京都府遺跡調査概報

第113冊

1．門戸古墳群
2．岡ノ遺跡第２・３次
3．京都第二外環状道路関係遺跡
（長岡京跡右京第799次）
4．長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡
5．木津川河床遺跡第16次
6．薪遺跡第５次
7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
（内田山遺跡・内田山古墳群（第４次））

２００５

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成15・16年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、国土交通省近畿地方整備局、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて行った、門戸古墳群、岡ノ遺跡第２・３次、京都第二外環状道路関係遺跡、長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡、木津川河床遺跡第16次、薪遺跡第５次、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会、福知山市教育委員会、長岡京市教育委員会、八幡市教育委員会、京田辺市教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年１月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　上　田　正　昭

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．門戸古墳群　　2．岡ノ遺跡第２・３次

3．京都第二外環状道路関係遺跡　　4．長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡

5．木津川河床遺跡第16次　　6．薪遺跡第５次

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	門戸古墳群	舞鶴市大字丸田小字門戸	平16．4．22～平16．6．10	京都府土木建築部	石尾政信
2．	岡ノ遺跡第２・３次	福知山市東岡町、南岡町	平15．7．29～平16．2．20 平16．5．13～平16．9．30	国土交通省近畿地方整備局	伊野近富
3．	京都第二外環状道路関係遺跡			国土交通省近畿地方整備局	岩松　保 竹井治雄
	長岡京跡右京第799次	長岡京市友岡川原９－１	平15．12．１～平16．2．26		
4．	長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡	長岡京市井ノ内小西地内	平15．11．26～平16．2．26	京都府土木建築部	増田孝彦
5．	木津川河床遺跡第16次	八幡市八幡科手	平16．4．20～平16．6．4	京都府土木建築部	柴　暁彦
6．	薪遺跡第５次	京田辺市薪狭道・巽	平16．1．9～平16．2．26	京都府土木建築部	高野陽子
7．	関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡			独立行政法人都市再生機構	筒井崇史
	内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)	相楽郡木津町大字木津小字内田山	平15．5．27～平15．6．27		

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係があたった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

1．門戸古墳群発掘調査概要---------- 1
2．岡ノ遺跡第２・３次発掘調査概要---------- 9
3．京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要----------19
4．長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要----------41
5．木津川河床遺跡第16次発掘調査概要----------55
6．薪遺跡第５次発掘調査概要----------65
7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成15年度発掘調査概要----------75

付 表 目 次

3．京都第二外環状道路関係遺跡(長岡京跡右京第799次)

付表　下海印寺地区試掘トレンチ調査概要一覧----------29

挿 図 目 次

1．門戸古墳群

第１図　調査地および周辺主要遺跡分布図---------- 2
第２図　調査地周辺地形図・トレンチ配置図---------- 3
第３図　門戸２・３号古墳測量図およびＡ地区平面図---------- 4
第４図　Ａ地区平面図---------- 5
第５図　Ａ地区断面図---------- 5
第６図　土師製筒形容器２出土状況図---------- 6
第７図　出土遺物実測図---------- 7

2．岡ノ遺跡第２・３次

第８図　調査地位置図----------10

第９図　第２次調査トレンチ配置図----------10
第10図　第２次調査４・17トレンチ土層断面図----------11
第11図　第２次調査４－１トレンチ平面図----------12
第12図　第２次調査17－１トレンチ平面図----------12
第13図　第３次調査トレンチ配置図----------13
第14図　第３次調査調査地東部遺構配置図----------14
第15図　第３次調査調査地中央部遺構配置図----------15
第16図　第３次調査調査地西部遺構配置図----------16
第17図　14トレンチ出土弥生土器----------17
第18図　出土遺物実測図----------17

３．京都第二外環状道路関係遺跡（長岡京跡右京第799次）

第19図　調査地位置図----------19
第20図　周辺調査地位置図----------20
第21図　友岡地区試掘トレンチ配置図----------21
第22図　Ａ～Ｅトレンチ土層柱状図・Ｆトレンチ土層図----------22
第23図　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ検出遺構配置図----------24
第24図　Ｃトレンチ土層部分図----------25
第25図　Ｅ・Ｆトレンチ検出遺構配置図----------26
第26図　下海印寺地区試掘トレンチ配置図----------28
第27図　１～７トレンチ土層図----------30
第28図　８～13トレンチ土層図----------31
第29図　３・７トレンチ検出遺構配置図----------32
第30図　８トレンチ検出遺構配置図----------33
第31図　出土遺物実測図(1)----------34
第32図　出土遺物実測図(2)----------35
第33図　出土遺物実測図(3)----------36
第34図　出土遺物実測図(4)----------38

４．長岡京跡右京第795次（7ANGKS－６地区）・井ノ内遺跡

第35図　調査地位置図----------42
第36図　トレンチ配置図----------43
第37図　溝ＳＤ290西壁土層図----------44
第38図　遺構配置図----------45
第39図　掘立柱建物跡ＳＢ277・278実測図----------46
第40図　掘立柱建物跡ＳＢ279・333実測図----------47
第41図　井戸ＳＥ339実測図----------48

第42図　土坑ＳＫ02遺物出土状況図----48
第43図　柱穴Ｐ157遺物出土状況図----49
第44図　溝ＳＤ152遺物出土状況図----49
第45図　出土遺物実測図(1)----50
第46図　出土遺物実測図(2)----51
第47図　出土遺物実測図(3)----52
第48図　出土遺物実測図(4)----53
第49図　出土遺物実測図(5)----53

５．木津川河床遺跡第16次

第50図　調査地位置図および周辺の遺跡----55
第51図　調査地位置図----56
第52図　Ａ地区平面図----57
第53図　Ａ地区土層柱状図----57
第54図　Ａ地区断ち割り土層断面図----57
第55図　Ｂ地区平面図----58
第56図　Ｂ地区東壁断面図----59
第57図　Ｂ地区北壁断面図----59
第58図　Ｂ地区側溝ＳＤ02出土遺物実測図----60
第59図　Ｂ地区道路状遺構ＳＦ05断ち割り断面図----60
第60図　Ｂ地区橋脚断ち割り断面図----61
第61図　Ｂ地区断ち割り断面図----61
第62図　Ａ地区出土遺物実測図----62
第63図　Ｂ地区出土遺物実測図----63

６．薪遺跡第５次

第64図　調査地位置図----65
第65図　調査地配置図----66
第66図　土層断面図----67
第67図　第３・４トレンチ平面実測図----68
第68図　第４トレンチ平面実測図----69
第69図　第５・６トレンチ平面実測図----70
第70図　出土遺物実測図(1)----72
第71図　出土遺物実測図(2)----73

７．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡(内田山遺跡・内田山古墳群(第４次))

第72図　調査地位置図----75
第73図　内田山遺跡・内田山古墳群トレンチ配置図----76

第74図　調査区平面実測図----------77
第75図　埴輪溜まりＳＸ135実測図----------78
第76図　内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図----------79

図　版　目　次

１．門戸古墳群

図版第１　(1)調査地遠景(南東から)　(2)Ａ地区調査前(南から)
(3)Ａ地区トレンチ全景(南から)

図版第２　(1)Ａ地区トレンチ南半分(東から)　(2)Ａ地区埋葬施設(南から)
(3)Ａ地区埋葬施設(東から)

図版第３　(1)Ａ地区土師製筒形容器１検出状況(東から)
(2)Ａ地区土師製筒形容器１検出状況(南から)
(3)Ａ地区土師製筒形容器１検出状況(東から)

図版第４　(1)Ａ地区土師製筒形容器２検出状況(南から)
(2)Ａ地区土師製筒形容器２検出状況(東から)
(3)Ａ地区上層検出の集石(北から)

図版第５　(1)Ｃ地区調査前(南から)　(2)Ｃ地区トレンチ全景(南から)
(3)Ｂ地区トレンチ全景(北西から)

図版第６　出土遺物

２．岡ノ遺跡第２・３次

図版第７　(1)調査地全景(上が南)　(2)調査地全景(上が東)
(3)調査地西部(上が南)

図版第８　(1)４トレンチ調査風景(西から)　(2)４トレンチ土層断面(北東から)
(3)17トレンチ全景(東から)

図版第９　(1)４－２トレンチ全景(西から)　(2)５－２トレンチ全景(西から)
(3)６－２トレンチ竪穴式住居跡ＳＨ0614(北から)

図版第10　(1)６－２トレンチ全景(東から)　(2)７トレンチ中世溝検出状況(東から)
(3)13トレンチ全景(西から)

図版第11　(1)14トレンチ全景(西から)　(2)15－３トレンチ全景(西から)
(3)16－２トレンチ(西から)

図版第12　(1)４－３トレンチ全景(東から)　(2)５－１トレンチ全景(東から)

(3)出土遺物

3．京都第二外環状道路関係遺跡(長岡京跡右京第799次)

図版第13　(1)友岡地区調査着手前全景(北西から)

(2)下海印寺地区調査着手前全景(南東から)

図版第14　(1)Aトレンチ全景(南東から)　(2)Aトレンチ中央部検出溝(北から)

(3)Bトレンチ断ち割り状況(南東から)　(4)Bトレンチ断ち割り状況(東から)

(5)Cトレンチ全景(南東から)　(6)Cトレンチ(東から)

(7)Cトレンチ(南東から)　(8)Cトレンチ(北西から)

図版第15　(1)Dトレンチ全景(北東から)　(2)Dトレンチ東端検出溝(東から)

(3)Eトレンチ全景(北東から)　(4)Eトレンチ全景(南西から)

(5)Eトレンチ東端部検出溝群(北西から)

(6)Eトレンチ流路検出状況(南から)　(7)Fトレンチ全景(西南から)

(8)Fトレンチ北東部検出足跡(西から)

図版第16　(1)1トレンチ全景(南東から)　(2)1トレンチ南西壁土層

(3)2トレンチ全景(南東から)　(4)2トレンチ北西壁土層

(5)3トレンチ全景(東から)　(6)3トレンチ全景(東から)

(7)4トレンチ全景(北から)　(8)4トレンチ南壁土層

図版第17　(1)5トレンチ全景(南東から)　(2)5トレンチ北西壁土層

(3)6トレンチ全景(北東から)　(4)6トレンチ北西壁土層

(5)7トレンチ全景(北東から)　(6)7トレンチ北西壁土層

(7)9トレンチ全景(南東から)　(8)9トレンチ北西壁土層

図版第18　(1)8トレンチ全景(南西から)　(2)8トレンチ全景(北西から)

(3)8トレンチ溝SD01内瓦検出状況(東から)

(4)8トレンチ溝SD01内瓦検出状況(西南西から)

(5)8トレンチ溝SD01断ち割り状況(北西から)

(6)8トレンチ溝SD01内瓦出土状況(上が北東)

(7)8トレンチ溝SD01内土層(東南東から)

(8)8トレンチ溝SD01内土層(北東から)

図版第19　(1)10トレンチ全景(南東から)　(2)10トレンチ北西壁土層

(3)11トレンチ全景(南東から)　(4)11トレンチ南西壁土層

(5)12トレンチ全景(南東から)　(6)12トレンチ北西壁土層

(7)13トレンチ全景(南東から)　(8)13トレンチ南壁土層

図版第20　(1)出土遺物(1)　弥生時代～中世土器　(2)出土遺物(2)　縄文土器

図版第21　(1)出土遺物(3)　瓦(凸面)　(2)出土遺物(4)　瓦(凹面)

図版第22　(1)出土遺物(5)　石器・石核・剥片など

(2)出土遺物(6)　石器・石核・剥片など

4．長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

図版第23　(1)調査前の状況(南から)　(2)調査地全景(上が南)

図版第24　(1)掘立柱建物跡ＳＢ277・ＳＢ278検出状況(北西から)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ279検出状況(南西から)

図版第25　(1)トレンチ近景(北から)　(2)掘立柱建物跡ＳＢ333(南から)

図版第26　(1)土坑ＳＫ02遺物出土状況(西から)　(2)柱穴Ｐ157遺物出土状況(南から)

図版第27　(1)井戸ＳＥ339近景(北から)　(2)溝ＳＤ290西壁断面(北東から)

図版第28　出土遺物

5．木津川河床遺跡第16次

図版第29　(1)調査前の状況(南西から)　(2)Ａ地区全景(西から)

(3)Ａ地区断面(南西から)

図版第30　(1)Ａ地区遺物出土状況(南西から)　(2)Ｂ地区全景(西から)

(3)Ｂ地区道路状遺構ＳＦ05(南西から)

図版第31　(1)Ｂ地区道路状遺構ＳＦ05断ち割り状況(南西から)

(2)Ｂ地区側溝ＳＤ01(南西から)

(3)Ｂ地区側溝ＳＤ01(北西から)

図版第32　(1)Ｂ地区東壁断面(南西から)　(2)Ｂ地区側溝ＳＤ04断面(南から)

(3)Ｂ地区側溝ＳＤ02遺物出土状況(西から)

図版第33　(1)Ｂ地区側溝ＳＤ04遺物出土状況(南西から)

(2)Ｂ地区側溝ＳＤ01・04断面(北西から)

(3)Ｂ地区橋脚３・４断ち割り状況(南から)

図版第34　出土遺物

6．薪遺跡第５次

図版第35　(1)調査前全景(第１～４トレンチ)　(2)調査前全景(第６トレンチ)

図版第36　(1)第１トレンチ全景(南東から)　(2)第２トレンチ全景(南東から)

(3)第３トレンチ全景(北西から)

図版第37　(1)第２トレンチ北西壁土層断面(南東から)

(2)第３トレンチ北西壁土層断面(南東から)

(3)第４トレンチ西壁土層断面(東から)

図版第38　(1)第４トレンチ全景(東から)　(2)第５トレンチ全景(東から)

(3)第５トレンチ北西区遺構検出状況(南から)

図版第39　(1)第６トレンチ全景(北西から)

(2)第６トレンチ南東隅断ち割り土層断面図(南西から)

(3)第６トレンチ北東隅土坑完掘状況(南西から)

図版第40　出土遺物

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡(内田山遺跡・内田山古墳群(第4次))

図版第41　(1)調査地全景(南から)　(2)調査地全景(東から)

図版第42　(1)調査地全景(北東から)　(2)重機掘削作業風景(西から)

(3)発掘作業風景(北西から)

図版第43　(1)調査地全景(北西から)　(2)調査地全景(北東から)

(3)調査地北東部全景(南西から)

図版第44　(1)溝ＳＤ136全景(南西から)　(2)溝ＳＤ132全景(南から)

(3)溝ＳＤ131全景(西から)

図版第45　(1)埴輪溜まりＳＸ135遺物出土状況(東から)

(2)埴輪溜まりＳＸ135遺物出土状況(北から)

(3)測量作業風景(西から)

図版第46　(1)出土遺物　埴輪　(2)出土遺物　埴輪・擂鉢

図版第47　(1)内田山遺跡　埴輪資料No.1　(2)内田山遺跡　埴輪資料No.2

図版第48　(1)内田山遺跡　埴輪資料No.3

(2)scale

1．門戸（もんど）古墳群発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、国道178号線交通安全施設建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼により実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第２係長奥村清一郎、調査第２係専門調査員石尾政信が担当した。本調査概要は石尾が執筆した。

調査は、平成16年４月22日に着手した。樹木伐採・試掘調査・一部拡張調査などの作業と併行して、地形測量・遺構測量・写真撮影などを実施した後、６月10日に現地調査を終了した。調査面積は約60㎡である。

調査にあたっては、地元自治会・関係諸機関などの指導・協力があった。また、現地調査および整理作業には、地元住民の方々の参加・協力があった。記して感謝したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

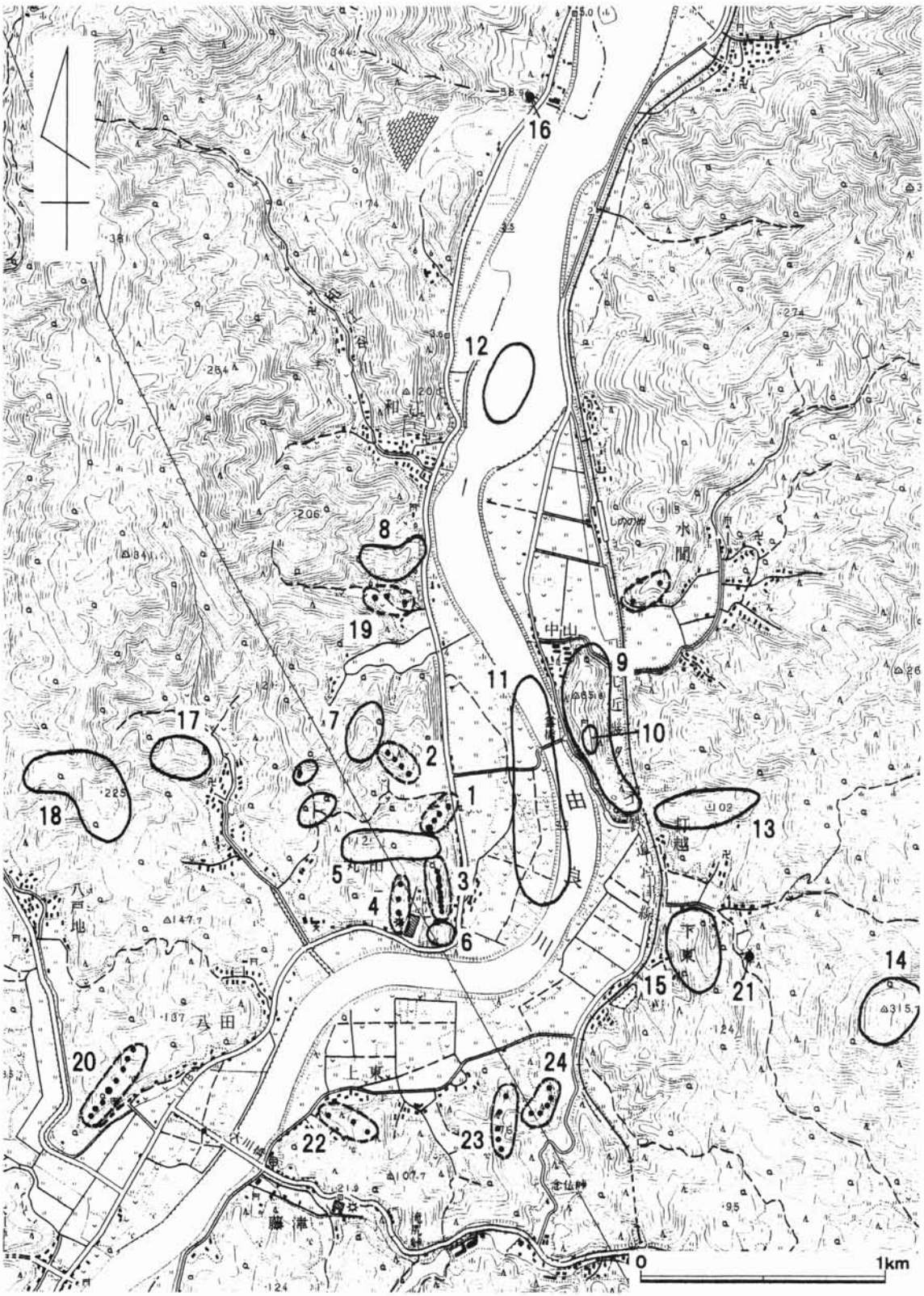
2．位置と環境

門戸古墳群は、河口から約5.5km上流の由良川左岸の丘陵上に位置する古墳群である。古墳群は、丸田集落北端の南西から北東方向に派生する丘陵支脈の稜上を占めている。現在、国道178号線に接する丘陵先端はすでに削られて崖面となっている。『京都府遺跡地図』によれば、５基の古墳が登録されており、丘陵尾根筋に２～５号墳、少し離れた北東斜面に１号墳の位置が表示されている。今回、交通安全施設建設に伴い、１号墳および２号墳の東半分が掘削予定地に含まれるため発掘調査を実施した。

由良川下流域には平野が少なく、河川に沿って幅１km以下の細長い平地が連続し自然堤防が顕著に認められる。自然堤防上には多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、弥生時代の集落遺跡として著名な志高遺跡があり、弥生土器をはじめとする遺物散布地である八雲遺跡が門戸古墳群の眼下に所在する。周辺には、門戸古墳群が立地する同一丘陵の南側に朝宮古墳群・宮ノ谷古墳群が、北方丘陵上に奥谷古墳群が、由良川を挟んだ南東丘陵上に上東古墳群・一ノ木古墳群など、数多くの古墳群が所在する。門戸古墳群から約３km下流の由良川左岸の丘陵上には三庄太夫・城ノ腰古墳が所在する。

平地に面する丘陵は急峻なものが多く、こうした自然地形を利用した山城が数多く所在する。

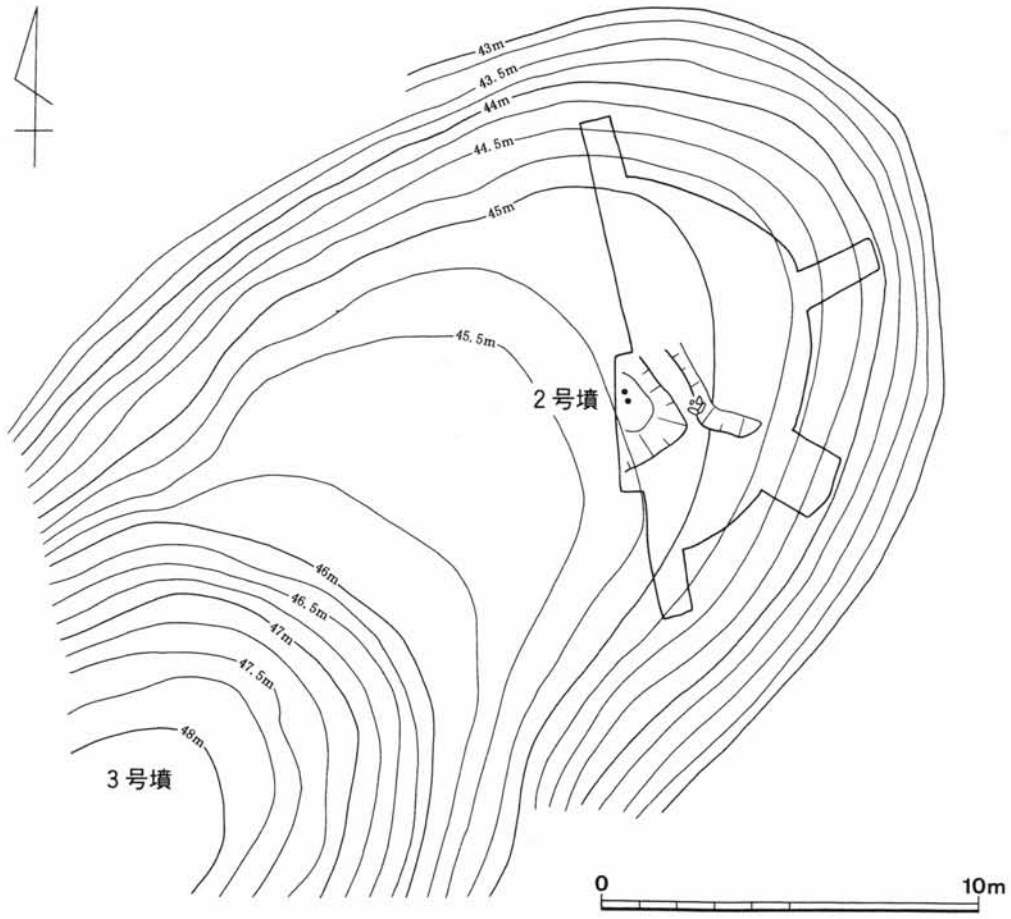
門戸古墳群の対岸に、丹後守護職であった一色氏一族の居城であった中山城跡があり、その南東丘陵上に一色氏総師の居城である建部山城跡が存在する。門戸古墳群の南西丘陵上にも門戸宮ノ谷城跡があり、平坦地・堀切・土橋などが見られる。門戸２号墳の立地が中山城跡と対峙する



第1図　調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000日置・宮津)

1．門戸古墳群	2．奥谷古墳群	3．朝宮古墳群	4．宮ノ谷古墳群	5．丸田宮ノ谷城跡
6．丸田東城跡	7．丸田斎宮城跡	8．和江宮ノ谷城跡	9．中山城跡	10．中山近世墓
11．八雲遺跡	12．和江遺跡	13．打越城跡	14．建部山城跡	15．佐織城跡
16．山庄太夫・城ノ腰遺跡		17．丸田安ノ奥城跡	18．八田コヨリ城跡	19．ニイザ古墳
20．八田古墳群	21．安寿姫古墓	22．和田古墳群	23．上東古墳群	24．一ノ木古墳群

第2図　調査地周辺地形図・トレンチ配置図



第３図　門戸２・３号古墳測量図およびＡ地区平面図

場所にあり、墳丘が平坦であることから、城跡に関連する施設の所在も推測された。丸田地区は、由良川が蛇行しているため、低位からでも由良川の河口部が眺望できる地点である。

３．調査概要

調査は、丘陵上の２号墳推定地（Ａ地区）、北東斜面の１号墳推定地（Ｂ地区）、民家に近い南東斜面の平坦地（Ｃ地区）の試掘調査を実施した。各地区の状況は以下のとおりである。

Ａ地区では、埋葬施設の一部が検出され、埋土から弥生土器が出土した。西側を拡張したところ、埋葬施設の上面で、土師製筒形容器・蓋を検出した。木根による攪乱で規模は不明であるが、出土遺物から経塚が存在していたことが判明した。土師製筒形容器の周辺に石が散在していたので、土坑内に容器を据置きその周囲を石が取り囲んでいたと推定される。また、表土直下で方形状に置かれた石群を検出しているので、経塚に関連する可能性が推定される。

Ｂ地区では、地山面まで掘り下げたが、遺構・遺物とも検出できなかった。トレンチ上位に土取り穴が存在していた。

Ｃ地区では、電柱と近世墓の残欠を検出した。地山面を掘り込んだ近世墓は約90cm（３尺）四方で、深さ約30cmを測る。地元の方々の話によれば、この平坦地付近は明治末期まで墓地であった

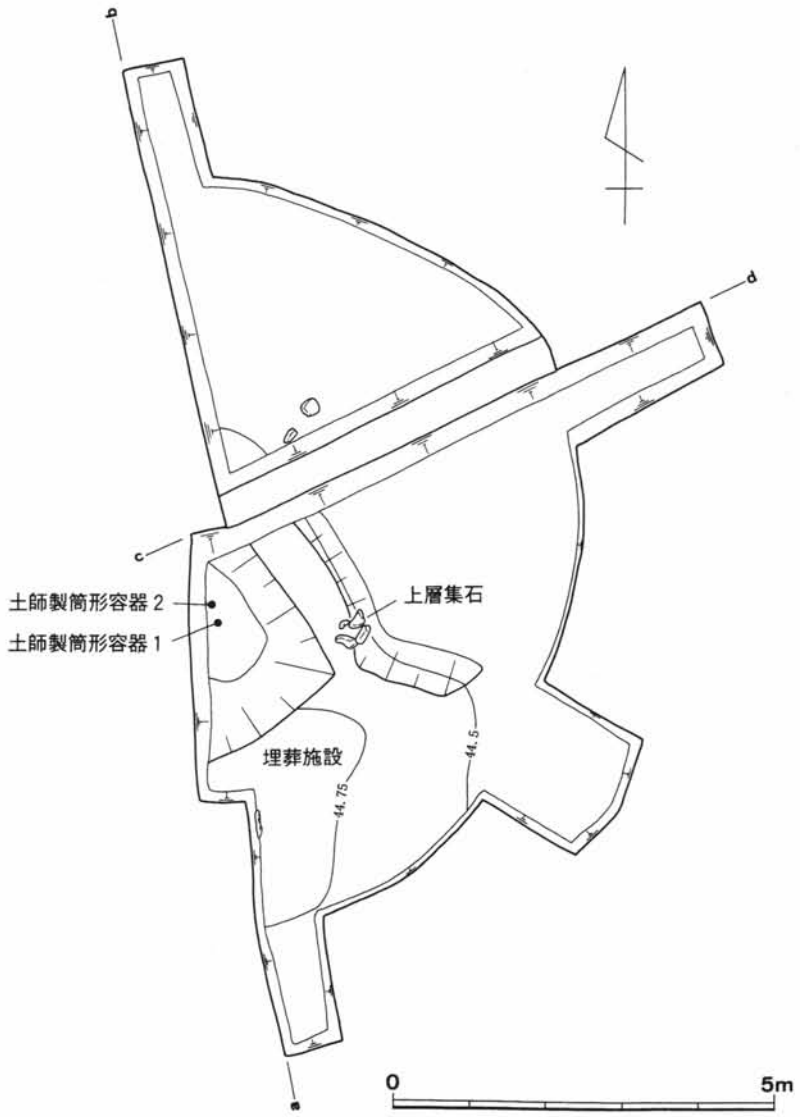
が、丸田地区の集団墓地造営に伴い、改葬・移転を行ったと言われている。

4．検出遺構

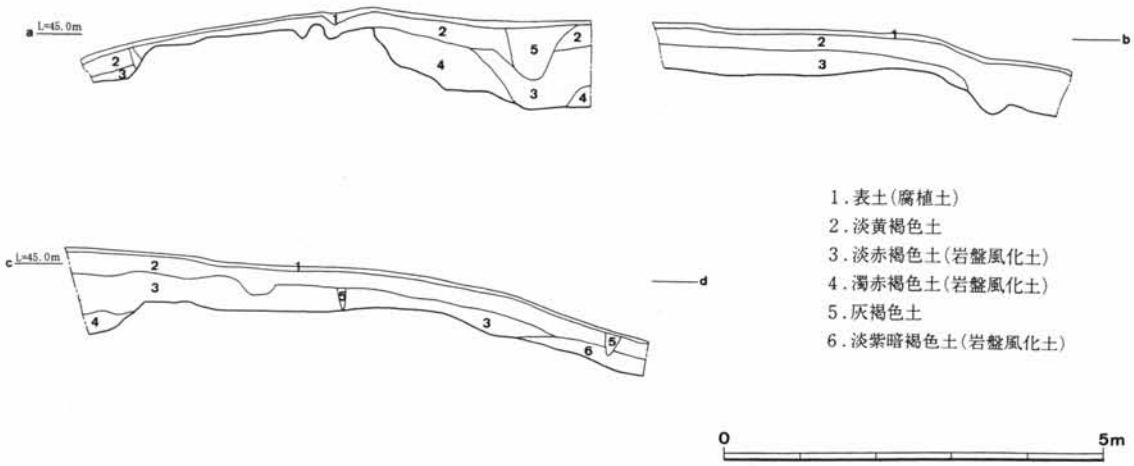
A地区で埋葬施設の一部とその上層で土師製筒形容器を検出した。以下に各遺構について簡単に記述する。

(1)埋葬施設

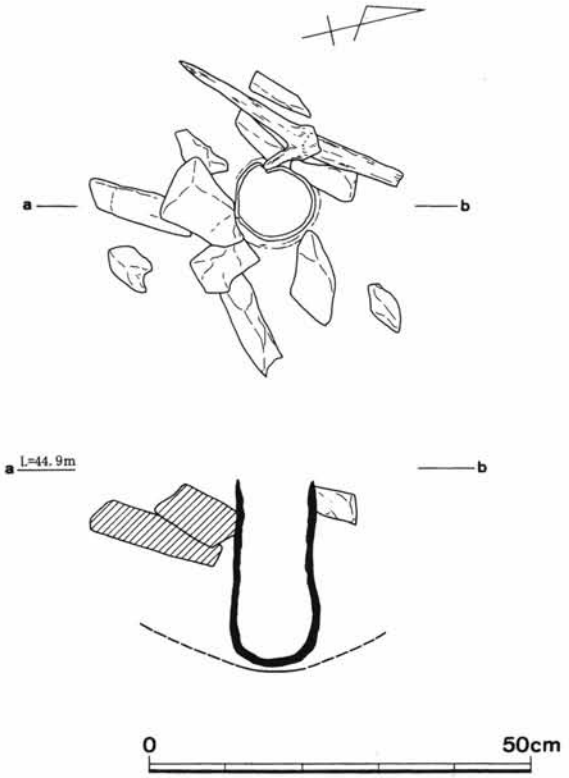
2号墳の埋葬施設は丘陵主軸にほぼ直交して造られ、幅1.9m以上、長さ2.1m以上、南端の最も高い地点(地山面)から底面までの深さ約1.0mを測る。埋葬施設は、赤褐色・紫暗褐色の粘板岩質の岩盤を掘り窪めて墓穴を構築している。板状の礫が堆積していることや木根



第4図　A地区平面図



第5図　A地区断面図



第６図　土師製筒形容器２出土状況図

による攪乱で、断面観察でも棺痕跡などは明瞭でない。両側に地山の礫が堆積し、中央部に礫の少ない部分が見られるが、明瞭な二段墓穴にはみえない。底に近い地点から弥生土器片が出土した。

(2)経　塚

埋葬施設の上面で検出した土師製筒形容器から経塚と判断した。木根による攪乱で、形態・大きさは明確でない。散乱した角礫の間に、口縁部が欠損した土師製筒形容器１が検出されたが、発見時は土器の形態が判断できず、底部まで掘り下げた段階で筒形容器と判明した。

筒形容器１(第７図４)は、出土状況の写真撮影を行った後取り上げた。ここから20～30cmの地点で木根の間に筒形容器２(第６・７図)が検出された。出土状況図の作成と写真撮影を行った後取り上げた。筒形容器１・２の内部には土が入り込んでいたが、ほかには何も入っていなかった。出土状況から、土坑を掘削した後、筒形容器を据え置き、上部周辺に角礫(地山である粘板岩質の礫)を並べたものと推定できる。筒形容器１・２は、同一土坑内に埋納されたものと推定される。

５．出 土 遺 物（第７図）

出土遺物には、Ａ地区から出土した剣鉄のほか、埋葬施設から出土した弥生土器の底部、埋葬施設の上層から出土した土師製筒形容器と蓋、Ｃ地区から出土した白磁椀・古銭などがある。

１は埋葬施設から出土した弥生土器の底部である。底部径2.9cm、残存高3.1cmを測る。外面にタタキ痕跡がみられる。内面調整は不明である。胎土はやや粗く、直径２mm以下のチャート・長石などを含む。外面が灰褐色系、内面が橙褐色～淡灰褐色を呈す。

２はＡ地区掘削中に出土した鉄製品で、断面の形状から剣と推定できる。幅3.2cm、残存長6.6cmを測る。

３は土師製筒形容器１の周辺から出土した。土師器皿を蓋として転用したものと推測される。口径11.6cm、器高3.0cmを測る。胎土は精良で黒色系粒子を含み、焼成は良好で明るい淡褐色を呈す。

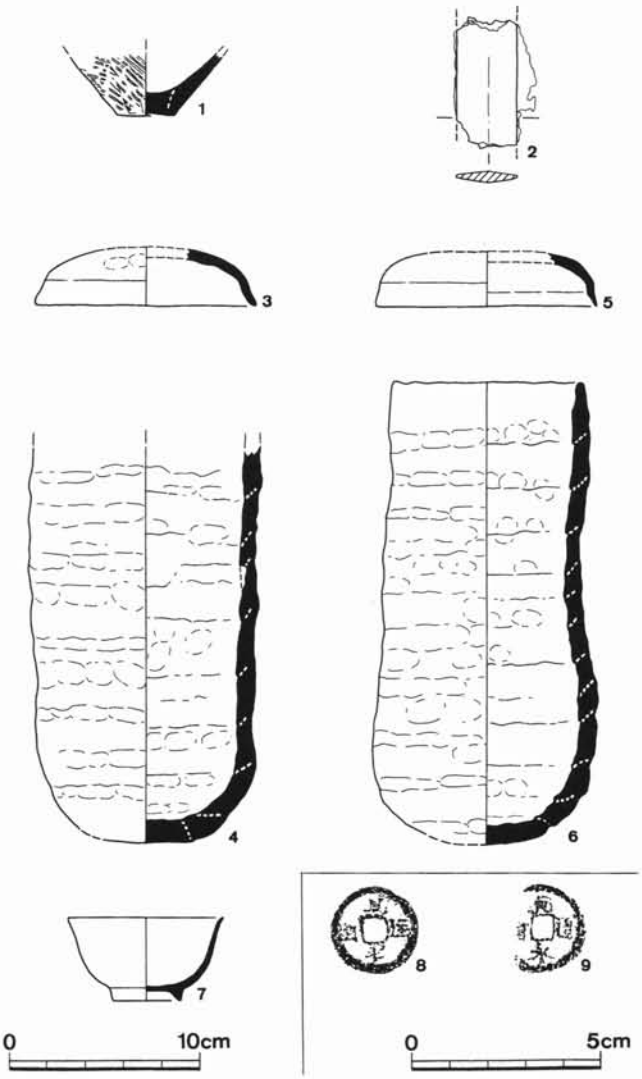
４は土師製筒形容器１である。金属製経筒を模倣した形状の円筒形を呈し、底部は丸い。口縁部を欠損し、残存高20.6cm、体部の平均径11.9cmを測る。粘土を積み上げた痕跡が明瞭で、内・

外面に指押さえ痕跡とヨコナデ痕跡が残る。胎土は精良、焼成はやや甘く淡褐色を呈す。

5は土師製筒形容器2の周辺で出土した。土師器皿を蓋として転用したものと思われる。口径11.6cm、器高2.85cmを測る。胎土は精良で、焼成が良好で明るい淡橙褐色を呈す。

6は土師製筒形容器2である。4と同様に金属製経筒を模倣した形状の円筒形を呈している。胴部の中央がやや細くなり底部は丸い。口縁部径9.9cm、器高24.1cmを測る。4と同様に粘土を積み上げた痕跡が明瞭で、内・外面に指押さえ痕跡とヨコナデ痕跡が残る。胎土は精良焼成はやや甘く明るい淡褐色を呈す。

今回検出された土師製筒形容器は、丹後地域で発見されている土師製筒形容器からみると、12世紀後半～13世紀前半の時期のものと推定される。



第7図　出土遺物実測図

7はC地区掘削中に出土した白磁椀である。口径8.1cm、底部径3.5cm、器高4.35cmを測る。胎土は堅緻で、焼成も良好である。

8・9はC地区近世墓内から出土した寛永通寶である。残存状況は悪く、癒着したものを含めると合計3枚出土した。

6．まとめ

今回の調査で明らかになったことを列記し、まとめとしたい。

1号墳推定地では、その上位に土採り痕跡が確認できた。これは丘陵先端が改変された際に残されたわずかな平坦地で、古墳ではないことが判明した。

2号墳は先端部が改変されている可能性があるが、地形測量図では、短径約11m、長径約15mの墳丘規模をもつ。埋葬施設は幅約1.9m以上、長さ2.1m以上あるが、調査範囲の制約から規模は確定できない。内部から弥生土器片1点のみが出土している。古墳または弥生時代の墳墓と推定できる。

今回の調査では、2号墳の上層で経塚を検出したが、周辺にも経塚が存在している可能性が高

い。なお、C地区南西の平坦地や民家沿いの丘陵斜面に五輪塔の一部が散見されるので、周辺に中世墓などが存在していた可能性が高い。

（石尾政信）

注1　舞鶴市教育委員会松本達也、宮津市教育委員会東高志の両氏から現地で御教示を得た。

注2　調査参加者は、以下のとおりである（順不同・敬称略）

作業員　小谷以し江・小谷喜代子・小谷正志・山崎喜美恵・山崎扶沙・山崎直美

調査補助員　真下春美　**整理員**　中村ひろみ・長尾美恵子・村上優美子

2．岡ノ遺跡第２・３次発掘調査概要

１．はじめに

岡ノ遺跡は、福知山市の中央部にある福知山城の南方に位置する遺跡である。これまでの調査によって弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが判明している。

今回、国土交通省近畿地方整備局により国道９号の拡幅が計画されたことにより、総延長東西約500ｍを対象として発掘調査を実施した。対象となったのは、京都府福知山市東岡町から南岡町内の約1,300㎡である。その後、協議により約500㎡が追加された。当初の調査の概要については、すでに昨年度に報告[注1]しており、今回は追加調査分について報告する。あわせて、今年度前半に実施した試掘調査結果についても報告する。

調査期間は、第２次調査が平成15年７月29日～平成16年２月20日で、第３次調査は平成16年５月13日から実施した。現在調査中であり、本調査概要は９月30日時点の成果について報告する。

現地調査は、平成15年度が当調査研究センター調査第２課調査第２係長伊野近富、主任調査員戸原和人、専門調査員石尾政信が担当した。また、平成16年度は、調査第２課課長補佐兼調査第２係長奥村清一郎、次席総括調査員伊野近富、主任調査員戸原和人・松井忠春・中川和哉、専門調査員石尾政信、調査第３係主任調査員竹原一彦が担当した。

調査に係る経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

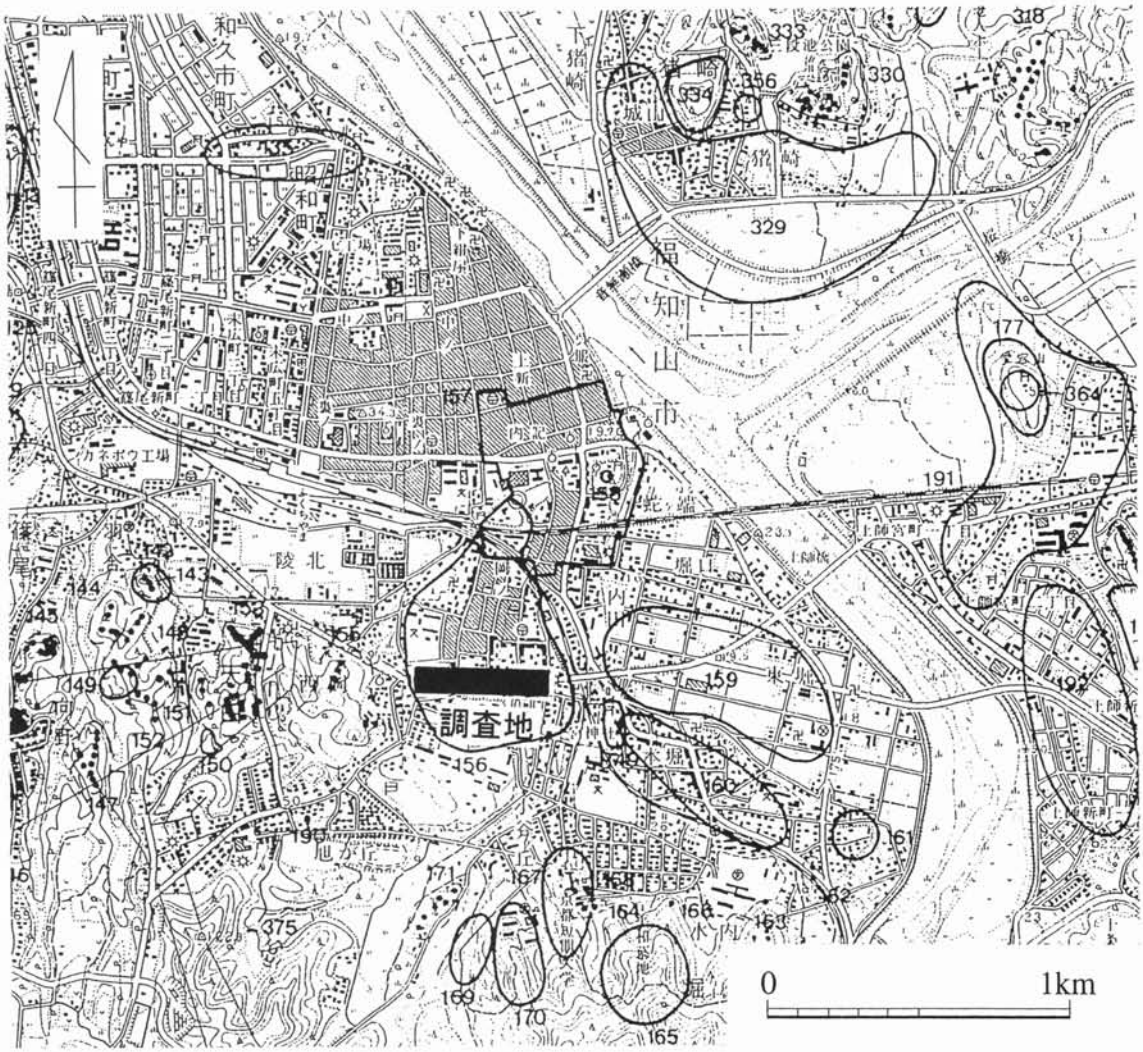
調査にあたっては、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所・京都府教育委員会・福知山市教育委員会に数多くの指導、助言を得た。また、現地作業では、南岡町・東岡町・緑ヶ岡町・北小谷ヶ丘町の各自治会の方々の御理解と御支援をいただいた。

２．これまでの調査

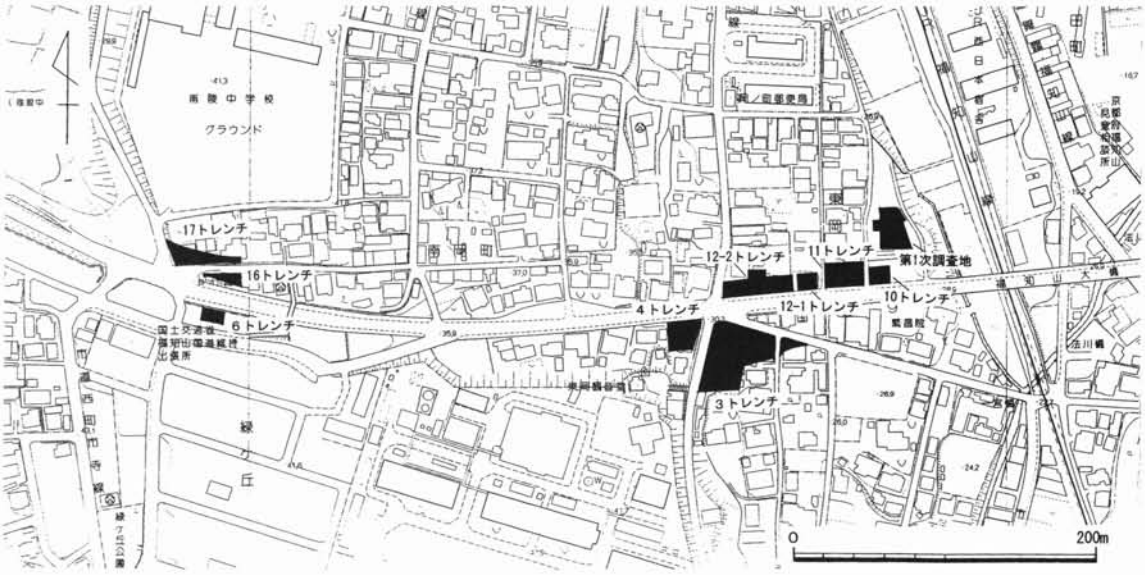
福知山市の中心部は盆地の中にあり、その中央に由良川が貫流している。由良川は兵庫県側から流れてきた土師川と盆地の中央で合流する。この合流地点の西側に福知山城があった。福知山城本丸は南側から張り出した丘陵の先端に造営された。

今回の調査地は福知山城本丸から南方700～900ｍの地点にあり、張り出した丘陵上にある。岡ノ遺跡の第１次調査（第９図）は、平成14年度に福知山市教育委員会によって実施され、弥生時代の墓および古墳・奈良時代～中世にかけての集落遺跡が確認された[注2]。

第２次調査は、平成15年度に当調査研究センターが実施した。調査対象地の東端では、当初、標高約27ｍの地点で国道９号を挟んだ、南北に５か所のトレンチ（３・10・11・12－１・12－２トレンチ）を設定し、その後、国道の南側で１か所のトレンチ（４－１トレンチ）を追加した。西端では、当初、標高約42ｍの地点で南北にそれぞれ１か所の試掘トレンチ（６・16トレンチ）を設



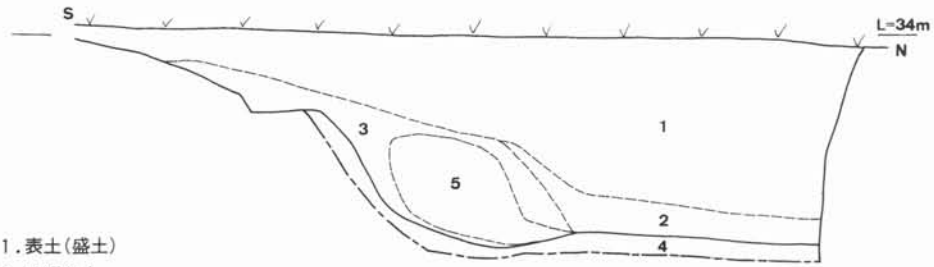
第８図　調査地位置図(『京都府遺跡地図』より転載。国土地理院1/25,000福知山東部・西部)



第９図　第２次調査トレンチ配置図

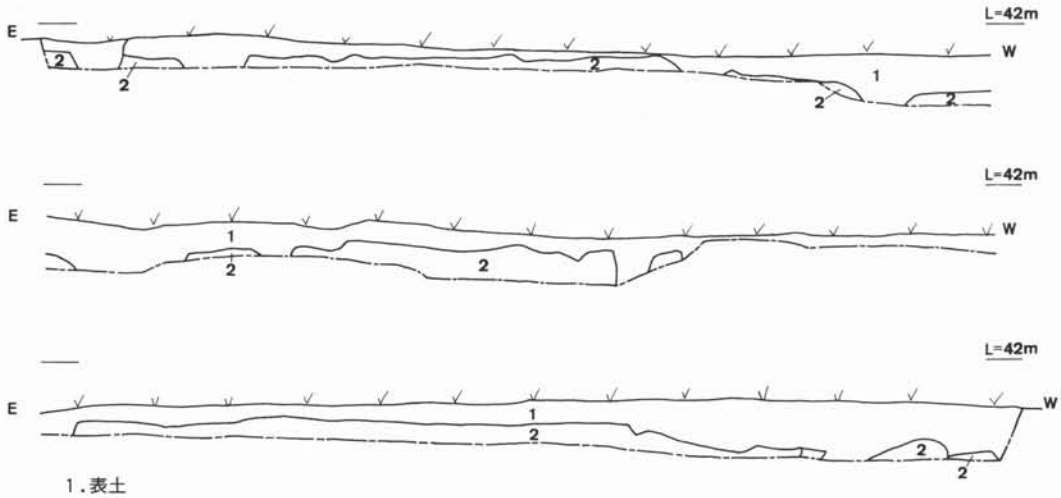
4 トレンチ西壁

4 トレンチ西壁



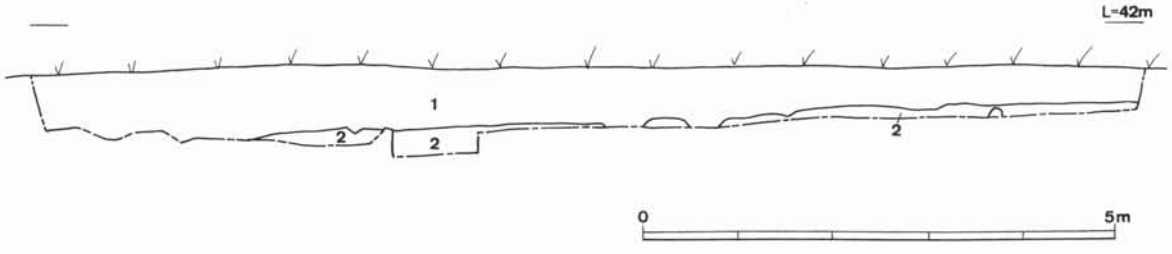
1.表土(盛土)
2.暗褐色土
3.黒褐色土
4.黄褐色砂礫土(地山)
5.黄褐色土

17トレンチ南壁



1.表土
2.黄褐色粘質土

17トレンチ西壁



第10図　第２次調査４・17トレンチ土層断面図

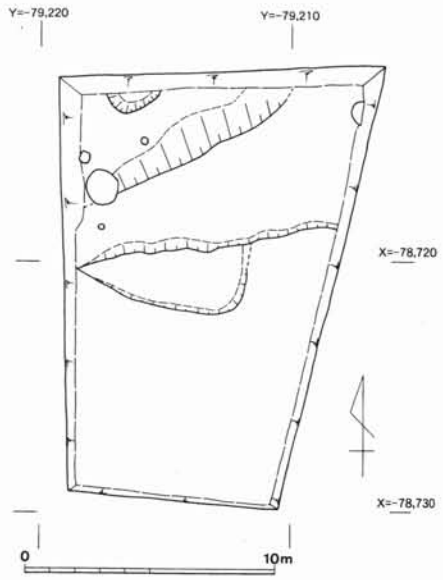
定した。次いで北に1か所のトレンチ(17－1トレンチ)を追加した。調査面積は、当初の調査面積1,300㎡、追加調査485㎡の合計1,785㎡である。

調査の結果、弥生時代の竪穴式住居跡・溝・柱跡、古墳時代の住居跡、平安時代の柱跡・土坑、中世の柱跡、近世の井戸・柱跡を検出した。特に、3トレンチから出土した平安時代の緑釉陶器椀は、京都市内で生産されたいわゆる洛北産の大振りなもので、京都市内以外では出土例の少ないものである。

3．調査の概要

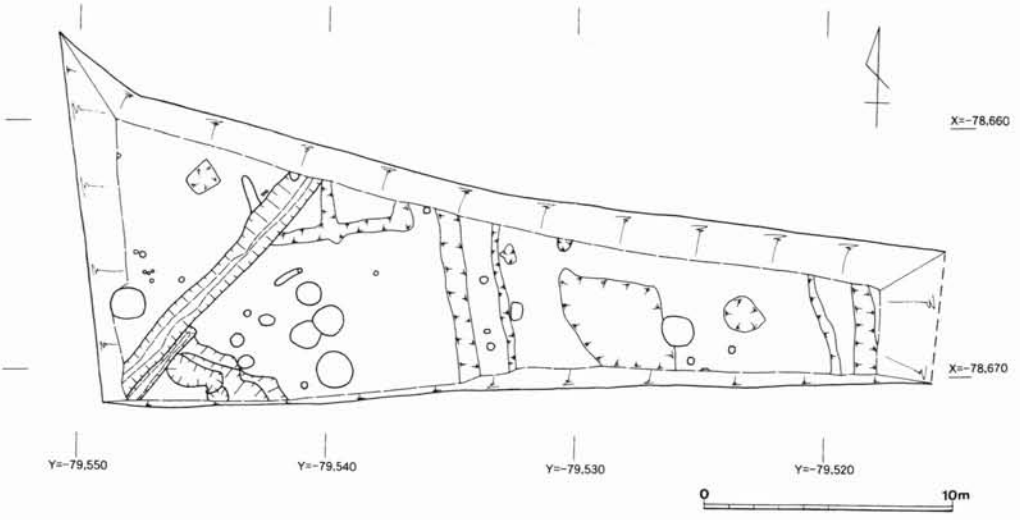
(1)第2次調査

調査地は、南北にのびる丘陵上にあり、4トレンチと17トレンチの2つのトレンチは丘陵の東西端に位置している。

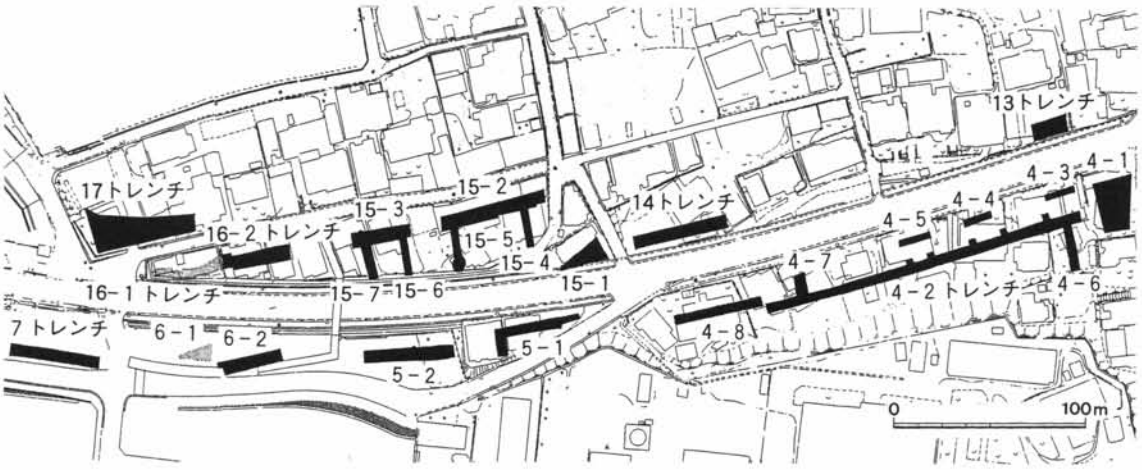


第11図　第2次調査4－1トレンチ平面図

4－1トレンチは国道9号の南側に設定した。東の谷から丘陵上に上がったところに位置している。トレンチは南北に長い台形である。北端が12.5m、南端が8.8m、南北が16.8mである。現在の国道9号は丘陵を2～3m掘り下げて東西方向に設置されており、トレンチの北方は急激に下がっている。表土から0.25m下で地山を確認した。土層は黄褐色砂礫土をベースとしているが、円礫土や粘性砂質土が縞状にあり、表土がある程度人為的に削平されたことを示していた。トレンチ南端の10m地点から北側は急激に地山が下がっており、近代以降に盛土をして平坦面を広げて造成していたことが知られる。調査前は住宅が建っていたようである。ここでは、方形土坑を確認した。土坑の南部を確認したのみで、全容は不



第12図　第2次調査17－1トレンチ平面図



第13図　第３次調査トレンチ配置図

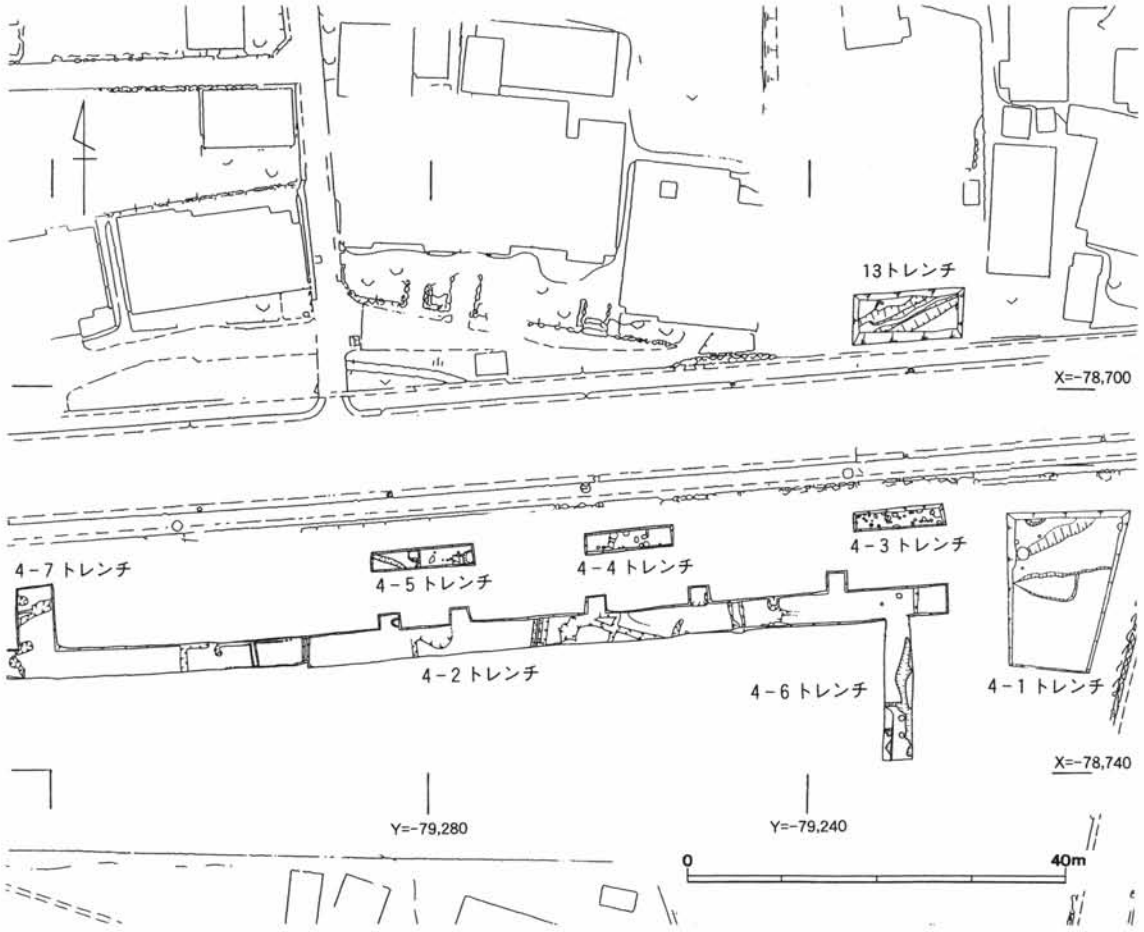
明である。埋土は黒褐色で、深さは0.05mである。南辺は5.3mである。出土遺物は須恵器小片(図版第12－(3))のみで、詳細は不明であるが、古墳時代の竪穴式住居跡の可能性がある。

17－１トレンチは国道９号の北側に設定した。東西に長い台形状で、西辺15m、南辺33.5m、東辺5.4mである。表土から地山までの深さは0.6mである。地山は黄褐色粘質土である。検出遺構としては、溝やピットがある。トレンチの西南部で黒色粘土層を検出し、土器片が出土した。出土遺物は小片がほとんどである。

(2)第３次調査

ここで報告するのは、第３次調査のうち平成16年度前半に実施した試掘調査結果である。国道９号の南側で、南から西にかけて４－２～８トレンチ、５－１・２トレンチ、６－２トレンチ、７トレンチの各トレンチを設定した(第13図)。また、国道９号の北側で、東側から西にかけて13トレンチ、14トレンチ、15－１～７トレンチ、16－２トレンチを設定した。地区としては８地区で、トレンチは21か所を開けた。このほか、３－４トレンチと１・２トレンチの本調査を実施したが、これらの成果については次年度以降に報告する。

４地区の各トレンチは東西140mの範囲に設定した。まず、４－２トレンチは東西109.5m、南北３mの長大なものである。この東端に南へ拡張して４－６トレンチ(南北14m、東西３m)、西端で北に拡張して４－７トレンチ(南北７m、東西４m)を設けた。更に西方にはやや北寄りに４－８トレンチ(東西30.5m、南北３m)を設けた。４－２トレンチの北東方向には４－３、４－４、４－５の３つのトレンチを設定した。４－３トレンチは東西9.6m、南北2.3mである。４－４トレンチは東西9.3m、南北2.2mである。４－５トレンチは東西11m、南北2.2mである。４－２トレンチは深さ0.3mで、黄褐色の地山が露出し、特に、顕著な遺構は認められなかった。４－３トレンチでは、ピットと弥生土器を検出した。４－４トレンチでもピットと弥生土器を検出した。４－５トレンチは近世以降の土坑・溝を検出した。４－６トレンチでは、中世の土坑・溝を検出した。４－７トレンチでは、近世以降の土坑・溝を検出した。４－８トレンチはやや地形が上がったところに設定しており、ここも黄褐色の地山を深さ0.6～1.4mの所で確認した。若



第14図　第３次調査調査地東部遺構配置図

干のピットおよび須恵器が確認されたものの、顕著な遺構は認められなかった。なお、地山は低く、この地点がかつて北西方向に斜面をもつ谷状地形であったことが判明した。

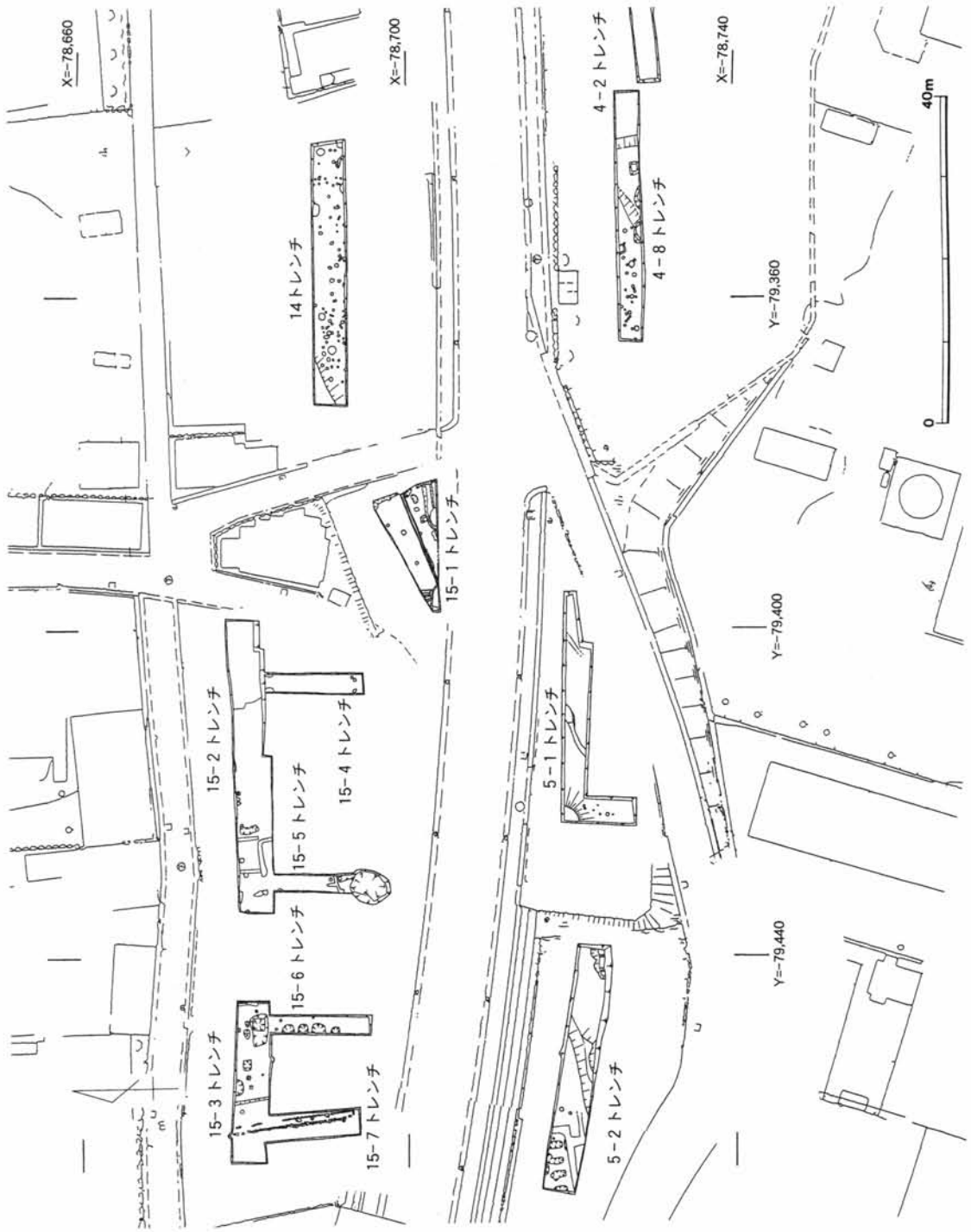
５地区の５－１トレンチは東西28.3m、南北3.5mである。西端で南に拡張して６mのトレンチを設けている。４トレンチよりやや高いところに設定した。ここでも谷状地形を確認し、ピットと須恵器杯を確認した。５－２トレンチは東西30.8m、南北４mである。南東方向に下る谷状地形でピットを検出した。

６地区の６－２トレンチは、丘陵の最も高い地点に設定した。東西21.4m、南北4.3mである。表土から深さ0.5mで黄色粘土の地山が認められた。トレンチの西部では、弥生時代の竪穴式住居跡１基を確認した。近代の溝に削平されているが、一辺2.8mの方形と考えられる。このほかピットを検出した。

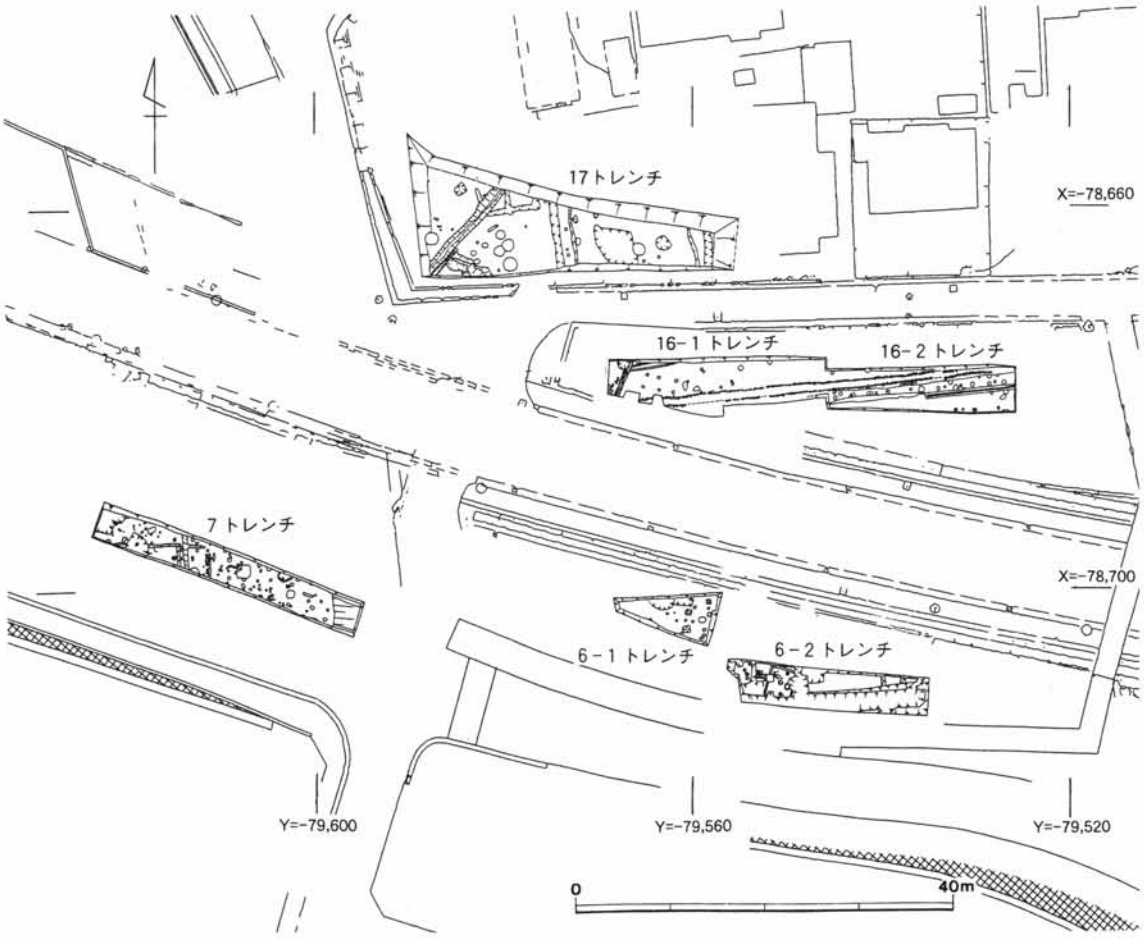
７地区の７トレンチは最も西寄りに設定したトレンチである。東西29.8m、南北3.9mの長方形である。表土下１mで黄褐色の地山が確認できた。多数のピットと共に、トレンチの東端では南北方向の幅3.2mの溝を検出した。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

次に、国道９号の北側に設定したトレンチの調査成果を記す。

13地区の13トレンチは、最も東よりに設定したトレンチである。４－３トレンチとは国道９号を挟んだ位置にある。東西11.5m、南北5.5mである。谷状地形で顕著な遺構は認められなかっ



第15図　第３次調査調査地中央部遺構配置図



第16図　第３次調査調査地西部遺構配置図

た。弥生土器が出土した。

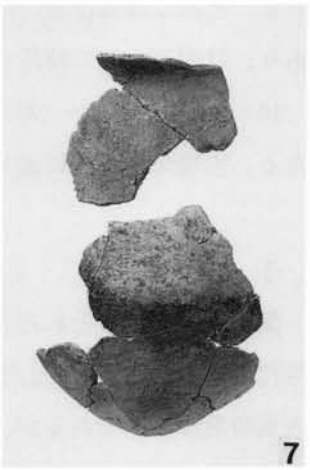
14地区の14トレンチは、調査地中央部に設定したトレンチである。東西32.7m、南北４mである。ピット列を確認した。土師器杯が出土した。

15地区の東部にある15－１トレンチは丘陵の高位に設定した。三角形のトレンチで東辺8.4m、南辺15.8m、北辺15mである。顕著な遺構は認められなかった。15－２トレンチは15地区の中央部に設定したトレンチである。東西36m、南北4.5mの長方形のトレンチの南辺に、２か所南にのびるトレンチを設定した。東側の15－４トレンチは南北12m、東西2.5mである。西側の15－５トレンチは南北9.6m、東西2.5mである。近世以降の土坑・溝を検出した。15－３トレンチは15地区の西側に設定した東西19.7m、南北4.5mの長方形のトレンチである。この南辺に南にのびる２本のトレンチを設けている。東側の15－６トレンチは南北12.3m、東西2.4mである。西側の15－７トレンチは南北11.5m、東西3.2mである。南北方向にのびる近代以降の溝を確認した。古墳時代以降の遺物が出土した。

16地区の16－２トレンチは東西20m、南北５mの長方形トレンチで、西端は昨年度の16－１トレンチと連結している。ここでは、竪穴式住居跡とピット列を検出した。また、東西方向にのびる近代以降の溝を確認した。

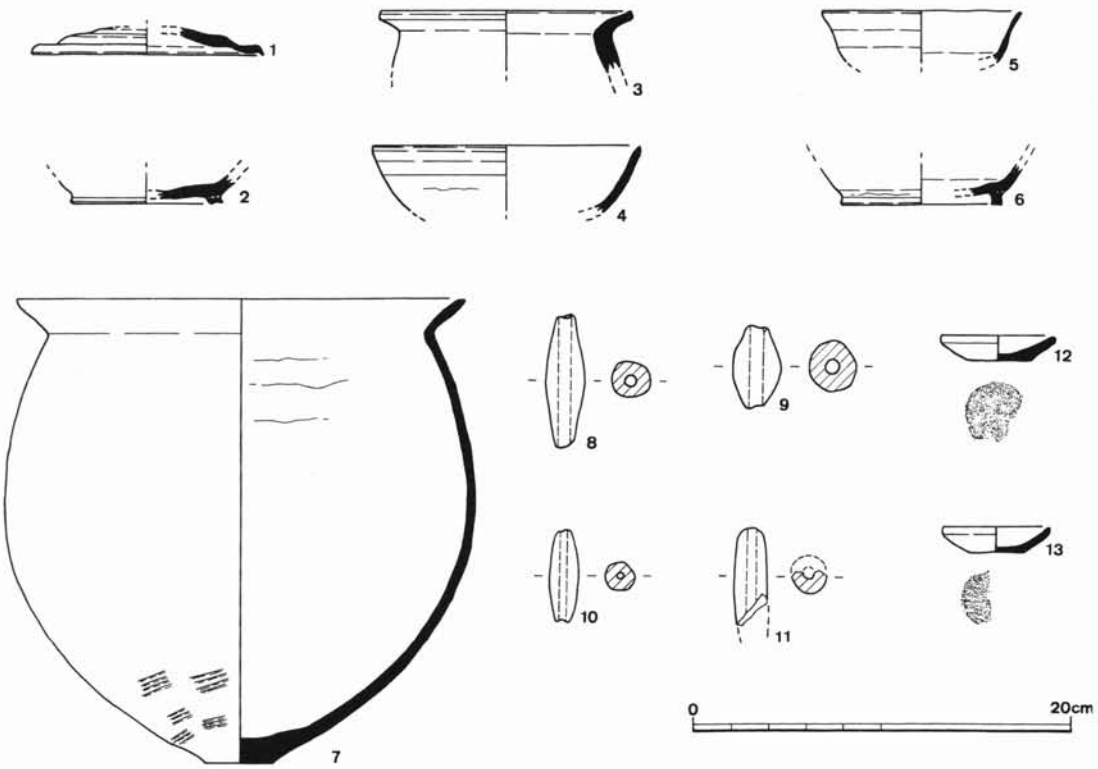
４．出土遺物（第17・18図）

今回報告するのは、第２次調査で出土したものである。１～４・８～13は３－２トレンチ南拡張部。５・６は３－２トレンチの土坑出土である。７は14トレンチ、14・15は４－１トレンチ出土である。



第17図　14トレンチ出土弥生土器

１は須恵器蓋である。口径12.2cm、残存高1.4cmである。色調は暗灰色で、微細な砂粒を含む。２は須恵器杯身である。底径は8.2cmである。色調は灰色で焼成はやや軟である。貼り付け高台で、高台の形は、成形時の圧力で少し凹んでいる。３は土師器甕である。口径14.1cmである。色調は暗褐色である。内外面ともナデを施す。４は土師器椀である。口径14.1cmである。色調は暗茶褐色で、口縁部外面にヨコナデ、ほかはナデを施す。５は須恵器杯身である。口径は10.5cm、底部は欠損している。色調は灰色で内外面ともロクロナデを施す。薄手で胎土は精良である。６は須恵器杯身である。底径は８cmである。色調は灰色で内外面ともロクロナデを施す。貼り付け高台である。以上は奈良時代に属する。７（第17・18図）は弥生土器の甕である。口縁部・胴部・底部の３片に割れており、接合点はないものの、図上で一個体に復原した。推定口径23.8cm、同器高24.4cmである。色調は明褐色で、胎土に砂粒を含む。磨滅が著しいが、体部下半には右上がりのタタキが施されている。底部は直径3.6cmの小さなものである。弥生時代後期に属する。８～11は土錘である。色調は淡褐色で一定している。胎土は良好である。長さは４～７cmで、幅は1.6～2.2cmである。中央には直径0.5cmの孔があけられている。12・13は土師器皿で



第18図　出土遺物実測図

ある。色調は淡褐色で、内外面ともロクロナデを施す。底部は糸切りである。１か所に油煤痕があり、灯明皿として使用されたことが知られる。江戸時代に属する。

14・15(図版第12－(3))は須恵器杯蓋片である。天井部はヘラケズリを施す。色調は青灰色である。古墳時代後期に属する。

５．ま と め

調査の概要をまとめると、以下のとおりである。まず、第２次調査の４－１トレンチでは古墳時代の遺物が出土した。また、17トレンチでは溝やピットを検出した。遺物が希少なため遺構の所属時期は不明であるが、生活跡の痕跡を確認することができた。

今年度の第３次の試掘調査の成果によれば、４地区については、顕著な遺構が認められなかったものの、調査予定域の全域で弥生時代から近世に至る遺構・遺物が確認できた。特に、今まで弥生時代の住居跡が確認されていなかった６－２トレンチで竪穴式住居跡が確認できたことは、遺跡がさらに調査地の西側に広がっていた可能性を示すものである。

また、７トレンチで中世の溝が確認できたが、溝幅が3.2mもあり、堀と呼べるものである。丘陵の西端にあることから、見晴らしの良い場所に造られ堀に囲まれた中世の方形居館があった可能性が指摘できる。

（伊野近富）

注１　戸原和人「岡ノ遺跡第２次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第111冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2004

注２　福知山市教育委員会「Ⅲ．岡ノ遺跡」『福知山市文化財調査報告書　第42集』　2002

3．京都第二外環状道路関係遺跡
平成15年度発掘調査概要

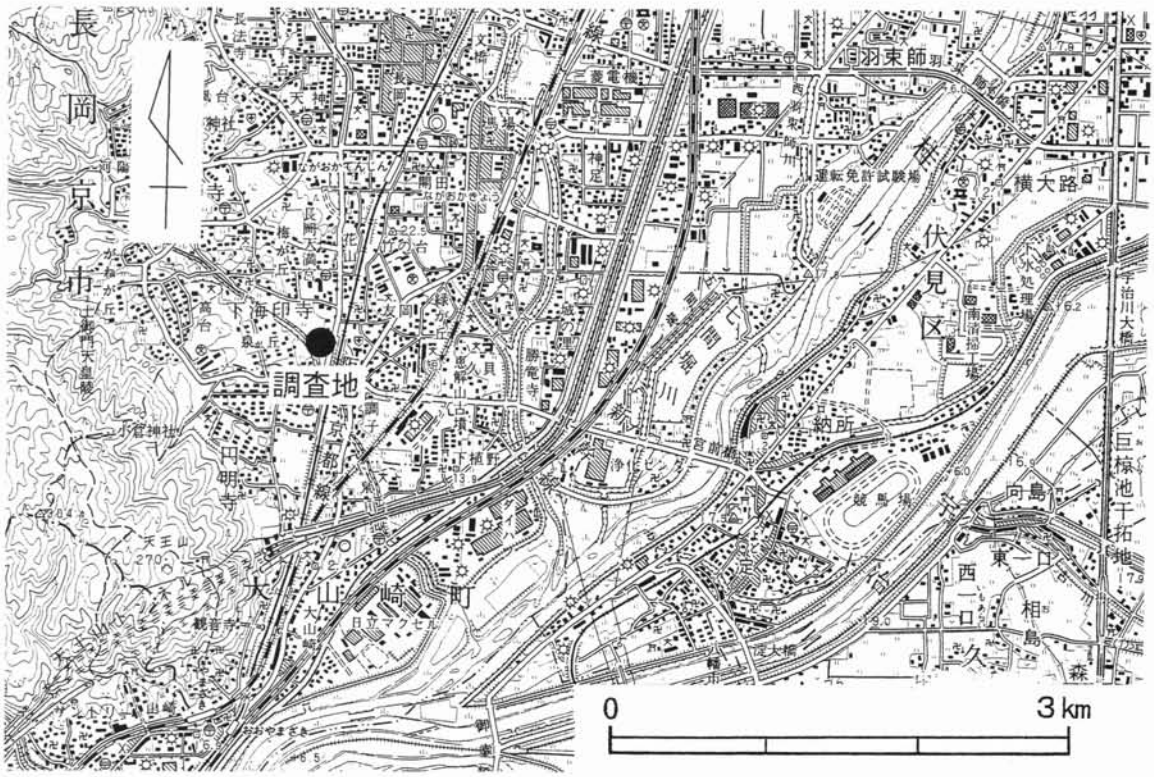
1．はじめに

今回の調査は、長岡京市友岡川原・下海印寺岸ノ下地内で実施したもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼により、京都第二外環状道路建設に伴う埋蔵文化財調査である(第19図)。

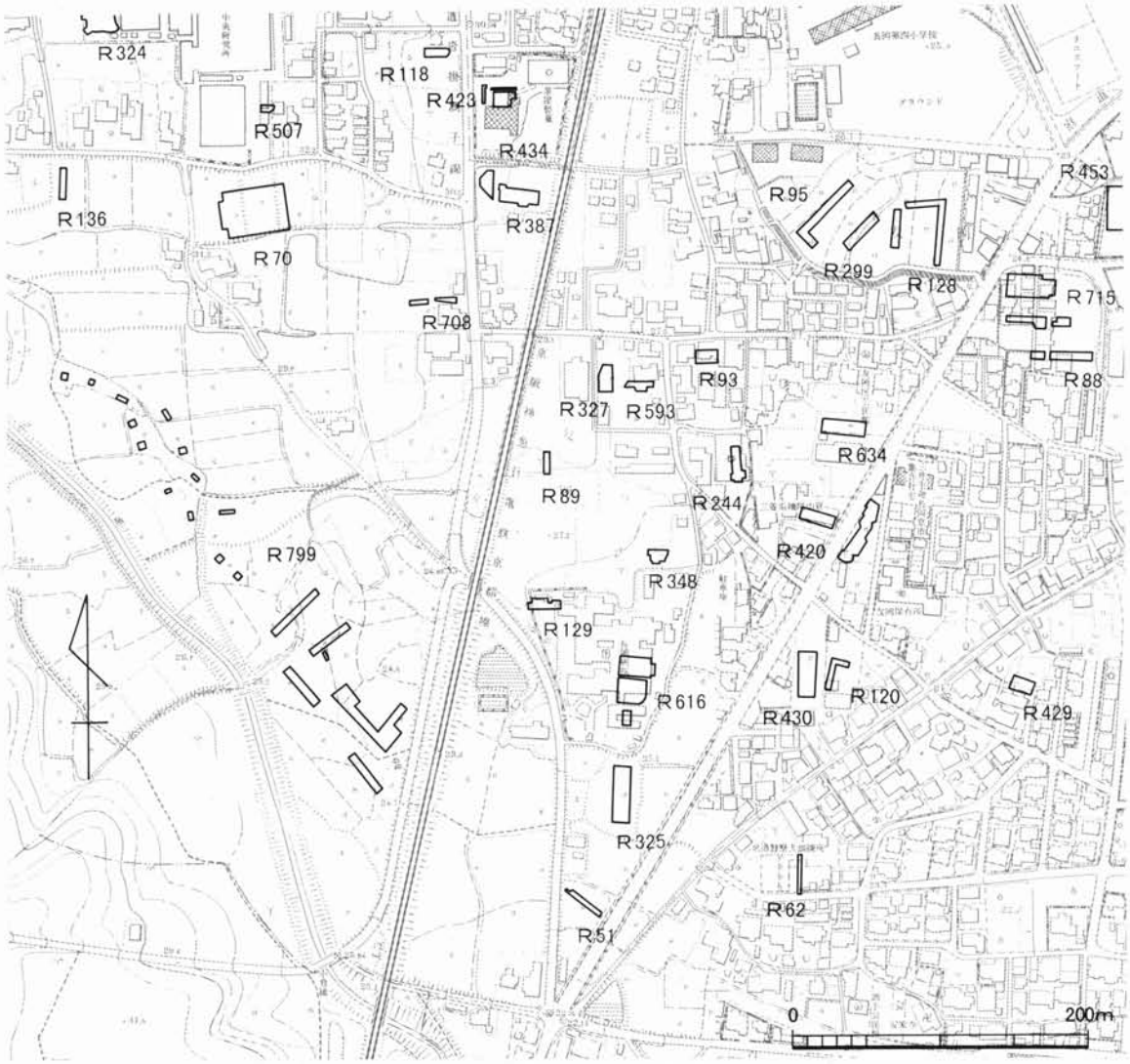
調査地は、長岡京の条坊復原よると、右京七条三坊十二町・八条三坊九町(新呼称では八条三坊十・十一町)に位置(注1)し、長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)調査である。

今回の調査対象地の周辺では発掘調査が実施されていないため、遺構・遺物が包蔵されているのか、全く知られていなかった(第20図)。しかも、対象地の西側に隣接して小泉川が流れており、小泉川の影響がどれほど及んでいるのかも知られていなかった。そのため、まず、遺構・遺物の有無と、その性格を明らかにすることを目的として、友岡地区川原地内にA～Fトレンチの6本の試掘トレンチを設定して調査を実施した。その結果、小泉川の流路内堆積の砂礫層をベースにして、中世以降現代に至る田畑の耕作土・整地土を確認するにとどまった。小泉川の旧流路・氾濫原は、調査対象地内の広範囲に及んでいることが判明した。

友岡地区の試掘調査に引き続いて、北西側の下海印寺地区岸ノ下地内で試掘調査を実施した。



第19図　調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第20図　周辺調査地位置図

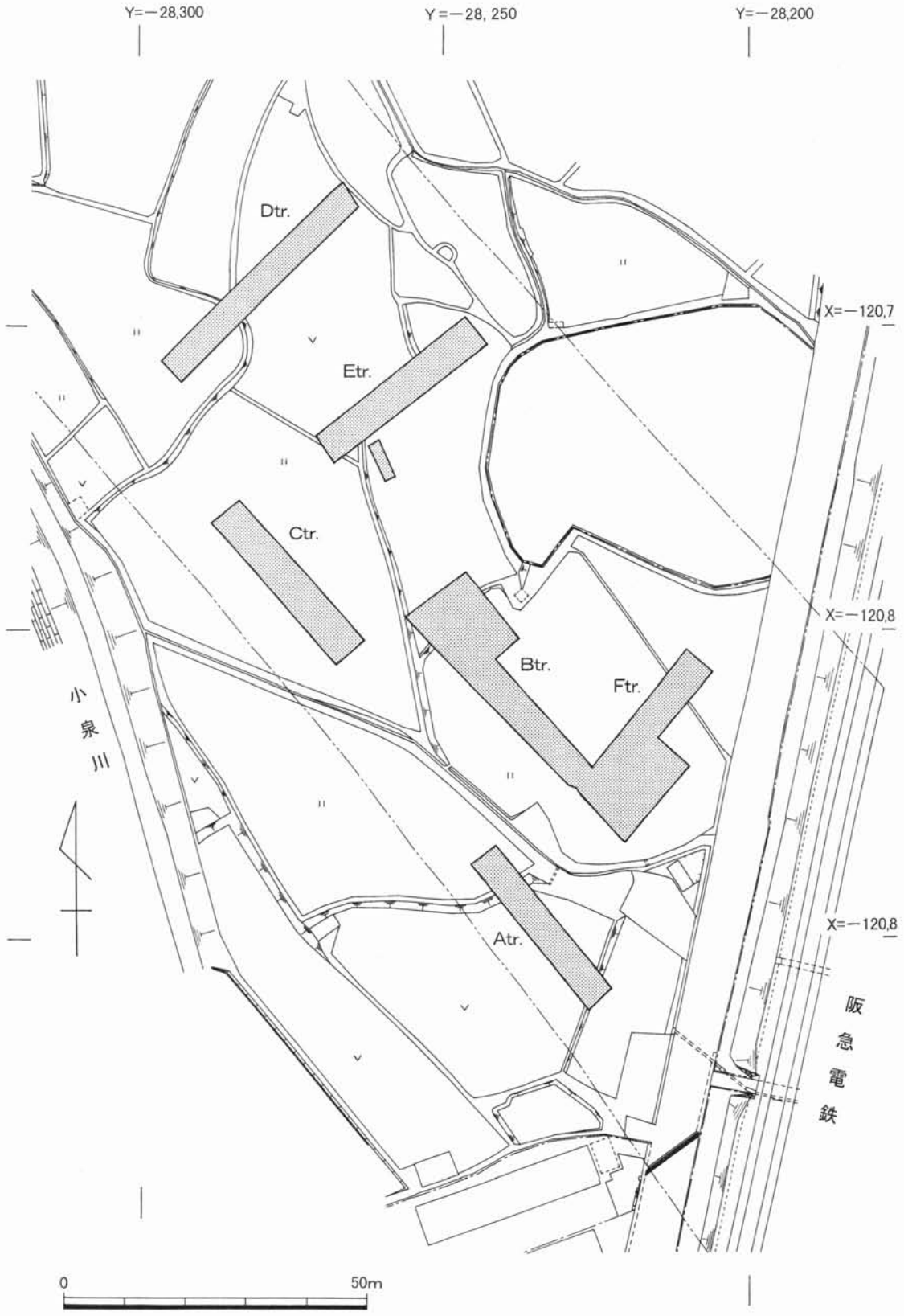
下海印寺地区では、路線予定地内で調査対象地までの重機の進入路を確保することができなかった。そのため、大きな面積の試掘坑を数か所に設けるのではなく、人力で掘削できる程度の小さな試掘坑を広範囲に設定し、小泉川の旧流路・氾濫原の分布を調べることとした。試掘坑は、路線内のほぼ全面に13か所のトレンチを配置した。

調査の結果、路線予定地内の西側は小泉川の旧流路にあたっており、砂礫層をベースにして、中世以降の田畑耕作土を確認したのみであった。それに対して、東側の一段高い段丘上では、縄文～平安時代の遺物と共に、柱穴・土坑・溝を検出し、広範囲に遺構・遺物が包蔵されているものと推定された。この下海印寺地区の北端は、伊賀寺遺跡にあたっている。

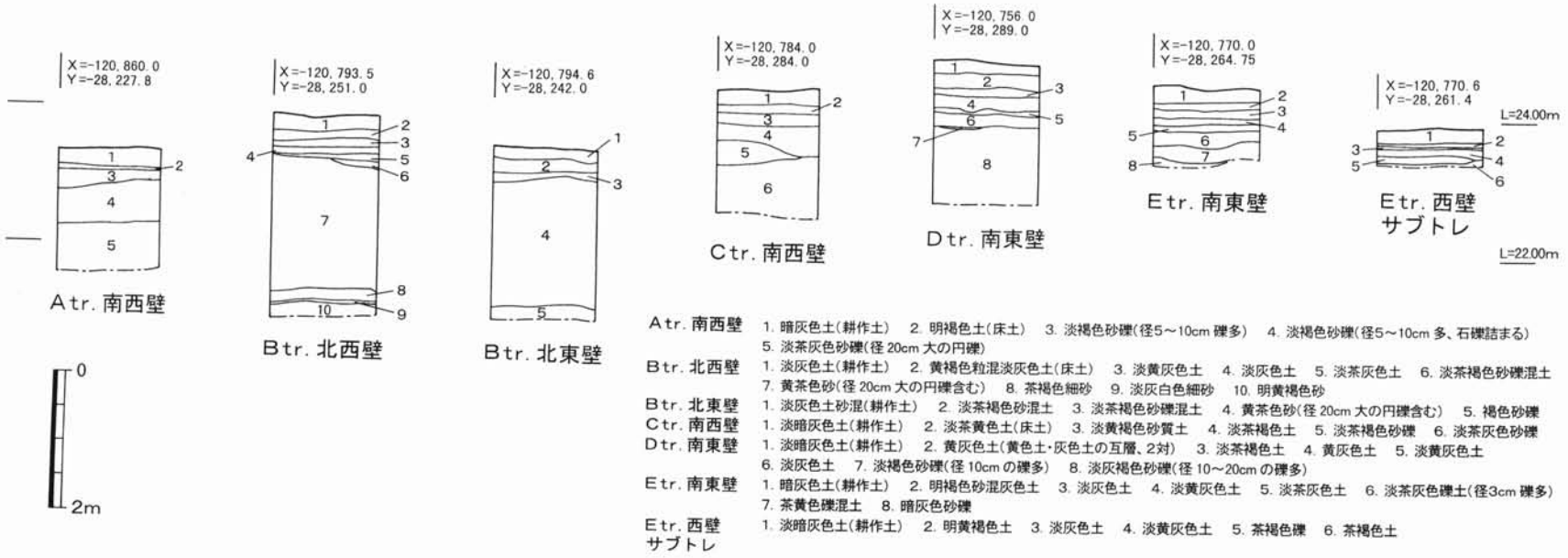
現地調査は、調査第２課調査第３係長石井清司、主任調査員岩松保、専門調査員竹井治雄が担当した。

調査は、平成15年12月１日～平成16年２月26日までの期間を要した。調査面積は約1,560㎡である。現地調査および整理作業には、多くの方々の参加を得た[注2]。ここに感謝するものである。

本調査概要は、現地調査を担当した竹井と岩松が執筆し、文末に文責を示した。また、出土遺



第21図　友岡地区試掘トレンチ配置図



Atr. 南西壁　1. 暗灰色土(耕作土)　2. 明褐色土(床土)　3. 淡褐色砂礫(径5～10cm 礫多)　4. 淡褐色砂礫(径5～10cm 多、石礫詰まる)　5. 淡茶灰色砂礫(径 20cm 大の円礫)

Btr. 北西壁　1. 淡灰色土(耕作土)　2. 黄褐色粒混淡灰色土(床土)　3. 淡黄灰色土　4. 淡灰色土　5. 淡茶灰色土　6. 淡茶褐色砂礫混土　7. 黄茶色砂(径 20cm 大の円礫含む)　8. 茶褐色細砂　9. 淡灰白色細砂　10. 明黄褐色砂

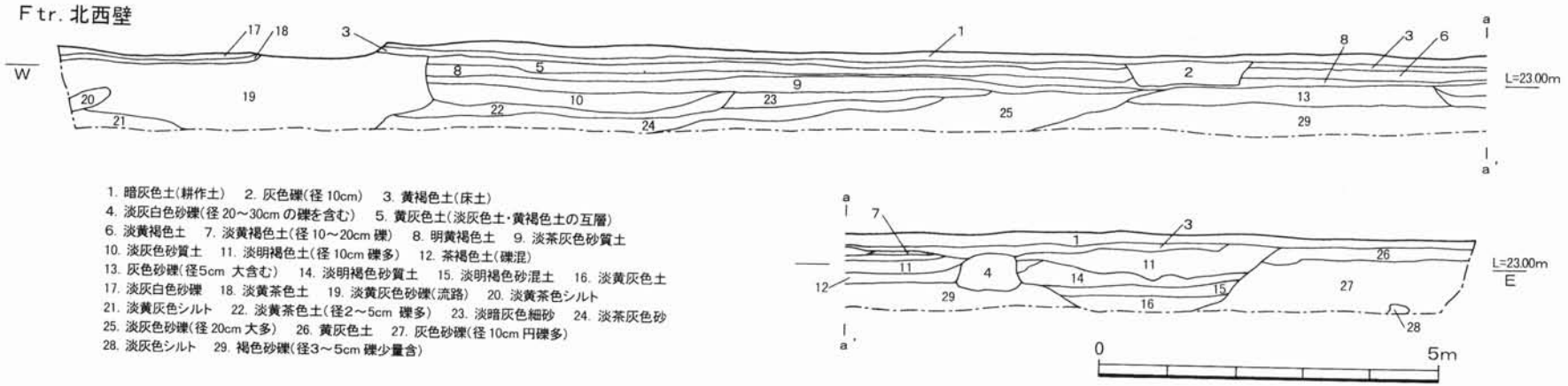
Btr. 北東壁　1. 淡灰色土砂混(耕作土)　2. 淡茶褐色砂混土　3. 淡茶褐色砂礫混土　4. 黄茶色砂(径 20cm 大の円礫含む)　5. 褐色砂礫

Ctr. 南西壁　1. 淡暗灰色土(耕作土)　2. 淡茶黄色土(床土)　3. 淡黄褐色砂質土　4. 淡茶褐色土　5. 淡茶褐色砂礫　6. 淡茶灰色砂礫

Dtr. 南東壁　1. 淡暗灰色土(耕作土)　2. 黄灰色土(黄色土・灰色土の互層、2対)　3. 淡茶褐色土　4. 黄灰色土　5. 淡黄灰色土　6. 淡灰色土　7. 淡褐色砂礫(径 10cm の礫多)　8. 淡灰褐色砂礫(径 10～20cm の礫多)

Etr. 南東壁　1. 暗灰色土(耕作土)　2. 明褐色砂混灰色土　3. 淡灰色土　4. 淡黄灰色土　5. 淡茶灰色土　6. 淡茶灰色礫土(径3cm 礫多)　7. 茶黄色礫混土　8. 暗灰色砂礫

Etr. 西壁 サブトレ　1. 淡暗灰色土(耕作土)　2. 明黄褐色土　3. 淡灰色土　4. 淡黄灰色土　5. 茶褐色礫　6. 茶褐色土



1. 暗灰色土(耕作土)　2. 灰色礫(径 10cm)　3. 黄褐色土(床土)
4. 淡灰白色砂礫(径 20～30cm の礫を含む)　5. 黄灰色土(淡灰色土・黄褐色土の互層)
6. 淡黄褐色土　7. 淡黄褐色土(径 10～20cm 礫)　8. 明黄褐色土　9. 淡茶灰色砂質土
10. 淡灰色砂質土　11. 淡明褐色土(径 10cm 礫多)　12. 茶褐色土(礫混)
13. 灰色砂礫(径5cm 大含む)　14. 淡明褐色砂質土　15. 淡明褐色砂混土　16. 淡黄灰色土
17. 淡灰白色砂礫　18. 淡黄茶色土　19. 淡黄灰色砂礫(流路)　20. 淡黄茶色シルト
21. 淡黄灰色シルト　22. 淡黄茶色土(径2～5cm 礫多)　23. 淡暗灰色細砂　24. 淡茶灰色砂
25. 淡灰色砂礫(径 20cm 大多)　26. 黄灰色土　27. 灰色砂礫(径 10cm 円礫多)
28. 淡灰色シルト　29. 褐色砂礫(径3～5cm 礫少量含)

第22図　Ａ～Ｅトレンチ土層柱状図・Ｆトレンチ土層図

物のうち、縄文土器・石器については、立命館大学大学院研修生近藤奈央が執筆した。

なお、今回の調査に係る経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

2．調 査 概 要

(1)友岡地区

友岡地区にはA～Fトレンチ(第21図)の6本の試掘トレンチを設定し調査を行ったが、全てのトレンチで顕著な遺構・遺物は検出できなかった。それぞれのトレンチは、地表下0.5～0.7mの厚さで田畑に伴う整地土と耕作土が堆積しており、その下位には砂礫が堆積していた。重機によりこの砂礫を深く掘削し、Bトレンチでは地表下2.5mに至るまで砂礫が厚く堆積していることを確認した。砂礫層の堆積規模から、これらの土砂を小泉川の流路内堆積の土砂と判断した(第22図)。

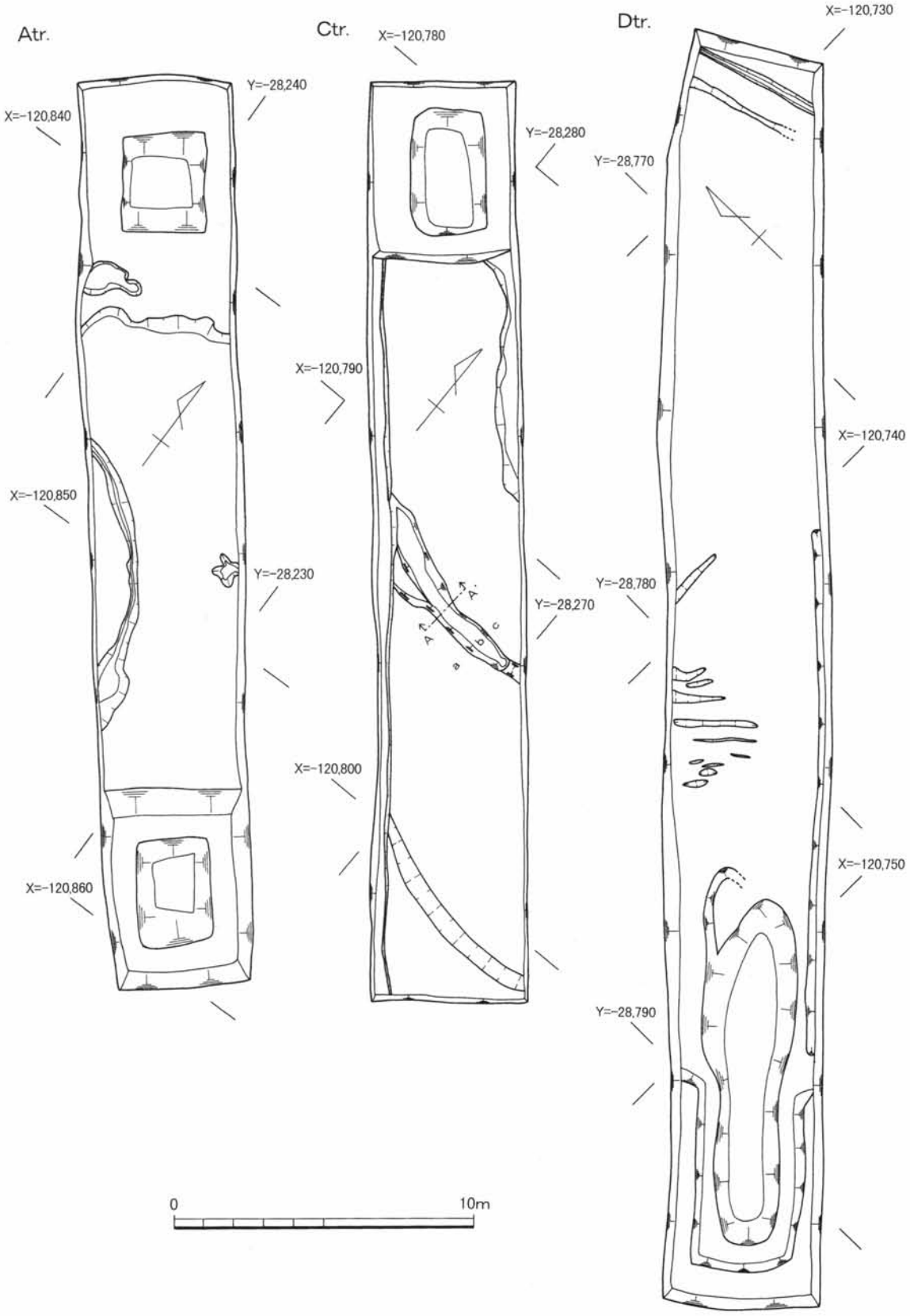
全てのトレンチで、砂礫層の上位には水平に薄く堆積した黄褐色土と灰色土がセットとなって、数セットが認められることから、整地を繰り返して耕作土を造成して盛り上げていったものと判断された。これらの整地土・耕作土中には瓦器片や中国製陶磁器片が混じることから、中世以後に、田畑としての土地利用が開始されたものと判断された。

検出した遺構は、耕作に伴う溝・足跡であるが、路線予定地内の東側に設定したD・E・Fトレンチで確認した。しかも、遺構は各トレンチの中でも東側に分布しており、その位置が段丘に近いためと判断される。

Aトレンチ(第23図)　調査対象地の西南隅に設定したトレンチである。地表下0.25～0.3mで、暗灰色土(耕作土)および明褐色土(床土)が堆積しており、床土直下が淡褐色砂礫・淡茶灰色砂礫となる。トレンチの北端と南端の2か所で、砂礫層を最大1.5m程度の深さで断ち割り、厚く砂礫が堆積していることを確認した。この結果、これらの砂礫層は旧小泉川の流路内で堆積したものと判断した。

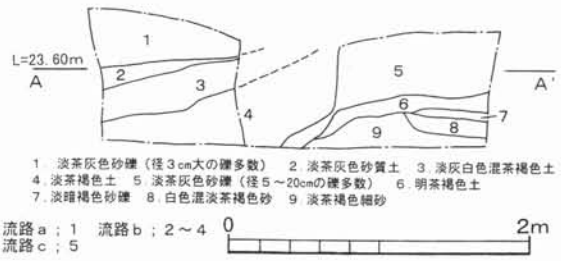
砂礫層上面で、溝・土坑を検出した。トレンチ中央部では弧状にめぐる、幅0.3～1.0m、深さ0.10～0.15mの溝を検出した。そのほかに、不定形の土坑を2か所で認めたが、これらの遺構からは遺物などの出土はみられなかった。トレンチ北側では、現地表で観察される田畑の段差が砂礫層上面でも認められたことから、小泉川旧流路内に堆積した砂礫を削って、現代の田畑の区画が設けられたと判断される。

Bトレンチ　調査対象地中央付近に設定したトレンチで、2枚の田畑を縦断して設定した。北側の田畑に相当する土層を見ると、6層の淡茶褐色砂礫混土の上位に薄い整地層を何層か積み上げて土盛りしている(第22図Btr.北西壁柱状図)のに対して、南側の田畑では、淡灰色土(耕作土)―淡茶褐色礫混土が0.3m程度堆積しているのみであった(第22図Btr.北東壁柱状図)。北端を除いて、耕作土・床土を除去した地表下0.3～0.5m程度の深度で、ほぼ全面に砂礫層が現れ、流路内堆積層と判断した(第22図Ftr.北西壁19層に相当)。この砂礫層上面では、遺構を全く確認できなかったため、北端部を地表下最大2.5m程度を断ち割り、遺構面・遺物の有無を確かめ



第23図　A・C・Dトレンチ検出遺構配置図

た。その結果、径20cm大の石を含む礫層が厚く堆積しており、標高21m付近で茶褐色～淡灰色細砂が堆積しているのを確認した。石の大きさから、小泉川本流内の堆積土砂と考えられる。



第24図　Cトレンチ土層部分図

以上のように、Bトレンチでは、旧小泉川の流路内堆積と判断される砂礫層が厚く堆積しており、遺構面が存在しないことが判明した。また、流路内堆積の砂礫からは、遺物は全く出土しなかった。

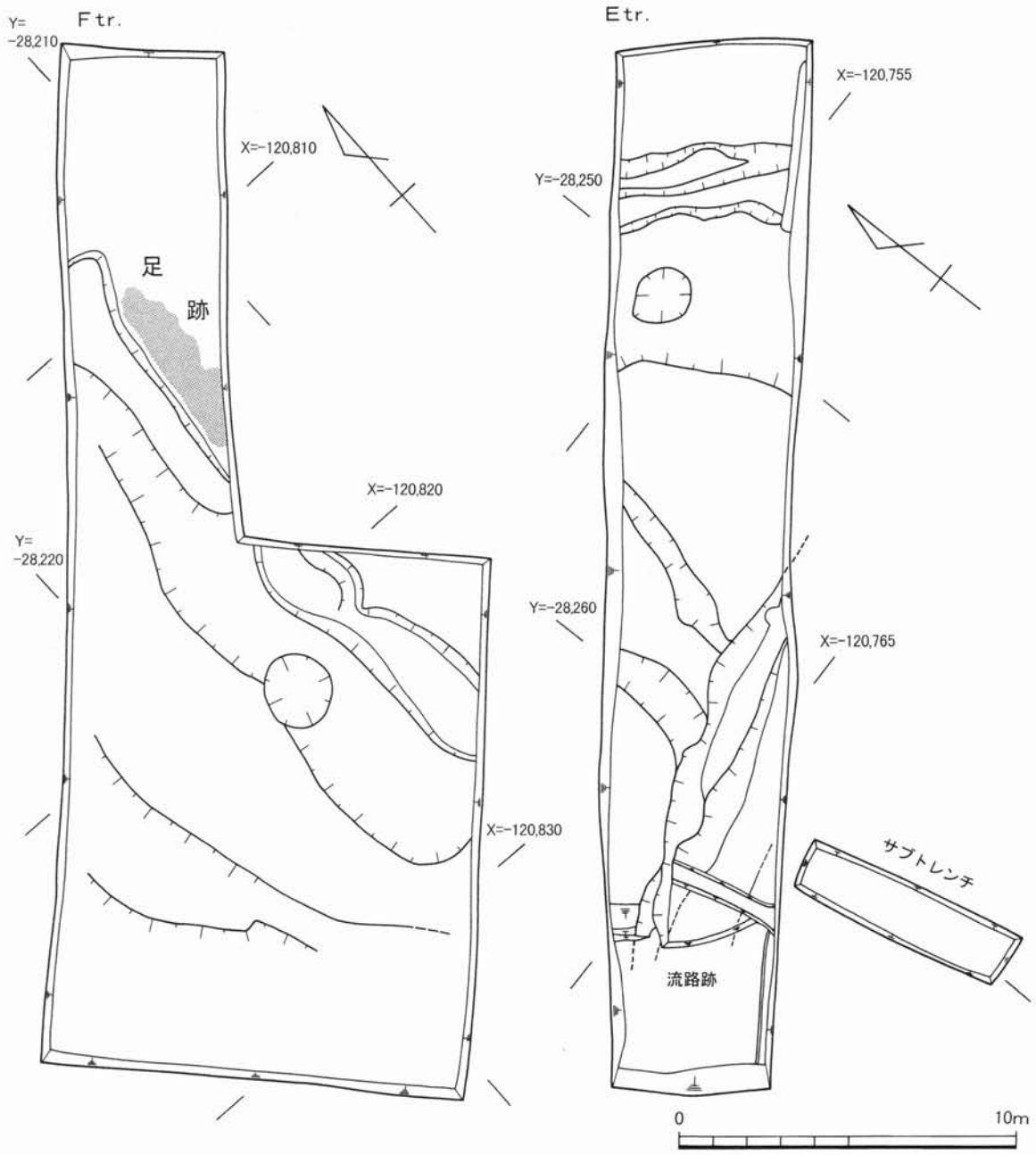
Cトレンチ(第23図)　小泉川に近接して設けたトレンチで、層序は、淡暗灰色土(耕作土)—淡茶黄色土(床土)が地表下30～40cmの厚さで堆積しており、淡茶黄色土の下が砂礫層となる。トレンチの北端で、この砂礫層を1.5mの深さで断ち割ったところ、砂礫が厚く堆積していることを確認し、旧小泉川流路内堆積の砂礫と判断した。砂礫層上面では、トレンチ東南部で深さ5cm程度の溝を検出した。トレンチ北西部では、北壁に沿って、黄茶褐色土を埋土とする溝状の落ち込みを検出した。この溝状の落ち込みは、上半は斜めに、下半はほぼ直に落ち込む形状を呈していた。壁面には、ベースとなる砂礫層に含まれた石礫が洗われた状態で露出しており、小泉川の溢流の痕跡もしくは旧地表面の田畑の段差と判断された。これらの溝からは、遺物は全く出土していない。

トレンチのほぼ中央部では、幅0.5～1.5mで、淡茶褐色土を埋土とする溝状の土質の違いを認めた。平面的に掘り下げたところ、南辺の壁が南に向けて、ベースと判断された砂礫の下に潜り込んでいく様相を確認した。そのため、サブトレンチを設定して土層観察を行ったところ、3本の流路が北から南に順次重なり合った部分の、2本目の流路の埋土を溝と誤認していることが判明した(第24図)。第23図Cトレンチ平面図では、流路a→b→cの順に新→古の流路内堆積土と判断された。先述の、平面的に溝と判断した埋土は、流路cの埋土上に抉り込んだ流路bの埋土であり、その南側は流路aにより削平されているものと判断した。これらの流路内堆積と判断する砂礫層からは、遺物は出土しなかった。

Dトレンチ(第23図)　友岡地区のうち、最も北側に設定したトレンチである。地表以下、耕作土—床土以下、淡茶褐色土—黄灰色土—淡黄灰色土—淡灰色土が約0.5mの厚さで堆積し、この下に、淡褐色砂礫・淡灰褐色砂礫が堆積している。トレンチの南西部で、この砂礫層を1.2mの深さで断ち割り、砂礫が厚く堆積しているのを確認し、小泉川の旧流路内堆積層と判断した。

トレンチの中央部と東端で、小溝群を検出した。トレンチの中央部では、6層の淡灰色土下面で深さ5cmにも満たない小溝群である。トレンチの東側に向かうにつれて、河川内堆積の砂礫層はその堆積面が徐々に低くなっており、6層の淡灰色土の下には、淡茶灰色土—灰色土が厚さ5cm程度づつあり、その下位に河川内堆積の茶褐色砂礫が堆積している。

トレンチの東端で検出した溝は、茶褐色砂礫層(流路内堆積である淡灰褐色砂礫の直上に堆積した土層)の上面と下面で一条づつ検出した溝である。標高23.9mと23.8m付近で、検出長4.5m、



第25図　Ｅ・Ｆトレンチ検出遺構配置図

幅0.4ｍで、遺物は出土しなかった。茶褐色砂礫層から第31図２の瓦器皿が出土している。

Ｅトレンチ(第25図)　地表以下、暗灰色土(耕作土)―明褐色砂混灰色土―淡灰色土―淡黄灰色土―淡茶灰色土が約0.5ｍ堆積しており、この下で、小泉川旧流路内堆積と判断される暗灰色砂礫層を確認した。トレンチの中央部やや東側では、現状の田畑の区画と一致した段差が認められ、流路内堆積の砂礫を削り出して田畑が作られている。この東側では、砂礫層上面で、３条の小溝と井戸状の土坑を検出した。土坑はやや大振りの石礫が詰まっていたが、遺物の出土はなく、流路内堆積の砂礫の一部を土坑と誤認した可能性もある。西端では小泉川から溢流したと判断される東西方向の流路跡とそれに流れ込むような深さ10cm程度の小流路跡を検出した。６・７層の淡茶灰色礫土・茶黄色礫混土が溢流内堆積土で、厚さは最大で0.6ｍを測る。この埋土中に瓦器片

が含まれることから、中世以降のものと判断される。第22図Ｅtr.南東壁土層柱状図は、溢流内の堆積土層の部分を図示している。この溢流の幅を確認するために、南側にサブトレンチを入れたが、この溢流の底面近くまで耕作土・床土―淡黄褐色土―茶褐色礫―茶褐色土が堆積しており、流路の立ち上がりは確認できなかった(第22図：Ｅtr. 西壁サブトレ土層)。現地形で見ると、サブトレンチ部分はＥトレンチ部分と比べて田畑が一段低くなっており、田畑を造成する際の削平により、溢流の立ち上がりは消失したものと判断される。

Ｆトレンチ(第25図)　トレンチ中央部から西半では、平面的に北から南に筋状に分布する砂礫の堆積を確認し、北西壁面の観察と併せて、数条の流路痕跡が重複しているものと判断した。第22図Ｆtr.北西壁土層図で見ると、大きくは13・29層のベースを、西側は22～25層・19層、東側は11・12層、14～16層を堆積土とする流路が抉り込んでいた。このトレンチでは数回の流路跡が認められ、中世以後に田畑としての土地利用がなされた後にも、小泉川がその流れを溢れさせ、広範囲に周辺の土地を浸食したことが観察された。トレンチ中央部南半では、水の流れによる抉れが認められた。25層中から第31図１の土師器皿、３の羽釜は24層に相当する土層から出土している。11層の淡明褐色土からは、９の須恵器杯、９層の淡茶灰色砂質土からは12～13の土器片が、27層の灰色砂礫からは14の弥生土器高杯が出土している。

遺構は、東端部で27層下位に相当する面で、中世以降の時期不詳の足跡を多数検出した。その西側には、畦畔状の0.15m程度の高まりが認められた。

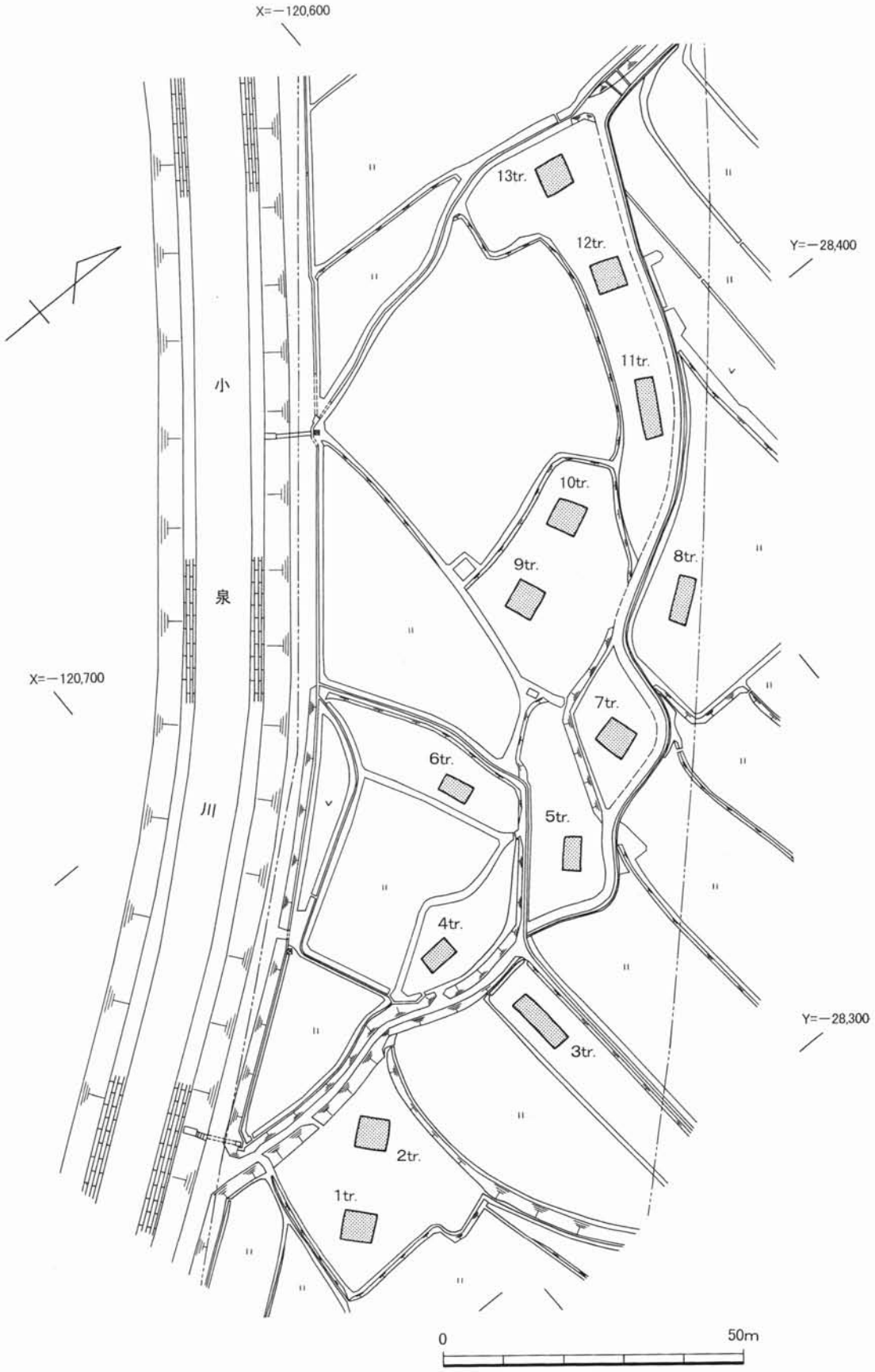
(2)下海印寺地区

下海印寺地区では路線対象地内に13か所のトレンチ設定して、遺構・遺物の検出に努めた(第26図)。

顕著な遺構・遺物を確認したのは、３・７・８トレンチで、いずれも路線予定地内の東側に位置しており、小泉川隣接地よりも一段高い段丘上にある。ほかの９か所のトレンチは、小泉川の旧流路にあたっており、小泉川の流路内堆積と判断される砂礫層とその上位に中世以降の田畑の耕作土・整地土が何回にもわたって盛り上げられているのを確認しただけである(第27・28図)。その中でも、９・12トレンチでは石器剥片が包含層中から出土しており、これらのトレンチが段丘の裾部に位置していることから、段丘上から流れ落ちたものと判断される。

以下、顕著な成果を得た３・７・８トレンチの３トレンチについて概述したい。それ以外のトレンチについては付表にまとめた。

３トレンチ(第29図)　耕作土の淡暗灰色土と床土の黄灰色土の下には暗灰褐色土が薄く堆積しており、東半ではその下に暗褐色粘質土が約10cmの厚さで堆積していた。これらの層中には、弥生土器片と判断される土器片(第31図15・16)が混じっていた。この下位には茶褐色斑混淡黄褐色土があり、この上面で小土坑を検出した。茶褐色斑混淡黄褐色土層は、掘削当初は地山と判断したが、トレンチ西端でこの上面を清掃中に石鏃１点が出土した。上位の土層との境界面であったため、茶褐色斑混淡黄褐色土中から出土したとの確証が得られなかったため、同層を広く掘り下げたところ、石器剥片１点の出土を見た。さらに掘削を進めたところ、下位には淡黄褐色土―茶



第26図　下海印寺地区試掘トレンチ配置図

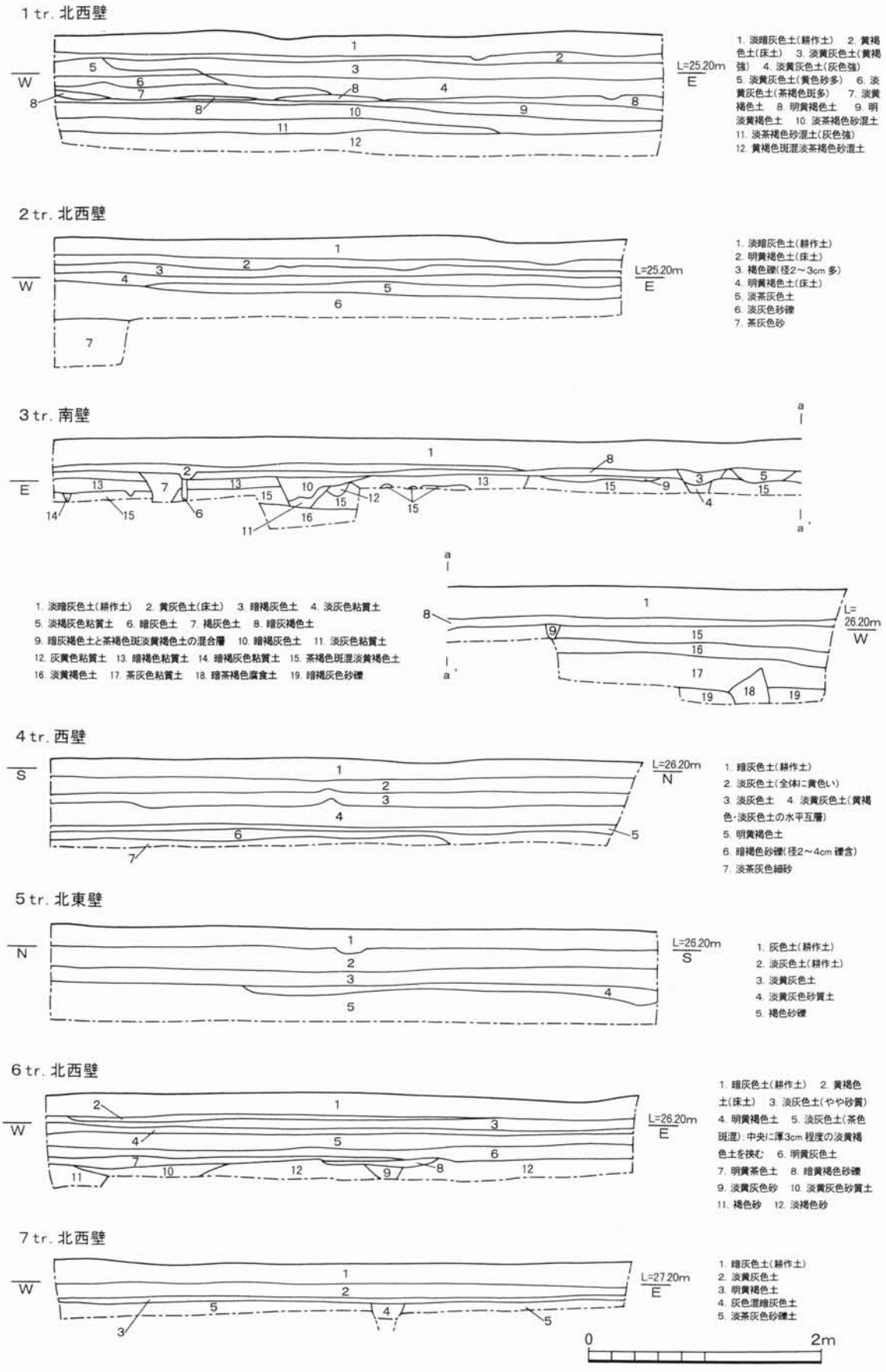
付表　下海印寺地区試掘トレンチ調査概要一覧

トレンチ	面積(㎡)	概　　要
1	25	地表下約70cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この面で、南北方向の溝の東肩を検出。この上位には、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
2	25	地表下約50cmで、旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
3	30	地表下約35cmで暗褐色土層を確認。包含層もしくは遺構内埋土か不詳。地表下約85cmで暗褐灰色砂礫層が分布し、この上面で縄文土器片と判断される土器片が出土。
4	15	地表下約70cmで、旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
5	15	地表下約50cmで、旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この上位には、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
6	15	地表下約60cmで、旧小泉川流路内堆積の砂礫層を確認。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
7	25	地表下約40cmで褐色砂が分布し、この上面で柱穴および土坑を検出。
8	25	地表下約45cmでほぼ真東西を向く幅３ｍの溝および柱穴数基を確認。溝内より瓦多数出土。
9	25	地表下約70cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この上位には、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積し、数面で耕作に伴う小溝群を確認。
10	25	地表下約75cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土。数面で耕作に伴う小溝群確認。
11	25	地表下約65cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層を確認。南北方向の流路跡の東肩を検出。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が分布。
12	30	地表下約50cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層。東西方向の流路状の落ち込みを検出。この上位に、中世以降現代に至る水田・畑作整地土と耕作土が堆積。
13	25	地表下25cmで旧小泉川流路内堆積の砂礫層。東西方向にのびる流路状の落ち込みを検出。この上位に、現代の耕作土が堆積。

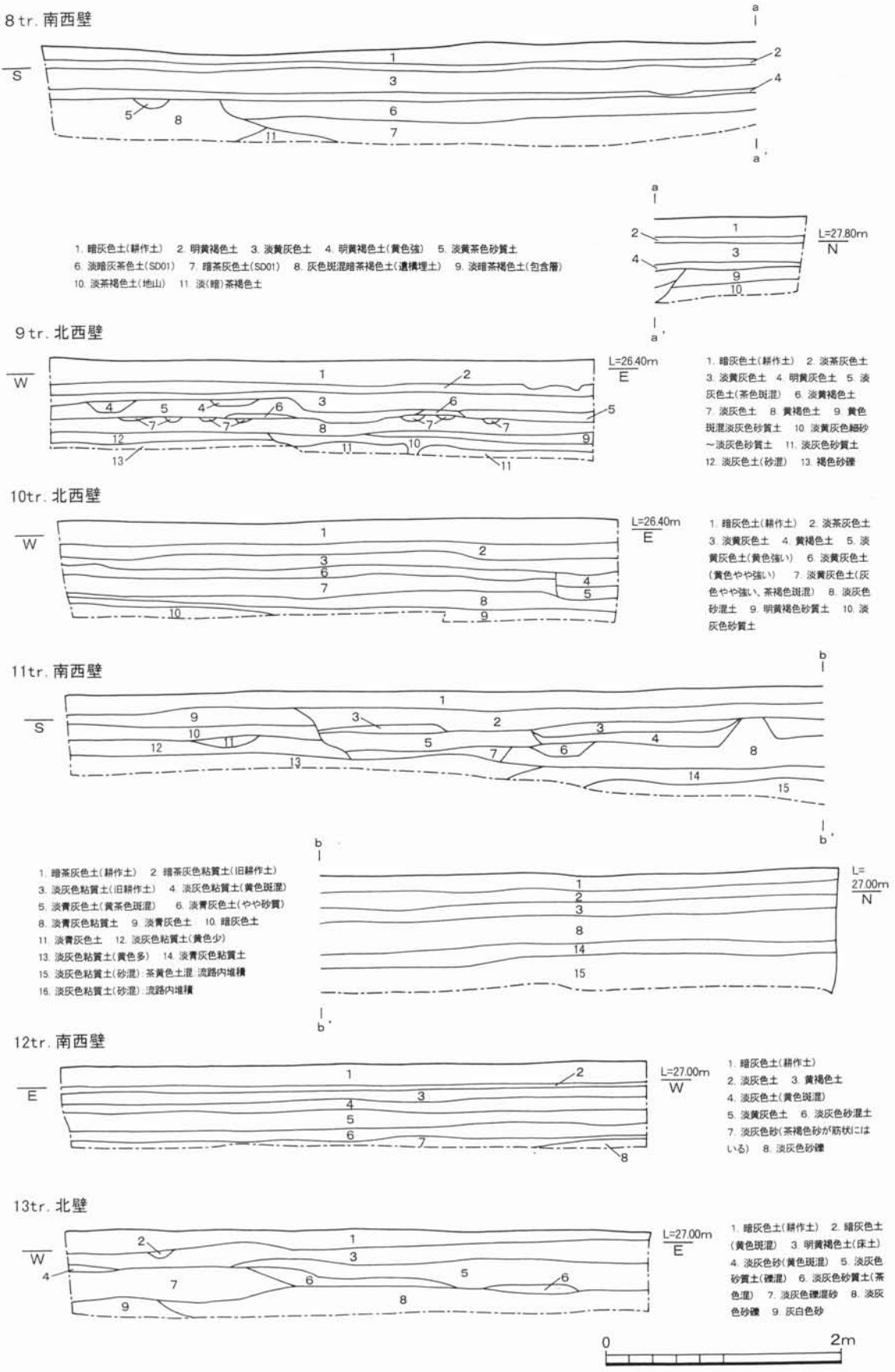
灰色粘質土―暗褐灰色砂礫が堆積しており、暗褐灰色砂礫の上面で、縄文土器と判断される土器片１点を確認した。この面は、茶褐色斑混淡黄褐色土の上面から45～50cm下位にあたる。

７トレンチ(第29図)　地表下0.4～0.5m掘り下げると褐色砂礫となり、この上面で柱穴６基とそれよりやや大形の土坑１基を検出した。土層断面の観察では、この直上にある淡茶灰色砂礫土層の上位から掘り込まれている。淡茶灰色砂礫土層には、弥生時代から古墳時代と判断される土器片が含まれていた。同層の上位には、耕作土および耕作土関連の暗灰色土・淡黄灰色土が堆積しており、これらは出土遺物から中世以降の整地土と判断される。

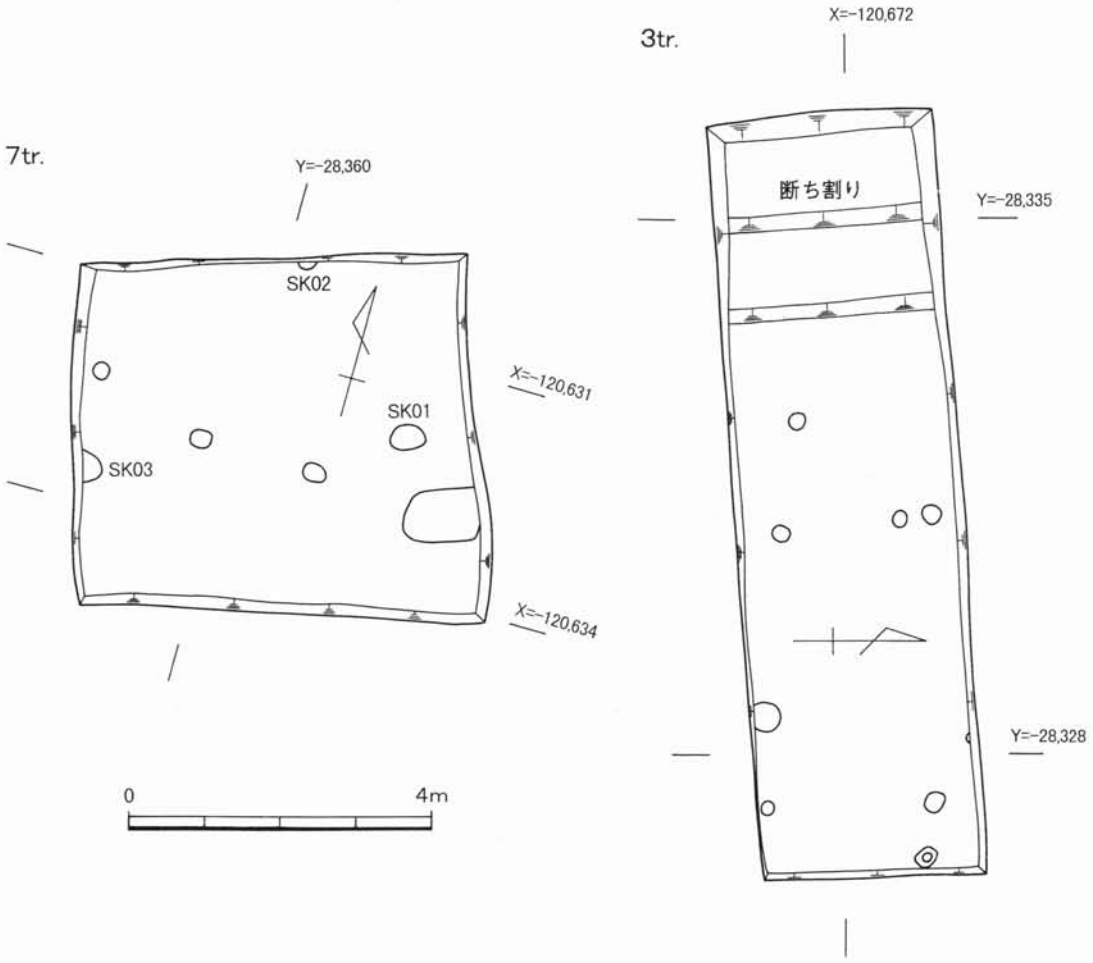
８トレンチ(第30図)　トレンチ南辺近くで、東西方向の溝を検出した。南辺は直線的に掘られているが、北辺で西側に向かって北側にやや広がる不定形に掘削されている。「Ｌ」字形に曲がる屈曲部にあたる可能性がある。ほぼ直線的に掘られた南辺で計測すると、Ｎ６°Ｗの傾きを有しており、周囲に認められる田畑の区画方向と一致している。溝幅は３ｍを測り、深さは0.4ｍである。トレンチの西辺に沿って設定したサブトレンチ内では、溝の北側の傾斜面に接して多数の瓦片が堆積しており、南側斜面では認められなかった。また、溝の検出面では、北辺だけに瓦片が分布していた。これらのことから、溝の北側に瓦を葺いた構造物が存在しており、その瓦が溝内に廃棄されたものと想定される。瓦の大半は現地にそのまま保存したが、現地での観察およ



第27図　1～7トレンチ土層図



第28図　8～13トレンチ土層図



第29図　3・7トレンチ検出遺構配置図

び出土した瓦を見ても、瓦当面は認められなかった。溝心の座標は、Y＝－28,369.0のとき、X＝－120,610.6である。座標値のみで見ると、長岡京の七条条間小路南側溝（X＝－120,245.2、Y＝－25,795.8）[注3]より、約365m（約1,235尺）南側に位置する。内部からは、第31図4～7・10・11の土器が出土している。

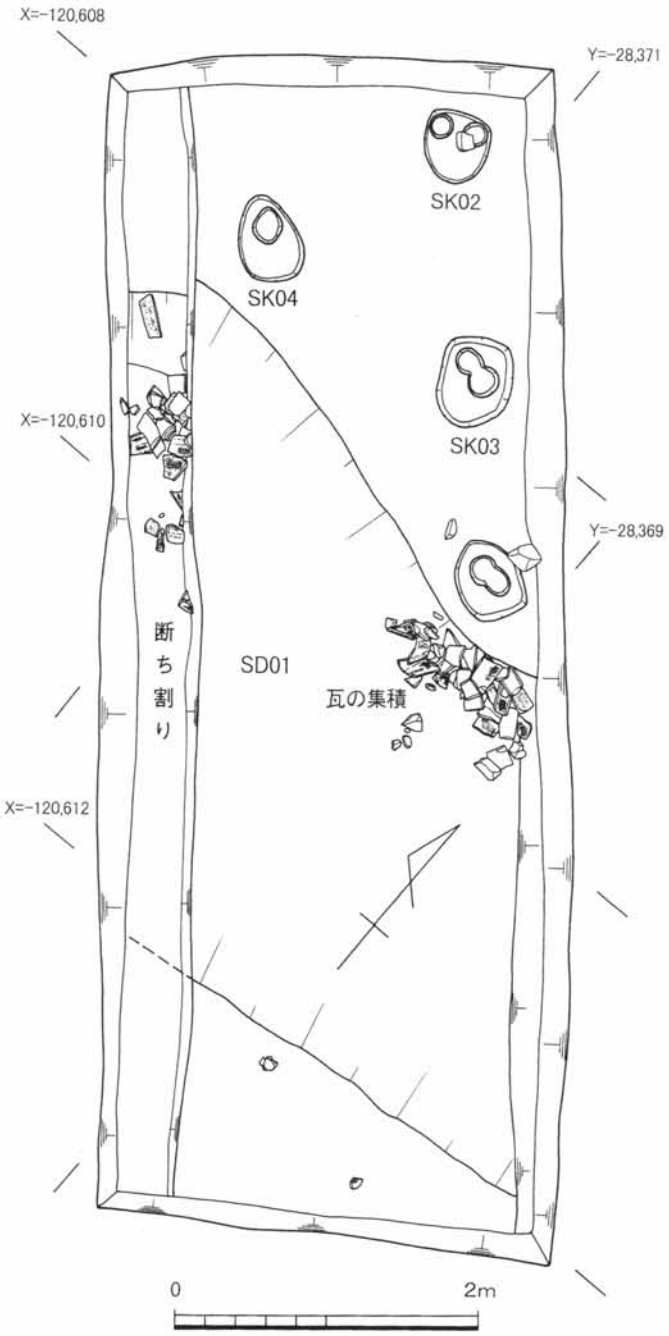
溝の北側では柱穴状の土坑4基を検出し、溝との位置関係から柵列とも判断されるが、トレンチの西辺のサブトレンチ内の溝底面でも柱穴状の色の違いが認められたので、溝に先行する掘立柱建物跡に復原できる可能性もある。

土坑ＳＫ01からは、第32図27・第33図32、土坑ＳＫ02からは、第33図30の縄文土器片が出土したが、この遺構の時期を示す遺物であるかどうかは不明である。溝の南側は、土師器や須恵器を含む灰色斑混暗茶褐色土がトレンチの全面に広がっており、サブトレンチの観察では、堆積の厚さは0.35mを測る。溝ＳＤ01の北側ではこの層に対応する土層が認められないため、溝ＳＤ01に先行する遺構の埋土と判断される。溝の検出時や包含層中には、須恵器や土師器と共に、縄文土器片や石器剥片が混じっていた。

（岩松　保）

3．出土遺物（第31～34図）

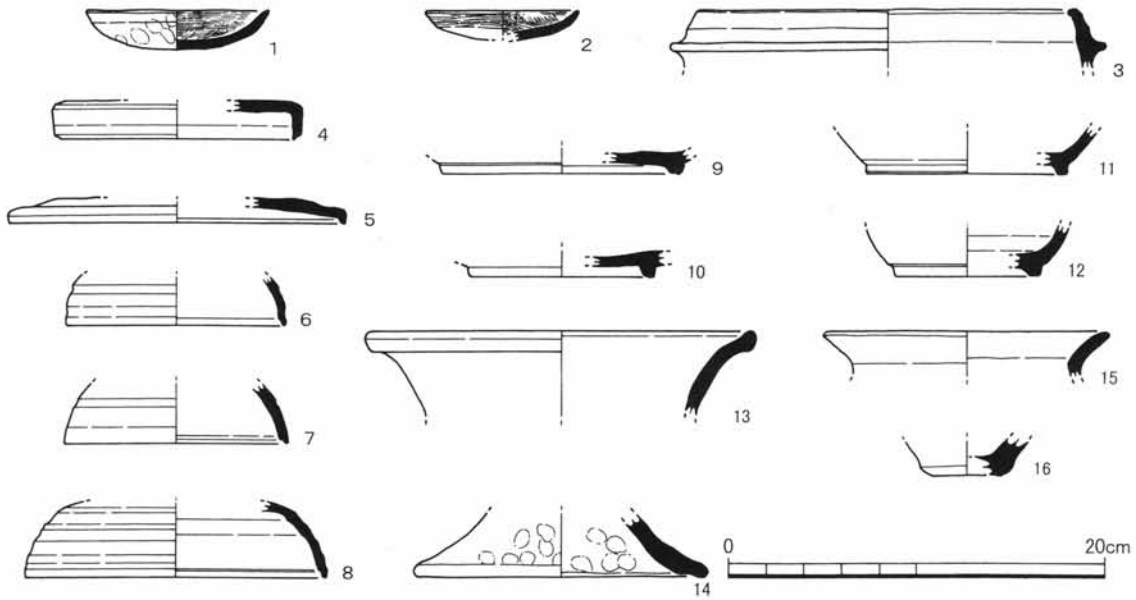
遺物は土器を主体に瓦・石器などがコンテナバット５箱程度が出土した。土器は、各トレンチの各層位から出土した。細片が多く、角がとれて磨滅したものがほとんどである。このうち図化できたものを概述する。



第30図　８トレンチ検出遺構配置図

第31図１は土師器皿Ｎで、Ｆトレンチ西半淡灰色砂礫層から出土した。口径9.6cm、器高2.1cmを測る。色調は内外面明橙色を呈し、外面に黒褐色の黒斑が残る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収まる。内面はナデ調整で仕上げるが、細かいハケ目が残る。外面は指押さえの後、口縁部は横方向のナデ調整である。時期は11世紀である。２は瓦器皿である。口径8.3cm、器高1.6cmを測る。体部は外反気味に斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収まる。内面と口縁部外面にミガキを施す。時期は12～13世紀である。Ｄトレンチ東半で、流路内堆積である淡灰褐色砂礫の直上に堆積した茶褐色砂礫層から出土した。３は、Ｆトレンチ南半部の茶褐色土(礫混)から出土した瓦質の羽釜である。口径20cmを測る。鍔部分は８mmと幅が狭い。口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は水平の平坦面をもつ。調整は口縁部、鍔部分共に横ナデがみられ、特に鍔の接合部には強く施す。時期は13世紀後葉～14世紀初頭である。

４～７は、８トレンチ溝ＳＤ01から出土した須恵器である。４は、口径13.2cm、器高2.1cmを測る須恵器短頸壺の蓋である。天井部は平坦で口縁部はやや内側に垂下し、端部は凹面を呈し、断面鋭角に収まる。調整は天井部外面はヘラケズリ、天井部と口縁部の接合部、端部は横ナデを施す。時期は、和泉陶邑窯での中村編年Ⅳ型式２段階である。５は、口径17.7cmを測る須恵器杯身の蓋である。色調は橙白色を呈し、焼成が不十分である。天井部はヘラケズリ、口縁部は短く屈曲し、端部は丸く収まる。内面はナデで仕上げる。時期は８世紀後半～９世紀初頭である。６



第31図　出土遺物実測図(1)

Dトレンチ：2　　Fトレンチ：1・3・9・12～14
3トレンチ：15・16　　8トレンチ：4～7・10・11　　9トレンチ：8

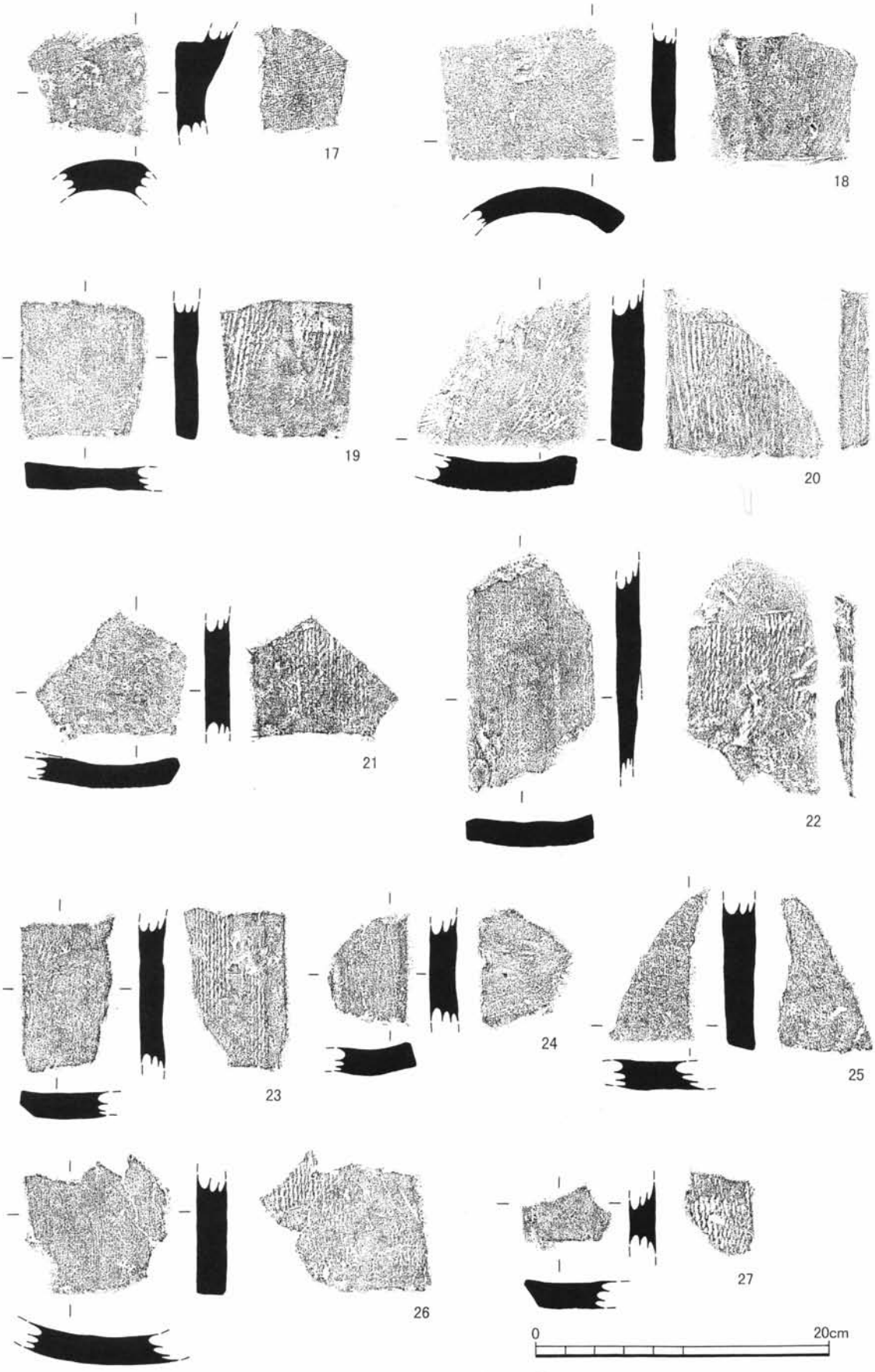
は、口径11.6cmを測る須恵器杯の蓋である。稜線はヘラ削りによる段差が認められる。口縁部は内側に湾曲して下がり、端部付近で外反し、丸く収まる。時期は中村編年Ⅱ型式２段階である。７は、口径11.8cmを測る須恵器杯の蓋である。稜線はヘラ調整による明瞭な段差が認められる。口縁端部付近で外反し、小さく丸く収まる。そのため、端部内面は凹面になる。時期は中村編年Ⅱ型式２段階である。８は、９トレンチ暗茶褐色土から出土した。口径16.0cmを測る須恵器杯の蓋と思われるが、天井部欠損のためつまみの有無が確認できないため、有蓋高杯の蓋の可能性もある。稜線には浅い凹線様の沈線がみえるが、無いに等しい。中村編年Ⅱ型式３～４段階である。９～12は、壺の底部と思われる12を除き須恵器杯Ｂである。時期は８世紀代後半のものが多い。９はＦトレンチ西半の淡明褐色土、10・11は８トレンチの溝ＳＤ01から、12・13はＦトレンチの９層淡茶灰色砂質土から出土している。13は口径20.4cmを測る須恵器甕である。口縁部は大きく外傾し、端部は上向きに丸く収まる。時期は中村編年Ⅲ型式２段階である。

14は、口径15.2cmを測る弥生土器高杯の脚部である。内外面指押さえによる成形の後、ナデ調整する。特に丸く収めた端部は横ナデによるていねいな仕上げを施す。Ｆトレンチ27層の灰色砂礫から出土した。15は、口径15.2cmを測る弥生土器甕である。短い頸部は「く」の字に外反し、口縁端部は丸く収まる。16は弥生土器甕の底部である。色調は内面黒色、外面赤褐色を呈する。底部外面はわずかに窪みがみられる。15・16は、３トレンチの暗灰褐色土から出土した。

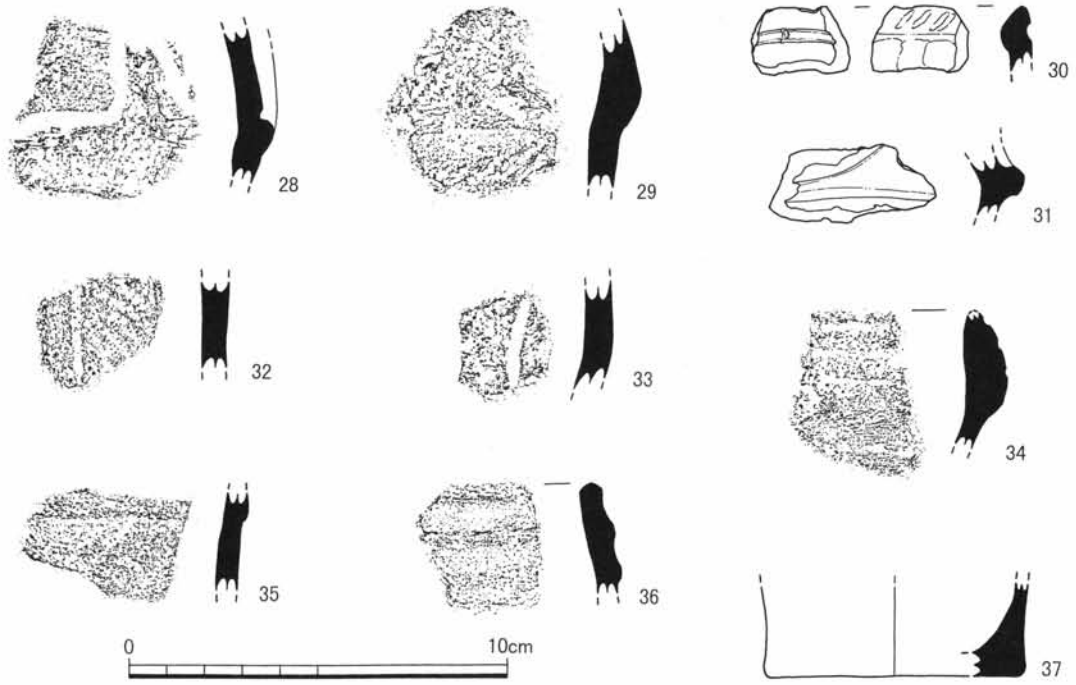
第32図は、８トレンチから出土した瓦の拓影であるが、瓦当部分は全く出土しなかった。

（竹井治雄）

第33図は、今回の調査で出土した縄文土器の実測図と拓影である。７・８トレンチから中期末～後期中葉の縄文土器片が10数点出土したが、その大半は、調整が不明瞭のため時期を確定する



第32図　出土遺物実測図(2)



第33図　出土遺物実測図(3)

ことはできなかった。ここでは実測が可能な10点を図示した。

このうち28～33・35・37は８トレンチから出土した。ほとんどが包含層中からの出土であるが、32は土坑ＳＫ01、30は土坑ＳＫ02から出土した。土坑ＳＫ01・02は掘り切っていないため、この土器が混入であるのかどうかは不明である。34・36は７トレンチの包含層出土である。このほか、３トレンチの暗褐灰色砂礫の上面で、縄文土器と判断される土器片１点を確認している。

28は区画文と隆帯をもつ深鉢で、口縁部直下の破片である。外面はナデ調整であるが、内面は磨滅のため不明瞭である。区画文は残存部分から縦隆帯の左右に施文されていたと考えられる。左の区画文先端は四角く、右側のものは丸みを帯びている。沈線は棒状の工具が用いられたようで内湾している。29は深鉢の口縁で、外反しながら立ち上がり、隆帯付近でゆるやかに撫でた後、隆帯上部と下部にＬＲ縄文を施文している。内面はていねいにヨコナデしている。口縁の肥厚は強く撫でられたことにより、一部で段を形成する。内面の色調はにぶい橙色を呈する。30は深鉢と考えられ、外面口縁直下に押し引き沈線と内面口唇部に斜状の文様を施している。内傾気味に立ち上がる外面に対し、内面は断面三角形状に肥厚した器形である。内面にある斜状の沈線文は、同器種の土器にみられる施文から、縄目を転がした痕跡と考えられるが、磨滅が著しいため、撚りの方向は確認できなかった。外面沈線には竹管状工具を用いて左から右へと押し引いた痕跡が認められ、擦痕もわずかながら観察できた。31は28と同様、区画文を有すると考えられる隆帯部付近の破片である。内外面をナデ調整する。沈線は隆帯下にもあり、棒状工具による施文と推測できる。32・33は垂下する浅目の沈線を引く胴部片である。前者はＲＬ縄目の施文があるが、後者は磨滅が著しく確認できなかった。34は肥厚した口縁部に平行する浅い３本の沈線を引く。頸部を特に強く撫でている。口唇部を欠く。35は角閃石を多く含む胎土で作られており、黒褐色を

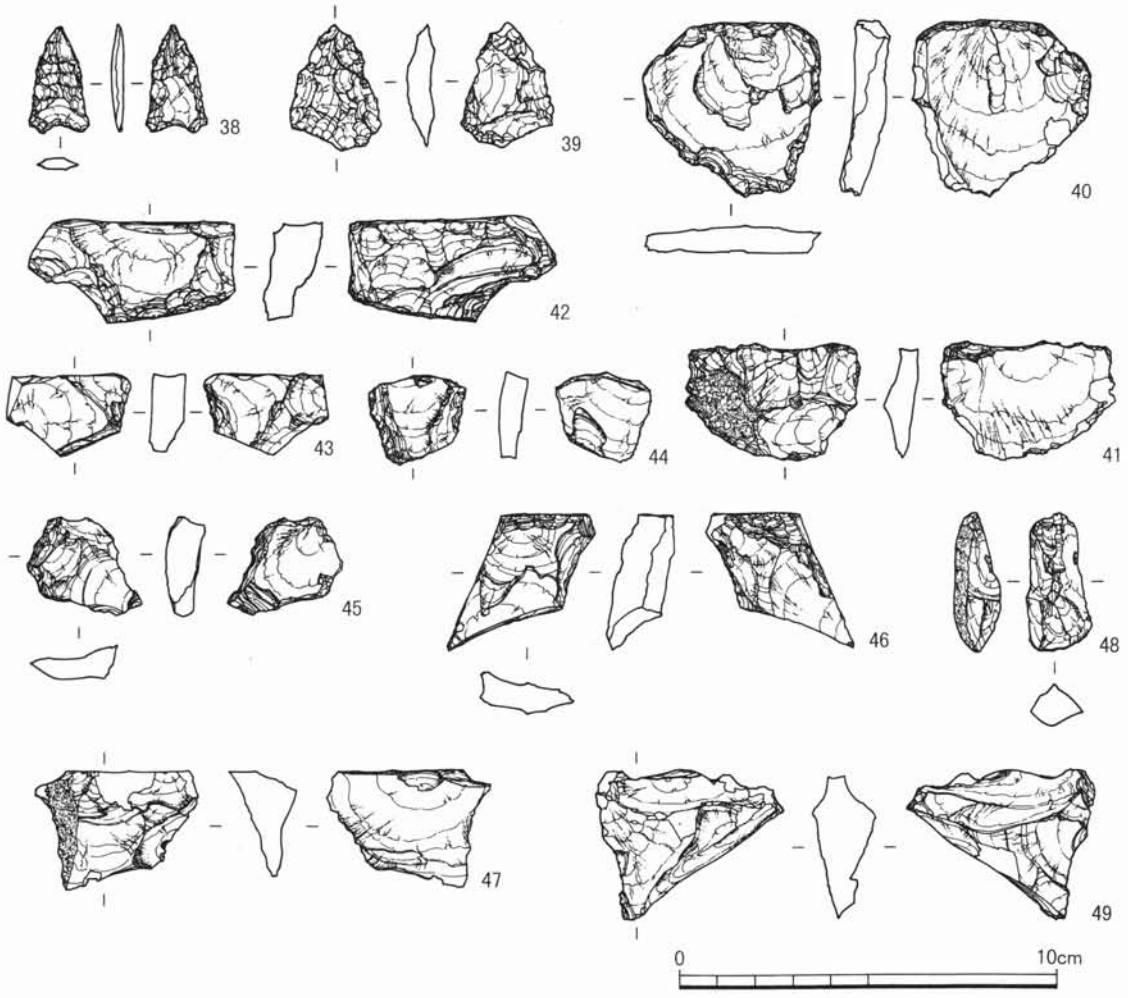
呈する。上部に肥厚した部分があり、頸部との境目に段差を形成している。内外面はナデ調整を行ったとみられる。粗製深鉢と考えられる。36の口唇部の面取りは、角度を変えてていねいに行われている。内面はナデ調整し、外面は指と工具によると考えられる浅く太い沈線が２本、口縁に平行して施文され、ミガキに近いていねいなナデ調整を施している。２本のうち下部沈線は指または先の丸い工具によると考えられるが、上部のものは断面が「く」の字状であり、工具痕とみられる傷が沈線内に残っていることから、ある程度幅があり、角のある工具が用いられたと考えられる。いずれの沈線内にも細かい擦痕が認められる。37は平底である。磨滅が著しいため、調整は不明である。接地面からわずかにくびれながら真っ直ぐに立ち上がる器形を呈する。

今回出土した縄文土器の型式については、28～31が縄文時代中期末の北白川Ｃ式、34が北白川上層２式、36は元住吉山２式に相当し、35は縁帯文期のいずれかに属する粗製深鉢、32・33と37の平底は、出土地点から北白川Ｃ式に伴うと考えられる。

石器類では石鏃のほか石核・剥片・剥離物などが50点余りが出土した。材質は、剥離物中にチャートが１点だけ含まれていたが、ほかは全てサヌカイトであった。これらの石器は、３・８・９・12トレンチの包含層から出土したもので遺構に伴うものはない。

第34図の石鏃・石核・剥片・剥離物のうち、38・45・48は３トレンチ、39・40・42・44・47は８トレンチ、41・43・46・49は12トレンチからの出土である。

38は凹基式の無茎石鏃である。主要剥離面と背面は基部を作り出した後、側縁を細かく加工したと考えられる。側縁から先端部付近で角度を変えて面を作り出す五角形鏃である。長さ2.8cm、幅1.7cm、最大厚3.4cm、重さ1.29ｇである。39は、38に比べ剥離痕が少なく、厚みも0.6cmと分厚いため、石鏃として用いられていたというよりも未製品の可能性が高い。長さ3.2cm、幅2.4cm、重さ4.89ｇである。40・41は、側縁部を調整したスクレイパーであると考えられ、主要剥離面にはほとんど調整がなされていない。共に打面に自然面を残す。40の背面は打点周辺に剥離痕が密集するが、大きな剥離面が基本となっている。主要剥離面の左側縁は後世の剥離痕が多く残るが、断面形状が彫刻刀のように三角形状の片刃を呈する。しかしながら、故意に作られた刃部として用いられていたかは不明である。法量は長さ4.6cm、幅4.7cm、最大厚0.7cm、重さ23.83ｇである。41は背面の1/3にサヌカイト特有の自然面を残す。剥離痕が多くみられる。長さ3.1cm、幅4.5cm、最大厚0.9cm、重さ13.23ｇである。42～47は剥片石核と考えられる。42は出土資料中最も風化が著しい。主要剥離面に下からの大きな剥離が多いが、背面は下部に小さい剥離痕が集まり、下面には自然面が残る。長さ2.1cm、幅5.5cm、最大厚1.6cm、重さ26.50ｇを測る。43は主要剥離面の右側縁に細かい調整が存在する。全体を荒く割っており、下面に自然面を残す。法量は長さ2.1cm、幅3.3cm、最大厚0.9cm、重さ7.42ｇである。44は背面右側の全面に鱗状の剥離痕が残る。両側を剥離した後、真ん中を上方から打ち欠く。5.06ｇの重さで、この中で一番軽く小振りである。長さ2.4cm、幅2.5cm、最大厚0.8cmを測る。45は左側面に自然面を残す重さ6.88ｇの剥片である。主要剥離面下部に階段状剥離を有し、背面を特に敲打した痕跡が残る。長さ2.6cm、幅3.0cm、最大厚1.0cmである。46は菱形を呈する剥片で、打面だけでなく、左側面、下面を打ち欠



第34図　出土遺物実測図(4)

いて平坦面を作り出し、形を整えようとしている。右側面は、主要剥離・背両面から調整する。両面とも打撃が数回加えられたような剥離痕がみられ、特に中心部が抉れており、凹レンズ状の形を呈する。長さ3.6cm、幅4.0cm、最大厚1.1cm、重さ13.42ｇである。47は打面と背面左側に自然面を残す。石核の端を打ち欠いたとみられ、主要剥離面・背面はその状態を端的に示す。断面は楔形状を呈する。重さは17.75ｇあり、長さ3.5cm、幅4.3cm、最大厚1.7cmである。48・49は石核の残滓と考えられ、前者は核の端であったため自然面が残っている。右側から左側に向かって打撃が加えられたようである。長さ3.6cm、幅1.6cm、最大厚1.1cm、重さ6.73ｇを測る。後者の49の剥離痕は全て背面の状態を示していることから、石核の中心部分とすることができ、あらゆる方向から打割されている状況を確認できる。この石核に残る痕跡の中では恐らく、図面左側の面から最初の打撃が加えられたと考えられる。長さ4.0cm、幅5.0cm、最大厚1.7cm、重さ32.57ｇであり、大型石核であったと考えられる。

８トレンチで出土した石器については、縄文土器の出土から当該期に属するものと考えられる。しかしながら、そのほかの石器については、３トレンチでは弥生土器が出土しているため、所属時期は確定できない。また、12トレンチから出土した石器類についても同様に、所属時期は不明である。

（近藤奈央）

4．ま と め

今回の試掘調査は、友岡地区と下海印寺地区の２か所で実施した。その結果、両地区とも現小泉川に近接した範囲は旧小泉川の流路にあたっており、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

小泉川近傍の土地利用についてまとめると、旧小泉川の流路と判断される砂礫層の上位には、田畑の耕作に伴う整地土が数回にわたって盛り上げられている。これらの整地土の中に中世以後の土器片が混じることから、中世以後に田畑として利用されたと判断される。

Ｆトレンチの砂礫層中からは、平安時代前期～中期にかけての土師器皿が出土しているので、中世以前には、旧小泉川の流路や氾濫原のため人的な土地利用はなされていなかったか、もしくは平安時代前期から中期の旧小泉川流路のためにそれ以前の生活痕跡が削り取られたかのいずれかである。

Ｂトレンチでは地表下2.5ｍまで掘削した。人頭大の石が多く堆積していたことから、旧小泉川の本流に位置していた可能性が高く、小泉川本流が位置していたために土地利用の開始時期が遅れたものともと判断される。中世以後には小泉川の流路も安定したようで、それまでの小泉川本流であったところが、水田耕作や畑作に利用されている。とは言っても、人間が住まえるような安定した環境にはなかったようで、人間の居住を示すような痕跡は認められなかった。Ｅ・Ｆトレンチでは、中世以後に小泉川から溢れ出したと判断される小流路が確認できたことは、その考えを裏付けるものであろう。

下海印寺地区の段丘上では、顕著な遺構・遺物を確認した。３トレンチでは、茶褐色斑混淡黄褐色土中から石鏃・剥片が、この下位の暗褐灰色砂礫の上面では、縄文土器と判断される土器片が出土した。段丘上に位置する７・８トレンチでは縄文土器および石器・剥片が出土しており、３トレンチの様相と併せて考えると、段丘上には縄文時代の遺構面が広範囲に遺存している可能性が窺われる。今回出土した縄文土器は、近藤奈央氏の詳細な観察にあるように、北白川下層Ｃ式、北白川上層２式、元住吉山２式と縄文時代中期末の範疇で捉えられるものである。近辺では、この段丘から南東側約300ｍに位置する右京第325次調査地から、縄文時代中期の船元式を主体とする多量の縄文土器が出土しており、それとの関連が注目される。

また、８トレンチでは、東西方向の溝を検出し、多くの瓦片が廃棄された状態で出土した。埋没の時期を示す土器は確認できていないが、奈良～平安時代に埋没したものと思われ、長岡京跡の条坊遺構や周辺に存在したと考えられている伊賀寺跡などとの関連が注目される。７トレンチでは、柱穴・土坑を検出し、包含層中から弥生～古墳時代にかけての土器片が出土しているので、当該時期の遺構が広がっているものと考えられる。

（岩松　保）

注１　山中章「古代条坊制論」（『考古学研究』第38巻第４号　考古学研究会）　1982

注２　**調査補助員**　大島弘子・木村涼子・黒慶子・近藤奈央・財前幸一郎

　　整理員　大島弘子・木村涼子・小林直・近藤奈央・松下道子

注３　『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊　京都市埋蔵文化財研究所調査報告書』第17冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1998

参考文献

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」(『研究紀要』第３号　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1996

平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』Ⅰ　1966

中村浩『和泉須恵邑窯の研究』　柏書房　1981

4．長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要

1．はじめに

この調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京市井ノ内小西地内に所在する。長岡京の条坊復原推定によると右京二条四坊二町(新条坊：右京二条四坊四町)にあたり、弥生時代～中世にかけての複合遺跡である井ノ内遺跡の西端付近でもある。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員増田孝彦が行った。調査期間は、平成15年11月26日～平成16年2月26日まで実施した。調査面積は、約800㎡である。

調査に際しては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府乙訓土木事務所・井ノ内自治会をはじめとする関係諸機関の協力を得た。また、現地作業・整理作業については、調査補助員・整理員の協力を得た(注1)。記して感謝する。

なお、調査に係る費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

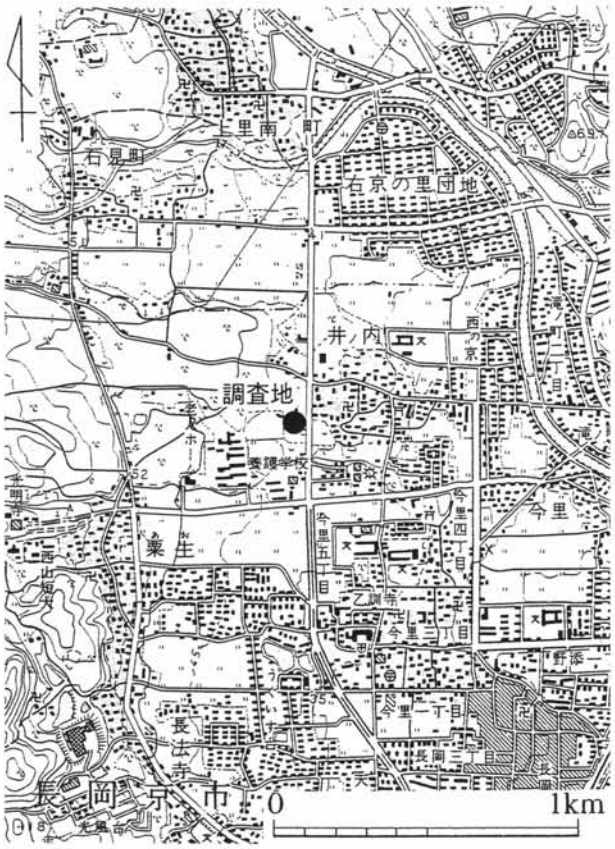
2．周辺の遺跡と調査

調査地は、小畑川右岸の善峰川により形成された沖積地南側、西山丘陵から派生した標高40m前後の低位段丘上に立地する。府道大山崎大枝線(通称文化センター通り)に対して、直交する南側の府道長法寺向日線と北側の府道向日善峰線に挟まれたやや北寄りに位置し、低位段丘上の張り出した低丘陵上に立地する。南側には、これに沿って蛇行しながら小畑川に注ぐ坂川がある。この段丘の北端は沖積地との境が京都市と長岡京市の行政界でもある。府道大山崎大枝線は、長岡京の条坊復原推定によると、西三坊大路内を通じていることになる。

調査地周辺には多くの遺跡が分布しており、北から上里遺跡・頭本遺跡・井ノ内遺跡が存在している。また、井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳の前方後円墳をはじめ、井ノ内古墳群(4基)など数多くの古墳が築造されている。

道路整備事業に伴う調査状況については(第36図)、昭和53・54年度に桂川右岸流域下水道建設工事および道路新設・拡幅工事に伴う調査が京都府教育委員会で実施された(注2)(右京第21・27次)。

大山崎大枝線に伴うものとしては、平成10年度に右京第615次(注3)、平成13年度に右京第704次(注4)、平成14年度に右京第753次(注5)、本概要報告の右京第795次の4次の調査が行われ、当調査研究センター



第35図　調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部)

が実施した。京都市域については、平成14・15年度に石見下海印寺線、伏見向日線道路建設に伴い、(財)京都市埋蔵文化財研究所で調査(右京第772・775次)が実施された。(注6)

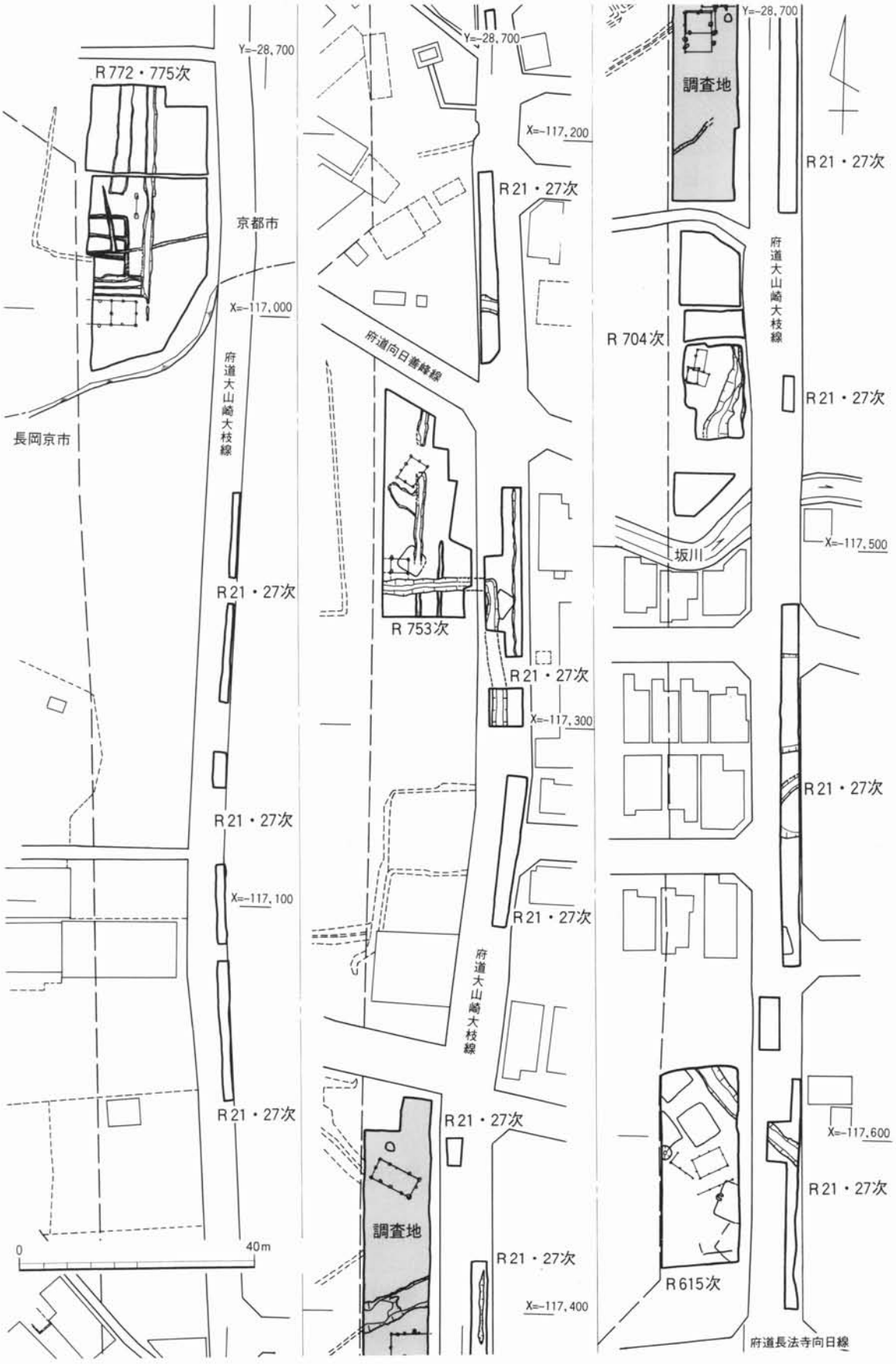
右京第772・775次調査では、平安時代以降とされていた上里遺跡が、縄文時代晩期まで遡ることが明らかになった。特に縄文時代晩期の甕棺墓群は、周辺に集落の存在を示唆するものであり、また、古墳時代中期の竪穴式住居跡群は、周辺遺跡の集落の変遷、古墳の築造を考えていく上で重要である。

やや南下した井ノ内遺跡の右京第21・27次調査では竪穴式住居跡、右京第753調査では古墳時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑、右京第615次調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡4基・掘立柱建物跡1棟などが検出されている。これらの古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡については、建物の方位がほぼ同方向に向く傾向が観察される。

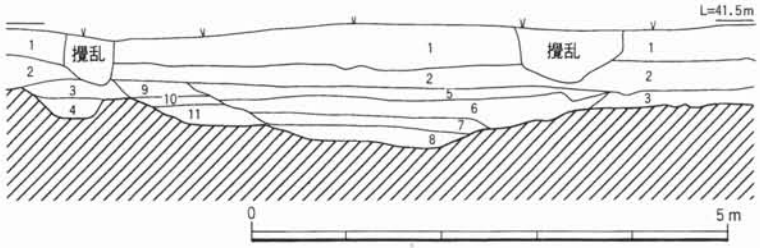
長岡京期の遺構に関しては、前述した上里遺跡の調査(右京第772・775次)において、長岡京の南一条大路南側溝が検出されているが、条坊復原の推定からずれることから、検討を要するという結果が報告されている。これとは別に西三坊大路の位置が判明し、長岡京の条坊復原を行う上で貴重な発見となった。また、西三坊大路に面した門跡も検出され、宅地の班給も行なわれていたことが明らかとなった。しかし、これより南側では長岡京期の遺物は出土しているが、遺構は確認されていない。条坊復原推定では、大山崎大枝線が西三坊大路の路面内に位置しており、これが起因するのであろうか。

平安時代以降は、台地上を中心に展開するようになり、遺構・遺物も長岡京期に比べると多くなる。遺構としては、中世以前と考えられる道路状遺構や掘立柱建物跡が検出されている(右京第795次)。

中世では、井ノ内館跡の外郭施設である方形に区画される溝の北限(右京第795次)や東限(右京第21・27次)の一部が確認されている。右京第704次調査では、坂川の旧支流と考えられる自然流路や流路の振れに合わせた掘立柱建物跡4棟が検出されており、時期は12世紀を中心とするものと考えられている。右京第27・704・795次調査では、出土遺物に鍛冶滓・鉄製品などの鍛冶生産関連遺物が含まれ、木炭やフイゴ羽口・焼土塊も確認されており、調査地近辺に鍛冶工房が存在



第36図　トレンチ配置図



1.表土(竹林盛土)　2.旧表土　3.淡黒褐色土(中世包含層)　4.黒褐色粘質土
5.暗茶褐色土　6.暗褐色礫混土　7.褐色礫混土　8.暗褐色礫混土(礫多い)
9.茶褐色粘質土　10.茶褐色礫混土　11.淡黒褐色礫混土

第37図　溝ＳＤ290西壁土層図

したことを示唆する。また、この付近は、富坂荘・長岡荘の荘園[注7]が存在していたことが知られており、関連が問われるところでもある。館跡と鍛冶工房の関係など中世の復原を試みる上で、今後の調査成果に期待される。

今回の調査地は、井ノ内館跡を区画する南限溝の検出および井ノ内稲荷塚古墳[注8]の東100mに位置することから、これらの古墳築造に関連する遺構や竹藪の盛土で削平された古墳などの検出が期待された。

3．調 査 概 要

調査地は竹藪であり、重機掘削に先立ち、トレンチ予定地内の竹根の除去を行い、土砂と分別した後、掘削を実施した。竹根については、産業廃棄物として処分を行った。調査は、土砂置き場がないため２回に分けて行った。まず、南側約600㎡の調査を行い、反転して、残る北側200㎡の調査を実施した。重機により表土を除去し、中世の遺物包含層を確認した後、人力掘削を行った。調査地は、北側から南に向かい緩い登り傾斜をもつ。調査前は竹藪であったことから南側の高所側の土が削られ、北側に盛土されている様子が観察された。竹藪となる以前は畑であったようで、竹藪の盛土下層に旧耕作土や部分的に耕作に伴う溝が認められた。トレンチ東側は、全体的に後世の攪乱が多く認められた。遺構検出面までの深さは、トレンチ北端で表土下１m、南端で0.55mである。

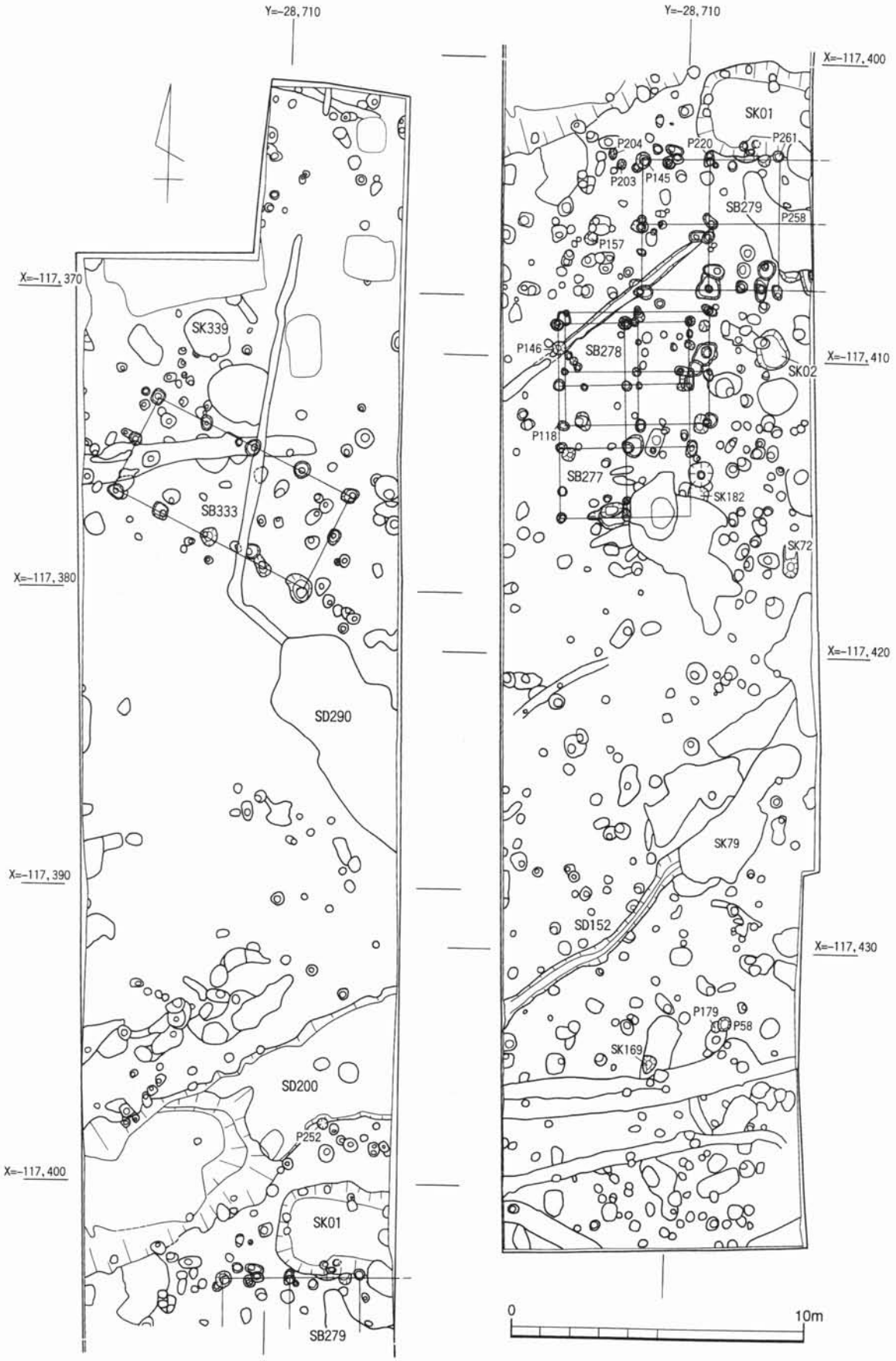
基本層序(第37図)は、トレンチ中央付近の溝ＳＤ290付近では、表土下約0.3mまでが竹藪の表土、その下に約0.3mの旧耕作土、さらに約0.15mの中世遺物包含層が続く。その下面が地山である黄褐色粘土(部分的に礫を含む)の遺構検出面となるが、調査地中央部ほど礫が多く含まれる。調査地北側では、近世以降の攪乱が多く認められ、遺構の削平が著しい部分も存在する。北側での遺構検出面の標高は40m、南側の最高所での検出面の標高は40.8mである。

4．検 出 遺 構

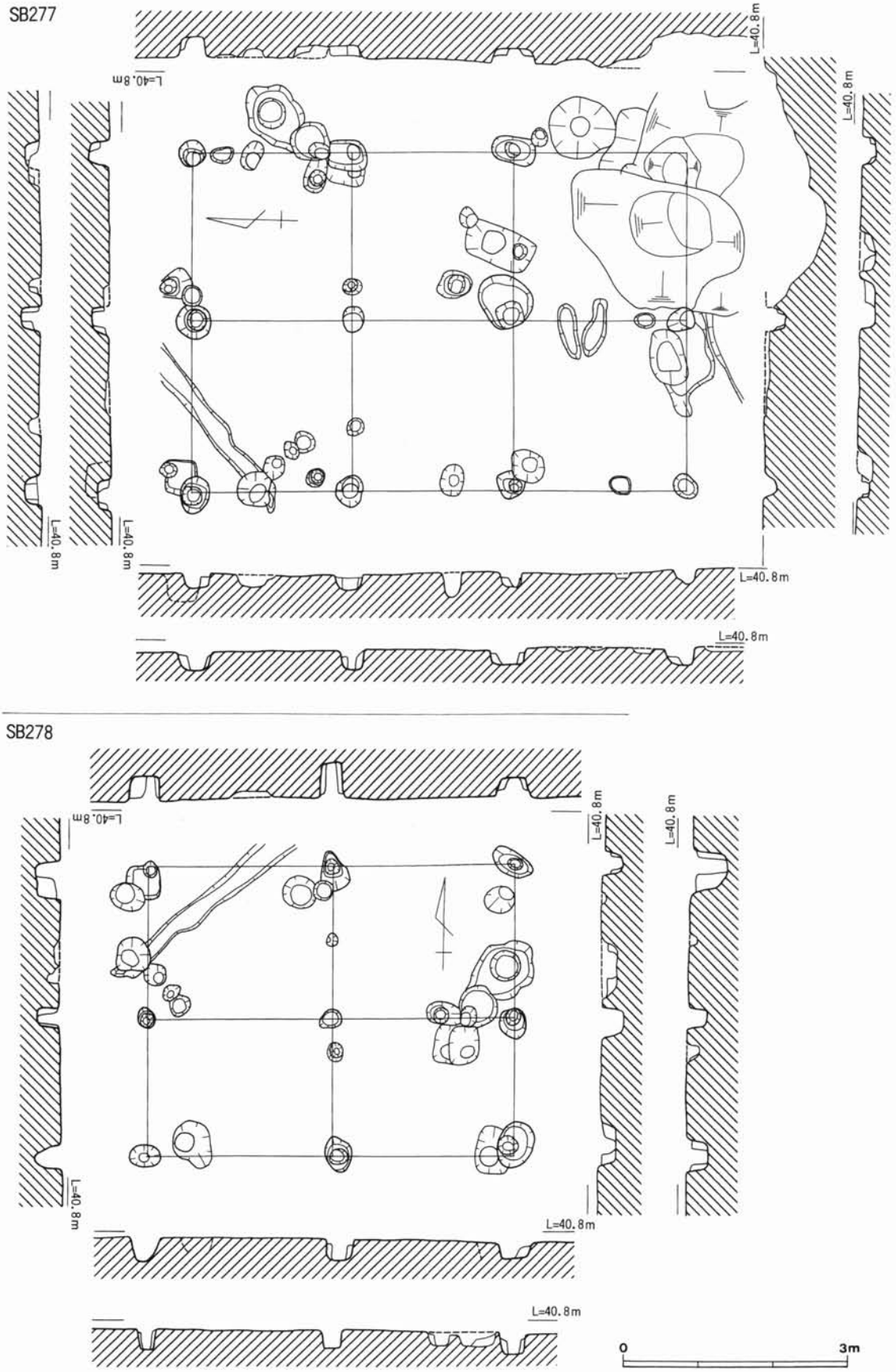
多くの柱穴が検出されたが、主な遺構としては、平安時代の掘立柱建物跡・溝・土坑、古墳時代と考えられる掘立柱建物跡・溝などがある。

(1)長岡京期～平安時代

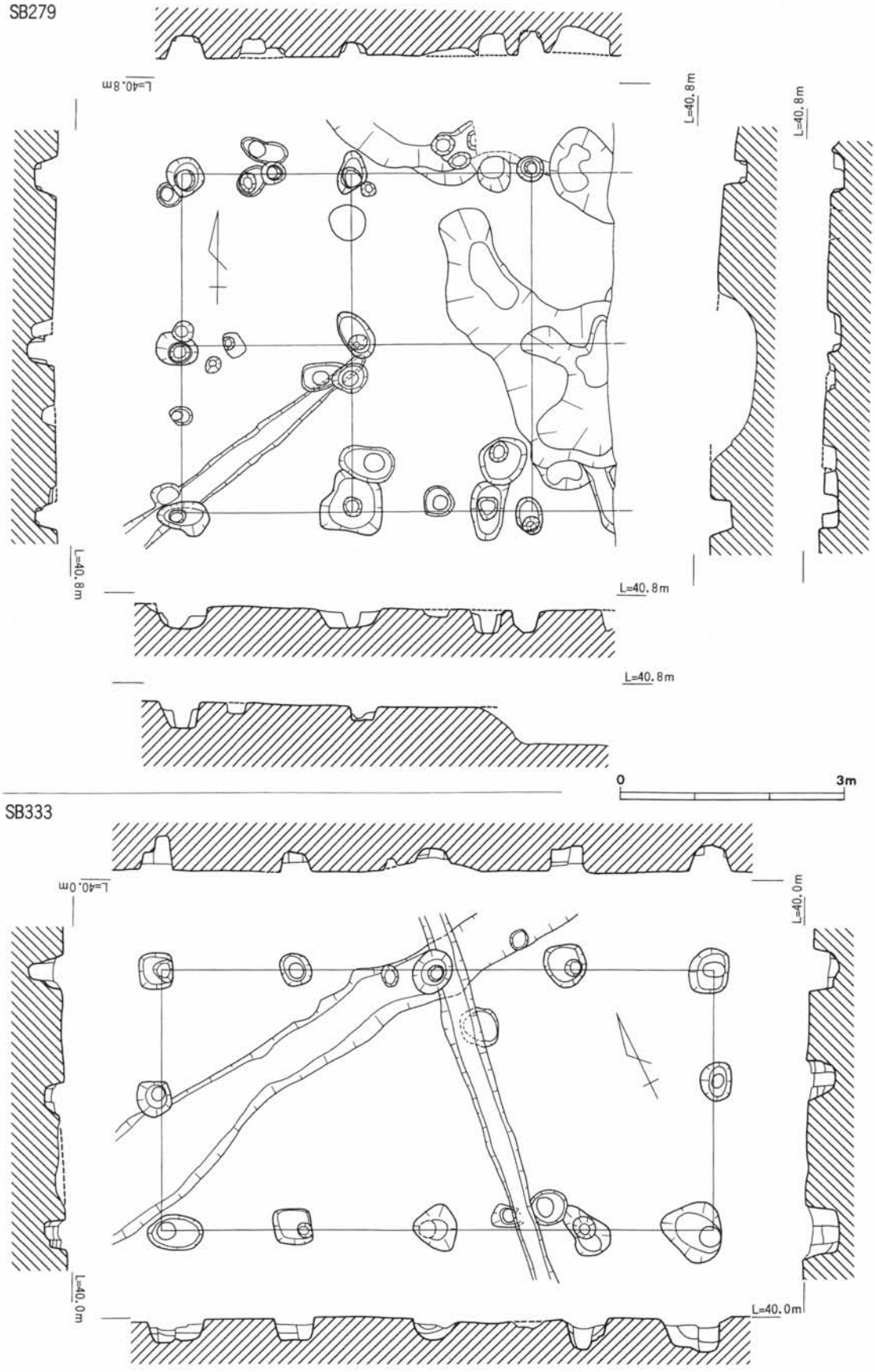
掘立柱建物跡ＳＢ277(第39図、図版第24－(1))　掘立柱建物跡ＳＢ278と重なるもので、東西２間(4.5m)、南北３間(6.6m)を測る南北方向の総柱建物である。柱間寸法は2.15～2.30mで、南東角の柱穴は中世遺構の攪乱により消失している。掘形の直径0.3～0.7m、深さ0.25～0.30m


Y=-28,710
Y=-28,710
X=-117,400
X=-117,370
X=-117,410
X=-117,380
X=-117,420
X=-117,390
X=-117,430
X=-117,400
SK01
P204
P220
P261
P203
P145
SB279
P258
P157
SK339
P146
SB278
SK02
P118
SB277
SK182
SK72
SB333
SD290
SK79
SD152
P179
P58
SK169
SD200
P252
SK01
SB279
0
10m

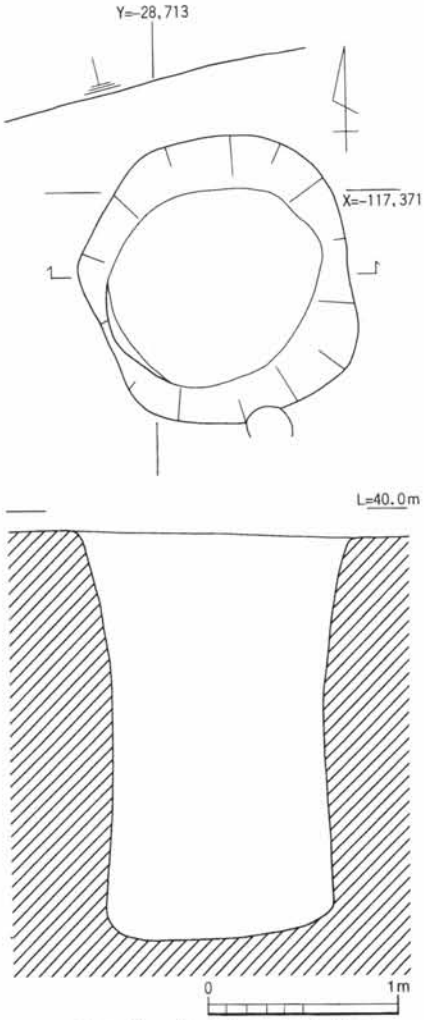
第38図　遺構配置図



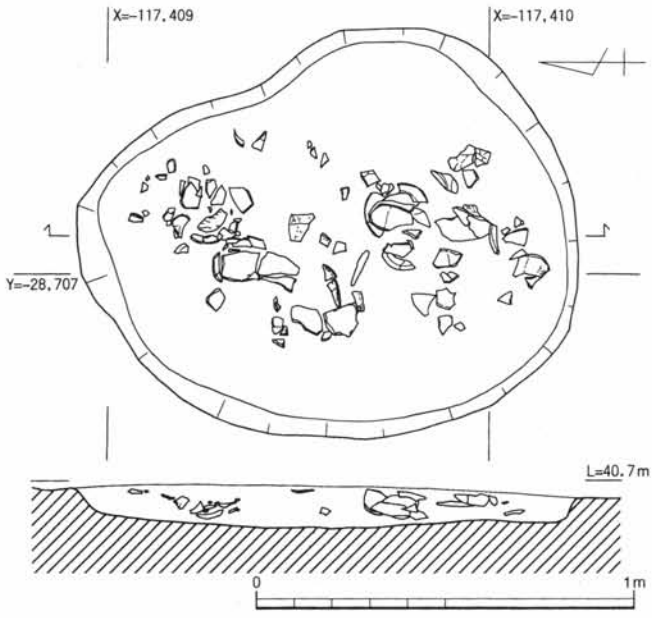
第39図　掘立柱建物跡ＳＢ277・278実測図



第40図　掘立柱建物跡ＳＢ279・333実測図



第41図　井戸ＳＥ339実測図



第42図　土坑ＳＫ02遺物出土状況図

を測る。

掘立柱建物跡ＳＢ278(第39図、図版第24－(1))　東西２間(4.90m)、南北２間(3.85m)を測る東西方向の総柱建物跡で、柱間寸法は1.85～2.48mである。掘形の直径0.3～0.5m、深さ0.25～0.35mを測る。

掘立柱建物跡ＳＢ279(第40図、図版第24－(2))　掘立柱建物跡ＳＢ277・278の北側で検出された掘立柱建物跡である。東側が調査地外となるが、東西２間(4.7m)以上、南北２間(4.5m)を測る東西方向の総柱建物跡である。柱間寸法は2.25～2.4mであり、掘形の直径0.4～0.7m、深さ0.25～0.30mを測る。土坑ＳＫ01の埋土を一部切って柱穴が掘り込まれていることから、土坑ＳＫ01より新しいものである。

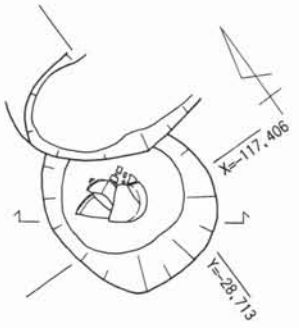
これらの掘立柱建物跡の方向は、ほぼ国土座標軸に合致している。柱穴内から遺物がほとんど出土していないが、掘立柱建物跡ＳＢ278・279の一部の柱穴内から土師器皿の出土が認められた。掘立柱建物跡ＳＢ278は10世紀後半、掘立柱建物跡ＳＢ279は12世紀代と推定される。掘立柱建物跡ＳＢ277は、掘立柱建物跡ＳＢ278と同位置に重なっており、前後関係も掘立柱建物跡ＳＢ277が新しく、建て替えの可能性もある。

溝ＳＤ290(第37・38図)　トレンチのやや北よりで検出したもので、北北東～南南西方向にのびる。溝幅約4.5m、東側の深さ約0.15m、トレンチ中央部分より西側は一段深くなり、約0.6mを測る。埋土からは、古墳時代の遺物も出土するが、平安時代後期の遺物も含まれることから平安時代後期の溝と考えられる。

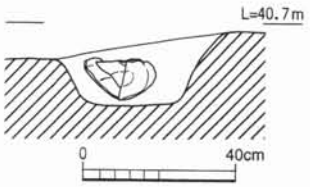
井戸ＳＥ339(第41図、図版第27－(1))　トレンチ北端で検出したもので、直径約1.5m、深さ約2.15mを測る。検出面から1.5m下層では湧水が顕著であったが、井戸枠などは存在していなかったことから素掘りの井戸と考えられる。井戸内からは、細片化した須恵器・土師器・瓦器が少量出土した。溝ＳＤ290同様、平安

時代後期以降のものと推定される。

土坑ＳＫ01(第38図)　トレンチ中央部東壁付近で検出したもので、調査地外にのびている。検出長約3.9m、幅約3.2m、深さ約0.25mの隅丸長方形の土坑である。ほとんどが小片化したものであるが、長岡京期を中心とする多くの遺物が出土した。10世紀後半に比定される。

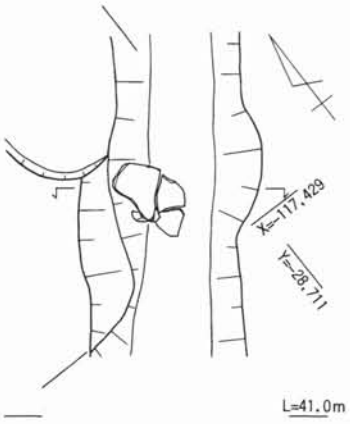


土坑ＳＫ02(第42図、図版第26－(1))　長径約1.3m、短径約1.5m、深さ約0.12mのやや不整形な円形土坑である。土坑内埋土は、炭混じりの暗茶褐色土で、黒色土器椀９個体を中心に、土師器皿４個体・甕１個体など土器類のみが埋納されていた。完全に復原できないものが大半であり、廃棄土坑の可能性がある。10世紀後半に比定される。



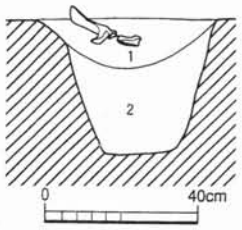
第43図　柱穴Ｐ157遺物出土状況図

柱穴Ｐ157(第43図、図版第26－(2))　掘立柱建物跡ＳＢ279の西側から検出したもので、掘形の直径約0.45m、深さ約0.2mの円形を呈する。埋土中から、底部外面中央に、「長」の字が墨書された長岡京期に比定される土師器杯(第47図45)が出土した。



(2)古墳時代

掘立柱建物跡ＳＢ333(第40図、図版第25－(2))　東西４間(7.4m)、南北２間(3.4m)の北東から南東方向にのびる建物跡で、主軸はＮ64°Ｗである。掘形の直径0.45～0.90m、深さ0.25～0.46mを測る。掘立柱建物跡ＳＢ277・278・279とは方向が違うため、時期が異なると考えられる。平成14年度に、今回の調査地から北側約110mの地点で実施した調査でも、同じ主軸方向をもつ建物跡が検出されている。掘形内からは少量の遺物が出土したが、時期を特定するには至らなかった。古墳時代後期の建物である可能性がある。



第44図　溝ＳＤ152遺物出土状況図
1.淡黒褐色土　2.黒褐色土

溝ＳＤ152(第44図)　トレンチ南寄りで検出した北北東～南南西方向にのびる溝で、検出長約８m、幅約0.5m、深さ約0.35mを測る。東側半分は平安時代の土坑ＳＫ79の掘り込みにより、大きく削られている。検出面では土師器甑片(第47図62)が出土した。混入遺物とも考えられるが、西壁付近では、須恵器杯身・杯蓋(第45図1・5)が出土している。

5．出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器などの土器類、平瓦・丸瓦などの瓦類、鉄鏃・金具・鉄釘などの鉄製品、石器(叩石)、炉壁・鍛冶滓といった鍛冶

生産関連遺物などがある。

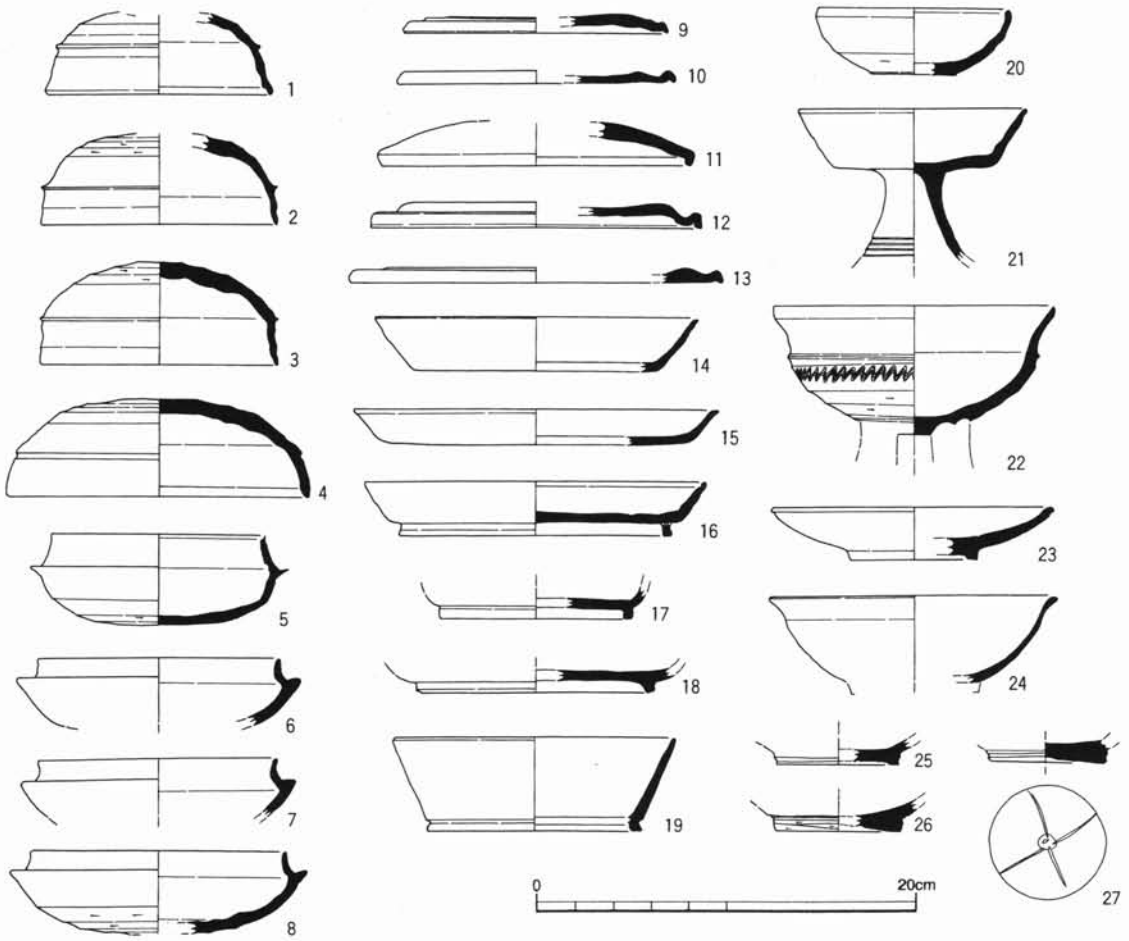
出土遺物の時期は、主に古墳時代・長岡京期・平安時代～中世に分けられる。平安時代後期～中世にかけての土器は、調査地全体から出土しているが細片化したものが多い。

古墳時代の遺物(第45・46図)　須恵器杯蓋・杯身・高杯・提瓶・壺・甕がある。1～3は杯蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。22は高杯である。陶邑編年MT15型式頃に併行するものである。28・30は同TK43型式、4～8・28(広口壺)・30(提瓶)は、同TK43～TK209型式の幅の中で捉えておきたい。20・21は同TK217型式に比定できる。

1・5は溝SD152、2は柱穴P58、4・6～8・20・28・30・32・34は溝SD200から出土した。3は包含層から出土した。

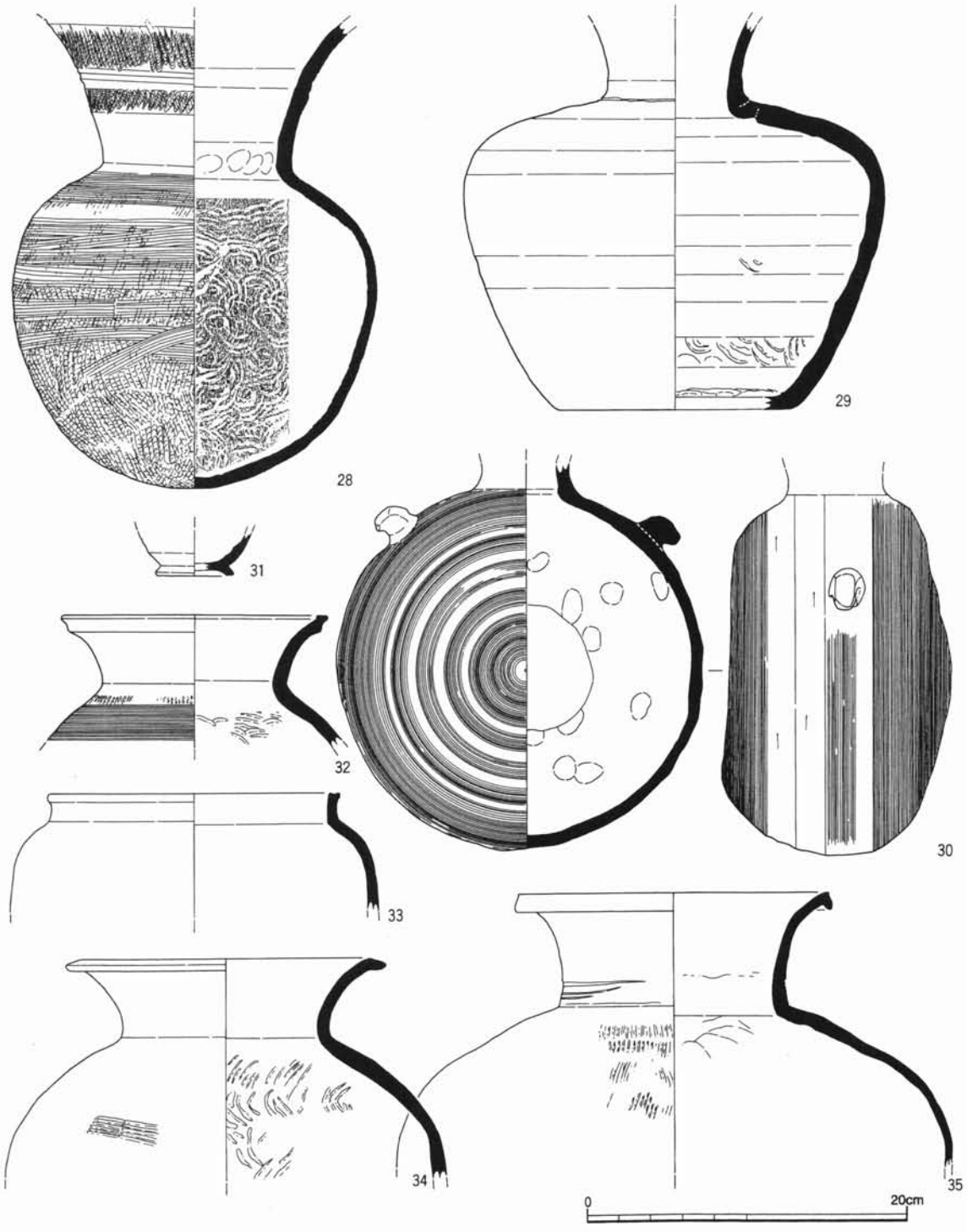
長岡京期の遺物(第45～47図)　須恵器・土師器・瓦類がある。瓦類については、平瓦・丸瓦の小片であり、図示していない。須恵器には蓋A・杯A・杯B・壺Mがある。土師器には皿A・甕がある。皿Aには、外面全体をヘラケズリするC手法によるものが多く認められる。45は底部に、「長」と墨書している。9・11・13・14・18・39は溝SD200、12・15～17・26・47～49は土坑SK01から出土した。10・19・46は包含層から出土した。長岡京期としたが、これらの土器には一部平安時代に入るものも含まれよう。

平安時代の遺物(第45～47図)　23は無釉陶器、25は緑釉陶器の皿または椀の底部である。27は、

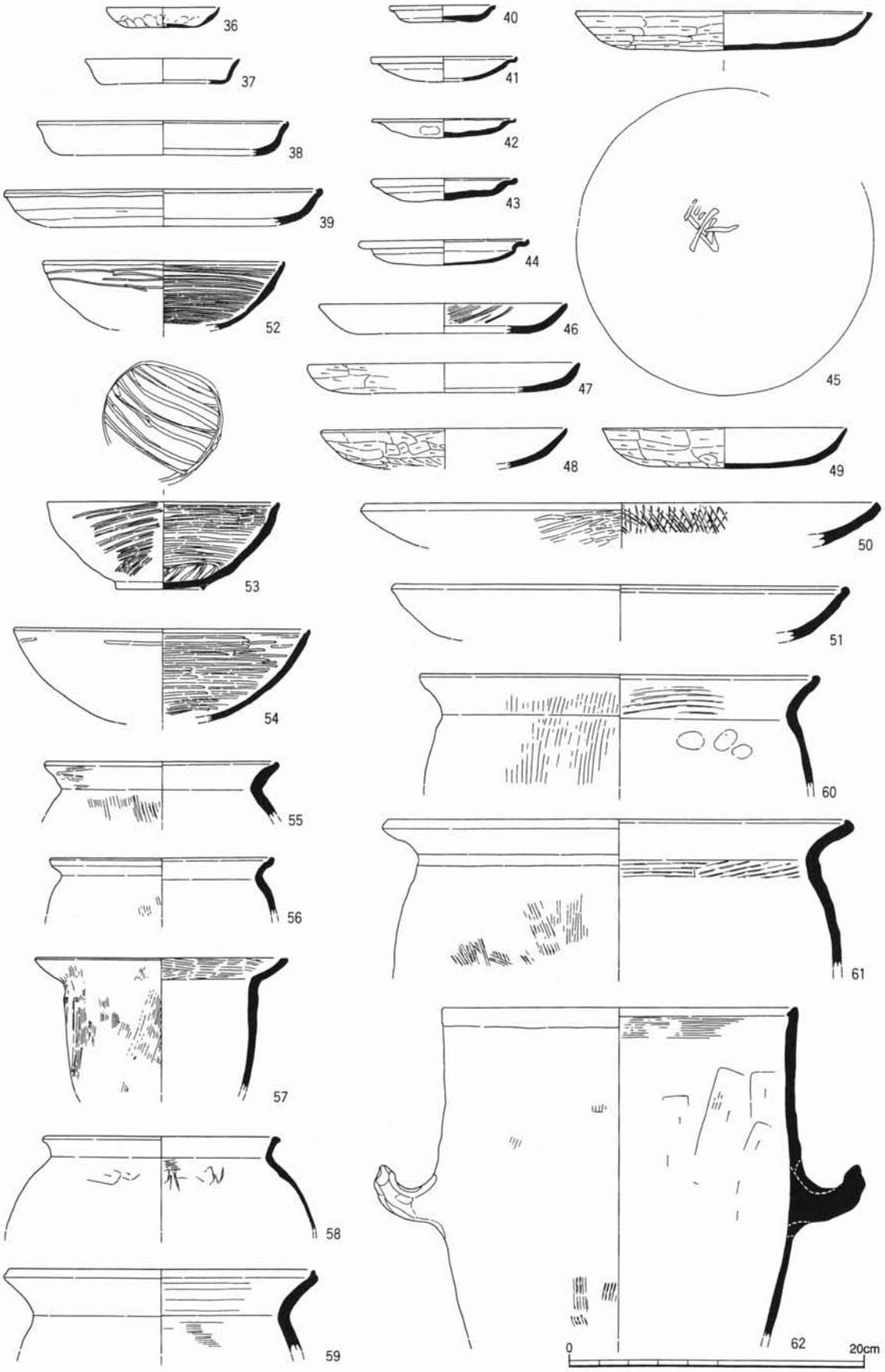


第45図　出土遺物実測図(1)

無釉陶器の底部で、外面に「十」字の線刻が認められる。24は、灰釉陶器で掘立柱建物跡ＳＢ279の柱穴から出土した。混入遺物と考えられる。25・27は溝ＳＤ200、26は土坑ＳＫ01から出土した。41～44は土師器皿である。手づくねで、口縁端部を外側に引き出して端部を上に摘み上げるものである。40は土坑ＳＫ72、42・43は掘立柱建物跡ＳＢ278柱穴内(Ｐ145・118)、41は包含層から出土した。そのほか、31・33～35の須恵器甕、55～61の土師器甕、62の甑は長岡京期～平安時代前期にかけてのものである。31・34・56は溝ＳＤ200、35・60・61は土坑ＳＫ01、23は柱



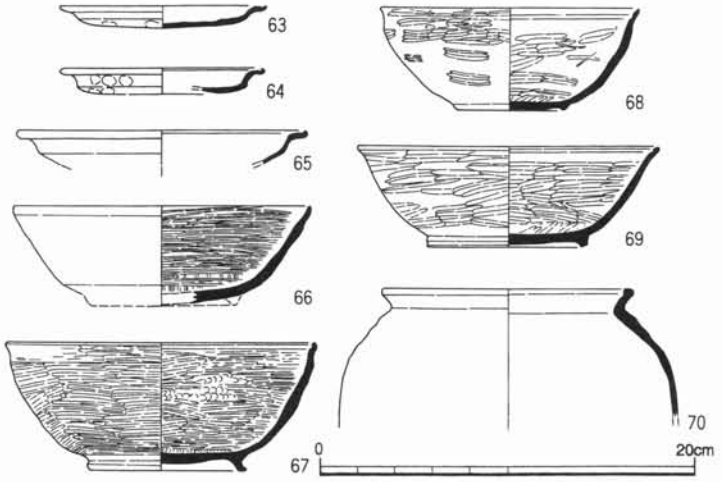
第46図　出土遺物実測図(2)



第47図　出土遺物実測図(3)

穴P258、33は柱穴P146、58は、柱穴P204、59は柱穴P203、62は溝SD152から出土した。

41～44は土師器皿である。土坑SK02出土の土師器皿と同様のもので、10世紀後半と考えられる。42・43は、掘立柱建物跡SB278のそれぞれ柱穴P145と柱穴P118から、41・44は包含層から出土したものである。



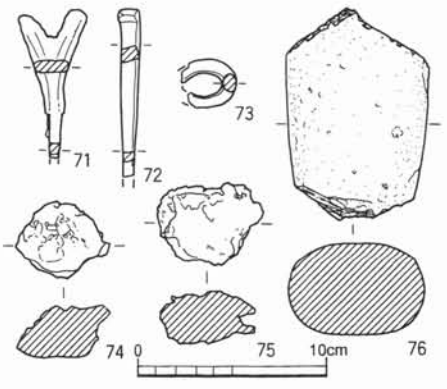
第48図　出土遺物実測図(4)

52～54は、瓦器椀である。口縁内面には密なヘラミガキが施され、口縁外面はヘラミガキがほとんど施されない。53の外面は磨滅が著しい。52は、外面が判然といないが、53・54については12世紀前半代が想定される。52は包含層、53は柱穴P182、54は溝SD152を切る土坑SK79から出土した。

土坑SK02の出土遺物(第48図)には、土師器皿・甕、黒色土器がある。63～65は手づくねの土師器皿で、口縁端部を外側に引き出して、端部を上方に摘み上げる。66～69は黒色土器で、66は内面だけ黒色処理する黒色土器A類である。A類は図示したもの以外に1点あり、そのほかはB類で図示したもの以外に3点ある。A類は、体部外面は高台付近まで密なヘラミガキが施され、内面の見込みにもヘラミガキが密に施されている。66も見込みにヘラミガキが施されている。68はやや遺存状態が悪い。10世紀後半頃と推定される。

そのほかの遺物(第49図)　71は、柱穴P182出土の雁又式の鉄鏃であるが、先端の形状が錆のため観察不能である。72は、掘立柱建物跡SB279内の柱穴P143出土の鉄釘で、頭部を折り曲げただけのものである。残存長9cm。73は環状の鉄器である。柱穴P261出土。74・75は形状から鍛冶滓と推定されるもので、74が58g、75は76.9gを量る。74は土坑SK164、75は土坑SK01から出土した。

76は、溝SD290出土の砂岩製の太型蛤刃石斧である。外面はていねいに磨かれているが、刃部と頭部を欠く。使用痕は認められないが、叩石・磨石などへの転用が考えられる。



第49図　出土遺物実測図(5)

6．まとめ

今回の調査では、前述した過去に行なわれた調査の中でも最も多くの長岡京期の遺物が出土した。しかしながら、遺構はわずかに柱穴が検出されたにすぎない。近辺の調査でも同様の結果が出ている。その理由については今後検討を要するが、土坑SK01・溝SD200の存在や、

細片化した遺物が多く見られることから、平安時代の土地利用に伴い削平された可能性も考えられる。

古墳時代の遺構としては、掘立柱建物跡・溝などが検出された。また、出土遺物からみて周辺に古墳が存在していた可能性があり、稲荷塚古墳築造後の様相を窺うことができる資料として重要なものである。

昨年度調査では、井ノ内館跡の外郭施設である方形に区画される溝の北・東限の一部を確認していたが、今回の調査地内ではその南限の溝が検出されなかった。南限溝はこの調査地よりも北側に存在するものと考えられる。

（増田孝彦）

注１　**調査参加者**　荒川仁佳子・尾上忍・川村真由美・木下博文・久米政代・杉江貴宏・西村香代子・長谷川マチ子・兵頭真千・山脇里子・鷲原裕太郎

注２　奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1980－２)』　京都府教育委員会）　1980

注３　竹井治雄「長岡京跡右京第615次(7ANIHJ-６地区)発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第89冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

注４　柴暁彦「長岡京跡右京第704次(7ANGSK-１地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第102冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2002

注５　増田孝彦「長岡京跡右京第753次(7ANGHD-５地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第107冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注６　(財)京都市埋蔵文化財研究所『長岡京右京二条四坊一町現地説明会資料』　2003.6

注７　向日市史編さん委員会『向日市史』上巻　向日市　1983

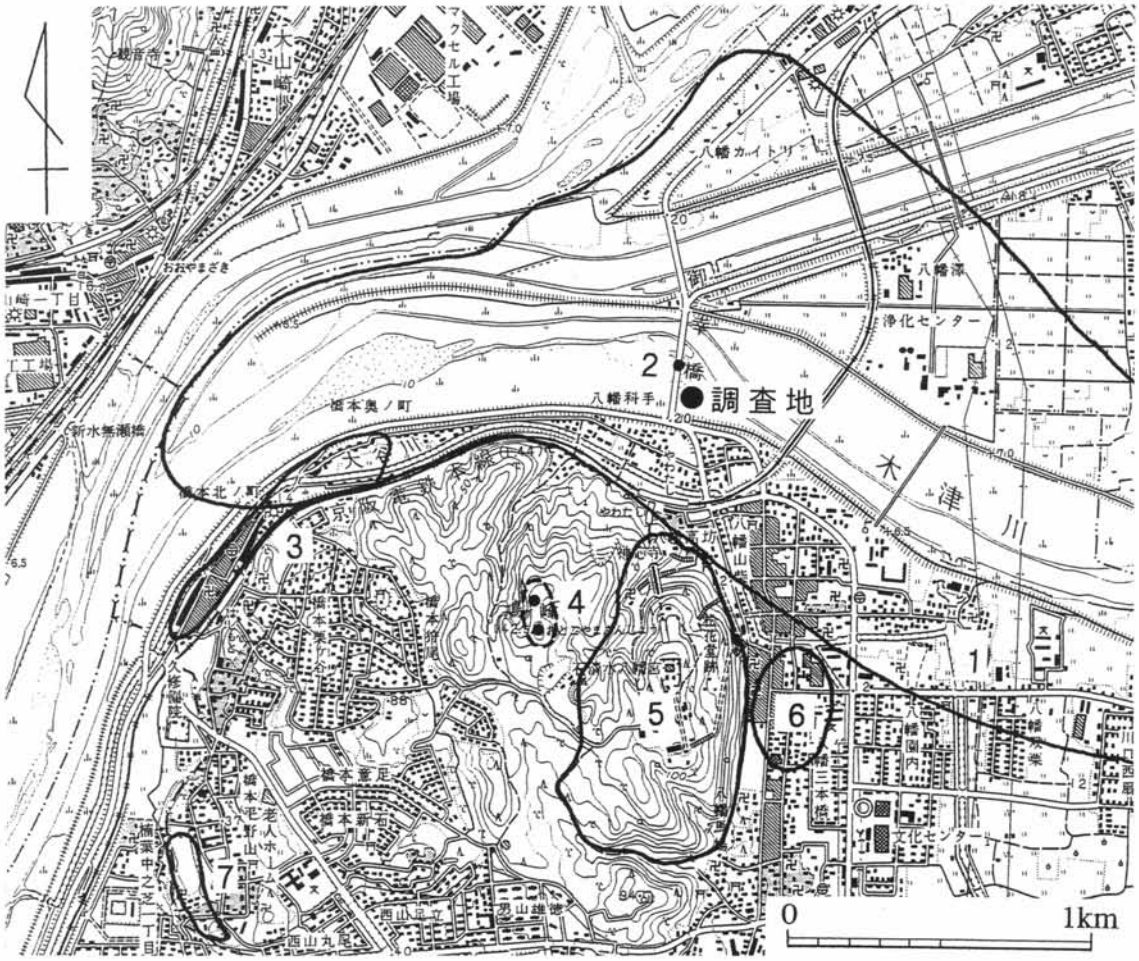
注８　「長岡京市における後期古墳の調査」（『長岡京市埋蔵文化財発掘調査報告書』第44冊　長岡京市教育委員会）　2002

5．木津川河床遺跡第16次発掘調査概要

1．はじめに

木津川河床遺跡は、八幡市の木津川流域に所在する弥生時代から近世にかけての複合集落遺跡である。今回の調査は、八幡市八幡科手地先の「木津川御幸橋」橋梁新設改良事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第３係長石井清司、主任調査員増田孝彦、調査員柴暁彦が担当した。調査期間は、平成16年４月20日～６月４日である。調査期間中は、京都府教育委員会・八幡市教育委員会・国土交通省淀川河川事務所・山城北土木事務所および地元住民の方々などの指導および助言を得た。(注1) また、調査にあたっては、調査補助員・整理員の援助を受けた。(注2) 記して感謝する。本調査概要は柴が執筆した。



第50図　調査地位置図および周辺の遺跡(国土地理院1/25,000淀)

1．木津川河床遺跡　　2．御幸橋遺跡　　3．橋本・奥ノ町遺跡　　4．鳩ヶ峰１・２号経塚
5．石清水八幡宮遺跡　　6．男山城跡　　7．糸ヶ上遺跡

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2．位置と歴史的環境（第50図）

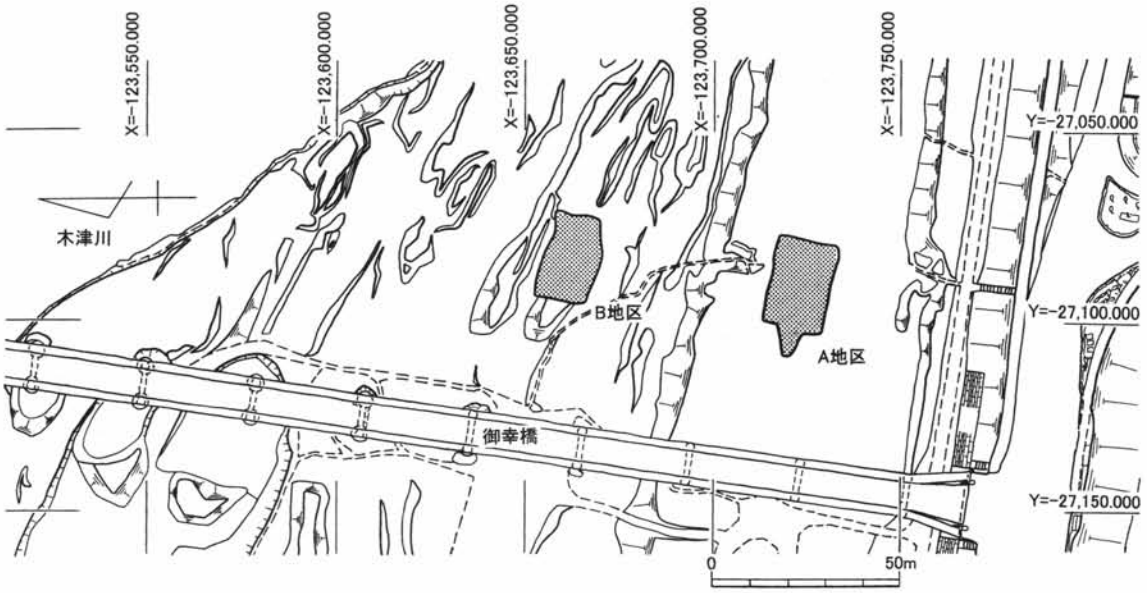
木津川河床遺跡の過去の調査について木津川左岸に限定して概要をみてみると、弥生時代後期、古墳時代初頭・前期・後期の各時期の遺構・遺物が確認されている。弥生時代後期では、溝・土坑などが確認され、多数の遺物が出土している。古墳時代初頭は、竪穴式住居跡（７基）・掘立柱建物跡・土器溜まりなどが見つかっている。古墳時代前期は、竪穴式住居跡（８基）・掘立柱建物跡・不明土坑群のほか遺物包含層が確認されている。古墳時代後期は、竪穴式住居跡(14基)・掘立柱建物跡・土坑などが確認されている。また、各調査では上層遺構として中世素掘り溝群が確認されている。

木津川河床遺跡周辺の遺跡としては、平安時代後期とされる鳩ヶ峰経塚が男山丘陵の標高142ｍの鳩ヶ峰に位置する。１・２号経塚の２基が確認され、１号経塚から常滑壺・瓦経・刀剣、２号経塚から「永久四年」銘(1116年)のある銅鋳製鍍金経筒が出土している[注3]。このほか中世の遺跡としては、男山丘陵東麓に所在する男山城跡がある[注4]。この城は、建武３(1336)年～文和元(1352)年頃、南北朝の争乱の時期に後村上天皇が築城したとされる[注5]。

3．調 査 概 要

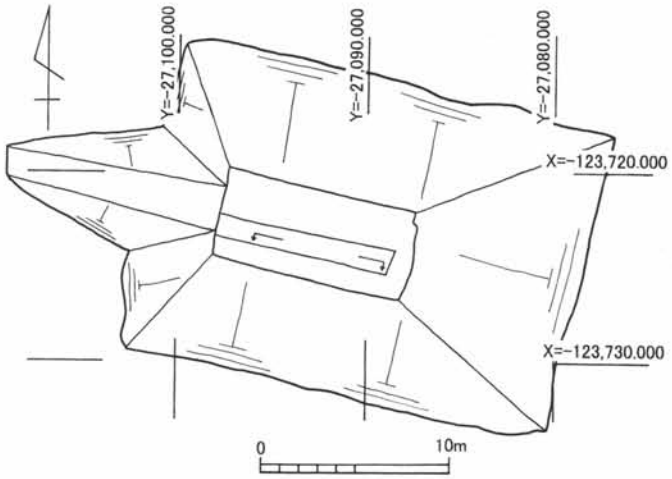
調査は、木津川左岸の橋梁建設予定地部分の２か所（Ａ・Ｂ地区）を対象に、重機により表土および砂層の除去を行い、この後、人力掘削により調査をすすめた。また、下層の状況については重機を用いて確認を行った。調査面積はＡ地区約60㎡、Ｂ地区約200㎡の合計約260㎡である。以下にＡ地区とＢ地区に分けて調査の概要を報告する。

(1) Ａ地区（第52～54図）



第51図　調査地位置図

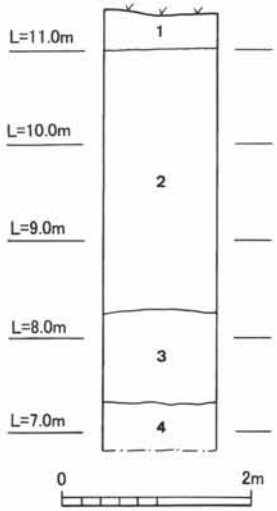
崩落防止のための法切りを行なったのち、表土および約３ｍ堆積する砂層を重機により除去すると暗青灰色粘質土層となった。この層において人力掘削により遺構・遺物の有無の確認を行ないながら、順次精査を実施した(第53図)。現地表面の標高は約11.4ｍであり、包含層の確認面の標高は約7.6ｍである。また、調査の最終段階で重機により下層の状況確認を行った(第54図)。



第52図　Ａ地区平面図

調査では、暗緑灰色粘砂質土層(１～３層)で遺構検出を開始し、順次掘削を行ない13・14世紀の遺物を包含する暗黒灰色粘砂質土層(４層)を確認した。この包含層は基本的に西側から東側へ傾斜する斜め堆積をなしており、包含層の遺物は周辺からの流れ込みと判断した。しかし、遺構は確認していない。出土した遺物は破断面が比較的新鮮であり、河川によって遠距離から流れ込んだものではなく、至近距離から流れ込んだものと解釈できた。遺物の大半は細片化したものであった。確認した包含層の遺物は大半が土師器であり、そのほかの遺物として須恵器、瓦器、白磁椀、青磁椀・皿片、軒平瓦瓦当片、縄目タタキが施された瓦片などが含まれていた。

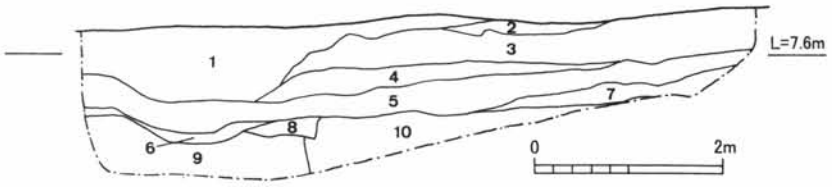
今回の調査地は河川から離れた堤防寄りの地点であったが、砂層と粘質土層の境目(標高約8.3ｍ)から比較的多量の湧水がみられた。最終的に重機により標高約6.4ｍまで掘削したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。



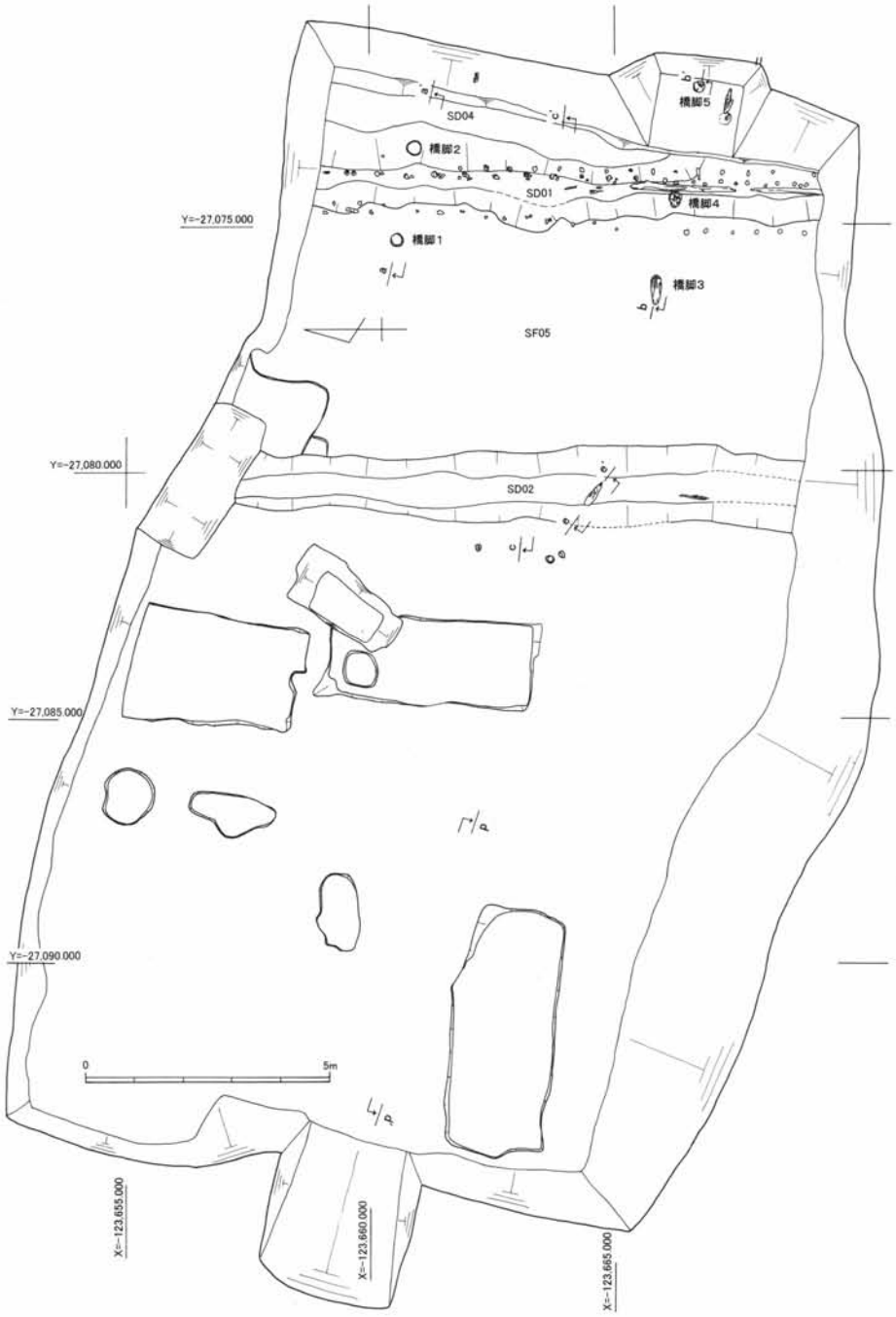
第53図　Ａ地区土層柱状図
1.暗黄褐色土
2.黄灰色粗砂
3.暗青灰色粘土
4.黒灰色粘土

(2) Ｂ地区

重機により地表面(標高約9.4ｍ)から約0.3～1.2ｍ堆積した砂層を除去すると灰色粘質土層となる。この層が今回確認した遺構面で標高は約8.6ｍを測る。また、調査の最終段階で下層遺構の確認のため



第54図　Ａ地区断ち割り土層断面図
1.暗緑灰色粘砂質土(わずかに遺物包含)　2.黄灰色粘質土　3.暗灰色粘質土
4.暗黒灰色粘砂質土(遺物多量に包含)　5.緑灰色砂質土　6.淡緑灰色粘砂質土　7.暗灰色粘質砂
8.暗灰色粘質土　9.暗灰色粘質砂(しまり弱)　10.黄茶色砂

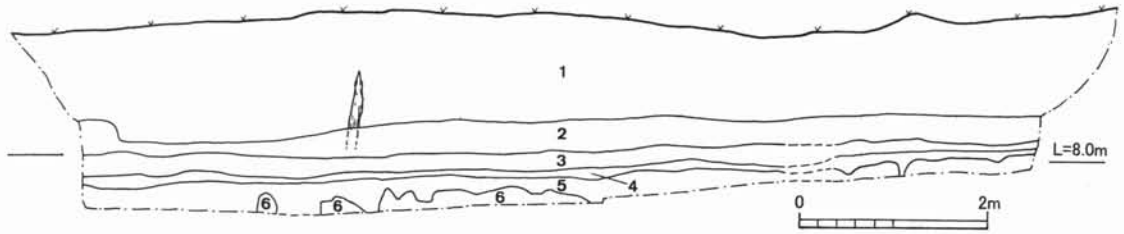


第55図　B地区平面図

重機で断ち割りを行った(第61図)。

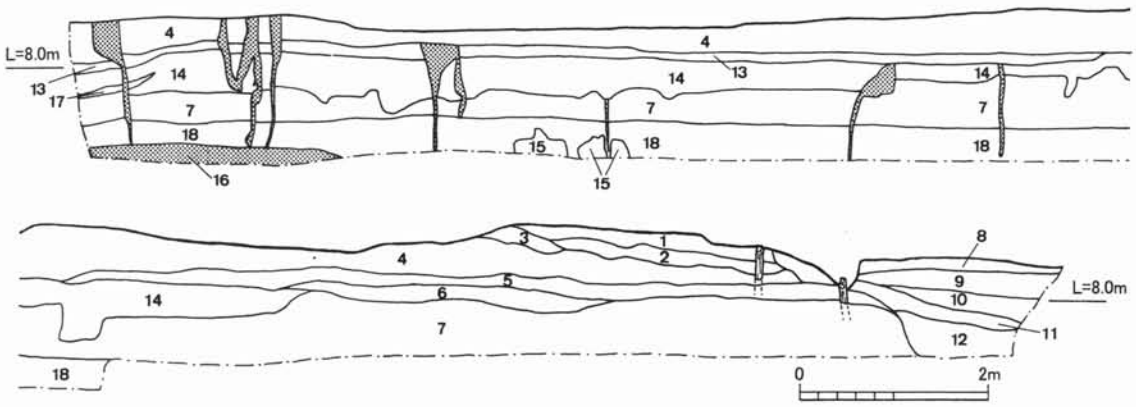
①層 序（第56・57図）

表土および砂層を除去すると遺物をほとんど包含しない安定した灰色粘質土(4層)となった。この4層上面が遺構検出面である。13層は木津川の水流が比較的ゆるやかな時期に堆積したとみられ、灰色土中で3条の黒灰色の縞状堆積がみられた。断面観察では噴砂が灰色粘質土層(4層)を引き裂いて貫入している状況を確認している。この噴砂は、遺構面から約1.3m下の灰黄色粗砂層(16層)が地震による液状化現象で吹き上げられたものであることを断ち割り調査により確認した(第57図)。噴砂の時期は、慶長の大地震によるものと考えられる。



第56図　B地区東壁断面図

1.黄灰色粗砂　2.灰黄色粘質土　3.灰茶色粘混砂土　4.茶灰色砂礫土(3～10cmの亜角礫)
5.暗灰色砂質土　6.灰色粘質土(地山)



第57図　B地区北壁断面図(網掛けは噴砂)

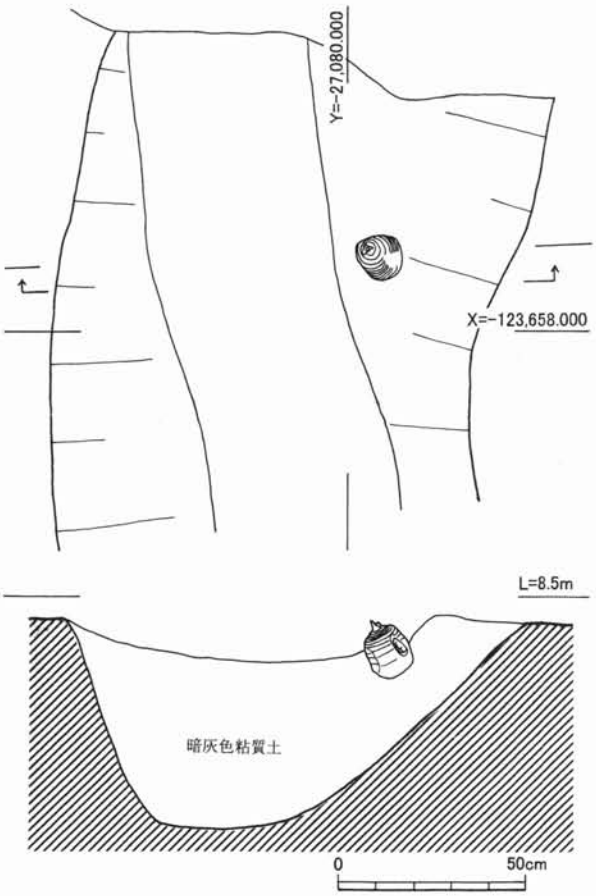
1.灰黄色粘質土　2.暗灰色粘質土　3.灰色粘質土　4.灰色粘質土(マンガン沈着)　5.灰色粘質土
6.灰黄色粘質土(粘性強)　7.灰色粘質土(地山)　8.灰色粘砂質土(下層に黄色細砂を含む)
9.灰黄色粘質土　10.灰茶色粘砂質土(炭化物を含む)　11.茶灰色砂礫土(3～10cm大の亜角礫)
12.暗灰色粘砂質土　13.灰色粘質土(縞状黒灰色堆積をなす)　14.灰色粘質土　15.青灰色粘質土
16.灰黄色粗砂　17.黄土色粘質土　18.7層と同じ

②**検出遺構**(第55図)

道路状遺構ＳＦ05　道路状遺構は東西に側溝を伴い幅約4.5mを測る。長さは約11m分を確認した。道路の方向はほぼ真南北を向いている。東側溝は時期差のある2条の溝ＳＤ01・04を確認したことから、もとの路面幅は4.5mよりは広く約5.6mはあったとみられる。路面本体には石敷きや轍などはみられず、すでに削平されていると判断した。また、道路状遺構ＳＦ05の断ち割りを行ったが時期の異なる路面は確認できなかった(第59図)。

側溝ＳＤ04　側溝ＳＤ01より一段階古い東側溝である。溝幅は調査地外となり不明である。深さは路面から約0.6mを測る。埋土は、灰茶色粘砂質土(10層)、茶灰色砂礫土(11層)、暗灰色粘砂質土(12層)である(第57図)。出土遺物には、染付椀・擂鉢・土師器皿などがある。

側溝ＳＤ01　道路状遺構ＳＦ05の東側溝で、延長10.4mを検出した。幅約0.9～1.0m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。この溝は上述の側溝ＳＤ04を切っている。溝の両肩部分には丸太の護岸杭が一定間隔で打ち込まれ、東肩杭列の比較的残存の良好な部分では杭に付随する横木が確認できた。杭の直径は8～10cmを測り、断ち割りの結果、杭は残存長1.3～2.4m程度と比較的長いものを使用していた。また、東肩杭列は2列になっており東側(外側)の杭が内側の杭に寄りかかるように斜めに打ち込まれている状況が確認できた。側溝ＳＤ01の護岸杭は側



第58図　B地区側溝ＳＤ02出土遺物実測図

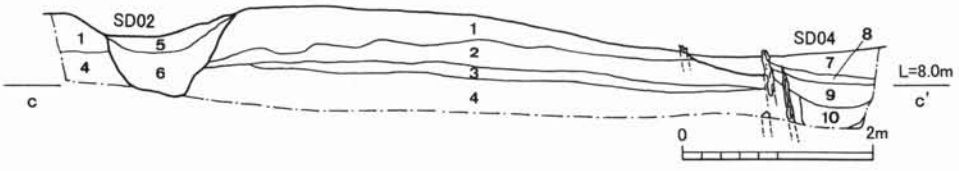
溝ＳＤ04の埋土の一部を掘削しており、溝肩部の地盤の補強のために設けられたものと思われる。出土遺物には若干の染付椀などがある。

側溝ＳＤ02　道路状遺構ＳＦ05の西側溝である。延長11.4ｍを検出した。幅は1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。この溝は素掘りであり護岸施設は伴わない。埋土は暗灰色粘質土である。この埋土中では溝の南側で柱材１本が投棄された状態で出土した(第60図)。また、溝の北側の東肩部分では口縁部を欠失した備前焼ヘソ徳利が出土した(第58図・図版第32-(3))。

橋脚１～５　橋脚は道路状遺構ＳＦ05の廃絶後に設けられており５本確認した。北側で橋脚２本(橋脚１・２)の抜き取り痕跡、南側で３本(橋脚３～５)を検出した。橋脚１・２は橋柱が抜き取られ、柱穴の中に粗砂が詰まった状態で検出した。橋柱痕の直径は約24cmを測る。断ち割りで深さ1.9ｍまでを確認したが橋柱痕の先端までは到達していない(第60図)。

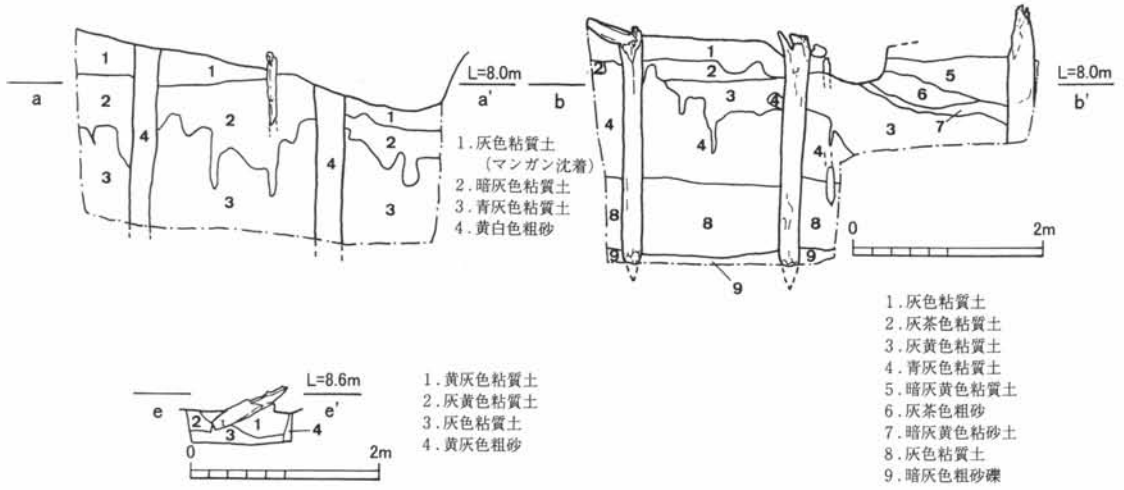
橋脚３・４は直径約28cmの丸柱を使用している。重機での深掘りにより、橋柱は柱の先端を尖らせ、橋柱の上部に櫓を組むことによって、橋柱をほぼ垂直に打ち込んだものであることを確認した(第60図)。橋柱の残存長は2.4ｍ以上を測る。橋柱の先端は灰色粘質土層を打ち抜き暗灰色粗砂礫面(標高約6.2ｍ)まで及んでいた。なお、この砂層面で若干の遺物が出土した(第63図71・79)。また、橋脚４の東側の部分拡張により橋脚５を確認した。

橋柱間の寸法は、橋脚１・２の心々距離が約1.8ｍ、橋脚３・４が約1.8ｍ、橋脚４・５が約2.4ｍであり、橋脚１・２と橋脚３・４との南北の間隔は約5.4ｍを測る。橋の上部構造は橋柱のみが残存するだけで不明であるが、橋脚３～５の配列から、橋柱は少なくとも１か所３本以上で桁を支えていたと思われる。



第59図　B地区道路状遺構ＳＦ05断ち割り断面図

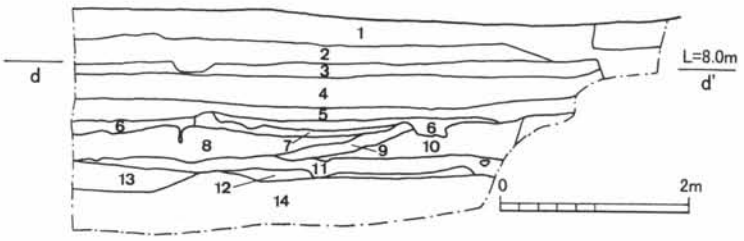
1.灰黄色粘質土　2.黄灰色粘質土　3.灰茶色粘砂質土　4.灰黄色粘質土　5.暗灰色粘質土
6.暗灰色粘砂質土　7.灰黄色粘質土　8.茶色砂礫土　9.灰色粘粗砂土　10.灰色粘砂質土



第60図　B地区橋脚断ち割り断面図

4．出土遺物（第62・63図）

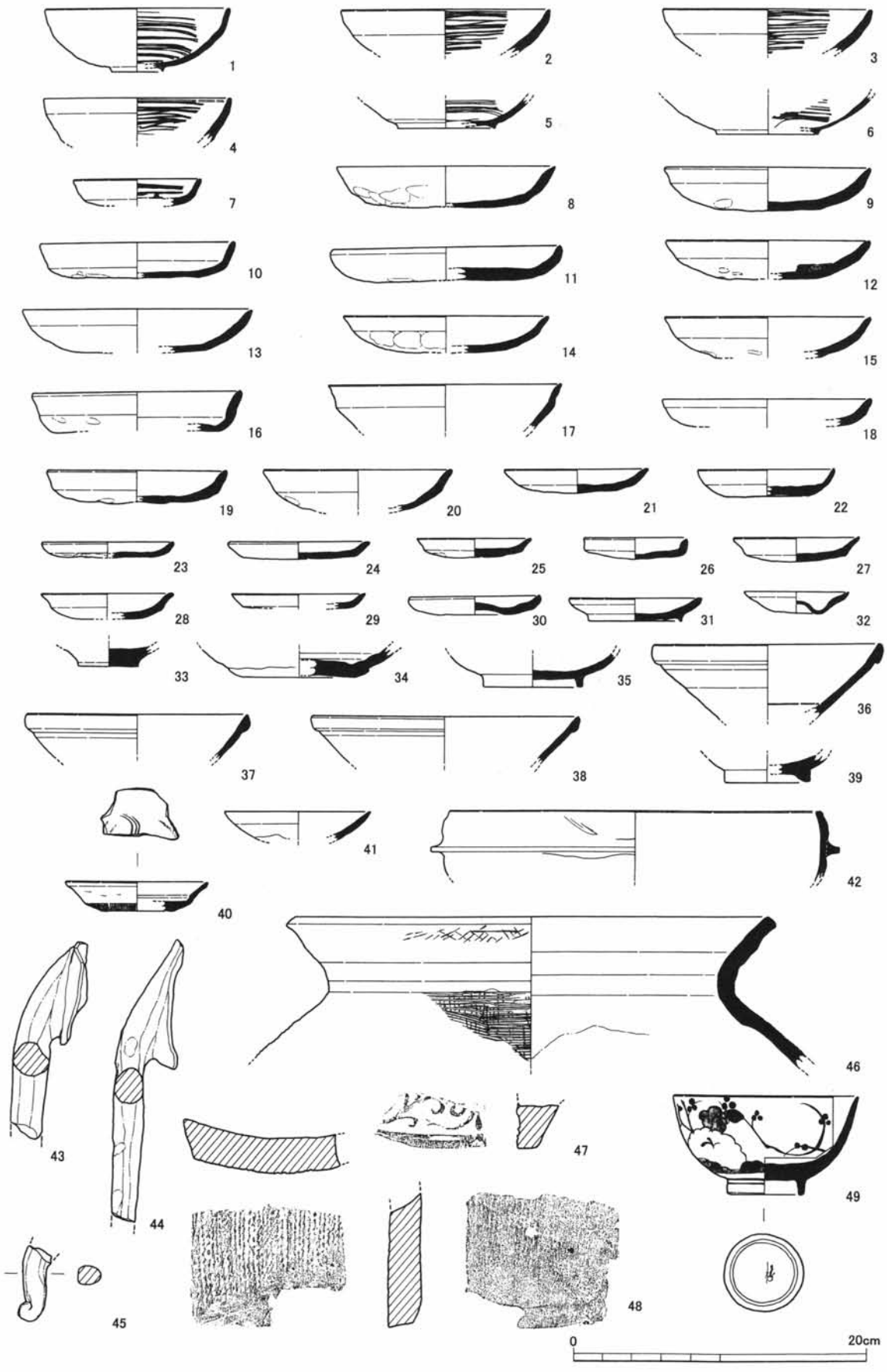
A地区は包含層出土の遺物、B地区は各遺構出土の遺物を示した。A地区の出土遺物(1～49)には瓦器椀・皿、土師器皿、白色土器、白磁椀片、青磁皿、灰釉陶器、瓦質土器、瓦片などがある。また、B地区の遺物(50～80)には、土師器皿、染付椀、擂鉢、煙管雁首・吸口、箸、銭貨などがある。瓦器椀(1～6)は、直径12.5～14.0cm、器高4.3cmのものがある。1の高台は断面が逆三角形をなす。7の瓦器皿は直径8.7cmを測る。土師器皿の法量は直径13.5～15.5cm、器高2.5～3.0cmのもの(8～18)、直径12cm、器高2cmのもの(19・20)、直径9.5～10.0cm、器高2cm前後のもの(21～30)の3タイプがある。また、土師器皿の中には高台の付くもの(31)、ヘソ皿(32)、底部に回転糸切り痕を残すもの(33)が各1点ある。34は須恵器壺類の底部である。35は白色土器の椀である。白磁椀(36～39)は口縁端部が玉縁となるものである。39は底部片である。40は青磁皿である。41は灰釉陶器皿である。42は瓦質土器の羽釜である。43・44は脚付き羽釜の脚部である。いずれも脚先端部を欠失している。45は瓦質土器浅鉢の脚部である。脚端部を蕨手状に巻き込み獣脚をなす。46は土師質の甕である。口縁部外面には縄目タタキが施され、体部外面は格子タタキを施す。47は軒平瓦の瓦当部分である。48は平瓦で凸面に縄目タタキを施す。49はくらわんか茶碗で、粘質土上面の砂層から出土した。



第61図　B地区断ち割り断面図

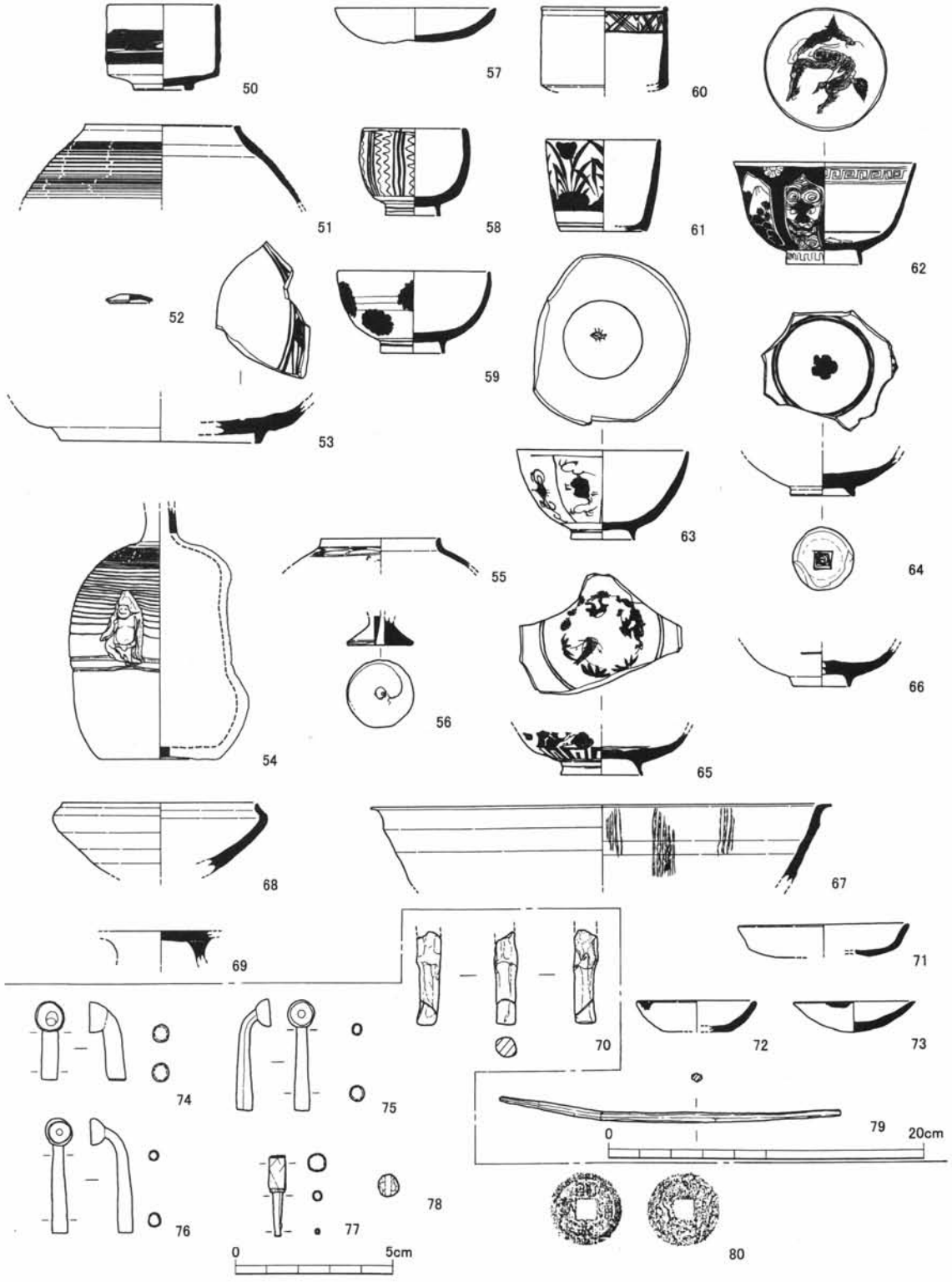
1.灰色粘質土(縞状堆積をなす)　2.淡灰色粘質土
3.灰黄色粘質土　4.黄灰色粘質土　5.淡黄灰色粘質土
6.淡灰黄色粘質土　7.灰黄白色粘質土
8.灰色粘砂礫土(5㎜大の礫を含む)　9.黄灰色砂礫土
10.8層と同じ　11.黄白色砂　12.灰色砂
13.暗緑灰色粘質土　14.暗灰色粘質土

50～53・74はB地区側溝SD01から出土した。50は磁器碗である。51は陶磁器の短頸壺である。



第62図　A地区出土遺物実測図

外面には灰緑色の釉がかかる。52は白磁の蓋である。53は染付皿である。54～56は側溝ＳＤ02から出土した。54は備前焼ヘソ徳利である。体部上半に横方向のカキ目を施す。胴部の３方にくぼみがあり、一つの凹部に大黒様の貼り付けがある。56は褐釉がかかった灯明台の脚部である。57



第63図　Ｂ地区出土遺物実測図

50～53・74．側溝ＳＤ01　　54～56．側溝ＳＤ02　　57～70・75・80．側溝ＳＤ04
68・69．撹乱土　　71・73・79．橋脚３・４断ち割り出土

～67・75・80は側溝ＳＤ04から出土した。57は土師器皿である。58～66は碗である。59はくらわんか茶碗で、62は見込み部分に麒麟が描出されている。64は伊万里焼の染付皿である。67は備前焼擂鉢である。68・69は攪乱層から出土した。68は青磁椀である。69は土師器高杯の脚部である。70は伏見人形の馬脚である。蹄の表現は線刻による。71～73は断ち割り出土の土師器皿である。71は橋脚３・４の断ち割り最下層から出土した。72・73は灯明皿として使用され、口縁部外面に煤が付着している。74～76は煙管の雁首である。77は吸口である。78は鉛製の錘である。79は箸である。橋脚３・４の断ち割り最下層から出土した。80は寛永通寶である。

５．ま と め

Ａ地区では調査面積と安全面の関係から標高約7.6m付近で遺物包含層を確認したにとどまった。この包含層には13～14世紀を中心とした遺物が多量に含まれていることがわかった。しかも遺物は細片が多いものの磨滅の度合いが低いことから、調査地近辺に中世集落の本体が存在することを示唆する。

Ｂ地区では近世段階の遺構を確認しただけであるが、道路状遺構は石清水八幡宮の一の鳥居を北進する「御幸道」の延長部分の可能性も十分に考えられる。また、橋脚遺構は橋全体の構造からみればほんの一部を確認したに過ぎないが、道路と川の変遷を考える上で興味深い資料を提供したといえる。

なお、現在の木津川に架かる御幸橋は昭和５(1930)年に架設されており、今回検出した橋脚遺構はその前段階のものであると考えられる。

（柴　暁彦）

注１　八十島豊成・大洞真白・小森俊寛・中塚良・古閑正浩(敬称略)

注２　**調査参加者**　尾上忍・杉江貴宏・穂積優子・渡辺咲子(敬称略)

注３　桝井豊成・竹中友里代『八幡市遺跡地図』　八幡市教育委員会　1990

注４　竹岡林『日本城郭大系』第11巻　新人物往来社　1980

注５　注３に同じ。

参考文献

高橋忠久「音無瀬橋の変遷」(『史談ふくち山』第459号　福知山史談会)　1990

特別展示図録『平成10年度特別展　絵図が語るふるさとの景観－目で見る城陽300年－』　城陽市歴史民俗資料館　1998

古閑正浩「山崎津跡第15次調査(7YYMSYS地区)発掘調査報告」(『大山崎町埋蔵文化財報告書　第26集』大山崎町教育委員会)　2003

森正「(6)八幡市木津川河床遺跡(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)　2001

なお、木津川河床遺跡の各年度の調査概要については、当調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第８・11・16・19・23・30・49・102・106冊に収録されている。

6．薪（たきぎ）遺跡第５次発掘調査概要

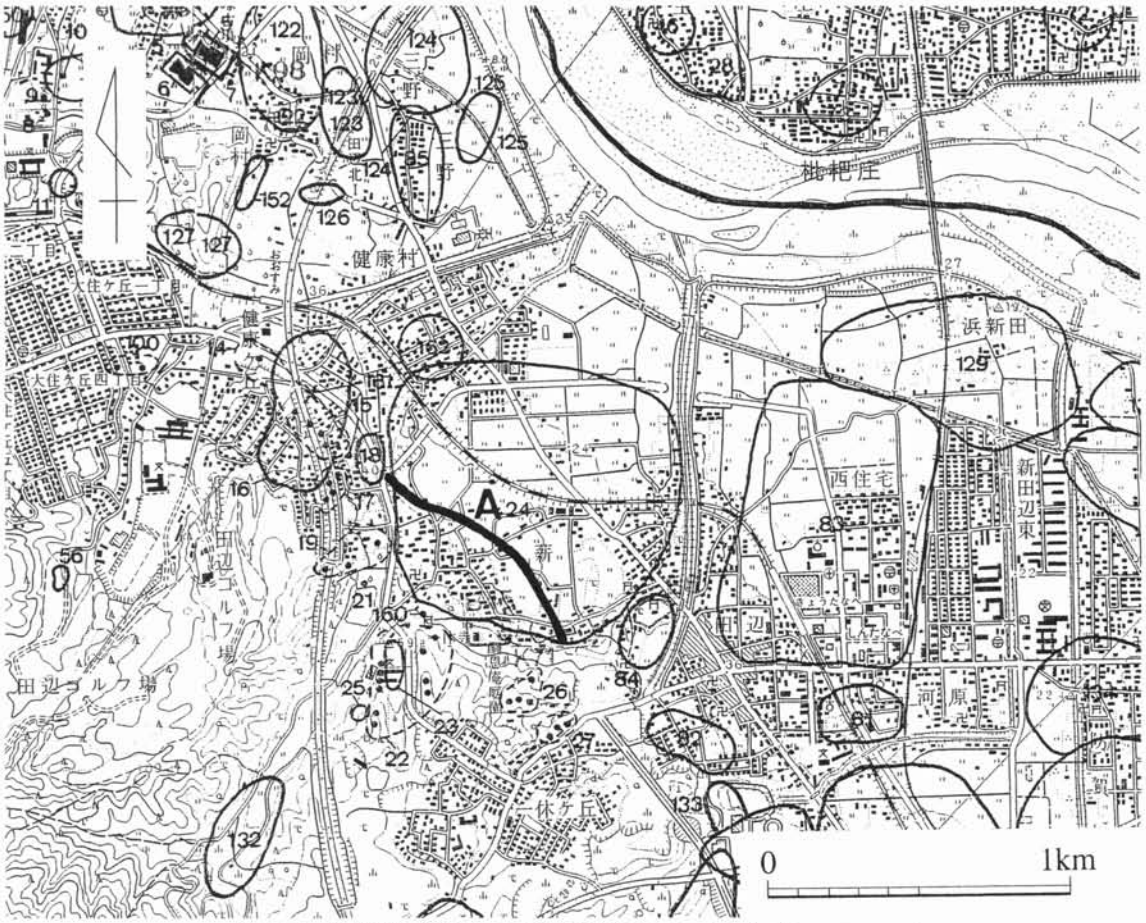
１．はじめに

薪遺跡は、山城盆地の南部を流れる木津川左岸丘陵の裾部に位置する。木津川の支流となる手原川の扇状地上に形成された遺跡であり、縄文時代から近世に及ぶ複合集落遺跡として知られる。遺跡の範囲は約900m四方に及ぶ。

薪遺跡の調査次数は５次を数え、これまでの調査で、主に縄文時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が検出されているが、いずれも部分的な調査にとどまり、全容はなお不明な状況にある。(注１)

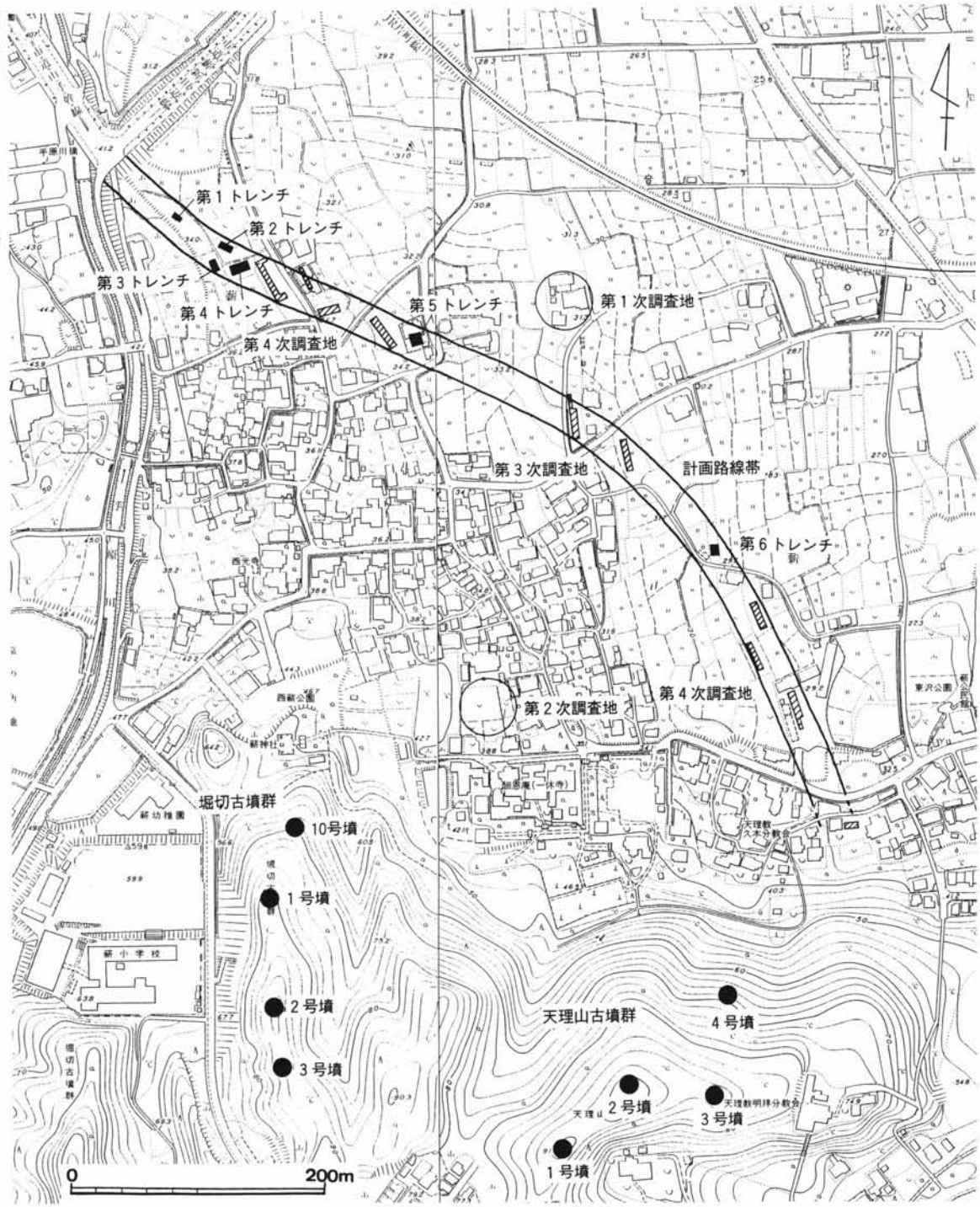
今回の調査は、平成13・14年度調査に続く主要地方道木津線道路整備促進事業に伴う試掘調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

過去の試掘調査では、平成13年度には、遺跡の中央部で縄文時代後期の土坑、古墳時代後期初



第64図　調査地位置図（『京都府遺跡地図』から転載。1/25,000）

A．調査対象地　24．薪遺跡　84．棚倉孫神社遺跡　26．天理山古墳群　22．堀切古墳群
23．堀切谷横穴群　25．西薪遺跡　27．小欠古墳群　15．大欠１号墳　19．西山古墳群
16．狼谷遺跡　17．畑山古墳群　18．畑山遺跡　162．薪城跡　５．大住車塚古墳
６．大住南塚古墳　７．姫塚古墳　85．三野遺跡　122．奥村遺跡　158．田辺遺跡　29．興戸遺跡



第65図　調査地配置図

頭の溝、鎌倉時代の土坑などを検出(注2)し、また、平成14年度には、遺跡北部で縄文時代後期の落ち込みや平安～鎌倉時代と推定される柱列を検出している(注3)。

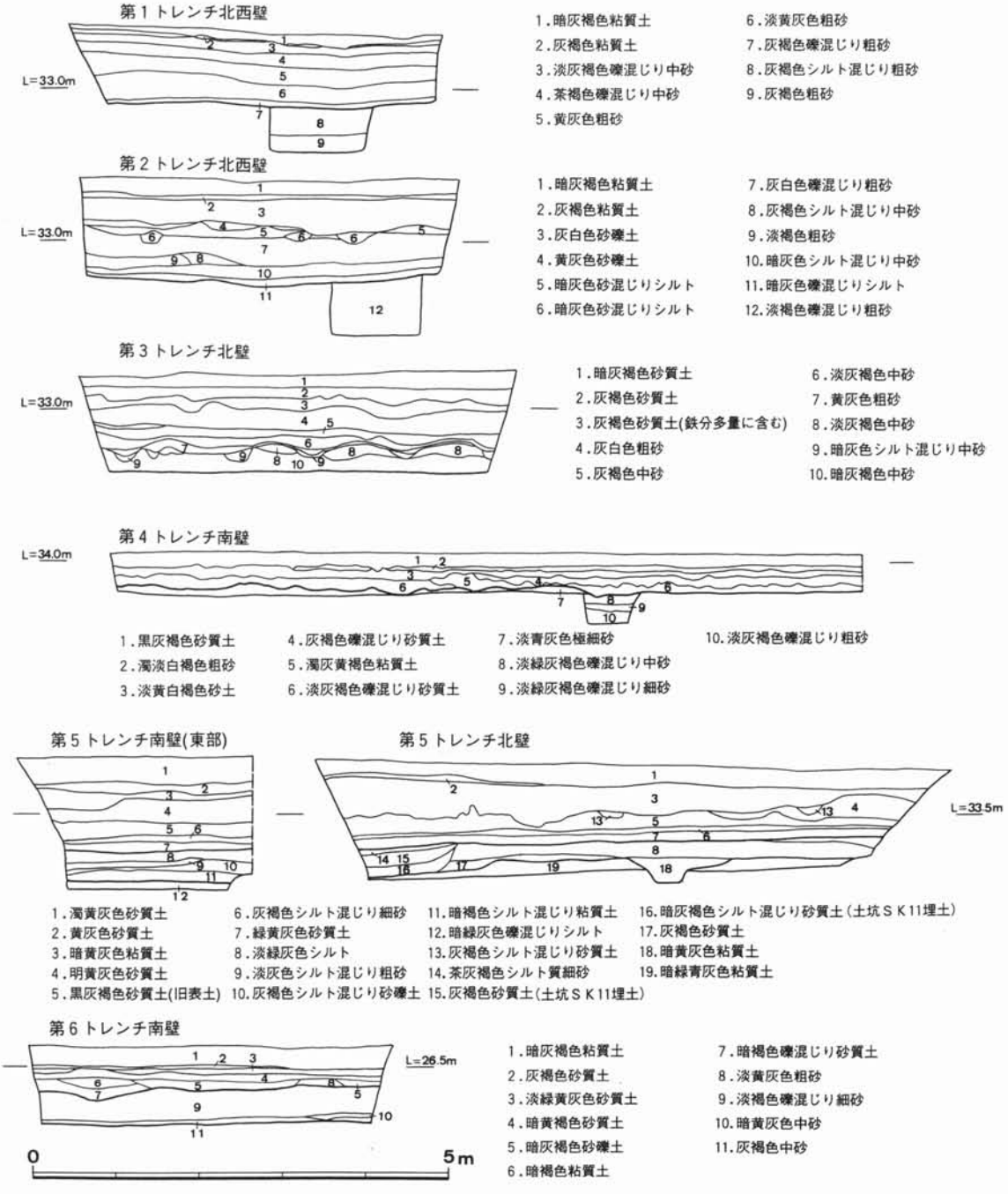
調査は、平成16年１月９日から開始し、同年２月26日に終了した。試掘トレンチは、計６か所に設置した。調査面積は約350㎡である。現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第３係長石井清司、調査員高野陽子が担当した。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

２．調 査 概 要

過去２回にわたる試掘調査は遺跡の南東部と中央部を重点的に行ってきたため、今回の試掘地の設定にあたっては、特に遺跡の北西部を中心に設定した。北西部において第１～４トレンチの４か所を、また、中央部で第５トレンチを、さらに南部で第６トレンチを設定した(第65図)。

第１～４トレンチは、天井川となって遺跡の西辺を南北に流れる手原川の東の地点にあたり、周辺は、調査前には休閑地ないしは耕作地であった。第１トレンチは、現地表面の標高約33.7mを測り、表土下約0.2mで淡灰褐色砂層を検出した。また、第２～４トレンチでも表土下約0.3～0.5mで灰褐色砂礫層を検出し、いずれも手原川の氾濫に伴うとみられる洪水砂および砂礫層と



第66図　土層断面図

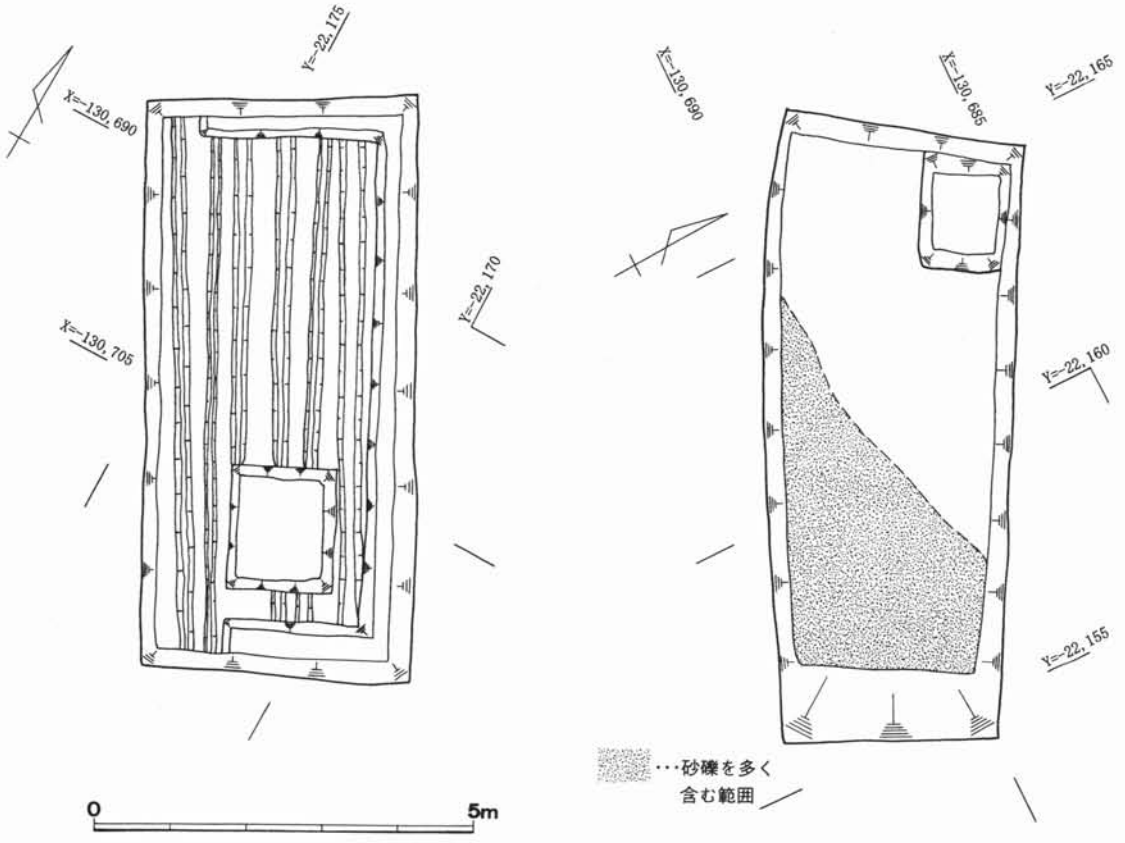
判断した(第66図)。第５・６トレンチ周辺は、安定した地盤にあり遺構を検出した。第５トレンチでは、現在の住宅建設に伴う盛土を除去したのち標高約33.4mで旧表土を確認し、その下層約0.4mで奈良時代後期～平安時代初頭の遺物包含層が認められた。遺跡周辺の地形は、北から南にかけて序々に低く傾斜する。南部に設定した第６トレンチでは、標高約26.7mを測り、表土下約0.3mで遺構面を検出した。

(1)第１トレンチ

遺跡北端の休閑地となっている低湿地に設定したトレンチで、約４×８mの規模を測る。土層の堆積状況は、上位から、暗灰褐色粘質土、淡灰褐色礫混じり中砂、茶褐色礫混じり中砂、黄灰～淡黄灰褐色粗砂、灰褐色礫混じり粗砂の順に堆積がみられるが、表土下約0.3mの茶褐色礫混じり中砂を除去し、黄灰色粗砂に達したレベルで、激しい湧水がみられた。排水を行いつつ、さらに掘削を進めたが、明確な遺構や遺物は認められなかった。一部を断ち割った結果、表土下約１mで手原川の氾濫原とみられる砂礫層に達することを確認した。

(2)第２トレンチ

約５×12.5mの規模で畑地に設定したトレンチである。重機によって、表土下約１mまで掘削し、良く締まった基盤層とみられるシルト混じりの砂礫層に達したため、人力掘削によって精査を行ったが、明確な遺構は認められなかった。精査時に中世土器の小片が出土したことから、この砂礫層は中世における手原川の旧河道の一部の可能性がある。基盤層を断ち割った段階で、著しい湧水がみられた。排水を行いつつ基盤層下約0.7mまで掘削したが、砂層の堆積が厚く、こ



第67図　第３・４トレンチ平面実測図

れ以上の掘削については、湧水によりトレンチ壁が崩壊する危険があったため断念した。

(3)第３トレンチ

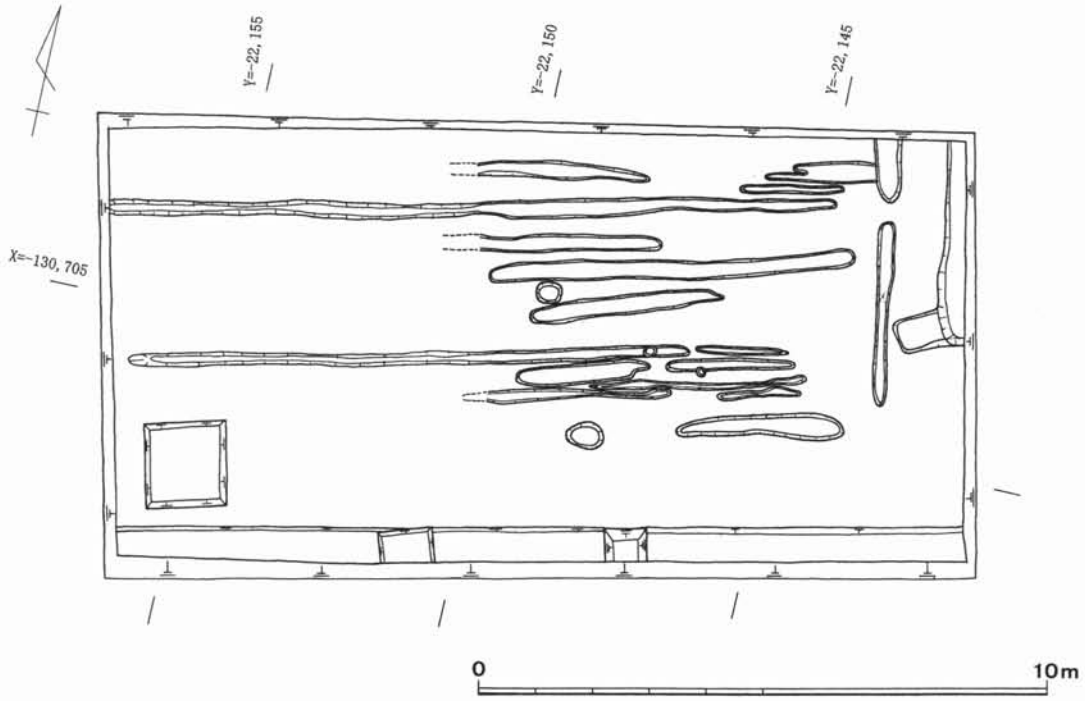
約５×11mの規模で設定したトレンチである。第１・２トレンチの西側の耕作地を対象とした。上層から約0.6m掘り下げた面で南北方向の素掘り溝を６条検出した。いずれも現在の畦畔とほぼ平行するもので、溝内から遺物は出土していないが、包含層中から中世土器の小片が出土しており、中世段階の素掘り溝となる可能性がある。さらに下層を掘削した結果、表土下約1.2mで硬く締まった基盤層を検出した。この面を精査したが、明確な遺構は認められなかった。トレンチ中央の一部を断ち割り、表土下約1.6mのレベルで厚さ約30cmの灰褐色シルト層を検出したが、遺物は出土していない。さらに表土下約２mで砂礫層を検出した。

(4)第４トレンチ

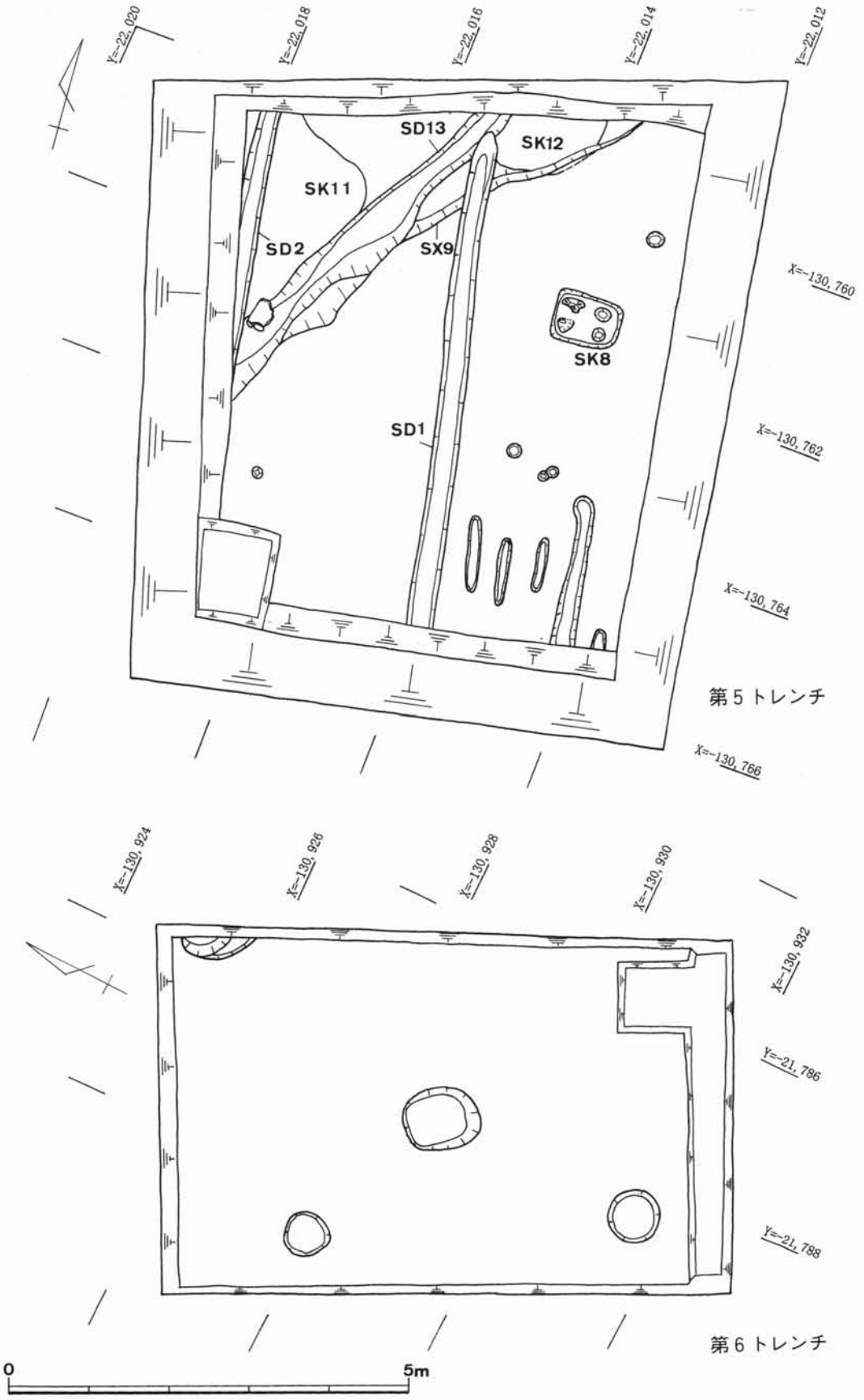
第２・３トレンチの南東の耕作地に設定した約7.5×15.5mのトレンチである。表土および灰褐色砂質土を除去したのち素掘り溝を検出した。東西方向の溝10～11条、南北方向の溝２条を検出した。いずれも幅0.2～0.3m、深さ約0.1mを測る。溝から遺物は出土していないが、包含層中からは染付などの陶磁器片、中世土器片が出土した。第３トレンチで検出した素掘り溝よりも検出レベルが浅く、また、溝の深さも浅いことから、近世以降の素掘り溝と推定される。表土下約0.4mで湧水がみられた。一部で断ち割り調査を行った結果、砂礫層の堆積を約0.7mにわたって検出したが、明確な遺構は認められず、著しい湧水のため下層の掘削は断念した。

(5)第５トレンチ

薪遺跡の中央部に設定した約７×7.5mを測るトレンチである。住宅地造成時の厚さ約0.8mの盛土がみられ、これらを重機で除去したのち調査を行った。表土下約１mのレベルに灰褐色シル



第68図　第４トレンチ平面実測図



第69図　第５・６トレンチ平面実測図

ト混じり細砂が堆積しており、その下層で南北方向の素掘り溝群を検出した。また、トレンチ北端の排水溝およびトレンチ北壁から埴輪が出土した。埴輪片は、土坑ＳＫ11埋土からも出土しており、周辺に古墳に関連する遺構があるものと考えられる。トレンチ南西部には当初基盤層と考えていた緑青灰色砂混じりシルトが堆積するが、この層位をさらに掘り下げ、断ち割り調査を行った結果、表土下約1.4mのレベルにおいて縄文時代後期の遺物包含層を検出した。以下、主な検出遺構について詳述する。

溝ＳＤ１　トレンチ中央で検出した溝である。溝幅約0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。溝内から奈良時代の土器片を出土したが、混入したものである可能性が高く、切り合い関係から中世以降の素掘り溝と推定される。

溝ＳＤ２　トレンチ北西で一部検出した。溝幅約0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測り、溝ＳＤ１と同様、中世以降の素掘り溝とみられる。

溝ＳＤ13　後述する落ち込み状の遺構ＳＸ９の南東側の肩部に沿って検出した溝で、南西から北西方向へとのびる。規模は幅0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mを測る。溝内から奈良時代の須恵器が出土した。

土坑ＳＫ11　トレンチ北西隅で検出した土坑である。一辺約2.5m以上の隅丸方形状を呈するが、輪郭を検出するにとどめ、掘削は行っていない。遺物は、精査中に奈良時代の土師器・須恵器などが出土した。

土坑ＳＫ８　トレンチ東側で検出した土坑である。規模は0.55×0.85m、深さ0.10～0.15mを測る。床面は平坦ではなく、ピット状の落ち込みが４か所で認められる。土坑の輪郭に沿って、内側に茶褐色粘質土を約２～３cmの幅で部分的に検出した。

土坑ＳＫ12　落ち込み状遺構ＳＸ９を掘削後、下層から検出した楕円形状を呈する土坑である。平面形のみ確認し、掘削は行っていない。規模は、0.9×1.5m以上を測るが、一部は調査区側に拡張する。埋土の色調や検出レベルから縄文時代の土坑の可能性がある。

落ち込み状遺構ＳＸ９　トレンチ北西で検出した落ち込み状の遺構である。深さは約0.1～0.2mを測る。北西方向の立ち上がりは検出しておらず、調査区外に広がるとみられる。幅の広い浅い溝になる可能性があるが、調査した面積が限られており明確にできない。

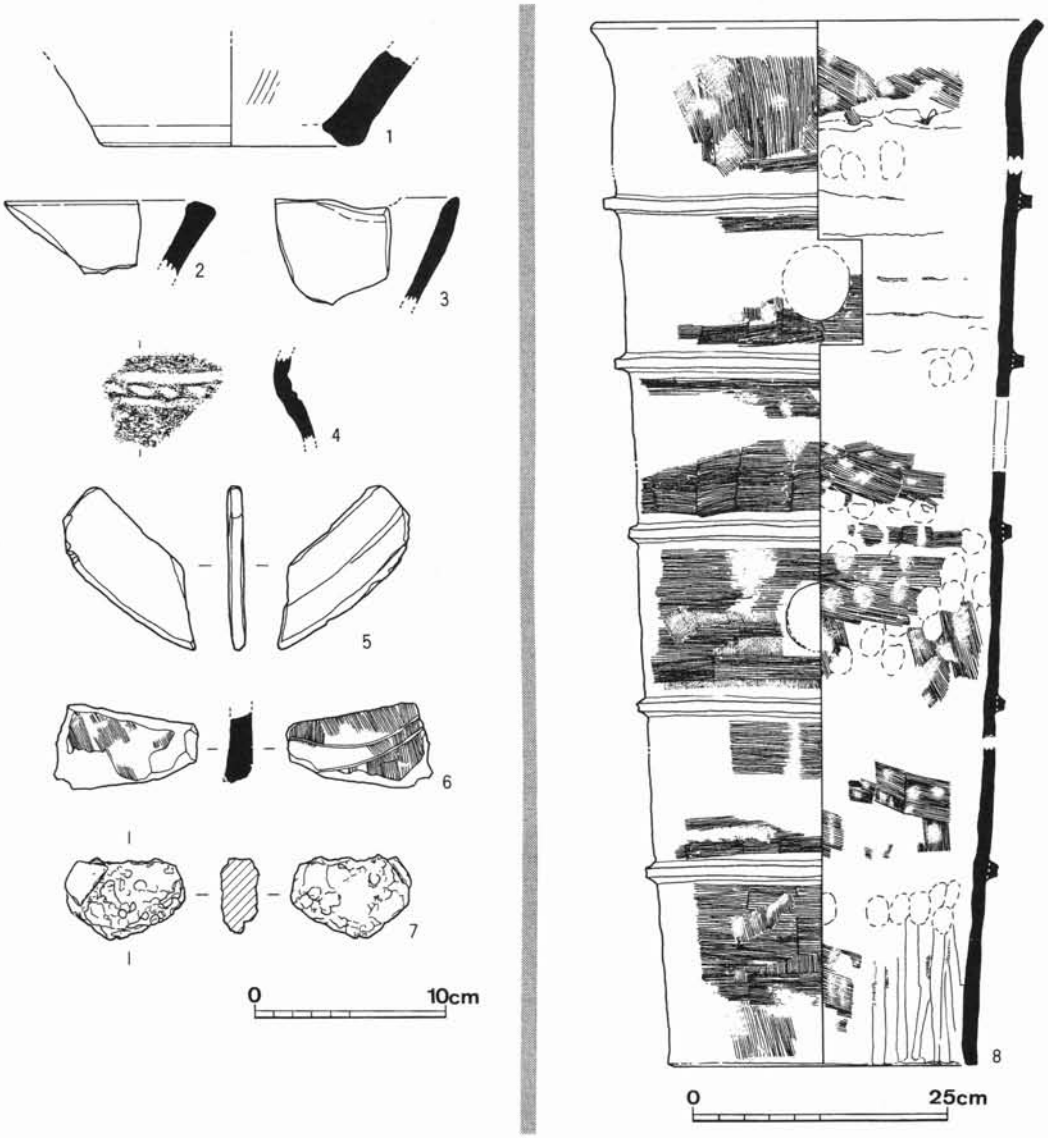
(6)第６トレンチ

薪遺跡南部の耕作地で設定したトレンチである。規模は約4.5×７mを測る。トレンチ西部と中央部で３基の土坑を検出した。柱跡の可能性も否定できないが、建物跡としての復原が困難であり、規模も大きいため土坑とした。埋土はよく締まった黄灰褐色砂質土を主体とする。遺物は出土しておらず時期は不明である。また、トレンチ北東隅で楕円形状の土坑の一部を検出した。断面は擂鉢状をなし、暗褐色粘質土を埋土とする。遺物はほかの土坑と同様認められなかった。

３．出 土 遺 物（第70・71図）

１は、第２トレンチから出土した擂鉢の底部である。２は、第３トレンチから出土した須恵器

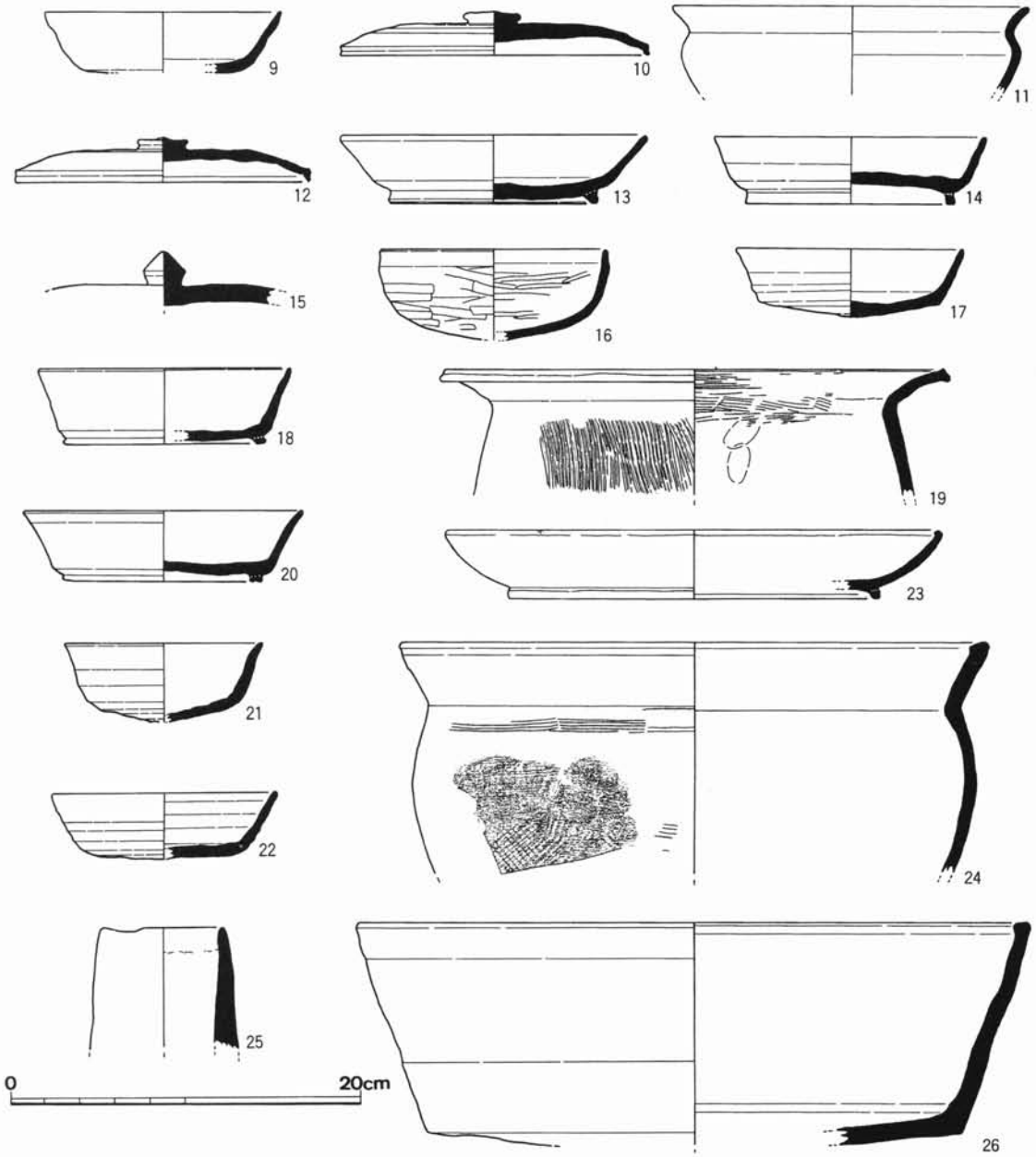
鉢の口縁部である。時期は12世紀後葉と推定される。３は、第４トレンチから出土した須恵器片口鉢の口縁部である。４～８は、いずれも第５トレンチから出土した。４は、南部断ち割りで検出した縄文土器を包含する層から出土した縄文土器深鉢の頸部である。平行する２条の沈線を施し、その間隙に押圧を連続して加えるもので、時期は縄文時代後期と推定される。５・６は、包含層中から出土した埴輪片である。５は、中央にヘラ描き沈線による文様が施される形象埴輪で、蓋形埴輪の立飾りの可能性がある。幅約４cm、厚さ0.8cmを測る。６は、やや曲面をもつ外面をハケ調整し、２条の沈線による文様を施す形象埴輪の一部である。８は、第５トレンチ北排水溝および北壁から出土した円筒埴輪である。破片は一個体の約1/3程度が出土した。突帯の位置などから判断して、６段５条の突帯をもつ普通円筒埴輪としての復原案を示したが、２段目と３段目、３段目と４段目、５段目と６段目には接合点は認められず、５段となる可能性も否定できない。形態は、口縁部がやや外反することを特徴とし、透かしは３～５段に対応する部位の破片に、



第70図　出土遺物実測図(1)

１．第２トレンチ包含層　　２．第３トレンチ包含層　　３．第４トレンチ包含層
４．第５トレンチ縄文時代遺物包含層(下層断ち割り)　　５～８．第５トレンチ包含層

円形透かしが認められる。また、４段目に対応する部位に、縦方向の部材の剝離痕が認められる（図版40：８－(2)）。調整は、一次調整にタテハケを施し、二次調整にＡ種ヨコハケおよび一部Ｂ種ヨコハケを施す。ハケ原体は１cm当たり４～５本と細かな目の原体を使用している。黒斑は２段目から４段目にわたって認められる。復原径は口径34.6cm、底径24.2cm、高さ82.2cmを測る。７は、包含層中から出土した鉄滓である。一部に土師器片が付着している。第71図９～26は、第５トレンチ出土土器である。９は、溝ＳＤ２から出土した須恵器杯Ａで、時期は９世紀初頭～前葉と推定される。10・12～19は、溝ＳＤ９から出土した。10・12は、扁平な宝珠形つまみをもち、口縁端部を内側に巻き込む蓋Ａで、帰属時期は８世紀後半と考えられる。須恵器杯Ｂには、高台の位置が体部から底部への屈曲部のやや内側にある14と、屈曲部近くに移行する18・20があり、



第71図　出土遺物実測図(2)

9・11．第５トレンチ溝ＳＤ２　10・12～19．第５トレンチ溝ＳＤ９　20～26．第５トレンチ包含層

８世紀後半～末の時期幅が推定される。15は、高くやや尖り気味の宝珠形つまみを有する蓋で、薬壺の一部と推定される。16は、須恵器椀であり、外面に板状工具によるナデを施す。21～26はいずれも包含層中から出土した。22の須恵器杯Ａは、口径が小さく、器高が高く、時期は８世紀後半と推定される。23の土師器皿は高台をもち、端部がやや肥厚するもので、８世紀後半に帰属する。25は、製塩土器である。胎土はチャートを多く含み、色調は赤褐色を呈する。時期は奈良時代後期～平安時代前期と推定される。

４．ま と め

薪遺跡北西部で設定した第１～４トレンチでは、主に素掘り溝などを検出した。掘削時期は、２時期あるものと推定される。第３トレンチで検出した南北方向の素掘り溝は、検出レベルなどから中世に遡る可能性があるが、第４トレンチで検出した東西方向の素掘り溝は浅く、近世以降のものと推定される。そのほかの遺構については、顕著な遺構が認められず、また、包含層についても確認していない。これらのトレンチ設定地点の西側丘陵縁辺部には、手原川が天井川となって流れており、周辺一帯はその氾濫原とみられ、河川堆積による砂礫層が厚く堆積している。こうしたことから、周辺における遺構群の多くは消失したと推定され、旧河道の底部を基盤層として確認したにとどまる。

遺跡の中央部に設定した第５トレンチでは、素掘り溝群に加えて、奈良時代の遺構群を検出し、包含層中から縄文土器や埴輪が出土した。第５トレンチの北西約30ｍの地点では、第３次の試掘調査でも奈良時代の遺構を検出しており、周辺にこの時期の遺構が広がると考えられる。また、同調査では古墳時代後期初頭の埴輪が出土しているが、今回の調査で出土したものは、古墳時代前期末～中期初頭に帰属するものであり、時期が異なることから、調査区周辺に複数の埋没古墳が存在する可能性がある。縄文時代の包含層については一部を確認したに過ぎないが、検出遺構のなかにも埋土の状況から縄文時代の土坑となる可能性があるものが含まれている。

遺跡の南東部で設定した第６トレンチでは、表土下約0.5ｍのレベルで土坑などを検出した。この調査区の北部の微高地は、比較的安定した基盤層を形成すると考えられることから、遺跡の中心が北部の微高地にあるものと推定できる。

（高野陽子）

注１　鷹野一太郎ほか「薪遺跡発掘調査概報」（『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集　京田辺市教育委員会）　2000

注２　竹原一彦「薪遺跡第３次発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第106冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注３　竹井治雄「薪遺跡第４次発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第110冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

調査参加者　有澤明子・丑山直美・岡野和美・尾上忍・鈴木浩子・栃木道代・西村敏子・村上計太・盛本照代（順不同）

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
平成15年度発掘調査概要

1．はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構(旧都市基盤整備公団)の依頼を受けて継続して実施しているもので、平成15年度は、内田山遺跡・内田山古墳群について調査を実施した。

内田山遺跡・内田山古墳群は、京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山に所在する。調査は、平成11年度に第１次調査、平成12年度に第２次調査、平成14年度に第３次調査を実施している。(注1)

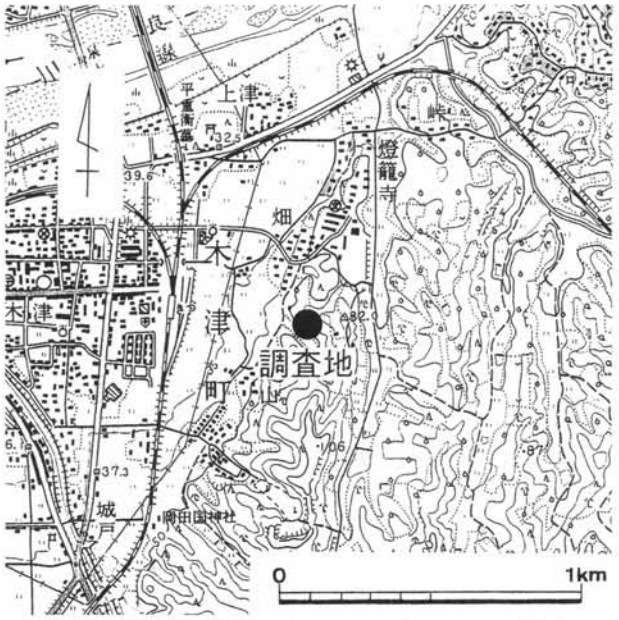
第１次調査では、開発対象地内に所在する内田山Ｂ１号墳の規模などを確認するとともに、内田山遺跡の広がりを確認するための試掘調査を実施した。その結果、内田山Ｂ１号墳は一辺18m程度の規模を測る方墳で、周溝からは川西編年Ⅱ期の円筒埴輪片が出土した。また、少量ながら弥生時代後期や奈良時代の土器片が出土した。第２次調査は、弥生時代や奈良時代の遺構・遺物について明らかにするために実施した。しかし、顕著な遺構は確認できず、出土遺物もごくわずかであった。第３次調査では、調査区の南西部で弥生時代後期前半の土器溜まりが検出され、当該期の遺構が斜面地にも広がる可能性が考えられた。

今回の調査は第４次調査にあたり、第１・３次調査地の南側の斜面地に位置する。調査期間は、平成15年５月27日～６月27日までである。調査面積は200㎡である。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第２係長伊野近富、調査員筒井崇史が担当した。発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力を得た。(注2)

調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城郷土資料館・木津町教育委員会・木津の緑と文化財を守る会・京都府立木津高等学校などの関係諸機関から指導・協力を得た。

なお、調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。



第72図　調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)

2．調査の経過

調査地は、木津町東部に所在する丘陵から木津町市街地に向かって西北西方向にの

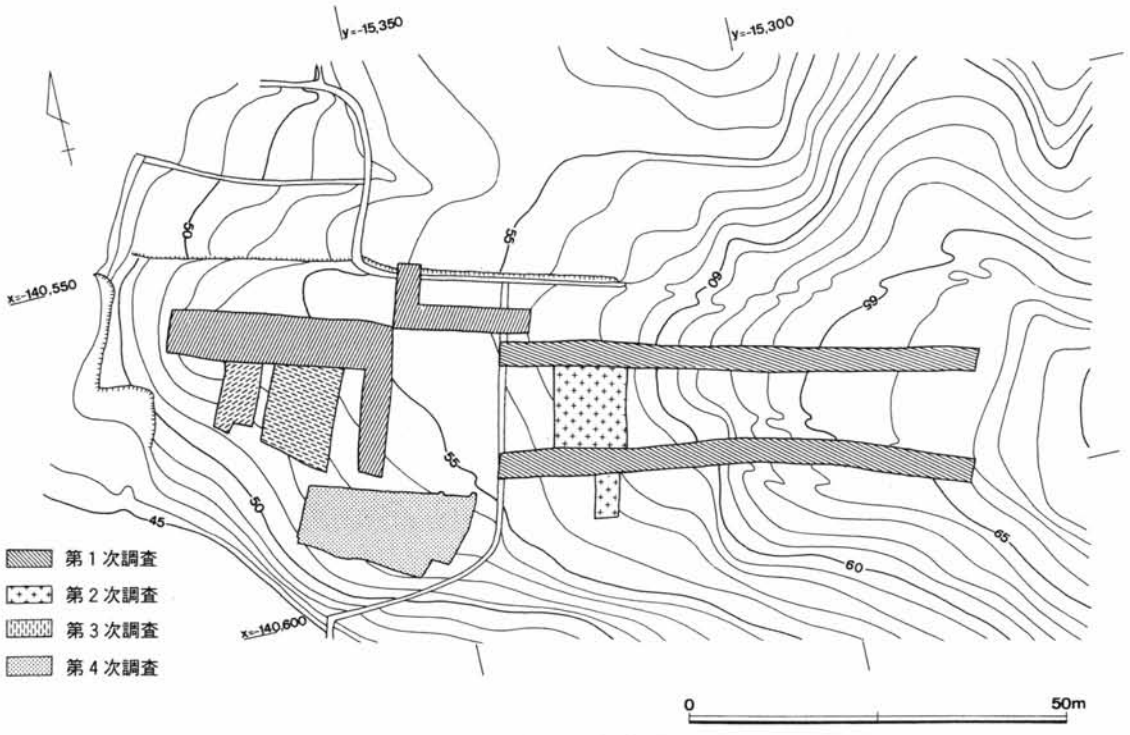
びる支尾根のほぼ先端部の南側斜面に位置する。

第４次調査は、第３次調査の成果を受けて、その南西側に調査区を設定して実施した。第３次調査で弥生時代後期前半の土器溜まりなどが検出され、当該期の遺構が斜面地に広がる可能性が考えられたため、調査を実施することになったものである。また、内田山Ｂ１号墳に関連する遺構・遺物などの存在も予想された。なお、調査は、これまでの調査に引き続くものであり、調査区名を第８トレンチとした。

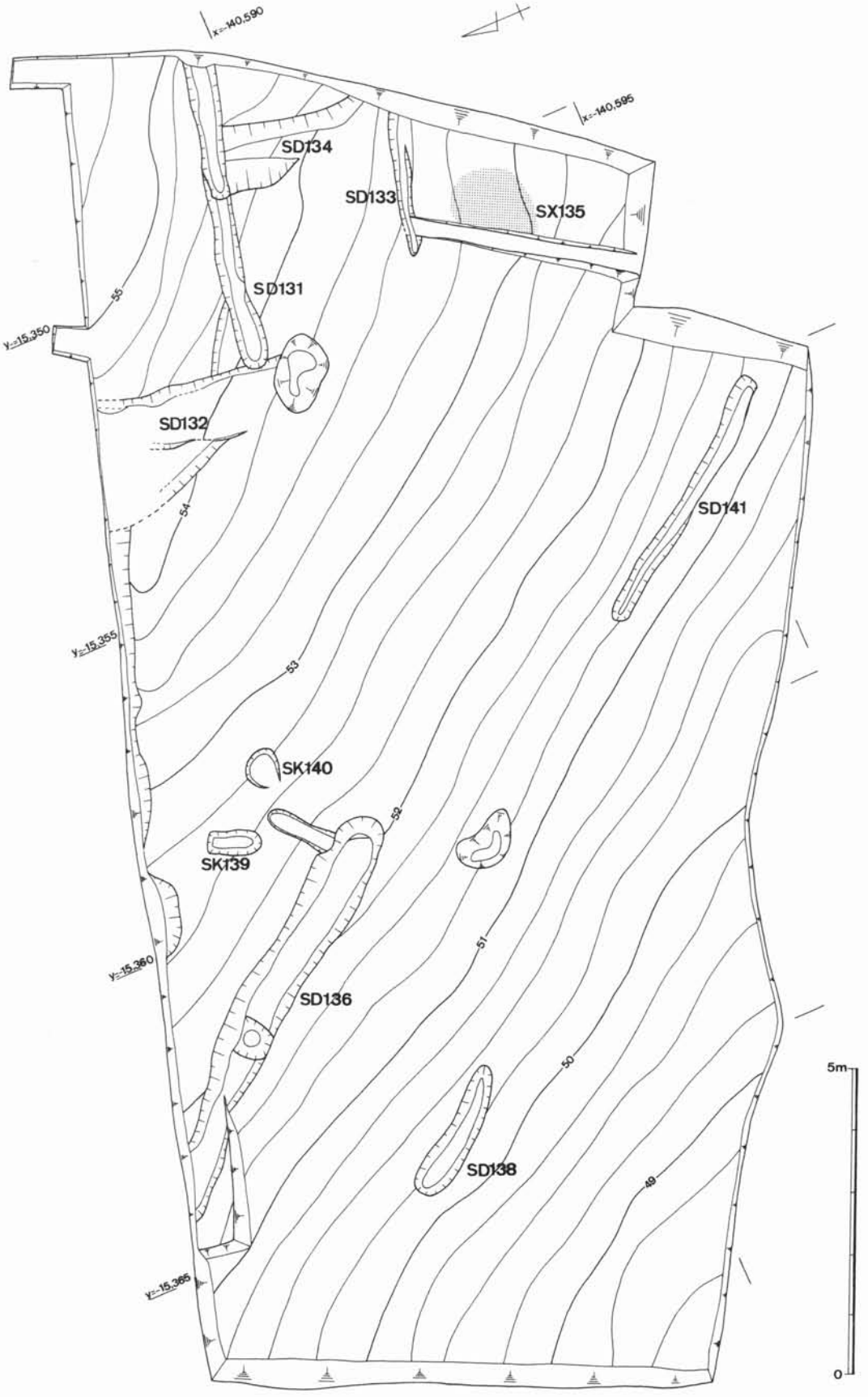
発掘調査は、平成15年５月27日から開始した。表土ならびに丘陵の流土の厚さは15～25cmを測り、これを重機で除去した。その後、人力による精査を行ったが、明瞭な遺物包含層は確認できず、調査区の西半部はさらに丘陵の流土が堆積していた(厚さ約15～20cm)。これらを除去して、遺構を検出した。調査区周辺は第３次調査の際に検出された弥生時代後期の遺構などが存在すると予想されたが、調査の結果、内田山Ｂ１号墳に伴うと思われる埴輪片がまとまって出土したほかは、時期不明の溝や土坑、近・現代の地境溝などを検出した。検出した遺構は平板測量を行いながら遺構番号をつけ、随時、遺構平面図・土層断面図の作成、写真撮影を行った。また、並行して遺構の掘削作業を行い、出土遺物の取り上げなどを行った。６月下旬には遺構の検出・掘削作業、記録作業などのすべての作業を終え、最終的に６月27日をもって現地調査を終了した。

３．調査の概要（第74図）

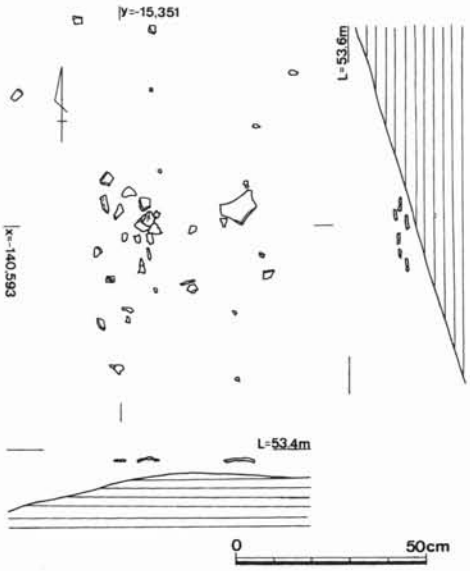
今回の調査では、埴輪溜まり１か所(ＳＸ135)、溝７条、土坑２基を検出した。このうち、調査区内の比較的高所側で検出された溝３条は等高線とは異なった方向に掘削されており、畑などの区画溝と考えられる。他の３条は概ね等高線に沿って検出された。



第73図　内田山遺跡・内田山古墳群トレンチ配置図



第74図　調査区平面実測図



第75図　埴輪溜まりＳＸ135実測図

埴輪溜まりＳＸ135（第75図）　調査区の南東隅で検出した埴輪溜まりである。小片化した埴輪が、南北0.7m、東西1.1mの範囲からややまとまって出土した。これらの埴輪はもともと、内田山Ｂ１号墳に樹立されていたものと考えられ、集積したような状態で出土したことから、後世に改めて一括投棄されたものと考えられる。なお、これらの埴輪片とともに、擂鉢の破片が出土しており、投棄の時期もこの頃と考えられる。

溝ＳＤ131　検出長5.2m、幅0.3～0.5m、深さ0.2～0.3m測る直線的な溝である。腐植土が比較的厚く堆積していたので近年の畑の区画溝の可能性が高い。出土遺物はない。

溝ＳＤ133　検出長2.3m、幅0.2m前後、深さ約0.1mを測る。埴輪溜まりＳＸ135の高所側を画するような状態で検出されたため、関連する遺構かとも思われたが、埴輪の投棄時期が新しいことから、溝ＳＤ133も耕作に伴う溝である可能性が高い。

溝ＳＤ136　検出長7.2m、幅0.6～0.75m、深さ0.2～0.3mを測る。ほぼ等高線に沿って掘削されている。出土遺物は、弥生土器もしくは土師器の細片があるが、詳細は不明である。

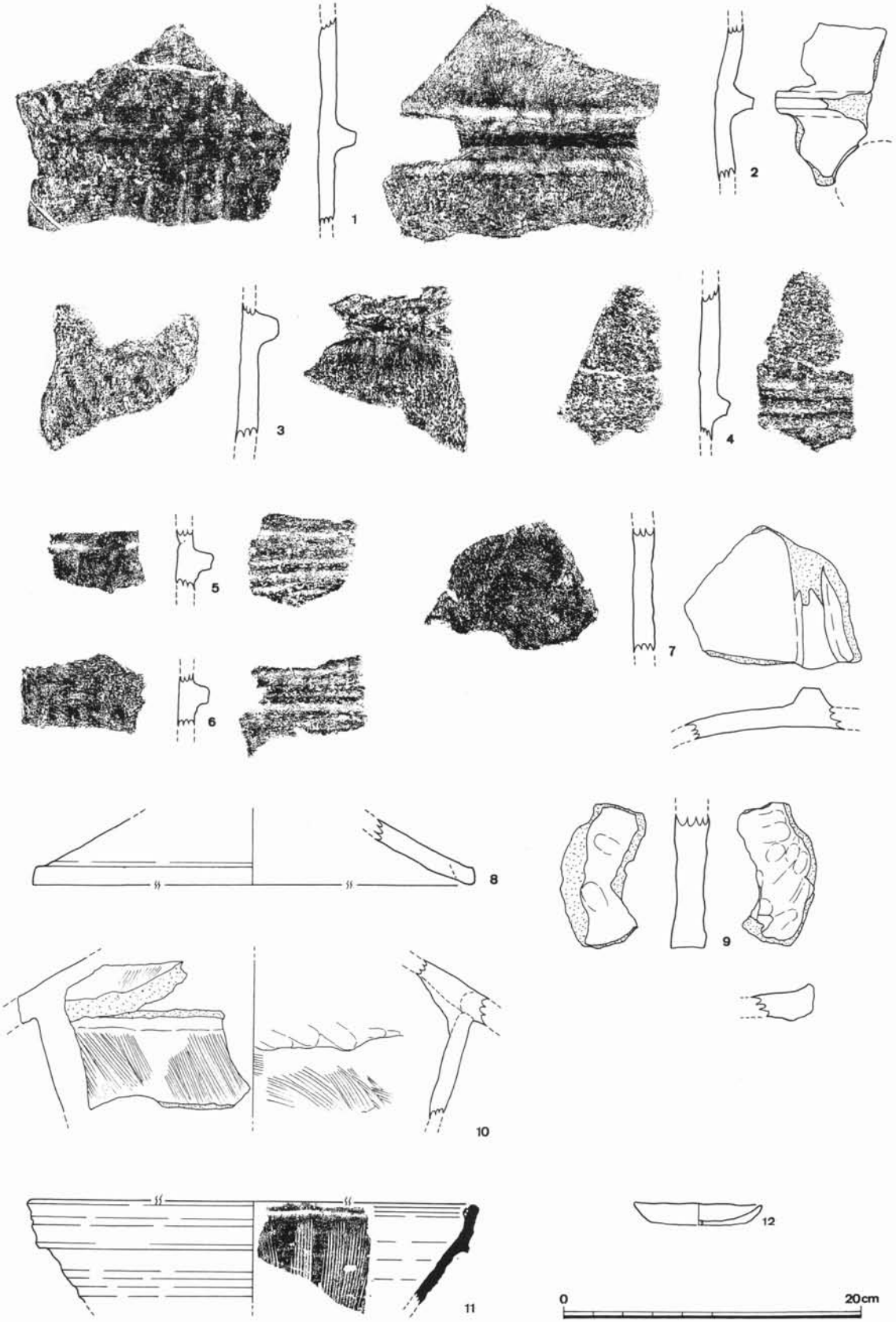
溝ＳＤ141　検出長4.5m、幅0.35m前後、深さ0.10～0.15mを測る。溝ＳＤ136と同様ほぼ等高線に沿って掘削されている。出土遺物もなく、詳細は不明である。

４．出土遺物（第76図）

出土遺物としては、埴輪が大半を占め、そのほかに中・近世以降の遺物が少量ある。出土遺物は整理箱で４箱分である。

１～10は埴輪で、このうち、１～６は円筒埴輪の破片である。内外面とも磨滅している資料が多い。１の突帯は比較的突出度の高い断面台形状を呈する。２は、１よりもさらに突出度の高い断面台形状を呈する。円筒部の形状がやや湾曲している。また、部分的に円形の透かし孔を確認できる。３は１・２に比べてやや突出度の低い断面台形の突帯を有する。４は内面に明瞭な接合痕がある。５・６は突帯部分の小破片である。５も内面に明瞭な接合痕がある。７は通常の円筒埴輪とは異なる破片で、第１次調査の際に出土したような特殊円筒棺の破片と考えられる。横断面に見られる突帯は円筒埴輪に通有に見られる突帯ではなく、突帯間に貼り付けられる特殊円筒棺特有の突帯であり、突帯の下端は欠損しているのではなく、剥離している。外面調整は磨滅のため不明である。内面調整はハケ調整である。８は蓋形埴輪の笠部の破片と思われる。端部の断面形が比較的方形に近いことや破片に反りが少ないことから笠部の破片と判断した。推定復原径30cm、残存高4.3cmを測る。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。９は形状が不明の埴

輪片である。残存長9.5cm、幅4.5cm、厚さ２cm前後を測る。破片の外周部には剥離痕跡が見られる。内外面共に調整はユビオサエまたはユビナデで、必ずしもていねいではない。10は蓋形埴輪



第76図　内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図

の円筒部と笠部の接合部分の破片である。

11・12は中・近世の遺物である。11は擂鉢で、復原口径29.6cm、残存高7.0cmを測る。内面には７条を１単位とするすり目がある。12は土師皿である。復原口径8.6cm、器高1.6cmを測る。

５．ま と め

今回の調査成果については、以下のとおりである。

前年度までの調査成果を受けて、今回の調査地では弥生時代の遺構・遺物が検出されると予想していたが、調査の結果、弥生時代や古墳時代の遺構は検出されなかった。また、内田山Ｂ１号墳に伴うと思われる埴輪片が少量出土したものの、いずれも内田山Ｂ１号墳の墳丘の削平などに伴う転落や混入と考えられる。したがって、今回の調査地には弥生時代の遺構や内田山Ｂ１号墳は及んでいなかったと考えられる。

（筒井崇史）

注１　筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要　(2)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000
筒井崇史・山内基樹「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要　(2)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001
筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概要　(3)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第109冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注２　**調査参加者**　岡野奈知子・奥出裕也・滝下勝久・松浦弘太郎・山田三喜子

付載報告

内田山遺跡出土埴輪の胎土分析

1．試　料

分析試料は、内田山遺跡出土の埴輪片３点である。これらは以下の工程を経て、胎土分析に供された。

2．分析方法

(1)試料の採取

分析試料は、試料のもつ考古学的価値を損なわないように配慮して切り削る位置を決め、ダイヤモンドカッターを用いて適宜切削し採取した。分析に供した試料片重量は８～15ｇ程度である。

(2)前処理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度１～２％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨ての篩用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別(60・120・250メッシュ)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250メッシュ(1/8～1/16㎜)粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石薄片を作成した。

(3)全鉱物組成分析(火山ガラス・軽鉱物・重鉱物含有比測定)

前述の封入薄片を用い、主として重鉱物・軽鉱物・土粒子の量比の違いが試料ごとに認められるかをチェックする目的で分析を行うが、試料間の差がそれほどないことから、分析項目を増やし、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・焼結粒子・そのほかの５項目について、１含有粒子数を無作為に計数した。このうち焼結粒子としたものは、胎土中焼結され多くの微細粒子が集合し、塊状となった粒子を指す。作業要領は基本的に後述の重鉱物分析と同様で、１薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数した。なお、対象粒子は120～250メッシュ(1/8～1/16㎜)粒径試料である。

(4)重鉱物組成分析

主要重鉱物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(BHb)・緑色普通角閃石(GHb)・不透明(鉄)鉱物(Opq)・カミングトン閃石(Cum)・ジルコン(Zr)・黒雲母(Bt)・アパタイト(Ap)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理に

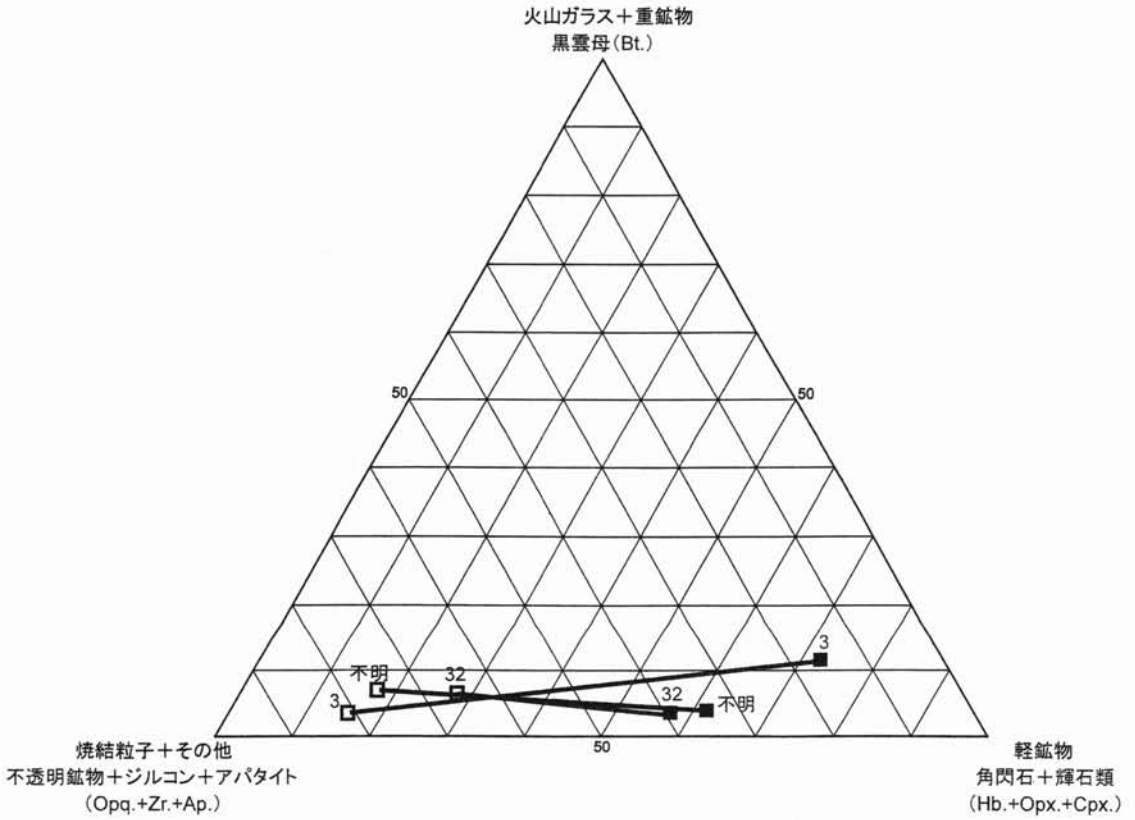
よる重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(5)火山ガラス形態分析

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1976)に準拠してH：扁平型(Ha,Hb)、C：中間型(Ca,Cb)、T：多孔質型(Ta,Tb)に分類した。またこれらの形態に属さないものを、It：不規則型として一括し示した。なお、含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したものやスコリア質のものおよび亀ノ甲型と呼ばれる特異な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・檀原(1995)に基づき水和(hydration)やスーパーハイドレーション(super hydration)の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

3．分析結果と考察

今回の分析結果の詳細は、文末の測定データ一覧表中に示されている。しかし、分析生データだけをみていたのでは比較要素が多いため、分析値間の相互関係を把握することは困難と思われる。そこで、重鉱物分析および火山ガラス・鉱物組成結果を三角ダイアグラム上にプロットし表示した。なお、三角ダイアグラムを作成するにあたり、各分析結果の3つの成分を端成分として以下に述べる要素を設定した。



内田山遺跡出土埴輪3点の胎土分析三角ダイアグラム

まず、重鉱物組成データでは、黒雲母(Bt)、不透明(鉄)鉱物とジルコンの和(Opq＋Zr)、緑色角閃石と斜方輝石および単斜輝石の和(GHb＋Opx＋Cpx)を３つの端成分とし、頂点・左下・右下を100％として図示した。その理由は、Btは主として花崗岩起源の可能性が高い要素とみなすことができる。Opq＋Zrはともに比重が非常に大きく風化にも強いため粘土中に残りやすく、水簸の過程で沈降し排除されやすい要素である。そのほかの成分であるGHb＋Opx＋Cpxは火山灰起源の可能性を含む要素で、胎土の母材を検討するには有効と判断した。

一方、全鉱物組成(火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有率)では、三角ダイアグラムの３つの端成分として、頂点に重鉱物＋火山ガラスを、左下に岩片・焼結粒子、右下に軽鉱物をそれぞれ100％になるようにプロットした。その理由は、粘土鉱物を主とし非結晶～微結晶の集合体である焼結粒子は土器材料の主成分であること、軽鉱物はそれに次ぐ主成分粒子であり、重鉱物＋火山ガラスは含有量がともに少なく一括して副成分粒子とみなせると判断したことにある。なお、軽鉱物はさらにカリ長石・斜長石・石英などに細分され、表２にその正確な量比が表示されるが、三角ダイアグラム上では軽鉱物として取扱った。

今回の３点の分析結果は、各試料ごとの胎土分析結果表および三角ダイアグラムに示される通りであり、互いによく似た結果となっている。わずかに３点しかないため、近似あるいは相違点の詳しい比較検討は差し控えたい。ただし、以下の２点について、コメントを付記する。

1) 火山ガラスの厚さや形態について、ＳＸ135－３試料と他の２試料とでわずかながら違いが指摘される。すなわちＳＸ135－３試料では肉厚のバブル・ウォール型ガラスが主であるのに対し、他の２試料では厚さは普通であり、軽石型ガラスの割合が多い傾向が認められる。

2) 重鉱物組成について、ＳＸ135-３試料ではカミングトン閃石(Cum)が検出されたが、他の２試料では検出されないという違いがある。

これらの２点の相違から、ＳＸ135－３試料と他の２試料は区別される可能性を指摘しておきたい。

参考文献

吉川周作「大阪層群中の火山灰層について」『地質学雑誌』82(8)　1976　p.479-515.

山下透・檀原徹「火山ガラスのhydrationとsuper hydration －日本の広域テフラについて－」『フイッション・トラックニュースレター－』第８号　1995　p.41-46.

なお、温度変化型屈折率測定装置RIMS™と測定方法は、PAT. 1803336,1888831で特許登録および商標登録されている。

補記　本分析は、当調査研究センターが、京都フイッション・トラック株式会社に委託して行った。

表1　保存用資料一覧表

No.	試料名	処理生試料 乾燥重量 (g)	篩別試料重量(g) >1/4 mm	1/4-1/8 mm	1/8-1/16 mm	色調判定	備考
1	KUM4 8トレンチ SX135 3	9.91	4.80	1.79	1.23	2.5 Y 1.7/1, 2.5 Y 5/8粒子	
2	KUM4 8トレンチ SX135 32	7.95	3.11	1.40	0.99	7.5 YR 5/6, 白色粒子	
3	KUM4 590 8トレンチ 不明	15.25	7.25	2.83	1.77	7.5 YR 4/6, 白色粒子	

注：※(1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。

(2) 1/8-1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。

(3) 色調判定は、新版標準土色帳(農林省農林水産技術会議事務局監修、1970)による。

表2　三角ダイアグラム基礎データ一覧表

■全鉱物分析

No.	試料名	全鉱物3項目 火山ガラス+重鉱物	焼結粒子+その他	軽鉱物	合計	全鉱物計測粒子数と含有率 ※(1) 火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	焼結粒子	その他	合計
1	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 8トレンチ, SX135, 3	7	162	31	200	5	31	2	162	0+	200
		3.5	*81*	*15.5*	*100*	*2.5*	*15.5*	*1*	*81*	*tr*	*100*
2	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 8トレンチ, SX135, 32	13	131	56	200	6	56	7	131	0+	200
		6.5	*65.5*	*28*	*100*	*3*	*28*	*3.5*	*65.5*	*tr*	*100*
3	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 590, SX135, 不明	14	151	35	200	7	35	7	151	0	200
		7.0	*75.5*	*17.5*	*100*	*3.5*	*17.5*	*3.5*	*75.5*	*0*	*100*

■重鉱物分析

No.	試料名	重鉱物3項目 黒雲母	不透明鉱物+ジルコン+アパタイト	角閃石+輝石類	合計	重鉱物計測粒子数と含有率 ※(1) Ol	Opx	Cpx	BHb	GHb	Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	合計
1	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 8トレンチ, SX135, 3	8	11	50	69	0	0	0	0	47	9	3	2	8	0	69
		11.6	*15.9*	*72.5*	*100*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*68.1*	*13.0*	*4.3*	*2.9*	*11.6*	*0.0*	*100*
2	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 8トレンチ, SX135, 32	5	55	80	140	0	1	0	1	78	55	0	0	5	0	140
		3.6	*39.3*	*57.1*	*100*	*0.0*	*0.7*	*0.0*	*0.7*	*55.7*	*39.3*	*0.0*	*0.0*	*3.6*	*0.0*	*100*
3	内田山遺跡(第4次調査)埴輪 KUM4, 590, SX135, 不明	6	53	95	154	0	1	0	14	80	52	0	1	6	0	154
		3.9	*34.4*	*61.7*	*100*	*0.0*	*0.6*	*0.0*	*9.1*	*51.9*	*33.8*	*0.0*	*0.6*	*3.9*	*0.0*	*100*

※(1)　上段：計測粒子数，下段：含有率%

表3　胎土分析結果表(試料1)

火山ガラス・鉱物組成(モード分析)　注:以下のモード分析値は上段が計数値、下段は含有率%を示す.

火山ｶﾞﾗｽ	軽鉱物	重鉱物	焼結粒子	その他	合計	備考
5	31	2	162	0+	200	火山gl:珪長質肉厚bw>pm型。 軽鉱物:Qz,pl,Kf,β-Qz.
2.5	15.5	1.0	81.0	tr	100.0	重鉱物:GHb,Opq,Bt,Cum,Zr. 焼結粒子:淡灰褐色。 その他:Poなど。

bw:ﾊﾞﾌﾞﾙｳｫｰﾙ,pm:軽石,sco.:ｽｺﾘｱ,pl:斜長石,Qz:石英,Kf:カリ長石,chal:カルセﾄﾞﾆｰ,po:ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ,

重鉱物分析(モード分析)

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
−	−	−	−	47	9	3	2	8	−	69	
0.0	0.0	0.0	0.0	68.1	13.0	4.3	2.9	11.6	0.0	100.0	

Ol:ｶﾝﾗﾝ石,Opx,Cpx:斜方,単斜輝石,BHb,GHb:緑色・褐色角閃石,Opq:不透明鉱物,
Cum:ｶﾐﾝｸﾞﾄﾝ閃石,Zr:ｼﾞﾙｺﾝ,Bt:黒雲母,Ap:ｱﾊﾟﾀｲﾄ,Gar:ｻﾞｸﾛ石,

火山ガラス形態分類(モード分析)

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
10	33	11	8	−	1	−	63	−	珪長質肉厚bw型が主
15.9	52.4	17.5	12.7	0.0	1.6	0.0	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:ｲﾝｸﾙｰｼﾞｮﾝ、devt:失透化、RI:屈折率

軽鉱物組成分析(モード分析)

kf・af	plagioclase		QZ	chal	合計	備考
	low	high				

kf・af:ｱﾙｶﾘ長石,plagioclase:斜長石,low-pl:低屈折率斜長石,high-pl:高屈折率斜長,石Qz:石英,chal:カルセﾄﾞﾆｰ

斜長石の屈折率

屈折率範囲(range)		屈折率平均値(mean)	測定個体数(個)	屈折率最頻値(mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				

斜長石:劈開片上での最小屈折率n1(α<n1<β)

表4　胎土分析結果表(試料2)

火山ガラス・鉱物組成(モード分析)　注:以下のモード分析値は上段が計数値、下段は含有率%を示す.

火山ｶﾞﾗｽ	軽鉱物	重鉱物	焼結粒子	その他	合計	備考
6	56	7	131	0+	200	火山gl:珪長質bw>pm型。 軽鉱物:Qz,Kf,pl.
3.0	28.0	3.5	65.5	tr	100.0	重鉱物:GHb,Opq主。Bt,Opx,BHb少量。 焼結粒子:淡褐色。 その他:Po。

bw:ﾊﾞﾌﾞﾙｳｫｰﾙ,pm:軽石,sco.:ｽｺﾘｱ,pl:斜長石,Qz:石英,Kf:カリ長石,chal:カルセﾄﾞﾆｰ,po:ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ,

重鉱物分析(モード分析)

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
−	1	−	1	78	55	−	−	5	−	140	
0.0	0.7	0.0	0.7	55.7	39.3	0.0	0.0	3.6	0.0	100.0	

Ol:ｶﾝﾗﾝ石,Opx,Cpx:斜方,単斜輝石,BHb,GHb:緑色・褐色角閃石,Opq:不透明鉱物,
Cum:ｶﾐﾝｸﾞﾄﾝ閃石,Zr:ｼﾞﾙｺﾝ,Bt:黒雲母,Ap:ｱﾊﾟﾀｲﾄ,Gar:ｻﾞｸﾛ石,

火山ガラス形態分類(モード分析)

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
22	49	15	18	3	6	10	123	+	珪長質bw>pm型主。It型少量。
17.9	39.8	12.2	14.6	2.4	4.9	8.1	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:ｲﾝｸﾙｰｼﾞｮﾝ、devt:失透化、RI:屈折率

軽鉱物組成分析(モード分析)

kf・af	plagioclase		QZ	chal	合計	備考
	low	high				

kf・af:ｱﾙｶﾘ長石,plagioclase:斜長石,low-pl:低屈折率斜長石,high-pl:高屈折率斜長,石Qz:石英,chal:カルセﾄﾞﾆｰ

斜長石の屈折率

屈折率範囲(range)		屈折率平均値(mean)	測定個体数(個)	屈折率最頻値(mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				

斜長石:劈開片上での最小屈折率n1(α<n1<β)

表5　胎土分析結果表(試料3)

火山ガラス・鉱物組成(モード分析)　注:以下のモード分析値は上段が計数値、下段は含有率%を示す.

火山ｶﾞﾗｽ	軽鉱物	重鉱物	焼結粒子	その他	合計	備考
7	35	7	151	−	200	火山gl:珪長質bw>pm型主。lt型少量。 軽鉱物:Qz,Kf,pl,β−Qz少量。 重鉱物:GHb,Opq,BHb主。Bt,Opx,Zr含む。 焼結粒子:淡褐色。 その他:Po.
3.5	17.5	3.5	75.5	0.0	100.0	

bw:ﾊﾞﾌﾞﾙｳｫｰﾙ,pm:軽石,sco.:ｽｺﾘｱ,pl:斜長石,Qz:石英,Kf:ｶﾘ長石,chal:ｶﾙｾﾄﾞﾆｰ,po:ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ,

重鉱物分析(モード分析)

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
−	1	−	14	80	52	−	1	6	−	154	
0.0	0.6	0.0	9.1	51.9	33.8	0.0	0.6	3.9	0.0	100.0	

Ol:ｶﾝﾗﾝ石,Opx,Cpx:斜方,単斜輝石,BHb,GHb:緑色・褐色角閃石,Opq:不透明鉱物,
Cum:ｶﾐﾝｸﾞﾄﾝ閃石,Zr:ｼﾞﾙｺﾝ,Bt:黒雲母,Ap:ｱﾊﾟﾀｲﾄ,Gar:ｻﾞｸﾛ石,

火山ガラス形態分類(モード分析)

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
19	65	19	12	−	10	6	131	+	珪長質bw>pm型主。lt型少量含む。
14.5	49.6	14.5	9.2	0.0	7.6	4.6	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:ｲﾝｸﾙｰｼﾞｮﾝ、devt:失透化、RI:屈折率

軽鉱物組成分析(モード分析)

kf・af	plagioclase		QZ	chal	合計	備考
	low	high				

kf・af:ｱﾙｶﾘ長石,plagioclase:斜長石,low−pl:低屈折率斜長石,high−pl:高屈折率斜長,石Qz:石英,chal:ｶﾙｾﾄﾞﾆｰ

斜長石の屈折率

屈折率範囲(range)		屈折率平均値(mean)	測定個体数(個)	屈折率最頻値(mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				

斜長石:劈開片上での最小屈折率n1(α<n1<β)

表6　重鉱物組成分析結果一覧表

No.	試料名	粒子含有数(%)　※(1)											備考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	墳輪 KUM4,8ﾄﾚﾝﾁ SX135,3	−	−	−	−	47	9	3	2	8	−	69	
		0.0	0.0	0.0	0.0	68.1	13.0	4.3	2.9	11.6	0.0	100.0	
2	墳輪 KUM4,8ﾄﾚﾝﾁ SX135,32	−	1	−	1	78	55	−	−	5	−	140	
		0.0	0.7	0.0	0.7	55.7	39.3	0.0	0.0	3.6	0.0	100.0	
3	墳輪 KUM4, 590 8ﾄﾚﾝﾁ、不明	−	1	−	14	80	52	−	1	6	−	154	
		0.0	0.6	0.0	9.1	51.9	33.8	0.0	0.6	3.9	0.0	100.0	

注:　※(1)　上段:計測粒子数,　下段:%
なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石,	Opx: 斜方輝石,	Cpx: 単斜輝石	BHo: 褐色普通角閃石
GHo: 緑色普通角閃石	Opq: 不透明(鉄)鉱物	Id: イディングサイト	Zr: ジルコン
Bi: 黒雲母,	Ap: アパタイト,	Gar: ザクロ石	VG: 火山ガラス
Zoisite: ユウレン石	Cum: カミングトン閃石	Epidote: 緑レン石	

表7　全鉱物組成一覧表

No.	試料名	粒子含有数(%)　※(1)						備考
		火山ｶﾞﾗｽ	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
1	墳輪 KUM4,8ﾄﾚﾝﾁ SX135,3	5	31	2	162	0+	200	火山gl:珪長質肉厚bw>pm型。 軽鉱物:Qz,pl,Kf,β Qz. 重鉱物:GHb,Opq,Bt,Cum,Zr. 焼結粒子:淡灰褐色。 その他:Poなど。
		2.5	15.5	1.0	81.0	tr	100.0	
2	墳輪 KUM4,8ﾄﾚﾝﾁ SX135,32	6	56	7	131	0+	200	火山gl:珪長質bw>pm型。 軽鉱物:Qz,Kf,pl. 重鉱物:GHb,Opq主。Bt,Opx,BHb少量。 焼結粒子:淡褐色。 その他:Po。
		3.0	28.0	3.5	55	tr	100.0	
3	墳輪 KUM4, 590 8ﾄﾚﾝﾁ、不明	7	35	7	151	−	200	火山gl:珪長質bw>pm型主。lt型少量。 軽鉱物:Qz,Kf,pl,β−Qz少量。 重鉱物:GHb,Opq,BHb主。Bt,Opx,Zr含む。 焼結粒子:淡褐色。 その他:Po.
		3.5	17.5	3.5	75.5	0.0	100.0	

注:　※(1)　上段:計測粒子数,　下段:%
なお測定には、#120〜250粒径の粒子を対象としています。

図　　版

図版第１　門戸古墳群

(1)調査地遠景(南東から)

(2)A地区調査前(南から)

(3)A地区トレンチ全景(南から)

図版第２　門戸古墳群

⑴Ａ地区トレンチ南半分（東から）

⑵Ａ地区埋葬施設（南から）

⑶Ａ地区埋葬施設（東から）

図版第３　門戸古墳群

⑴Ａ地区土師製筒形容器１
検出状況（東から）

⑵Ａ地区土師製筒形容器１
検出状況（南から）

⑶Ａ地区土師製筒形容器１
検出状況（東から）

図版第4　門戸古墳群

⑴Ａ地区土師製筒形容器２
検出状況（南から）

⑵Ａ地区土師製筒形容器２
検出状況（東から）

⑶Ａ地区上層検出の集石
（北から）

図版第５　門戸古墳群

⑴Ｃ地区調査前（南から）

⑵Ｃ地区トレンチ全景（南から）

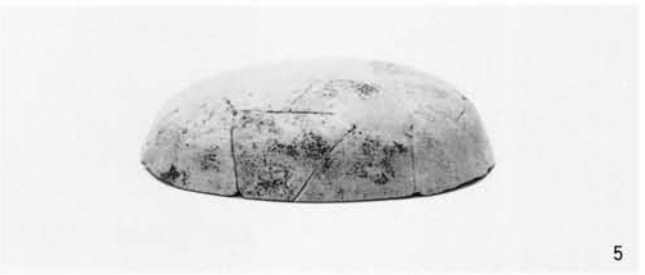
⑶Ｂ地区トレンチ全景
（北西から）

図版第6　門戸古墳群

1

2

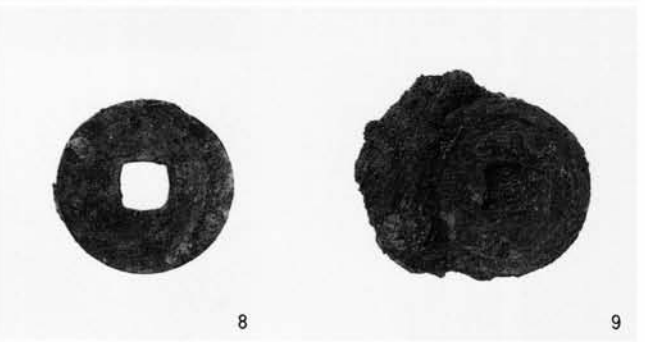
3


5

4

6

7

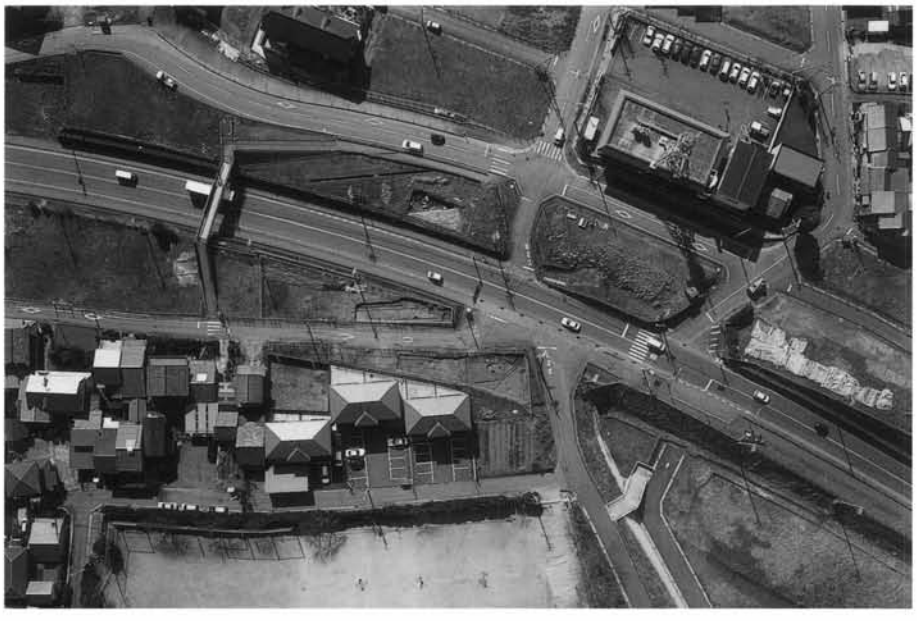

8　9

出土遺物

図版第７　岡ノ遺跡第２・３次

(1)調査地全景(上が南)

(2)調査地全景(上が東)



(3)調査地西部(上が南)

図版第8　岡ノ遺跡第2・3次

(1) 4トレンチ調査風景(西から)

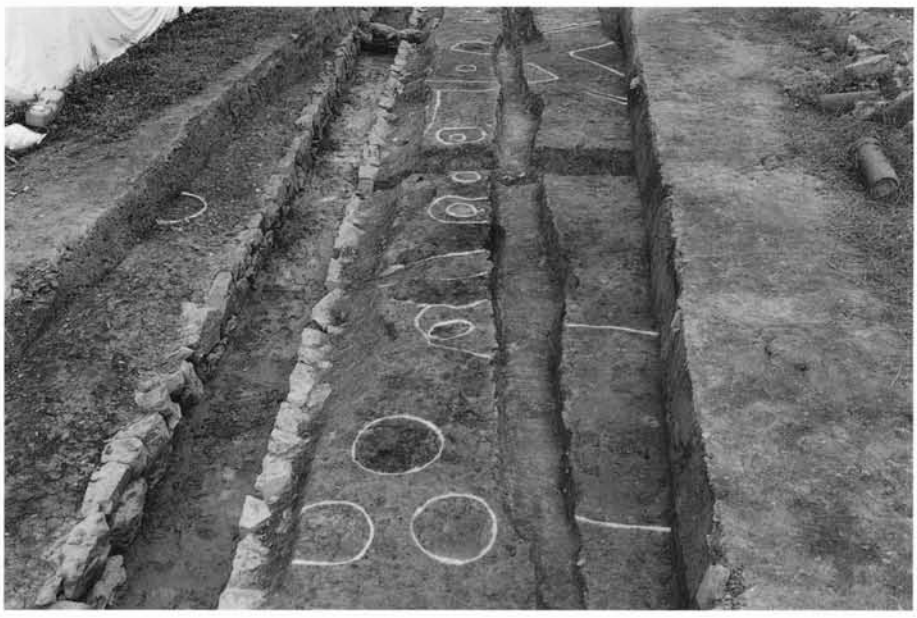
(2) 4トレンチ土層断面
(北東から)

(3)17トレンチ全景(東から)

図版第９　岡ノ遺跡第２・３次

⑴４－２トレンチ全景(西から)

⑵５－２トレンチ全景(西から)



⑶６－２トレンチ
竪穴式住居跡ＳＨ0614(北から)

図版第10　岡ノ遺跡第２・３次

⑴６－２トレンチ全景(東から)

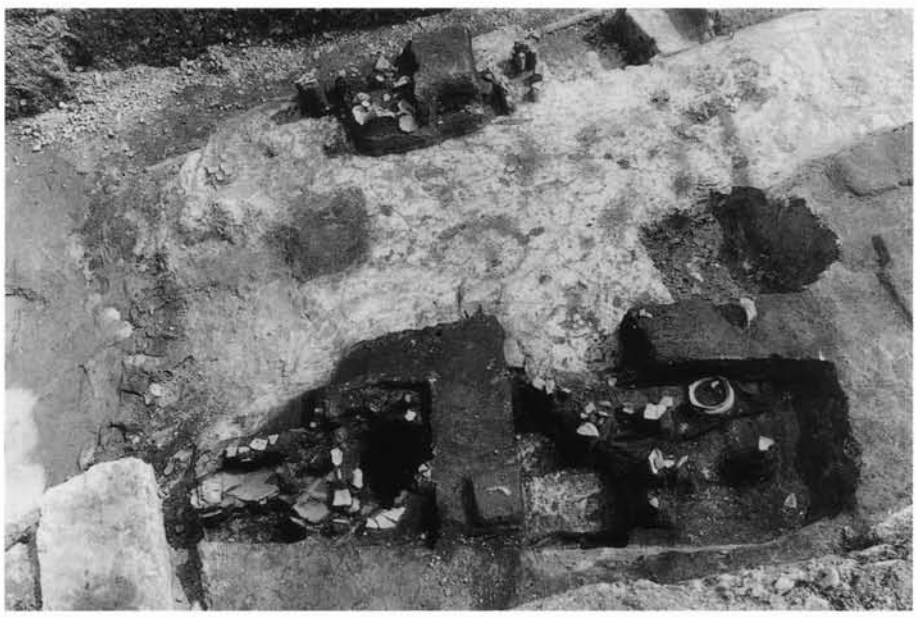
⑵７トレンチ中世溝検出状況
(東から)

⑶13トレンチ全景(西から)

図版第11　岡ノ遺跡第２・３次

(1)14トレンチ全景(西から)

(2)15－３トレンチ全景(西から)

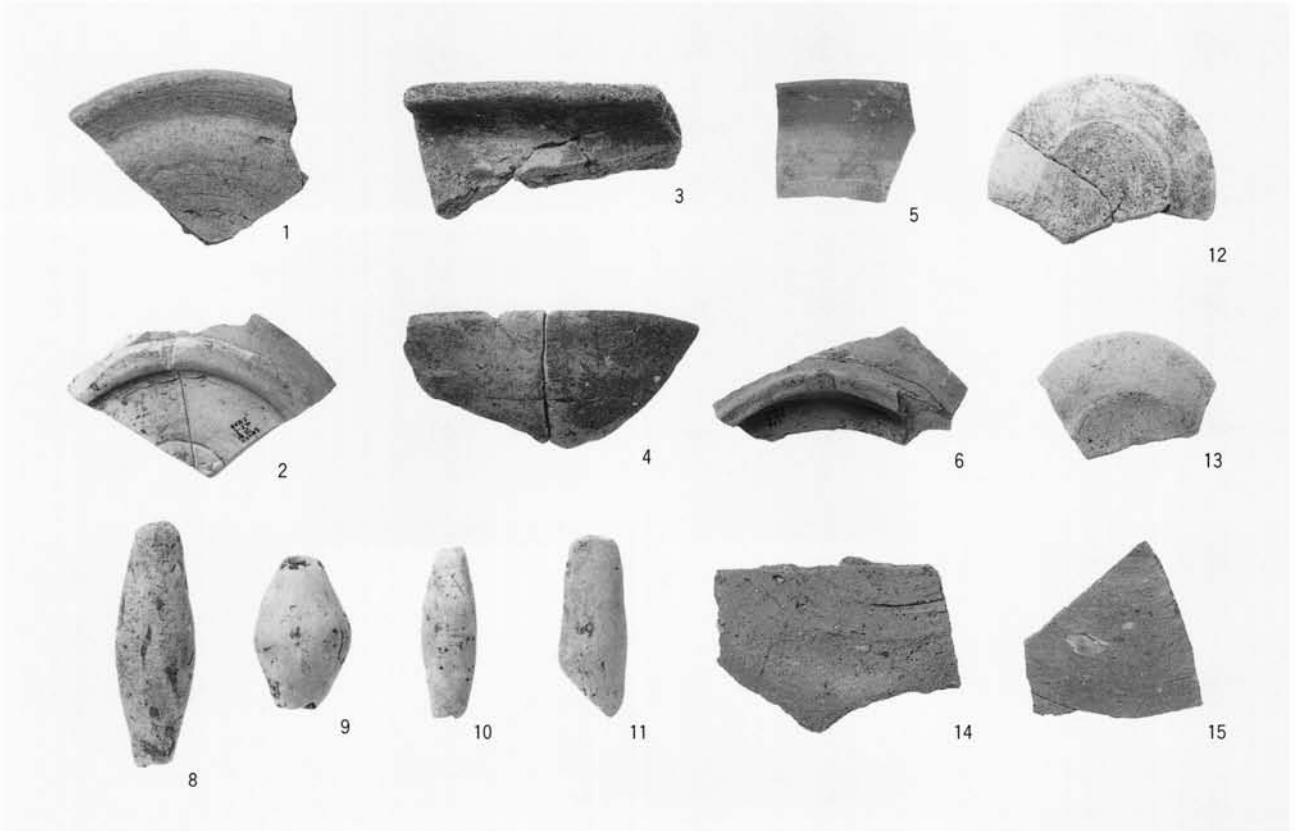


(3)16－２トレンチ(西から)

図版第12　岡ノ遺跡第２・３次

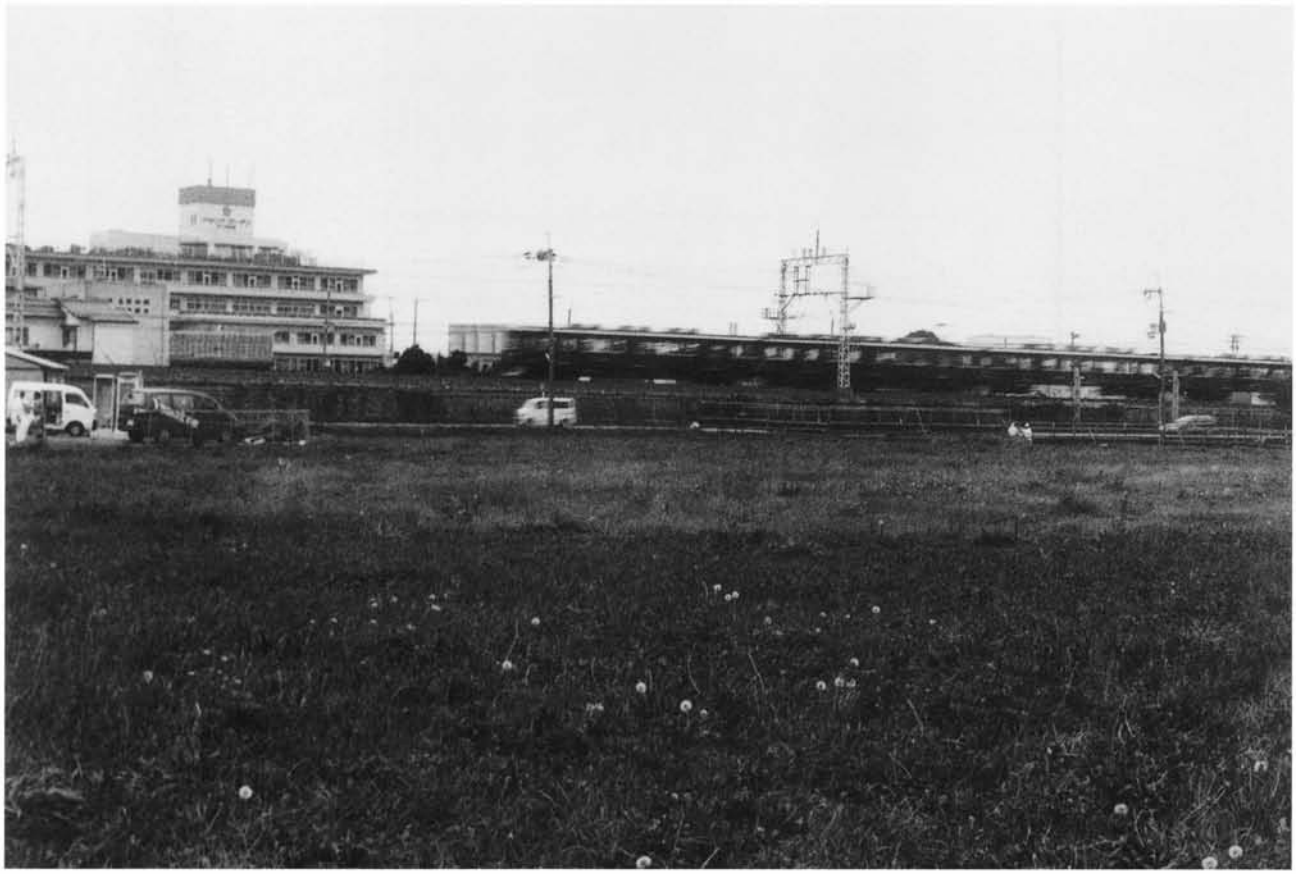
⑴４－３トレンチ全景（東から）

⑵５－１トレンチ全景（東から）



⑶出土遺物

図版第13　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)



(1)友岡地区調査着手前全景(北西から)

(2)下海印寺地区調査着手前全景(南東から)

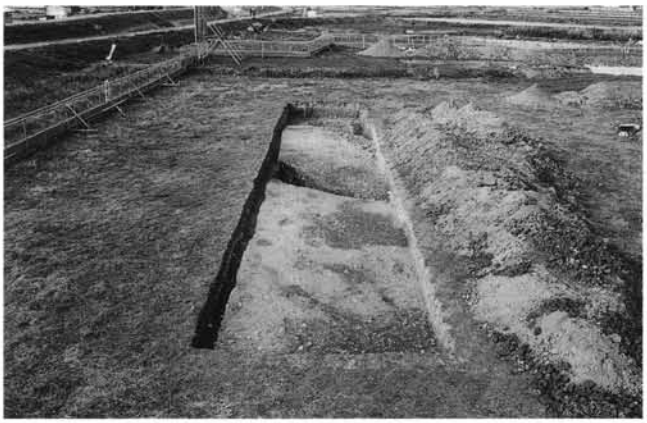
図版第14　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

(1)Aトレンチ全景(南東から)

(2)Aトレンチ中央部検出溝(北から)

(3)Bトレンチ断ち割り状況(南東から)

(4)Bトレンチ断ち割り状況(東から)



(5)Cトレンチ全景(南東から)

(6)Cトレンチ(東から)

(7)Cトレンチ(南東から)

(8)Cトレンチ(北西から)

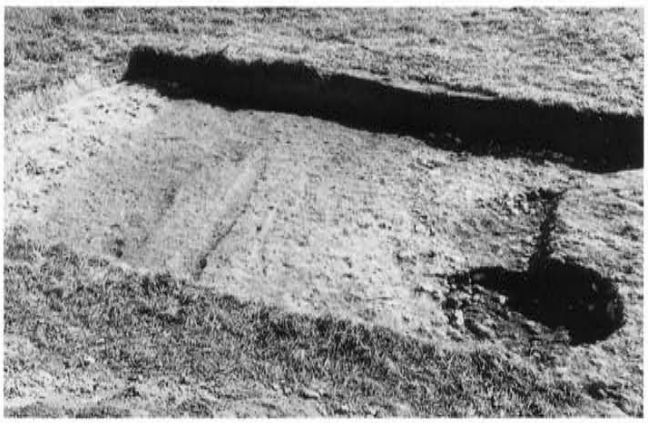
図版第15　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

(1)Dトレンチ全景(北東から)

(2)Dトレンチ東端検出溝(東から)

(3)Eトレンチ全景(北東から)

(4)Eトレンチ全景(南西から)



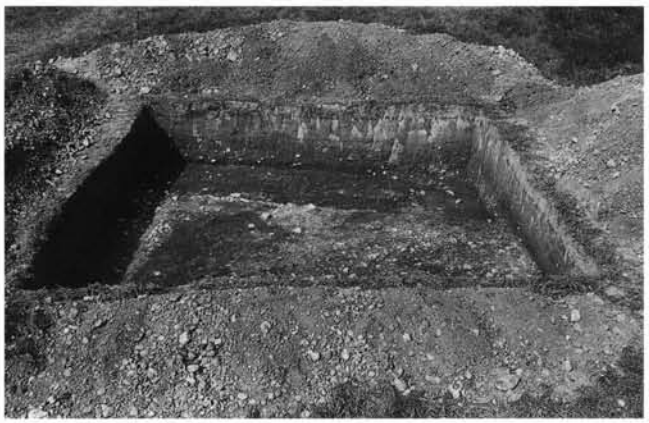
(5)Eトレンチ東端部検出溝群(北西から)

(6)Eトレンチ流路検出状況(南から)

(7)Fトレンチ全景(南西から)

(8)Fトレンチ北東部検出足跡(西から)

図版第16　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)



(1) 1トレンチ全景(南東から)

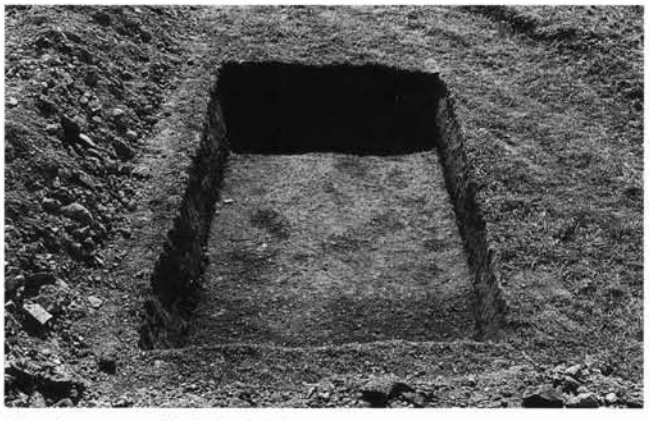
(2) 1トレンチ南西壁土層

(3) 2トレンチ全景(南東から)

(4) 2トレンチ北西壁土層

(5) 3トレンチ全景(東から)

(6) 3トレンチ全景(東から)



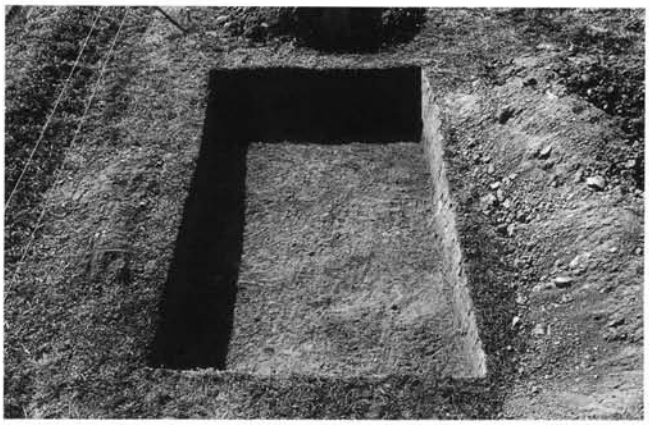
(7) 4トレンチ全景(北から)

(8) 4トレンチ南壁土層

図版第17　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

(1) 5トレンチ全景(南東から)

(2) 5トレンチ北西壁土層

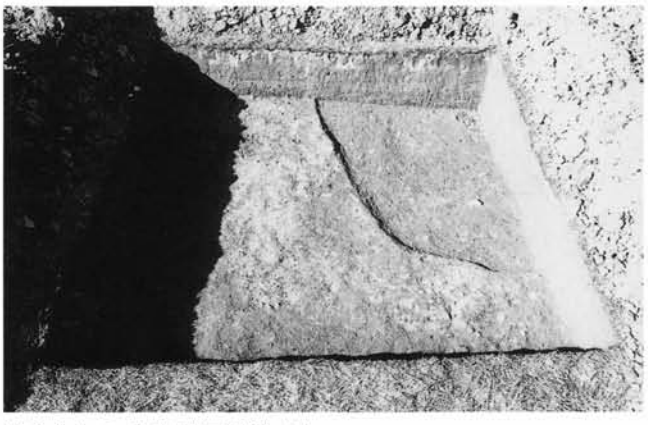


(3) 6トレンチ全景(北東から)

(4) 6トレンチ北西壁土層

(5) 7トレンチ全景(北東から)

(6) 7トレンチ北西壁土層

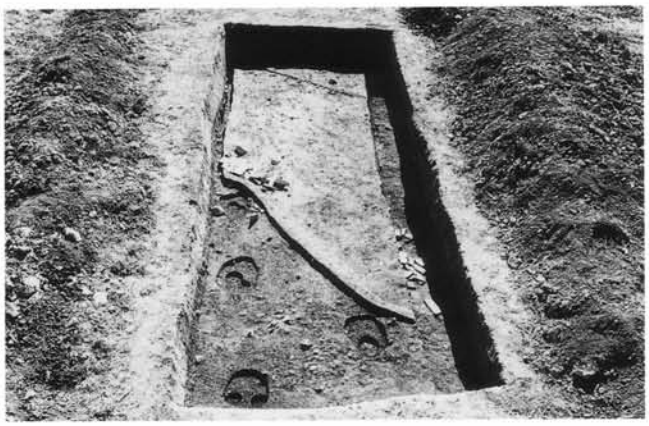


(7) 9トレンチ全景(南東から)

(8) 9トレンチ北西壁土層

図版第18　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

(1) 8トレンチ全景(南西から)

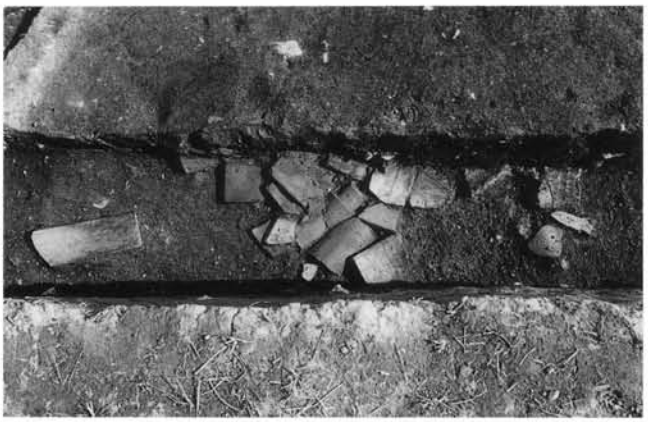


(2) 8トレンチ全景(北西から)

(3) 8トレンチ溝SD01内瓦検出状況(東から)

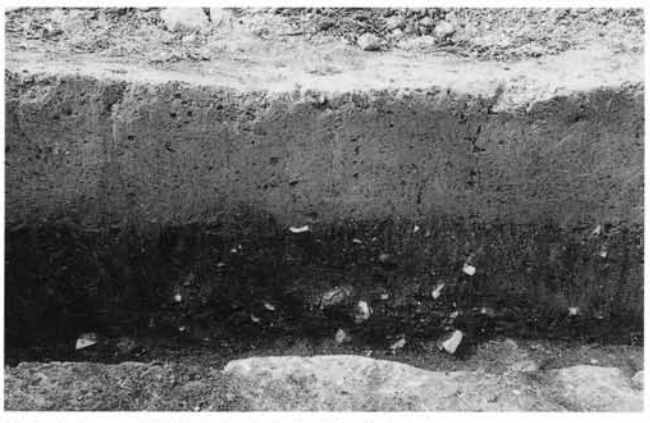
(4) 8トレンチ溝SD01内瓦検出状況(西南西から)

(5) 8トレンチ溝SD01断ち割り状況(北西から)



(6) 8トレンチ溝SD01内瓦出土状況(上が北東)

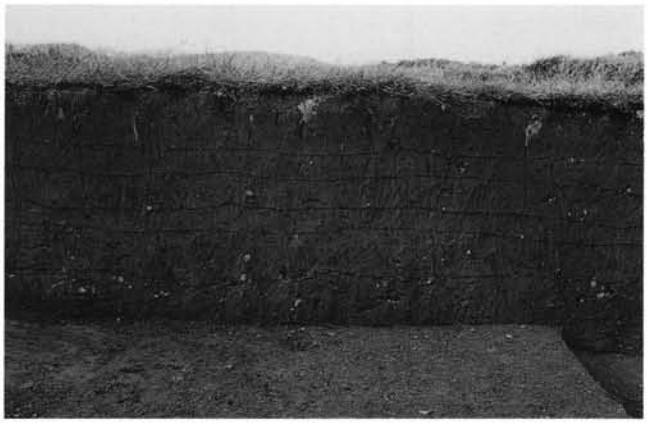
(7) 8トレンチ溝SD01内土層(東南東から)



(8) 8トレンチ溝SD01内土層(北東から)

図版第19　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

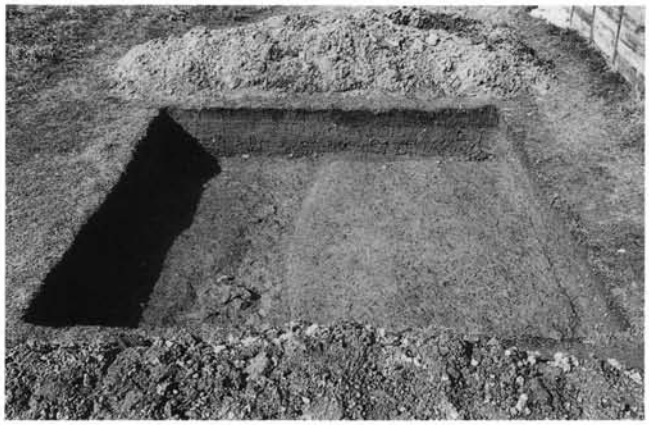
(1)10トレンチ全景(南東から)



(2)10トレンチ北西壁土層

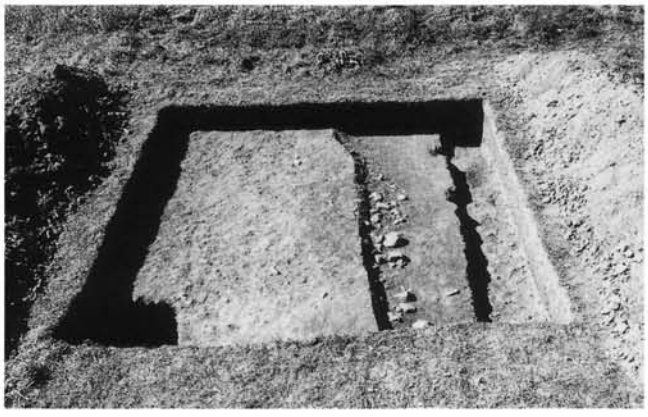
(3)11トレンチ全景(南東から)

(4)11トレンチ南西壁土層



(5)12トレンチ全景(南東から)

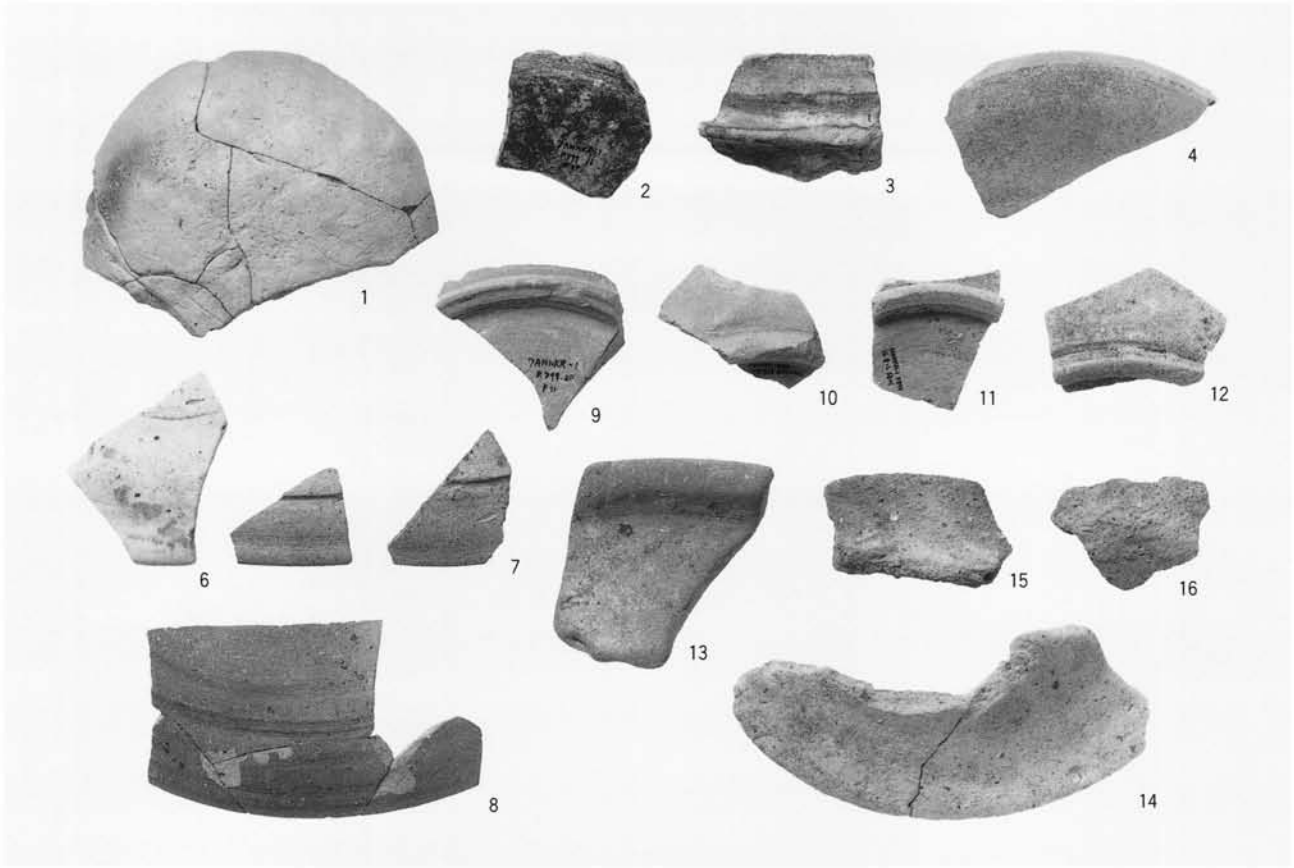
(6)12トレンチ北西壁土層



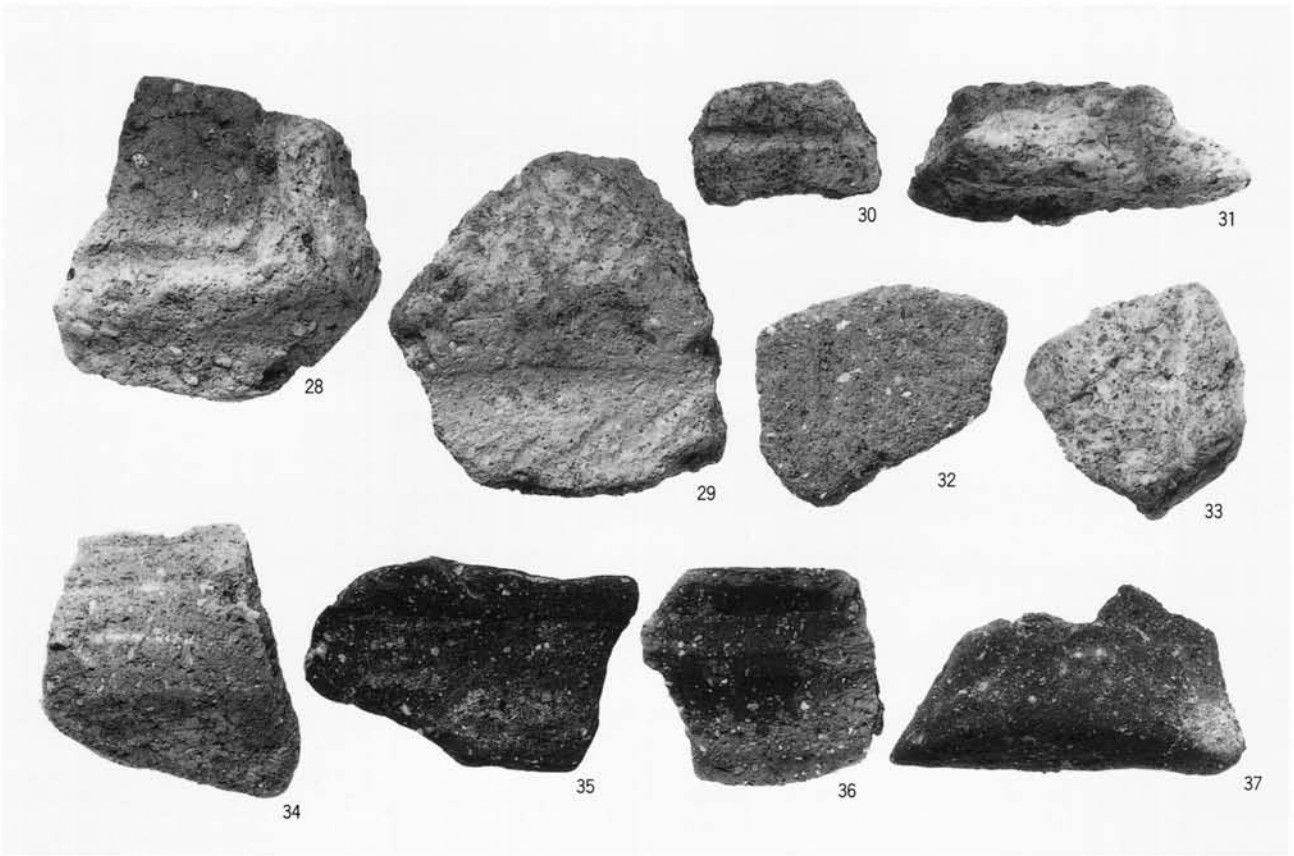
(7)13トレンチ全景(南東から)

(8)13トレンチ南壁土層

図版第20　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

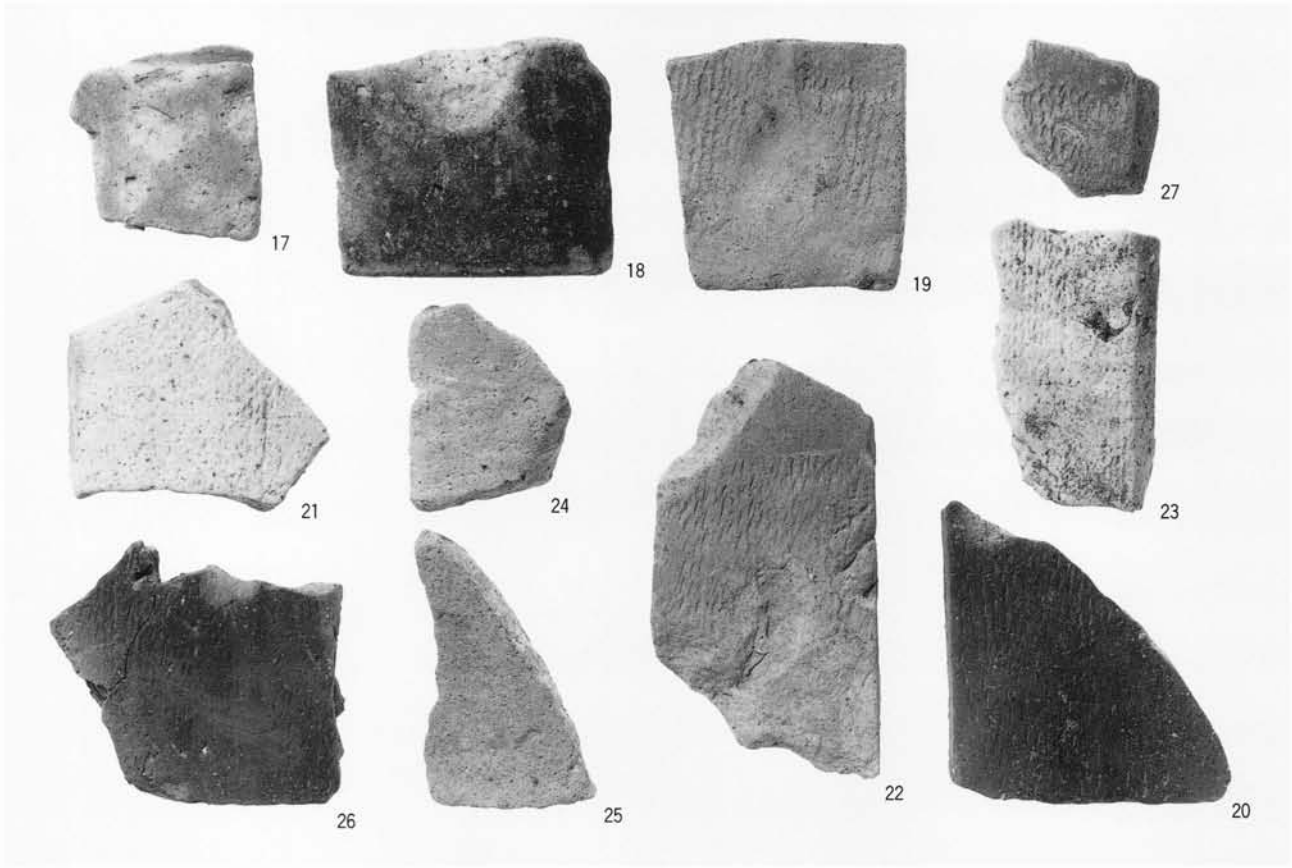


(1)出土遺物(1)　弥生時代～中世土器

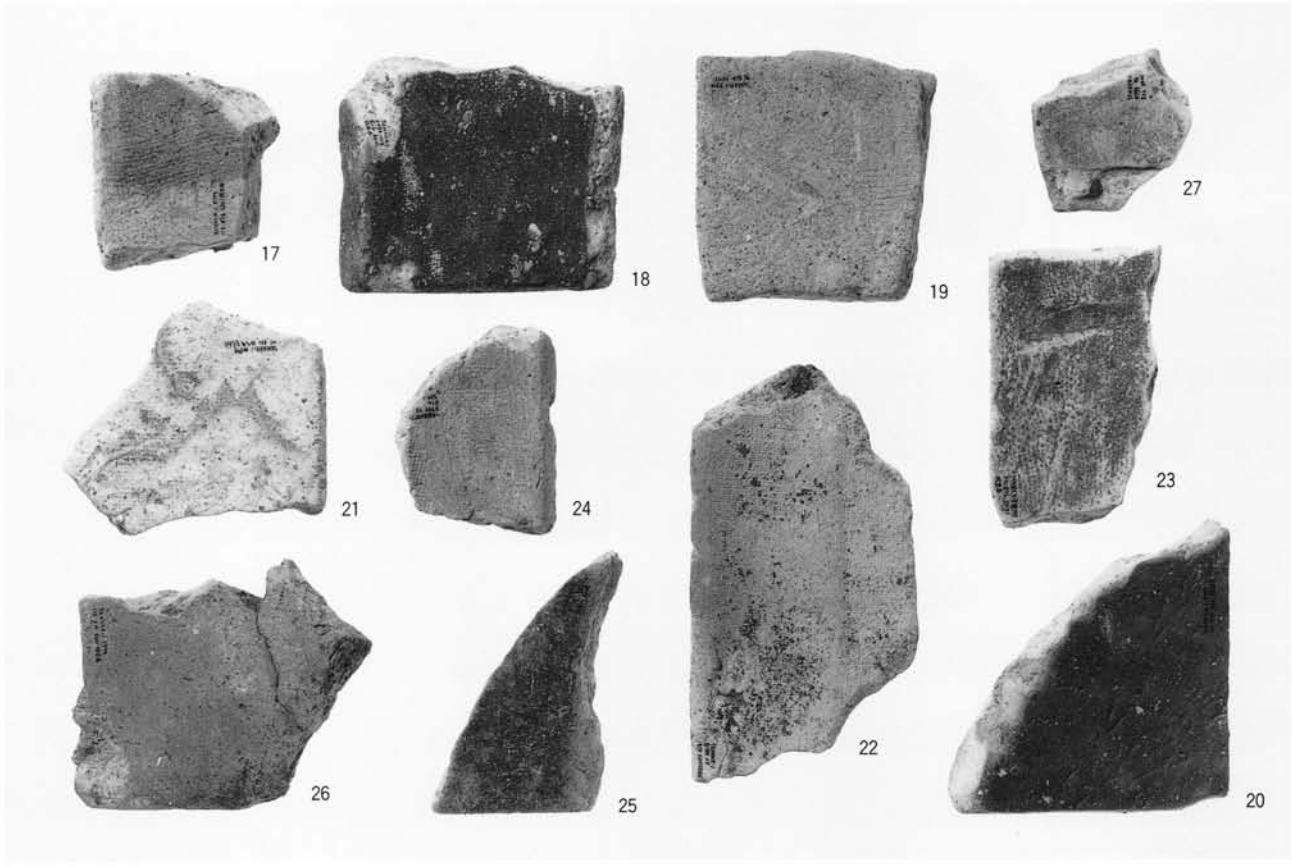


(2)出土遺物(2)　縄文土器

図版第21　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)

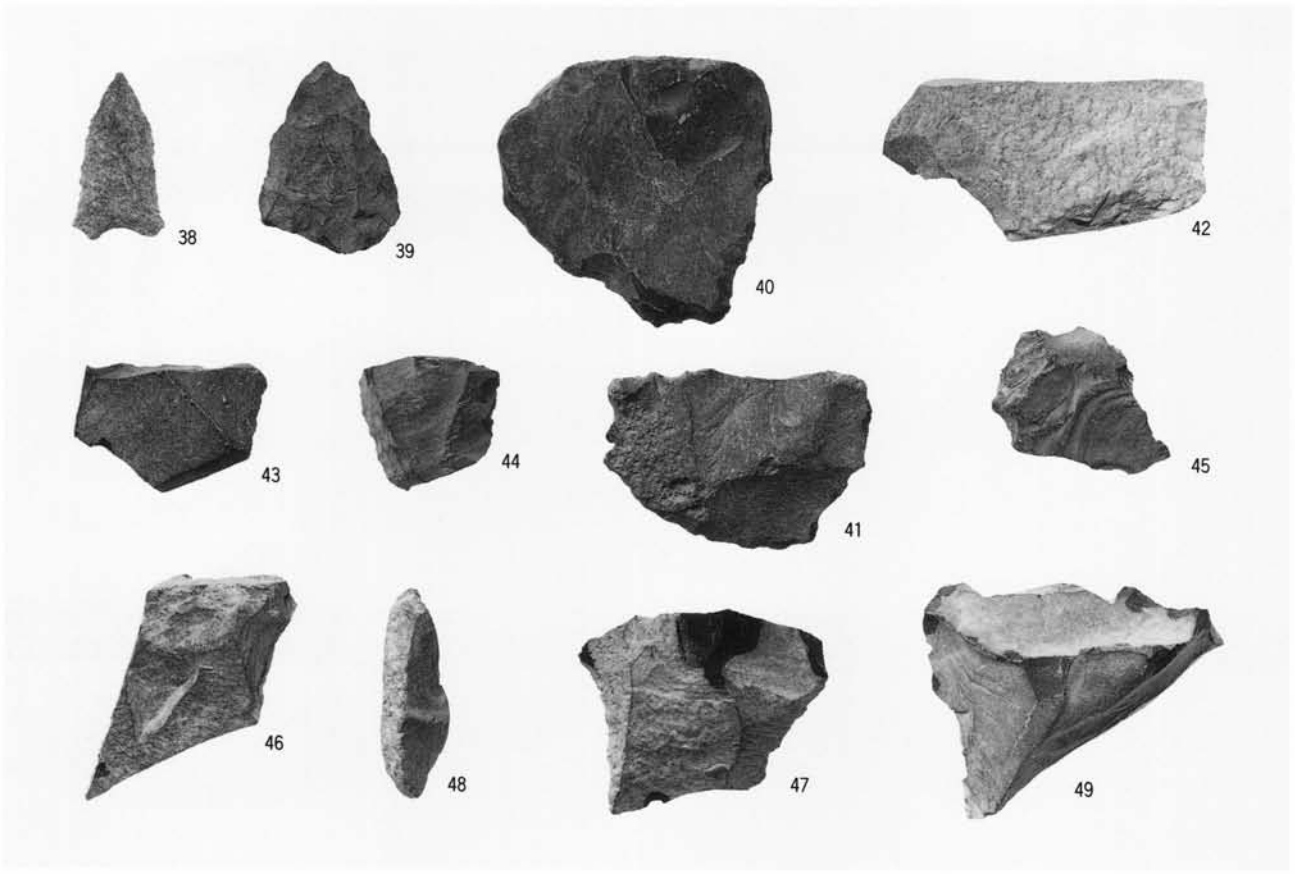


(1)出土遺物(3)　瓦（凸面）

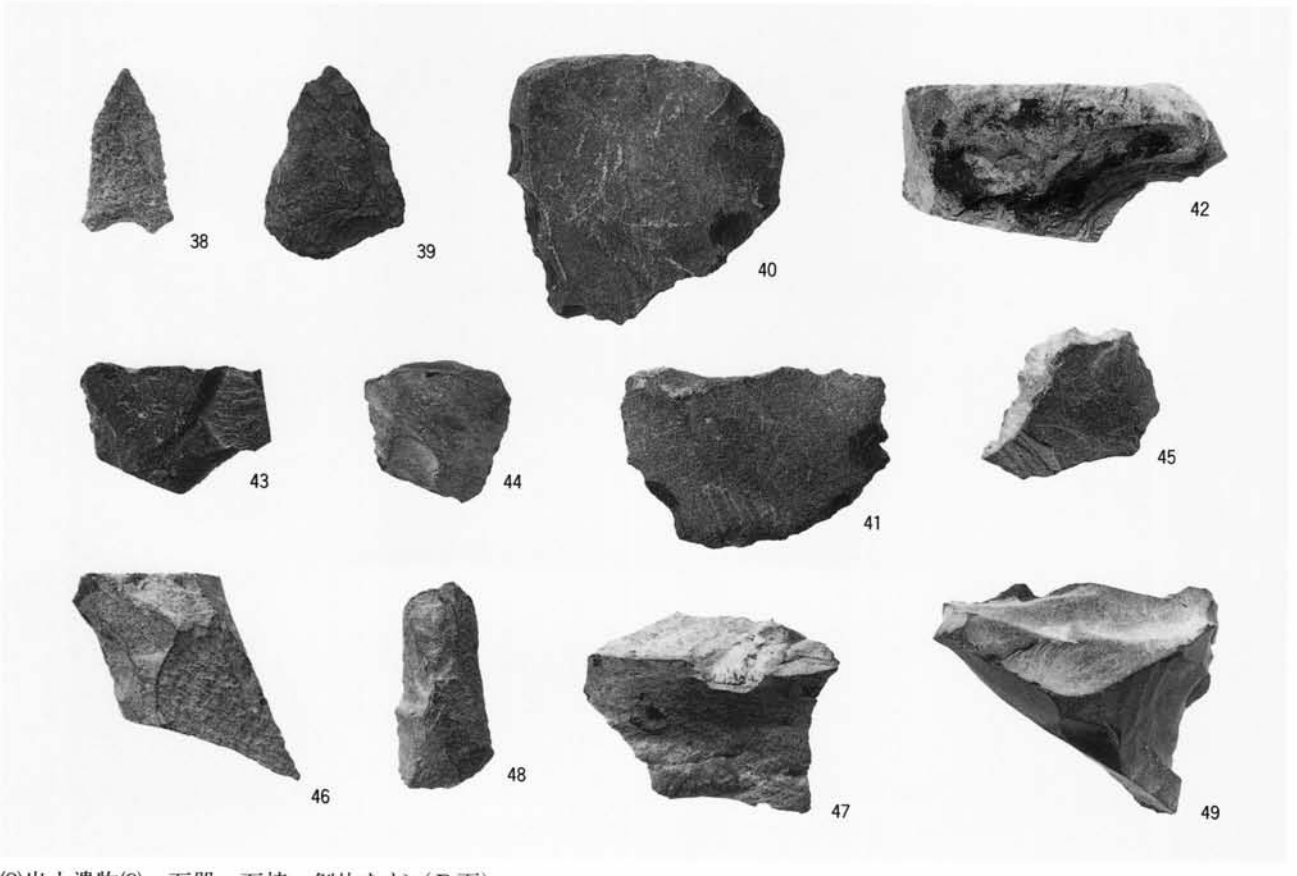


(2)出土遺物(4)　瓦（凹面）

図版第22　長岡京跡右京第799次(7ANNKR-1地区)



(1)出土遺物(5)　石器・石核・剥片など（A面）



(2)出土遺物(6)　石器・石核・剥片など（B面）

図版第23　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

⑴調査前の状況(南から)

⑵調査地全景(上が南)

図版第24　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

(1)掘立柱建物跡ＳＢ277・278検出状況(北西から)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ279検出状況(南西から)

図版第25　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

(1)トレンチ近景(北から)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ333(南から)

図版第26　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

(1)土坑ＳＫ02遺物出土状況(西から)

(2)柱穴Ｐ157遺物出土状況(南から)

図版第27　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

(1)井戸ＳＥ339近景(北から)

(2)溝ＳＤ290西壁断面(北東から)

図版第28　長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡

3

8

28

30

16

45

45

23

64

69

出土遺物

図版第29　木津川河床遺跡第16次

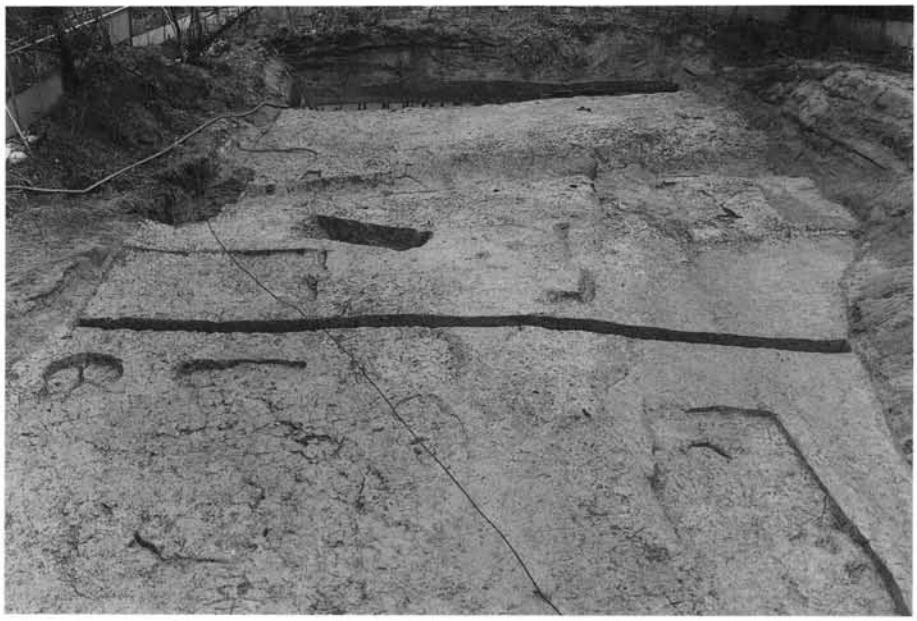
(1)調査前の状況(南西から)

(2)A地区全景(西から)

(3)A地区断面(南西から)

図版第30　木津川河床遺跡第16次

(1)A地区遺物出土状況(南西から)



(2)B地区全景(西から)

(3)B地区道路状遺構SF05
(南西から)

図版第31　木津川河床遺跡第16次

(1)B地区道路状遺構SF05
断ち割り状況(南西から)

(2)B地区側溝SD01(南西から)

(3)B地区側溝SD01(北西から)

図版第32　木津川河床遺跡第16次

(1)Ｂ地区東壁断面(南西から)

(2)Ｂ地区側溝ＳＤ04断面
(南から)

(3)Ｂ地区側溝ＳＤ02
遺物出土状況(西から)

図版第33　木津川河床遺跡第16次

⑴Ｂ地区側溝ＳＤ04
遺物出土状況（南西から）

⑵Ｂ地区側溝ＳＤ01・04断面
（南西から）

⑶Ｂ地区橋脚３・４断ち割り
状況（南から）

10

18

21

25

26

31

32

49

50

57

73

54

58

59

62

63

出土遺物

図版第35　薪遺跡第５次

⑴調査前全景（第１～４トレンチ）（北から）

⑵調査前全景（第６トレンチ）（南から）

図版第36　薪遺跡第５次

⑴第１トレンチ全景
（南東から）

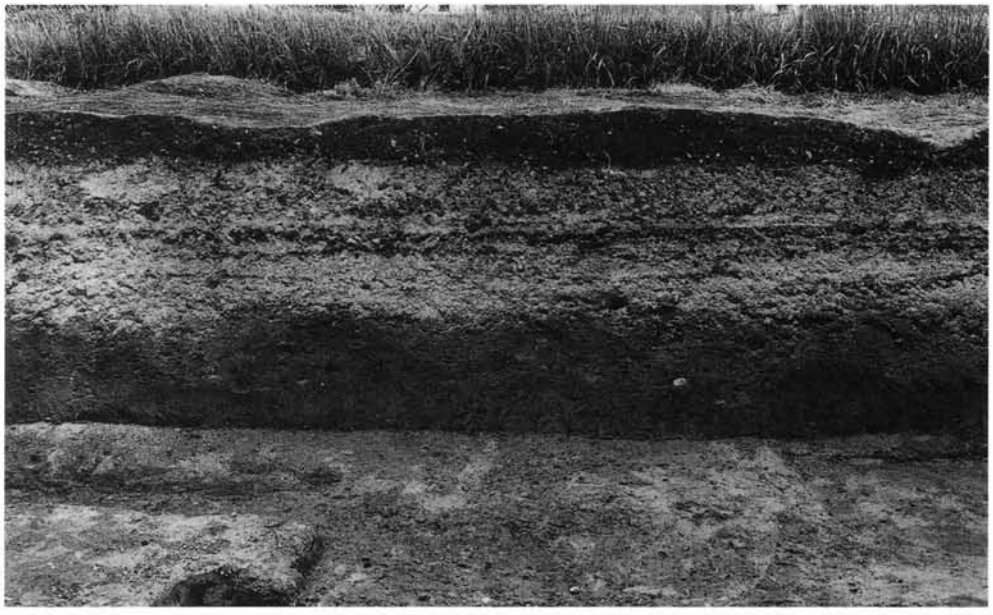
⑵第２トレンチ全景
（南東から）

⑶第３トレンチ全景
（北西から）

図版第37　薪遺跡第５次

⑴第２トレンチ北西壁
土層断面（南東から）

⑵第３トレンチ北西壁
土層断面（南東から）



⑶第４トレンチ西壁
土層断面（東から）

図版第38　薪遺跡第５次

⑴第４トレンチ全景
（東から）

⑵第５トレンチ全景
（東から）

⑶第５トレンチ北西区
遺構検出状況（南から）

(1)第６トレンチ全景
（北西から）

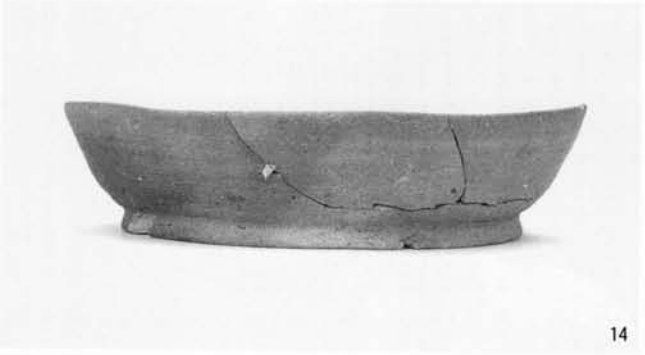
(2)第６トレンチ南東隅
断ち割り土層断面図
（南西から）

(3)第６トレンチ北東隅土坑
完掘状況（南西から）

図版第40　薪遺跡第５次

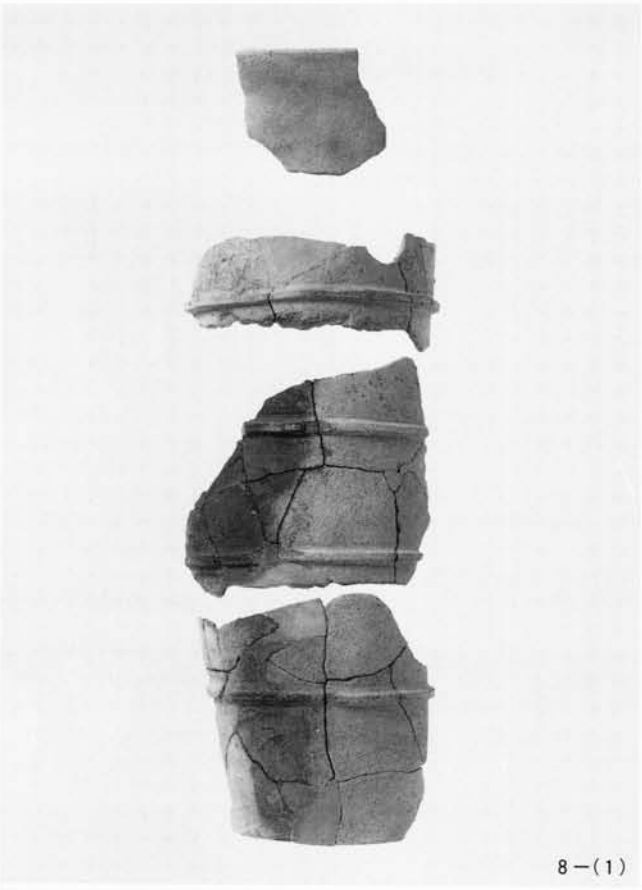
10

16

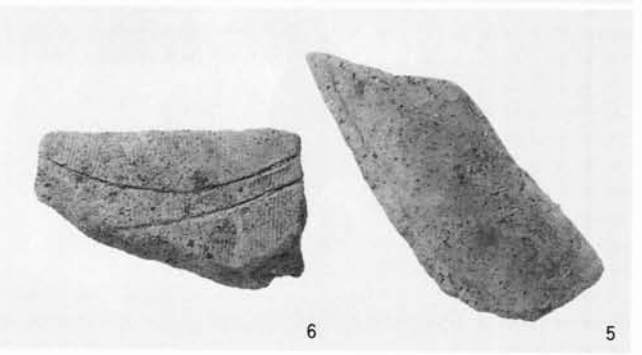

14

18

20

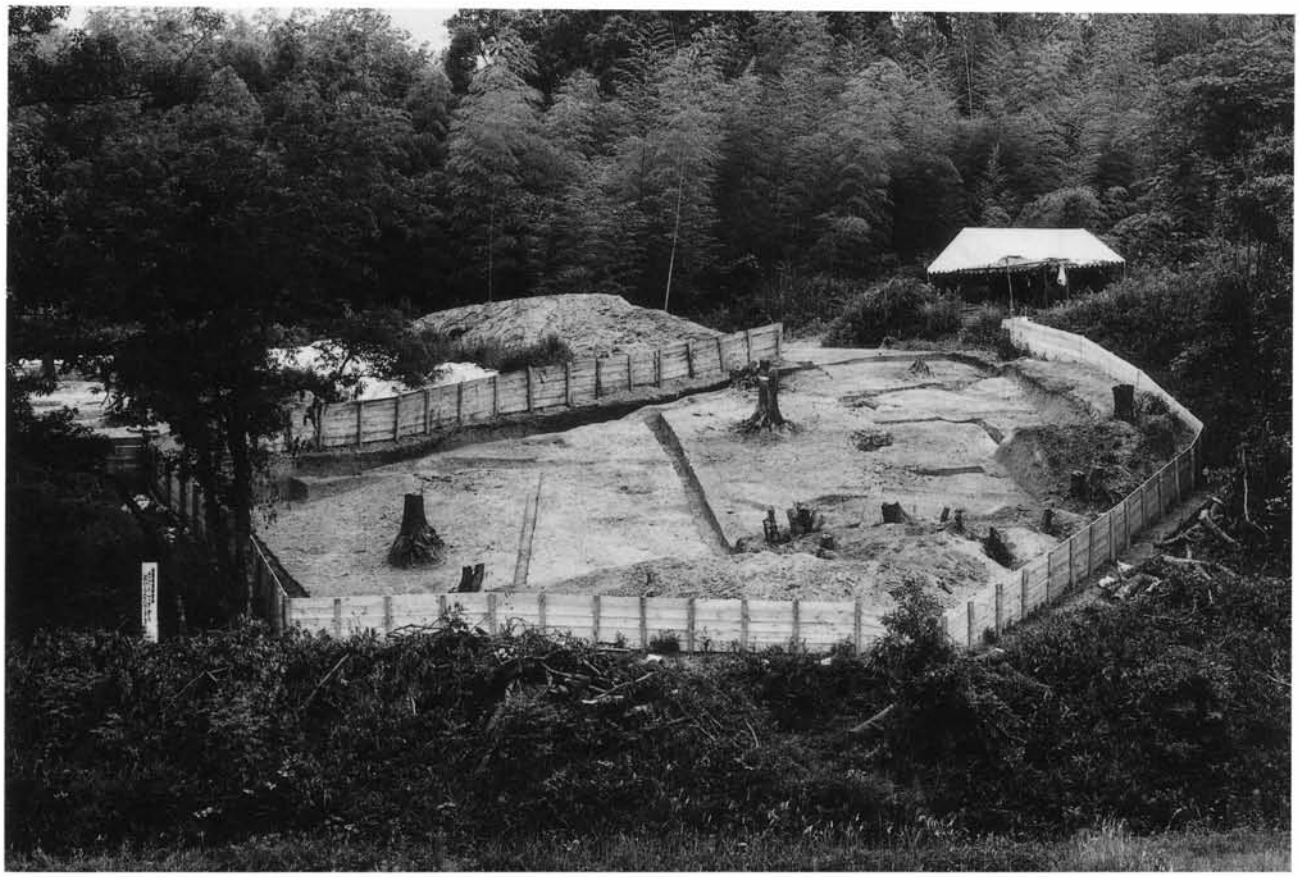

8－(1)

8－(2)

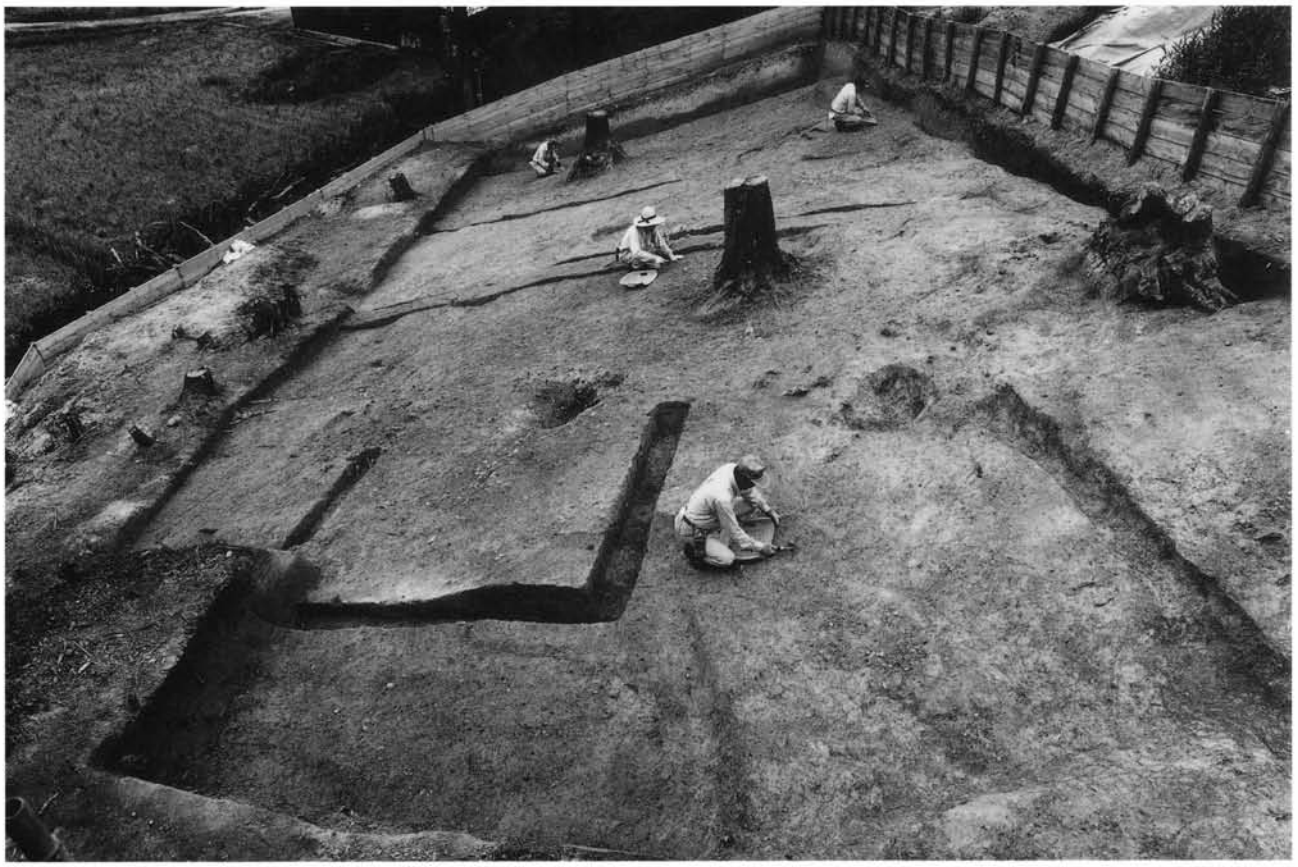

6　5

出土遺物

図版第41　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)



(1)調査地全景(南から)



(2)調査地全景(東から)

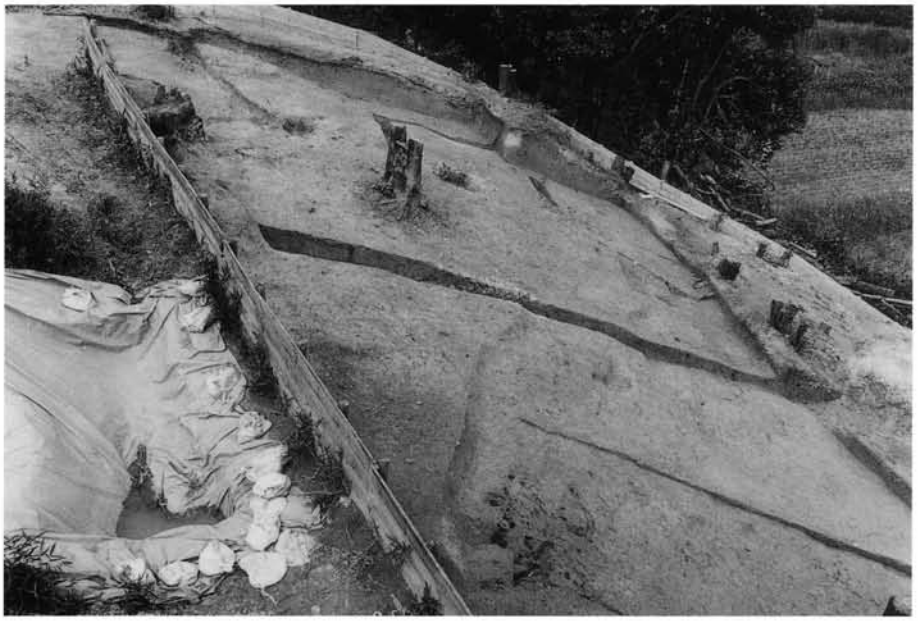
図版第42　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)

(1)調査地全景(北東から)

(2)重機掘削作業風景(西から)

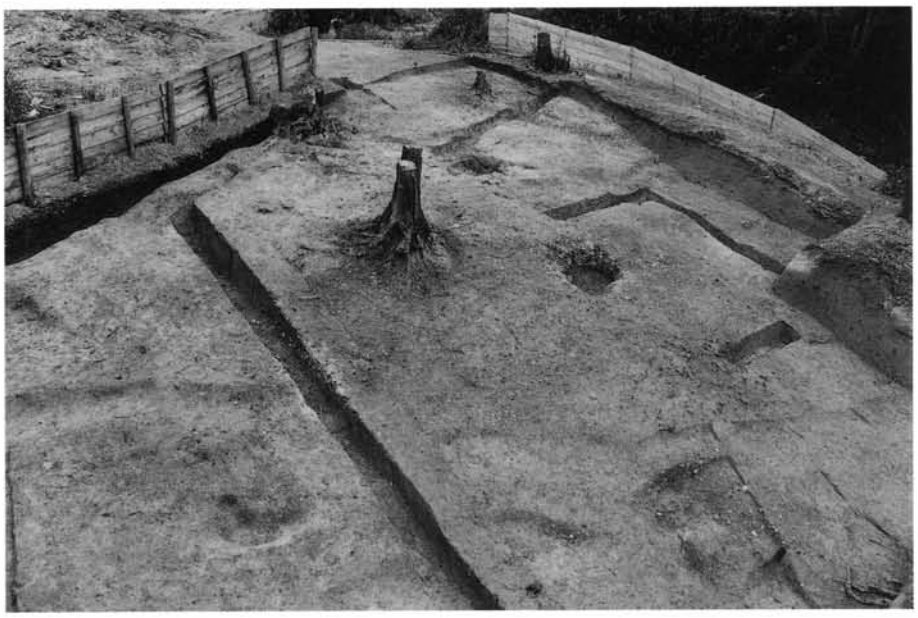
(3)発掘作業風景(北西から)

図版第43　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)



(1)調査地全景(北西から)

(2)調査地全景(北東から)



(3)調査地北東部全景(南西から)

図版第44　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)

⑴溝ＳＤ136全景(南西から)

⑵溝ＳＤ132全景(南から)

⑶溝ＳＤ131全景(西から)

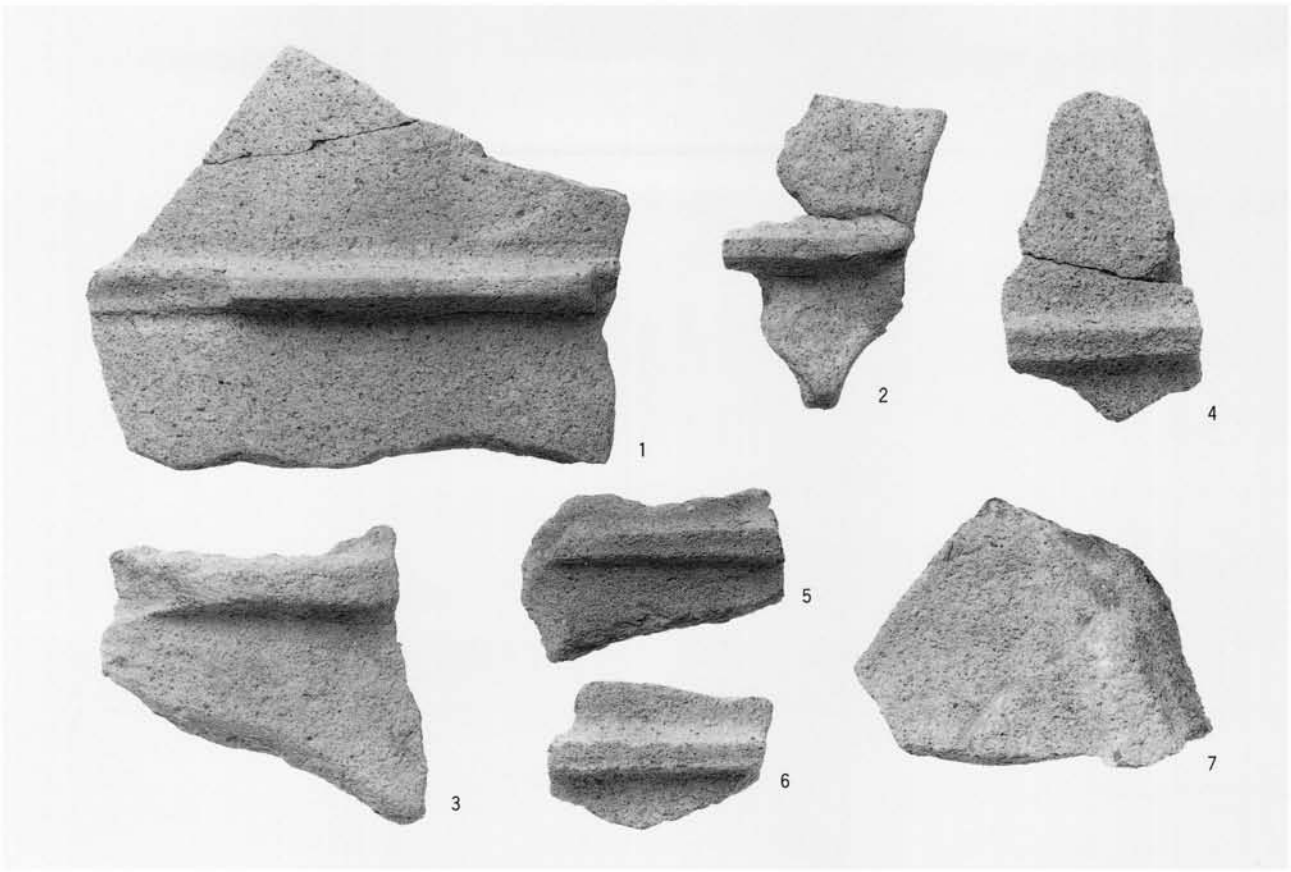
図版第45　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)

(1)埴輪溜まりＳＸ135
遺物出土状況(東から)

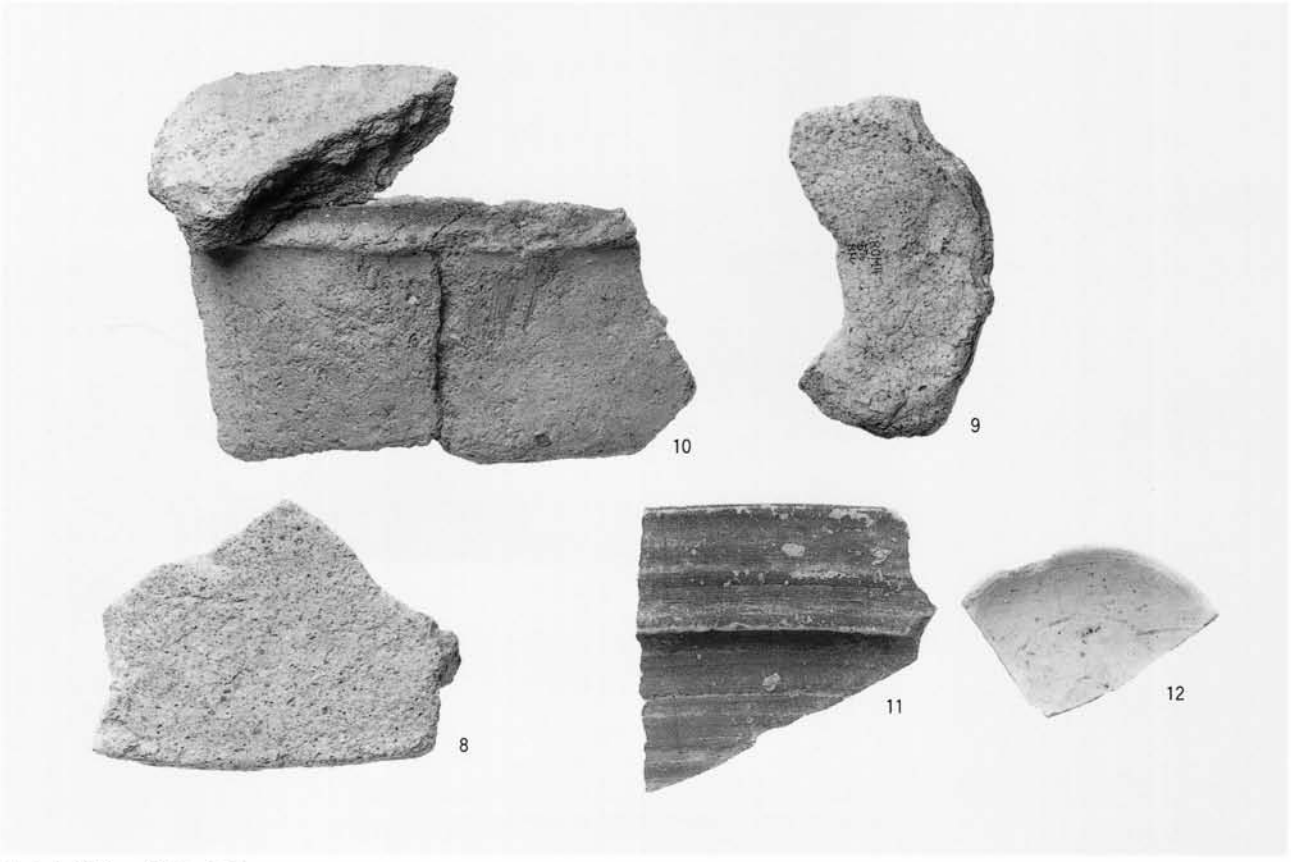
(2)埴輪溜まりＳＸ135
遺物出土状況(北から)

(3)測量作業風景(西から)

図版第46　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)

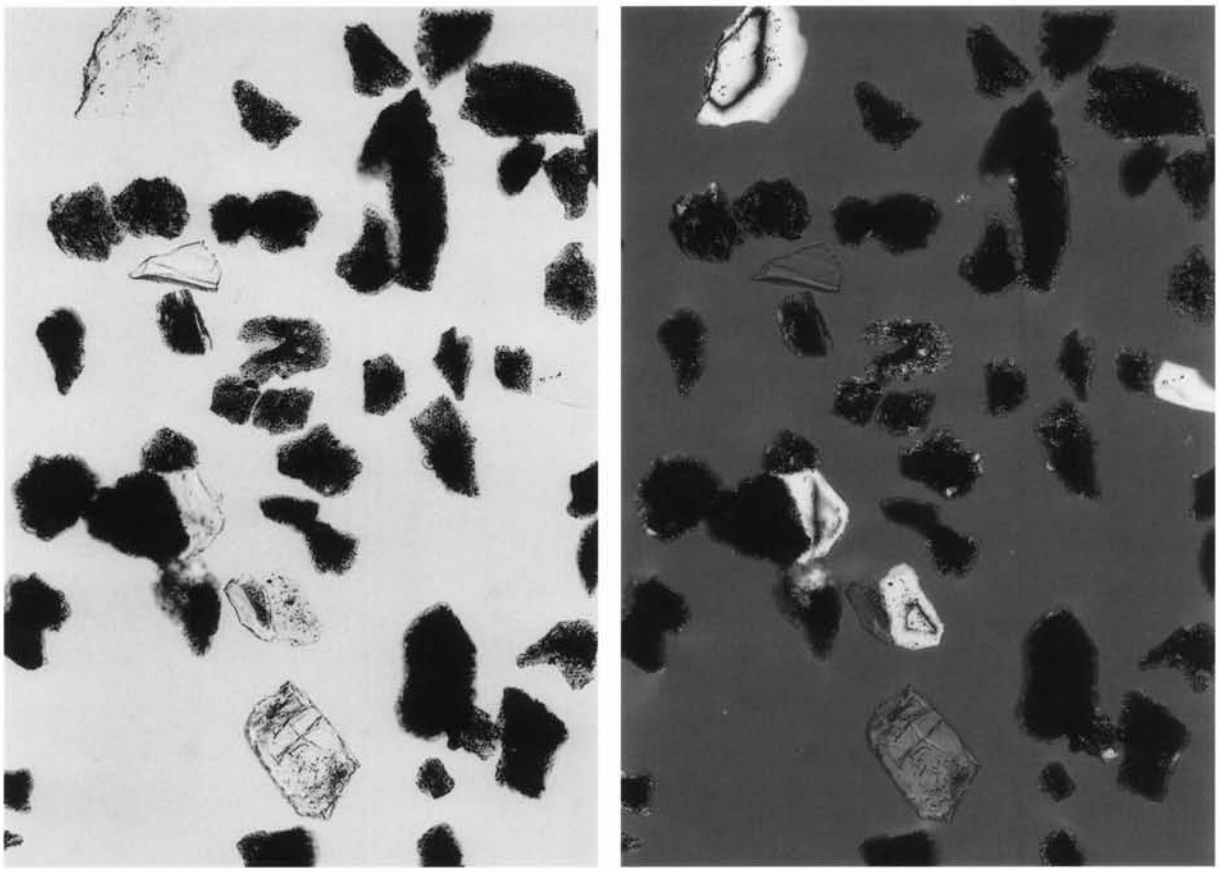


⑴出土遺物　埴輪

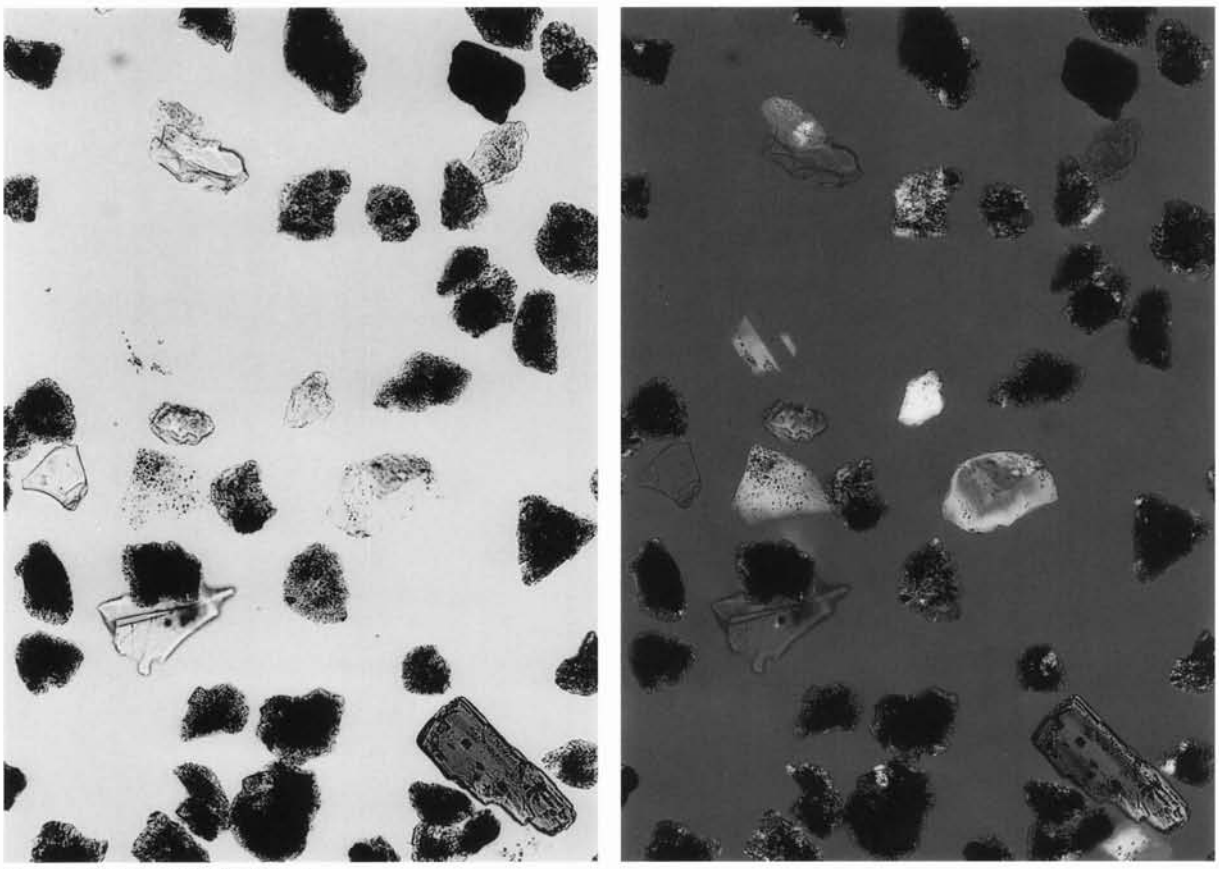


⑵出土遺物　埴輪・擂鉢

図版第47　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)

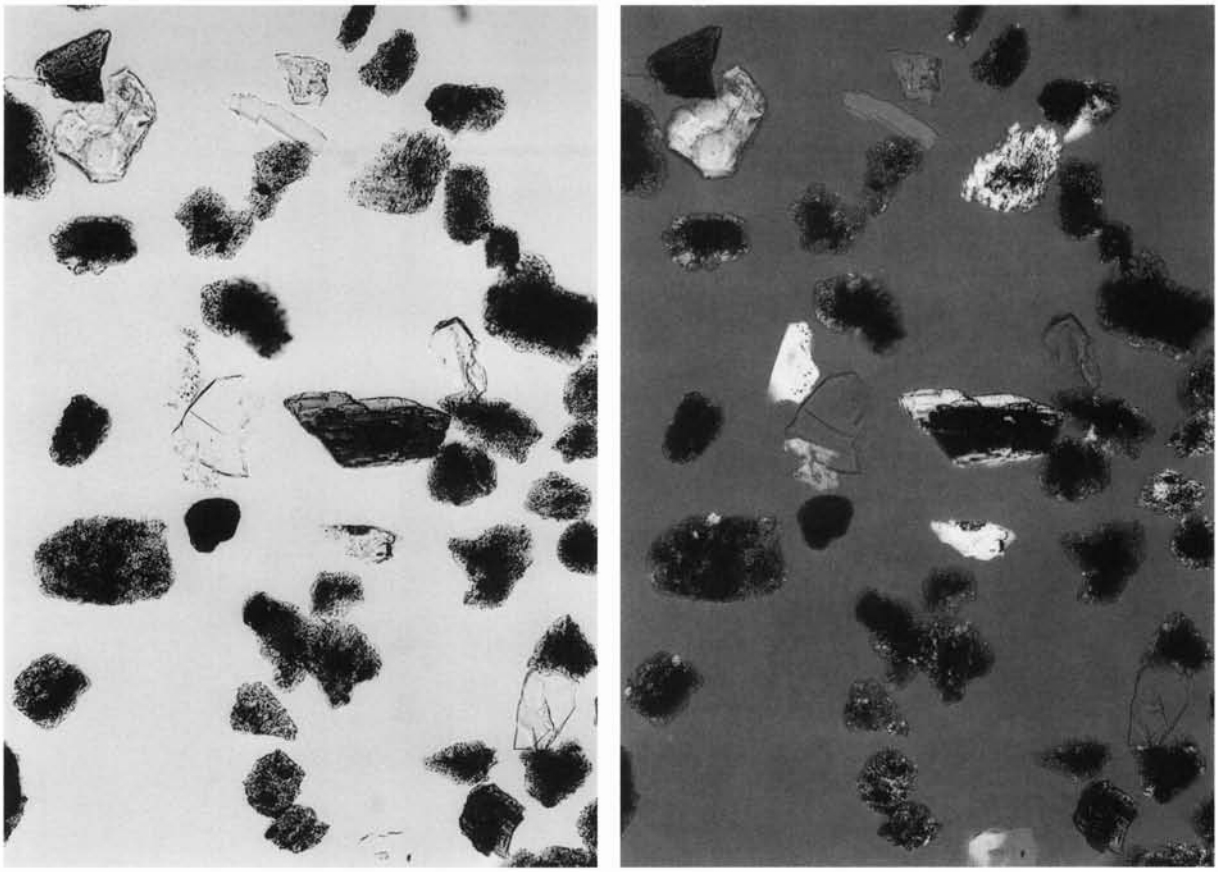


(1)内田山遺跡　埴輪資料No. 1

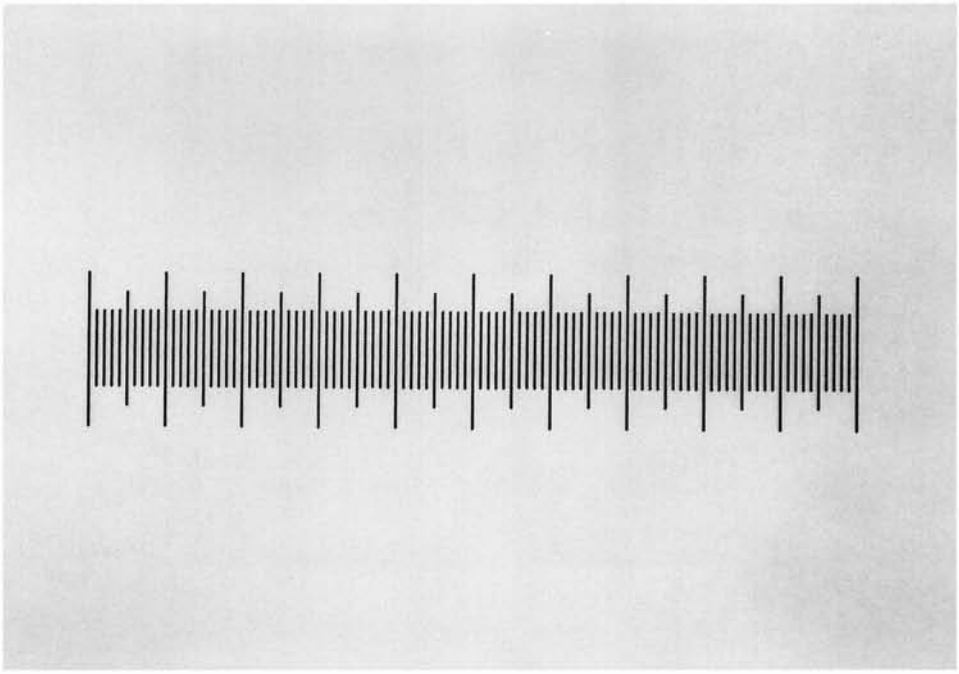


(2)内田山遺跡　埴輪資料No. 2

図版第48　内田山遺跡・内田山古墳群(第４次)



(1)内田山遺跡　埴輪資料No.３



(2)scale(最小目盛りは0.01㎜＝10㎛)

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第113冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　2005　年　1　月　31　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もんどこふんぐん 門戸古墳群	きょうとふまいづるしおおあざまるたこあざもんど 京都府舞鶴市大字丸田小字門戸	26202		35° 27’ 51”	135° 16’ 39”	20040422 ～ 20040610	60	道路建設
おかのいせきだいにじ・さんじ 岡ノ遺跡第2・3次	きょうとふふくちやましひがしおか・みなみおか 京都府福知山市東岡・南岡	26201		35° 17’ 26”	135° 07’ 27”	20030729 ～ 20040610 20040513 ～ 20040930	1,785 3,900	道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいななひゃくきゅうじゅうきゅうじ 長岡京跡右京第799次	きょうとふながおかきょうしともおかかわら・しもかいいんじきしのした 京都府長岡京市友岡川原・下海印寺岸ノ下	26209	091・097	34° 54’ 52”	135° 41’ 14”	20031201 ～ 20040226	1,560	道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいななひゃくきゅうじゅうごじ・いのうちいせき 長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡	きょうとふながおかきょうしいのうちこにし 京都府長岡京市井ノ内小西	26209	010	34° 56’ 29”	135° 41’ 06”	20031126 ～ 20040226	800	道路建設
きづがわかしょういせきだいじゅうろくじ 木津川河床遺跡第16次	きょうとふやわたしやわたしなで 京都府八幡市八幡科手	26210	004	34° 53’ 15”	135° 42’ 02”	20040420 ～ 20040604	260	道路建設

たきぎいせきだいごじ 薪遺跡第5次	きょうとふきょうたなべしたきぎせまみち・たつみ 京都府京田辺市薪狭道・巽	26211	024	34° 49' 23"	135° 45' 28"	20040109 ～ 20040226	200	道路建設
うちだやまいせき・うちだやまこふんぐん(だいよじ) 内田山遺跡・内田山古墳群(第4次)	きょうとふそうらくぐんきづちょうおおあざきづこあざうちだやま 京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山	26362	053・054	34° 44' 07"	135° 49' 47"	20030527 ～ 20030627	200	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門戸古墳群	古墳 経塚 墓	古墳 鎌倉 近世	埋葬施設(木棺直葬？) 経塚 墓	 土師製筒形容器・白磁椀 寛永通寶	古墳の墳丘部から蓋付土師製筒形容器を納めた経塚を検出。
岡ノ遺跡第2・3次	集落	弥生 古墳・奈良 中世・近世	竪穴式住居跡 土坑 土坑・溝	弥生土器 須恵器・土師器・土錘 土師器	弥生時代後期の竪穴式住居跡を検出。
長岡京跡右京第799次	集落 都城	縄文 平安	土坑 溝	縄文土器・石器 須恵器・瓦	縄文時代中期の土器出土。
長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡	集落 都城	古墳 奈良・平安	掘立柱建物跡・溝 掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑	須恵器 須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・無釉陶器・緑釉陶器・瓦・鉄器	長岡京期の遺構・遺物の出土。
木津川河床遺跡第16次	集落	中世・近世	道路状遺構・橋脚・河川堆積層	瓦器・土師器・白色土器・白磁・青磁・灰釉陶器・瓦質土器・近世陶磁器・煙管・鉛製錘・寛永通寶	石清水八幡宮にいたる橋の橋脚を検出。
薪遺跡第5次	集落	縄文 古墳 奈良	 土坑 溝・土坑	縄文土器 埴輪 須恵器・土師器・製塩土器	試掘調査
内田山遺跡・内田山古墳群(第4次)	古墳	古墳	埴輪溜まり	埴輪	内田山B1号墳に伴う埴輪片の出土。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第113冊

平成17年1月31日

発行　財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141